
きっと、それは

篠宮 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きつと、それは

【Nコード】

N1604T

【作者名】

篠宮 楓

【あらすじ】

お隣に越してきた、年上男性と可愛い高校生。

その日から私の日常が、なんだかおかしな方向に……？

ほんわか教師と元気な高校生に、振り回されきみなOLのお話。

なんだか押しの強い上司も絡んできました。なぜだろう？

他サイトでも、更新中です。

1（前書き）

こっそりと戻ってまいりました
初めましての方、以前見たことあるぞ？の方、どうぞよろしくおね
がいます。

可愛らしい、お隣の男の子
高校三年でも、こんな子がいるのね……

——羨ましいっつ！

——二十二歳OL談

枕元で響く携帯のアラームで、私は目を覚ました。
幾度か瞬きをして、息を吐く。

「うう……、眠い」

思わず呟いたのは、仕方ないと自分で自分を宥めてみる。

壁際に置かれたままになっている壁に掛けるべき時計は、十時過ぎを指している。

昨日の夜閉め忘れたベランダのカーテンから燦々と陽の光が降り注いで、その眩しさにもう一度目を瞑った。

——じりじりじり

ああ、なんだか擬音が目に見えそうなくらい暑い……

五月のゴールデンウィークをすぐ後ろに控えた、四月最後の祝日。
まだ肌寒い時間帯もあるけれど、窓を閉め切った室内はぽかぽかを
通り越して布団越しに私の身体をじりじりと熱する。

——暑い……眠い……暑い……眠い……あつ……

「暑いつてばっ」

耐え切れず、布団を跳ね除けて起き上がった。

歯を磨いて髪を梳かして、適当な服を着れば休日の自分は出来上が
り。

休みの日くらい、外に出ないでゆっくりしたい。

「……けど」

一言呟いて、頬を両手で軽く叩く。

平日に出来ない掃除や大物の洗濯、何よりも布団を干さないとカビ
が……↑経験あり

ベランダに出る窓を開けると、ぽかぽか日和、布団干し日和。

サンダルを履いてベランダに出ると、目の前に広がるのは水面が綺
麗な大きな川。

きらきらと午前の陽の光を反射している。

六年前アパートを探していた私は、この風景に目を奪われてこの部
屋に決めた。

少し古びた築二十年の建物、あまり多くない入居者。

静かなご近所、駅からは少し遠かったけれどそれでも私を惹きつけた。

以来、ずっとここに住んでいる。

社会人になった、今でも。

つい魅入ってしまった風景から視線を外して、上体だけ部屋の方へ向ける。

そこには八畳のフローリングにベッドと机。

ドアの向こうには、キッチンというにはおこがましいような台所が見える。

見えないけれど、横にもう一部屋。

築年数が古いから、部屋数があるのに安く借りられたのがあの頃の私には助かった。

「さてと、干しますか」

腕まくりをしてベッドから上掛けを剥ぎ取る。

そのまま体の向きを変えながら、ベランダの手すりにそれを掛ける。敷布団も同じ様に掛けて布団バサミをはめて、布団干し終了。

——はやっ

まあ、後はシーツとタオルケットを洗濯して、それからウォッシュヤブル枕を洗って……

思わず溜息をつきながら、干した布団の上に上体をもたせる。

「なんで二十二歳にして、こんな所帯じみた言葉を吐かなきゃいけないのよ……」

「じゃあ、おねーさんだ！ やった！」

——ん？

思わず、でろんつと布団の上に寄りかかっていた上体を起こす。

おかしいな、今、何か声が……

二階建ての古ぼけたこのアパートには、十部屋中たったの四部屋しか埋まっていない。

一階に三家族、二階に一家族。っていうか、左の角部屋に私がいるだけで二階には誰も住んでいない。

しかも私の下の部屋もその隣も誰も住んでいないから、声が聞こえる事なんてないんだけど……

外で誰かが話してるのかな？

きよろきよろと辺りを見回してから、さっきの体勢に戻る。

「ああ、暖かいなあ……。今日はいいお天気」

「いい引越し日和ですよねえ」

——！

がばつと、身体を起こす。

確実に今のは私の言葉への返答だったぞ！

やめてー、もしかしてお化け？

六年間何もなかったのに、今更？

恐る恐る声のした方に視線を向けると……

「——誰……？」

隣の部屋のベランダから、可愛らしい顔がこっちを覗きこんでいた。

呟いた言葉に、その顔はにつこり笑ってベランダから外へと身を乗り出した。

「えっ、ちよっ！」

慌てて伸ばした両手で、その子の腰にしがみつく。

「危ないっ！ 危ないから!!」

お化けかもしれないという憶測は吹っ飛んで、目の前で人が落ちるかもしれないその状況に真っ青になりながら両腕に力をこめた。

——所で、はたと気づく。

……腰？

ベランダを乗り越える人間の腰を、隣のベランダとの間にある仕切り越しに掴めるもの……？

「——あの、おねーさん。別に落ちるつもりじゃないから、離して欲しいな。切実に」

頭の上から聞こえる声に、恐る恐る頭をあげた。

仕切りをまたぐ様にベランダに腰掛けている、男の子。

困ったように頭に手をやっているその姿に、瞬きを繰り返す。

「え、え？」

もう、何かなんだかよく分からない。

誰？ この子、一体……

「お願いだから、離してつてばー」

「お前が驚かすからいけないんだろう？ ああ、すみませんお嬢さん」

後ろから男の人が、腕を伸ばして男の子を捕まえる。

「子供じゃないんだから、馬鹿なするなつて」

呆れたような声を上げながら、男の子を軽々と隣のベランダへ引っぱり……

「いてっ」

……落とした。

私は外れた腕をそのままに、新たに現れた男の人を呆気にとられたまま見上げた。

二十代後半もしくは三十代前半くらいかな。

短めの髪に、優しいそうな目。

そんなに筋肉なさそうなのに、男の子を軽々と引っぱり上げて……

「後ほどご挨拶させていただくはずなんですが、こんなところからすみません。隣に越してきた、遠野です。よろしく願いします」

じつと見ていた私に気付いて、その男の人……遠野さんは頭を下げて柔らかに笑った。

うわああ……、笑うと凄く可愛い……。

さっき引いたはずの血が、一気に顔に集まってくるのを感じて思わず俯いた。

「私の方こそすみませんっ。あの、えっと上条です。上条 由比です」

「俺は翔太！ ていうか、名前言わないとわかんねーじゃん。俺た

ち二人とも、遠野なのに。大人のクセに抜けてるよなー」

ひょこつと遠野さんの前に顔を出してきた男の子、翔太くんは途中から視線を上げて呆れた視線を向ける。

それを受けて軽く翔太くんの頭を叩くと、遠野さんは恥ずかしそうに私を見た。

「遠野 圭介です。上条さんはお一人暮らしなんですか？ ご家族の方は……」

ちらりと布団に視線を向ける圭介さんに、慌てて両手を振る。

「おっ、お一人暮らしですっ」

「お一人暮らしって、自分で言うかー？ ていうか、女の一人暮らしをはいはい暴露するってどうよ」

翔太くんに突っ込まれて、両手を挙げたまま顔を俯ける。

「お前はホントに……。すみません、こいつ口悪くて」

慌てて翔太くんの頭を下げさせる圭介さん。

なんだか仲のいい親子だなあ……。

思い出しそうな記憶を見ない振りして、にこりと笑う。

「いえ、とんでもないです。その……、今日からこちらに？」

荷物を運び入れたような音がしなかったことを不思議に思いながら聞くと、圭介さんは気付いたように腕時計を覗き込む。

「あ、これからなんです。騒がしくしてしまうと思いますが、どうもすみません」

「いえ、どうぞお気になさらないください」

頭を下げる圭介さんに合わせて同じ様に頭を下げると、彼は仕切りの向こうに姿を消した。

私もサンダルを脱いで、部屋に戻る。

ゆっくりと窓を閉めると、両手で頬を押さえた。

うわーっ、恥ずかしかったあぁっ！

ときどきと鼓動を刻む心臓を感じながら、真っ赤だろっ頬が熱くて仕方ない。

女子高だったし、女子大だったし、やっと就職した会社も部署は総務で男性比率は低い。

恥ずかしいのよ、慣れてないのよ、しかも圭介さんカッコイイし！！

やっとおさまってきた鼓動に、小さく息を吐いてベッドに腰掛けた。壁の向こうでは引越し業者が着たのか、チャイムに続いて部屋を歩き回る音が微かに聞こえる。

ていうか、なんでうちの隣なんだろう。

二階にある五部屋のうち、埋まっているのは私の部屋だけ。

普通角部屋とかの方が、よくない？

首を傾げつつパチンと頬を軽く叩くと、さっきやろうとしていた洗濯に取り掛かった。

「さて、と。完璧完璧」

腰に手を当てて、うんうんと頷く。

……人暮らししていると、独り言多くなるよね

その考えに自分で頷きつつ、目の前に広がる食料ににんまりと笑う。

以下、目の前のテーブルに並ぶ荒熱の取れた冷めた食料

- ・シチュー
- ・チャーハン
- ・ゆでたのみの、パスタ
- ・餃子
- ・ハンバーグ
- ・豚肉の味噌漬け（生）
- ・鶏の味噌漬け（生）
- ・牛切り落としと牛蒡煮

全て、冷凍するのです！！

ほくほくしながら、小分けして保存容器に入れていく。

お弁当と夕食用に、休みの日に必ず作り置きのご飯を冷凍する事に行っている。

だって、仕事から帰ってきてご飯作るの面倒なんだもん。かといって、お金もないから外食なんて出来ないし。

詰め終えたものを、冷凍庫に詰めていく。

「よし、終了」

全て終えて、エプロンをはずした。

壁際に置かれた時計は、十二時過ぎを指していて、
確かにお腹すいたなあと、台所に視線を移す。

「……あ」

そこには、まだ冷めていないシチューのなべ以外何一つ残っていない
かった。

作った満足感からお昼用を残さないで、全部冷凍してしまった馬鹿
な私……。

がつくりと肩を落として、テーブルの上においてあった財布を手に
取る。

そのまま戸締りをして上着を羽織ると、玄関のドアを開けた。

「あ、由比！」

同じタイミングで隣のドアも開いたらしい。

ドアを閉める音と同時に、翔太くんの声が聞こえて顔をそっちに向
けた。

「ああ、翔太くん」

鍵を閉めてもう一度見ると、上着のポケットに両手をつ込んだ翔
太くんがにこにこ笑って立っていた。

「ねえ、ここから一番近いスーパーってどこ？ 場所教えて欲しい
んだけど」

満面の笑みを浮かべる翔太くんに、思わず目を逸らしたくなる。

何？ このキラキラした笑顔は！！

可愛いんですけど、肌綺麗なんですけど、なんか……女として悔しいんですけど。

男の子でこれだけ可愛いって、彼女とか凄い可愛くないと大変そうだわ。

「由比？」

見たまま動きが止まっていた私を不思議に思ったのか、とことこと音がしそうな歩き方で傍に来る。

「ちよつと、由比ってば」

ぴらぴらと顔の前で振るその手さえも、綺麗な肌。

ふと視線を上げて翔太くんを見ると、ん？ という風に首を傾げる。また、その仕草が可愛いったらありゃしない。

「なんだっけ、スーパーだっけ？」

手にしていた鍵をミニバッグに入れると、私は翔太くんを促して歩き出した。

「うんそう、昼と夕飯のおかず買って来いって」

右手をポケットから引き抜くと、そこには指先に挟まれたメモ用紙。小さな紙には、所狭しと買い物リストが並んでいる。

それを受け取りながら階段を降りて、駐車場を抜けた。

祝日のお昼。

このアパート自体子供のいる家族は入居していないから、静かな空気が流れていて。

そのまま目の前の土手を上がっていく。

「私も今から買い物だから、一緒に行こう？」

「あ、マジで？ 助かったー。圭介ってうるせえんだもん、適当に買ってくと」

嬉しそうに両手を挙げる翔太くんは、やっぱり可愛い。

「そうなんだ。でもこのリストを書いたと思えば、確かに細かそうね」

もう一度メモ紙に視線を落とすと、二列に並んだ綺麗なリストが目映る。

翔太くんは上げていた手を後頭部で組みながら、まあねーと呟いた。

「クセでしょ、板書の」

「板書？」

疑問の声を彼に向けると、ああ、とこつちを向いた。

「圭介、高校の先生やってんの。科目は日本史」

「へえ？」

さつきベランダで会った、圭介さんの顔を思い浮かべる。

優しくそうで温和そうな彼には、似合いの職業かもしれない。

思わず頬が熱くなりだして、慌てて手のひらを当てる。

いくらあまり免疫がないとはいえ、赤くなりすぎだつての、もう。そんな私の状況を見ていた翔太くんが、ぽんつと右の拳を左の手のひらに当てて納得したように頷いた。

「もしかして、圭介、由比の好み？」

「は?!」

思わず叫んでしまった自分の口を、手のひらで塞ぐ。

叫ばれた方が驚いたのか、翔太くんはぽかんと口を開けたまま私を見ている。

私は気まずい雰囲気、視線をさまよわせてから溜息をついた。

「……そうじゃなくて。私、女子高・女子大で来たから、男の人とあまり話したことなくて。だから、つい顔が赤くなってしまうだけで」

情けないーっ、情けないよ私。

「え、じゃあ俺は？」

情けない告白にへこみ始めた私に、怪訝そうな翔太くんの声が掛かった。

……へ？

きょとん、と顔を上げて彼を見た。

「さすがに子供は大丈夫」

「……何、由比にとつて高三って子供に入るわけ？」

「うん、入る……って、は？」

「——は？」

答えてから聞き返した言葉を、同じ様に翔太が聞き返してきた。

「だれが、高三？」

「俺が、高三」

「え、十八歳？」

「十月には十八歳」

「——」

口を噤んだ私と、面白くなさそうな顔をした可愛い翔太くん。

一気に頭が回転した。

「ええっ！　嘘だあっ！　そんな可愛いのに、高三なんてありえな

い！ 女への冒涇だわ、その顔寄越せっ！」

「うわ、ひっで！ 思春期の高三男子捕まえて、そんな事言つか、普通！」

「だって、絶対高一か中学生かそこらかと」

「……」

無言の睨みに、黙りました。

「まったく、好きでこんな顔に生まれたんじゃないの」

「……ごめんなさい」

「なのにひでえよな、女への冒涇とか言われてさ。俺が何したってんだよ」

「……ごめんなさい」

さっき会ったばかりの年下の子に、私はどれだけ言われればいいのだろう。

あの後スーパーにつくまでぶつぶつと文句を言われ続けた私は、買い物カートを押しながらまだ言われていた。

よほど言われたくない言葉だったらしい。

まあ、中学生は言い過ぎたよね。

いけないことを言ったのは自分なので、仕方がない。

圭介さんが書いたリストの物を、カートに入れていく。溜息をついたとき、首元に温かさを感じて飛びのいた。

「なっ、何っ！」

私が居た場所には、上半身を屈めた体勢の翔太くんの姿。

首を押さえて見上げると、少し驚いたような表情だったのがにやりと笑みを浮かべた。

「あれえ？ 子供は大丈夫なんじゃないの？」

「驚くでしょ、普通っ」

思いつきり睨み上げて、踵を返す。

そのままレジを通って、荷物を袋詰めした。

いくら悪い事を言ったからって、あんな悪戯される覚えはなしっ。

翔太……くんづけなしっ！……は、隣で楽しそうに買ったものを袋に詰めている。

なんか余裕で、ムカツクんですけどっ

入れ終わった買い物袋を持ち上げようとして、横から出てきた手にそれを持っていかれた。

手元には、軽いものしか入っていない買い物袋。

「由比、行こ？」

につこりと笑みを浮かべるその顔は、顔だけなら可愛いのにっ！

この数十分のやり取りで、それが腹黒な笑みだと気付かされて思わず溜息をついた。

一方的にしゃべってくる翔太に相槌をうちながら、アパートの階段を上る。

「ああ、上条さん……て、あれ翔太？」

その声に顔を上げると、丁度部屋に入ろうとしている圭介さんがこっちを見ていた。

「もしかして一緒に行ってもらったんですか？ ご迷惑お掛けして……」

慌てて走りよってくる圭介さんに、笑顔を返す。

「いえ、とんでもありません。丁度私も行くところだったので」

「そうなんですか？ ありがとうございます」

そう言つて、部屋へと歩き出す。

「男手一つで育てている所為か、どうにも……」

「あ、いいえそんな。お気になさら……ず……？」

圭介さんの言葉に答えていたら、ふと違和感。

「どうされました？」

いきなり黙った私を不思議そうに伺う圭介さんにどう答えるべきか考えたまま、足は自分の部屋に向かつて。

黙々と歩きながら、家の鍵を取り出す。

「上条さん？」

その声に、鍵を開けてドアノブを引きながら顔を向ける。

聞いておくべき……？

踏み込みすぎ……？

「あの……」

黙ったままの私に声を掛ける圭介さん。

……うん、聞いちゃえ。

「……圭介さんて、おいくつなんですか？」

歳ですか？ と、困ったように首をかしげた圭介さん。

「今年二十八歳になりますか」

丁寧に教えてくださいました。

——翔太は、十八歳

——圭介さんは、二十八歳

「……十歳の時の……？」

「え？」

ぼそりと呟いた声に聞き返されたけれど、驚愕の事実には私はドアを開けて部屋に入った。

——つもりだった

閉めようとしたドアを引かれて、よろけた身体を後ろから伸びてきた腕に肩を引き寄せられる。

「こら、翔太!？」

慌てたような圭介さんの声と、足音。

背中に感じる温かさに、びくりと身体が震える。

「あれえ？ 子供だから大丈夫なんじゃないの？」

意地悪そうな声が、耳元で聞こえる。

「ちよつ、離してっ」

「えー、さっき俺が頼んだとき離してくれなかったじゃない。すつごい切実だったんだよ、あん時の俺のじょうた……」

「翔太!!」

圭介さんが引き剥がすように翔太の腕を掴み上げて、私の身体を開放してくれた。

振り返ると、口を尖らせた翔太と腕を掴む圭介さん。

「ホントすみません、ほら翔太。謝りなさい」

促すように背中を叩くと、翔太は圭介を見上げた。

「でもこのままじゃ、圭介は十歳で父親になったすげー人になるよ」

「……」

しん、と静まり返りました。

弾かれた様に私に向き直った圭介さんは、がしつと両肩を掴むと「違います!」と叫んだ。

「え？」

だって、翔太のお父さんなら……

疑いの目のまま見上げると、圭介さんは焦ってるのか凄く真剣な表情。

「翔太は年の離れた弟です。私の子ではなくて」

「え？」

年の離れた、弟？

「だって、男手一つでって……」

「それは」

「ていうかさー」

私の言葉を、翔太の声が遮った。

肩に手を置かれたまま、二人でそっちを見る。

翔太は手に持った買い物袋を少し持ち上げて、肩を竦めた。

「腹減ってんだけど。昼、食おうぜ？」

そう言つて、玄関先から顔を部屋のほうに向けた。

「すごいいい匂いするんだけど、シチュー？」

その声に、頷く。

「うん、さっき作ってたから……」

「だから、由比、いい匂いしてたんだ」

ちよんちよんつと指先で首筋を叩かれて、首を竦める。

「もしかしてさっき、匂い、嗅いでたの……？」

さっき、スーパ―で接近してた時……

「うん。いい匂いするから、何かと思って」

それがシチューの匂いって、どれだけ色気ないわけ？ 私。

女としてどうよ。

がつくりへこんでいたら、

「ね、食わせて。由比」

と、そのまま部屋に上がろうとするのを圭介さんが引きとめる。

「勝手に上がるな、女性の部屋に。すみません、あの、お話は食事の後にでも」

「ええっ？ シチュー食いたいつ」

「うるさい、行くぞ」

言い合いながら出て行く二人に、慌てて声を掛けた。

「あのっ。よければ、食べますか？」

「え？」

「食っ！」

喜ぶ翔太と戸惑う圭介さん。

そりゃそうだね、私もさすがに部屋には上げないでしょ。

「川の土手のところに、休憩用のベンチと小さなウッドテーブルが置いてあるんです。アパートの大家さんが、設置してくださったんですけど。そこで昼食食べませんか？」

嬉しそうに頷く翔太と、困ったような笑顔の圭介さんは、なんだかどちらも可愛かった。

「早く、早く」

玄関先で私を急かす声に、つい笑いそうになって口元を引き締める。こっ、なんていうの？

子供がご飯を待ちきれなくて、箸とかでお茶碗叩いている状態？大きいから余計に面白い。

圭介さんに準備するからと戻ってもらったのは数分前。

十分後に廊下で待ち合わせだと言っているのに、翔太は騒がしい。

「ねー、早くしないと上がるよー」

「ちよつと待つてつて」

別に上がってきてても構わないけど、圭介さんの手前、女として無自覚と思われても嫌過ぎる。

確かに今日初めて会ったわりには、凄い馴れ馴れしい気はするけれど。

でも、なんだかんだ言っっちゃんと玄関で待つているとことか。

こっちが不快になるようなことはしていないというか。

ある意味、無邪気というか翔太は行動にあまり意味がないんだろうなと思う。

まあ子供ならではの順応性というか。

馬鹿にされているというか。

确实、女にみられてないからの態度なのだと。

ははは、圭介さん考えすぎ

——それはそれで、へこむ

内心がつくりきながら、シチューの入った鍋を布で包んで玄関に持っていく。

待っているのに飽きたのか座っていた翔太が、飛び跳ねるように立ち上がった。

「よっしゃ、早く行こう」

鍋に伸ばそうとした翔太の手を、遮るようにぽんと叩いて止めた。

「あともう少し、我慢」

叩かれた腕を渋々下げながら頬を膨らますこの子を、どう高三だに見ればいいのか。

ホント、唯の子供だよね。

さながら待てをされた、大型犬。

「翔太くんは、ツナとハムとチーズ、どれが好き？」

「え？ 全部」

脊髓反射並みに答えた翔太に、腕まくりをしながら「全部か」と笑う。

「圭介さん来るまであと五分。まあ、間に合うでしょ」

そう言いながら、短い廊下をキッチンに戻った。

テーブルの上には、サンドウィッチ用の食パン。

夕飯でシチューと一緒に食べようと思っていたけれど、まあいいや。

「由比、何してんの？」

玄関先から翔太が不思議そうな声を上げている。

それはそうだろう、なんと言ってもお腹がすいて人を急かしていたくらいだ。

けれどさっき私に聞かれたのが食べ物に関係している事で、翔太の

忍耐力はまだ保たれているようだ。
うるさいけど。

「すぐ作るから」

自分が食べたかったから既に作ってあったツナマヨ（マカロニ入り・私の好物）を、レタスと一緒にマーガリンを塗ったパンに挟む。
ハムとチーズは一緒にパンに挟み、出来たものをパン用の包丁で4ノ1に切り分ければ終了。

それをペーパーナプキンに包んでラップで包む。

手近にあったマチの広いトートバッグに入れて、準備終了。

バッグにお皿とスプーン、お絞りを入れると翔太の待つ玄関へと向かった。

「お待ちせ。さ、行こう」

立ったままこっちの様子を伺っていた翔太は嬉しそうに頷くと、廊下にさっき置いた鍋を手につと玄関のドアを開けた。

それに続いて、外に出る。

「すみません、お待ちせしてしまつて」

既に待っていたのか隣の部屋のドアに寄りかかる圭介さんの姿に、慌てて頭を下げる。

圭介さんは温和そうな顔を少し崩して、私の手からバッグを取ろうと手を伸ばしてきた。

「あ、大丈夫ですよ。持てますから」

そう言つて遠慮しようとしたけれど、あっさりとバッグを持っていかれてしまった。

「こちらが無理を言つたんですから、この位させて頂かないと」
なんだか義理堅い人だ。

そして温和そうだけど、多分頑固だ、この人。

さつきから流されているようで、自分の主張だけは曲げないもの。

私は早々に諦めて、頭を下げる。

「じゃあすみませんが、お願いします」
「いえ」

私の言葉を聞くと、満足したように歩き出した。

階段を降りて表に廻る。

そこは、アパートにしては大きめの庭という名の敷地が広がる。

土手との境には低い生垣があるけれど、風景を邪魔するものじゃない。

生垣の向こうには、さっき通ってきた土手が続いている。

その生垣の少し手前に、大家さんが置いてくれたベンチとウッドテーブルはあった。

アパートの皆と大家さんと、たまにここで集まってご飯を食べたりする事もある。

テーブルの上に荷物を置いてもらうと、バッグから中身を取り出す。翔太はうきうきとした顔で、シチューの入っている鍋から布を剥ぎ取っていて。

圭介さんは伸びをしながら、土手の方を見ている。

——なんか、年の差？（笑

「綺麗ですよね、ここの風景」

そんな圭介さんを横目で見ながら、シチューをよそつ。

五月にシチューは暑い気がするけれど、川風が少し冷たいからいいかもしれない。

圭介さんは風景に見惚れていたことに気付いたのか、慌てて自分が持ってきた袋から飲み物を取り出し始める。

「本当に綺麗ですね。アパートを探していくつか見ましたが、この風景に惹かれてここに決めたんですよ」

「あ、私もなんです。本当に綺麗ですよ」

そんな感じでのほん会話を交わしていたら、翔太の喜びに満ちた叫び声に引き戻された。

「すげえ、サンドウィッチだ！ さっきこれ作ってたんだ、由比」
サンドウィッチのラップを外しながら目をキラキラさせている翔太を見ると、なんだか微笑ましい。

「たいしたものじゃないけどね。私的、シチューにはサンドウィッチを添えたいの。巻き込んですみません」

途中から圭介に視線を移すと、やっぱり困ったような顔をしていた。「なんだか、本当にすみません……」

「そんな恐縮していただくようなものじゃないですから、お氣になさらないでください」

見下ろされる視線に、頬が熱を持っていくのに気付く。

また翔太にからかわれたら大変とばかりに、視線を逸らしてさつさとベンチに腰掛けた。

「上手いよ、由比。料理得意っぽい」

「ぽいつてなに、ぽいつて」

すでに片手にスプーン、片手にツナサンドを持って食べ始めている翔太の言葉に、嬉しく感じながらも突っ込みは忘れない。

まあ、得意とは言わないけどね。
普通です。

「本当においしいです」

圭介さんの口にもあつたみたいだ、それにほっとする。

「喜んでいただければ、嬉しいです」

満面の笑みを浮かべると、圭介さんは少し眉を顰めてから小さく溜息をついた。

「ただ……その、少しだけ大人から忠告させて頂いてもよろしいですか？」

…… 大人？

私も大人ですが。

「…… はい？」

圭介さんは持つていたスプーンを置くと、じっと私を見下ろす。

何を言われるのかと掬ったシチューをスプーンごとお皿に戻して、

圭介さんの言葉を待った。

圭介さんは少し逡巡するように瞬きをしてから、口を開いた。

「お隣さんとはいえこちらは男所帯、あなたは若い女性なんですからもう少し警戒された方がいいと思います」

――

「あ、はい」

そのことか。

一応、自覚して暮らしてはいるんだけど。

まあ確かに、なんだか流されるように翔太に呼び捨てにされているし。

すると隣でサンドウィッチを食べていた翔太が、呆れたような顔を圭介さんに向けた。

「つつかさ、それ今言う事かよ。大体、圭介も食べさせてもらってるんだから同罪だろー」

「翔太、くん」

落ち込みそうだった気持ちだが、ふっと踏みとどまった。

「なあ？ 圭介、口煩すぎ」。家でまで、センセやらないでください。息詰まりますう」

少し暗くなつた雰囲気をかき消すようにおちゃらけた口調で言う翔太に、圭介さんは首の後ろを押さえながら頭を下げた

「上条さん、すみません。あの、怒っているとかそういうわけなじ

やいんです。ただ、その、心配で」

「あ、いいえ。その、心配して貰えて嬉しいです。そうですね、気をつけます。ありがとうございます」

翔太のおかげで少し上向きになっていたから、素直に圭介さんにお礼を言えてほっとする。

心配してくれたんだから、ここは喜ぶところだよ。うん。

圭介さんはほっとしたような顔で、ほんわかと笑った。

「すみません、ホント職業病ですね」

やっとな暗い雰囲気が払拭されて、内心ほっと溜息をつく。

やっぱり、ご飯は楽しくおいしく食べなくちゃね！

「そういえば、高校の先生をされているんですね」

シチューを口に運んでいた圭介さんは、ええ、と頷いた。

「日本史を担当してます。今は興味を持ってくれる学生が多いので、助かってますよ」

「圭介自身が人気あんじゃん。俺も同じ高校通ってるんだ」

空いている手を軽く振りながら突っ込む翔太に、思わずうんうん頷く。

「確かに圭介さん、人気ありそう。バレンタインデーとか、結構貰っちゃうんじゃないですか？」

私も女子高時代、先生にあげたなあ。

義理だけど。

でも、圭介さんは本命で貰えそう。

「そうですねえ、今の子達は義理堅いみたいで」

「いや、義理じゃねえし」

去年どれだけ凄かったかを楽しそうに話す翔太に、君もでしょ、と笑う。

「たくさん貰いそう」

そう言うと、翔太は少し遠い目をして自嘲気味に笑った。

「俺こそ義理。あと、“遠野先生に渡してください”とか言うのも多い」

「そう？ もてそうなのに」

「どうせ女への冒涇ですからね」

あー、根にもたれた。

ふて腐れたように口を突き出すその顔は、どう見ても子供。背もそこそこ高いのに顔が可愛いから、どうしても友達になっちゃうのかしら。

私は翔太の頭を軽く叩くと、ごめんと謝った。

「謝ってるように見えないけど？」

……顔が笑ってるのは許せ。

「どちらにしても、バレンタインデーは大漁なわけですね。おすそ分け、楽しみにしてます」

にこにこ頭を下げると、由比こそ寄越せ、と突っ込まれました。いいじゃない、そんだけ貰えるなら。

圭介さんはのほほんと笑いながら、

「来年の事を言つと、鬼が笑いますよ」

「……」

と、きつと今の若い子には通じないような言葉をおっしゃってました。

「あら、由比ちゃん。お昼食べてるの？」

圭介さんを生暖かく二人で見ていたら、後ろから声をかけられて振り向く。

そこには、大家さんの奥さんの姿。

五十代の奥さんは、明るくておおらかで肝っ玉母さんみたいな人。

丁度、外から帰ってきたのだろう母屋に行く途中らしかった。

ちなみに母屋は庭を突っ切って、防風林の向こう側にある。

「こんにちは。孝美さん」

ベンチから立ち上がろうとすると、それを制するように孝美さんが片手を振った。

座っててという言葉に、そのままの体勢で顔だけ向ける。

「あら、新しい住人さんね。遠野さんだったかしら？」

孝美さんは私の後ろに立つと、目の前の二人に笑いかける。

圭介さんと翔太はベンチから立ち上がって、頭を下げた。

「今日から、どうぞよろしくお願いします」

「お願いします」

圭介さんに続いてぺこりと頭を下げる翔太に、一瞬呆気に取られる。

何、この殊勝な態度は！

思わず見つめた私に、少し目を細めて見返す翔太。

それに気付かない孝美さんは、二人に座るよう促すと私の肩に手を置いた。

「もう仲良くなったの？ お隣さん同士、いいことねー」

「あはは」

さつき、圭介さんには心配されちゃいましたけど。

「じゃあね」

孝美さんは楽しそうに笑うと、帰っていった。

それを見送って視線を戻すと、翔太をじと見。

「何、今の態度。凄い大人しくなっちゃって」

「由比にも同じ態度、とって欲しい？」

私の言葉ににやりと笑うその顔に、何か薄ら寒い感じがするのは気のせい？

翔太は持っていたスプーンを皿におくと、その可愛らしい顔を最上級に駆使したキラッキラの笑顔を私に向けた。

「由比さん、本当にお昼ご飯ありがとうございます。とてもおいしくて、僕、凄く嬉しい」

「……っっ」

うっ、うわあああっ

真っ赤……になるはずがない！

キラキラ笑顔が、可愛い顔に似合う言葉遣いが、こんなにも恐ろしく感じるとは！！

「嘘くさい、無理っ」

鳥肌が全身に広がりそうで、両手で自分の腕を抱きしめた。

翔太は聞こえない振りをしたままにつこり笑うと、小さく首を傾げた。

「また、作ってくれる？」

ぶあああああ↑鳥肌が全身に広がるの音（笑

「無理ーっ！ 絶対裏がある、その笑顔には裏しかないっ！」

鳥肌を鎮めようと高速スピードで腕をさする私を、いつもの調子に戻った翔太がケタケタ笑っていて。

その態度にカチンと来て、じろりと翔太を睨む。

「大体、私の方が年上なのに、何で呼び捨て？ しかも、ため口っか」といって、今更敬語で話されても怖いけど。

裏がありそうで↑こことにかく大事

「いい名前じゃん、由比っで。由比も俺のこと呼び捨てでいいよ？ それに初対面から抱きつかれて、敬語も何もないよねえ。」

翔太の言葉に、顔に血が上る。

「だっ、あっ、あれは！ ベランダから落ちるかと思ってっ」

「離してっでいったのに、離してくれなかったじゃん」

翔太、絶対しつこい！

「翔太、いい加減にしなさい」

それまで静かだった圭介さんが、食べ終わったのか口を開いた。

「少し馴れ馴れしすぎる」

「っーかさ」

翔太は圭介さんの言葉を遮ると、背中を伸ばすように少し反らした。

「圭介は年上なのに、堅苦しすぎ。由比は圭介の事名前で呼ぶんだし、由比の事だつて名前呼びすれば？」

「ちよつと、翔太くん」

何でそこに飛び火するんだと慌てて名前を呼ぶと、翔太は首を横に振った。

「翔太」

呼び捨てて？

既に頭の中で呼び捨てにしていたんだけど。

「んじゃ、翔太。別に、私は……」

「上条さん」

今度は圭介さんが私の言葉を遮る。

「はい？」

視線を向けると、少し真面目な顔をした圭介さんが私を見ていた。

「私が敬語だと、やはり気になりますか？」

「え……と？」

うーん……

圭介さんに聞かれて、思わず苦笑してしまった。

翔太に言われるのもあれだけど、確かにずっと気になっていた。

私が圭介さんと呼んで、向こうは上条さんと呼ぶ。

なんか、私が馴れなれしすぎる気がする。

敬語に関しては、会った初日で敬語じゃない方が珍しいと思うけど。

圭介さんは苦笑いの私を見て、ゆっくりと頷いた。

「そうですね。年下の方に、気を使わせてしまうのも申し訳ないですし。では敬語もやめ。貴女も止めてくださいね？　そして……」

そして？

「由比さんと、呼びます。いい？」

ぶわっ、と自分でも顔が真っ赤になるのが分かった。

鼓動まで、跳ね上がる。

敬語じゃないしっ！ 由比さんだって！

「はい、いいいです……」

なんか、すつごく恥ずかしいんですけど。

圭介さんはふわりと笑うと、右手を私の前に出した。

「？」

頬を押さえながらそれを見ると、右手を取られて強制的に握手。

「改めて、よろしくね。由比さん」

「——はい」

ニヤニヤと笑う翔太の視線を感じながらも、真っ赤になる顔を止められない。

——これが、お隣さんと会った、初めての日でした。

言ではない（涙

私の平穏な日の最後だったと言っても、過

三階建て＋倉庫を有するうちの会社の一階、自動ドアをくぐって二番奥。

事務課がドアを並べてまして。

私の所属している総務課はこれまた、一番奥。ドアを入って左端、そこに私のデスクがある。

いつもの朝のはずなのに。

溜息しか出ないのは、これいかに。

「なあに？ 朝っぱらからその辛氣臭い顔。もう昼よ？ あんたの大好きなご飯の時間なのよ？」

何度目かの溜息のあと、隣に座っている同僚があえて溜息に被せるように嫌々な声を上げた。

⌈
⋮
⌋

動かしていたボールペンを止めて視線だけ横に向けると、そこには綺麗な顔がしかめっ面になって向けられていた。

「その顔でこっち見ないでよね、なんか悪いものに移りそう」

「ちよつと桜、その言い方は酷くない？」

「事実を言っただけ」

——冷たい

「都築さん、上条さん。先にお昼は入ってもらえる？ 私、カウンターにいるから」

「はい」

カウンターに座ろうとしている主任からの声に、二人揃って返事を返す。

総務は問い合わせやお客様の対応もするから、誰かが必ずいなきゃいけない。

私と桜はまだ入社したばかりだから、任されることはないけれど。

桜と連れ立って屋上に出る。

ぽかぽかな陽射しの中お弁当を広げると、昨日あったことを掻い摘んで話した。

「あら、羨ましい。いいじゃない。格好いい年上男性と、可愛い年下の子。ていつても、高三は子供とはいえないわね」

「え、そう？ 子供でしょ、まだ」

高校生だし、十八歳だし。あ、まだ翔太は十七歳か。

桜は少し呆れたように、私の頭を撫でた。

その態度に首を傾げると、もっと呆れたように溜息をつかれた。

——なにさ……

「あのねえ、由比。十八歳っていったら、ほとんど大人よ？ 少し頭が子供の、体は大人なんだからちゃんと気をつけなさいね」

「それ圭介さんにも言われたけど、一応、私も気をつけてはいるし。部屋には上げなかったよ?」

胸を反らして得意げに言ったら、はいはい、とあしらわれる。

「玄関の中に入れて、ドアを閉めてる時点でアウト」

「はあ? 隣に圭介さんいるのに? 何もないよ、いくらなんでも」
けらけら笑う私の頭を、桜に思いつき叩かれました。

「なんか、そのケイスケサンとやらの気持ち、凄く分かった気がするわ」

片手を気だるそうに振ると、桜は片付けたお弁当箱を持って戻って
いってしまいました。

先行くわよ、と一言残して。

それを見送ってから、後ろのフェンスに背をもたせ掛けた。

視線を上げると、綺麗な青空。

所々に浮いている雲が……

「おいしそう……」

呟いてから、違う違うと自分で突っ込む。

「まあ……、確かに」

からかわれただけとはいえ、あれはちょっとびっくりしたかな。

スーパ―で首もとの匂いを嗅がれた時と、アパートの玄関で肩を引き寄せられた時。

いくら可愛い顔だからっていつでも、私より背も高いし力も強いんだろう。

——でも、ねえ……

シチューとサンドウィッチを頬張っている姿が、ふと脳裏に浮かぶ。

あれ見せられたら、子供としか思えないでしょ。

思わず口元がにやけてしまう。

ずっと一人暮らしたから、自分のご飯を喜んで食べてくれるのが凄く嬉しかった。

いつもは圭介さんがご飯作ってるのかな。

多めに作って持っていたら、喜んでくれるかしら。

でも……、押し付けがましいかな。

「――何、にやけてんの？ 上条」

「へ？」

掛けられた声に目を開けると、目の前に突っ立って私を見下ろすでかい影。

無表情に思いつきり怪訝そうな色を浮かべたその人は。

「桐原、主任」

隣の課の、主任サマでございました。

桐原 悟 人事課主任 二十八歳。

がつしりした体躯に、直毛だよな？ の真っ黒な髪。

若手の中で、有望株。

——桜談

私にとっては、ただの怖い（ムカツク）トナリノ課の上司だ。

じつと見上げていた私に、怪訝そう↓不機嫌そうに表情を変えたのが見て取れる。

この人は無表情なんじゃなくて、ただ面倒だから顔を動かさないだけだ。

入社前研修で私の入っていたチームのリーダーだった、桐原主任。

初めて見る会社の上司に、ものすごく緊張した覚えがある。

表情少ないし、皆結構恐れていたけど。

けれど、的確にチームに指示して課題をこなしていくその姿は、感嘆の一言だった。

いるんだなー、リーダーになるべくしてなる人って。

そんなことを思った。

だから、あの時点では凄く尊敬していたんだけど。

「あー、ねずみ……」

これ！

隣の課に配属になったから、人がわざわざ挨拶に行ったのに！

一緒に行った桜には普通に返事したのに！

人が“ねずみ”発言に呆気にとられているうちに、桜には“おう”とか言いやがって！

それ以来、この人に対する尊敬の念なんぞ消え去ってございます。

「上条。お前、上司に対していい態度だな、オイ」

ですので、睨まれようと凄まれようとひとつも怖くないわけです。こいつの方が、常識だからね！

「キリハラシュニン、ナンゾゴヨウデスカ」

日本語って、こういう時素敵。

ちゃんと言いながら、口調で不機嫌さを表わせるなんて。

座って見上げたままカタコト口調で返したら、そのでかい手に頭を驚？みにされました！！

パワハラだ！

「痛い痛い！」

掴んでいる手を慌てて叩いても、その頑丈な拘束は一向に緩まず。

「噛み付くだけじゃ、能がないんだよ。もっと人間らしさを磨いてから反抗しろ」

「桐原主任、失礼です！」

私に！！

人間だもん！

人間じゃなかったら、なんだというんだ！

「男に浮かれてる暇があったら、さっさと仕事を覚えろ」

「はあ？」

男に浮かれてる？

「誰が！ いつ！ どこで！ 浮かれたっていうんですか！」

勢いよく頭を振って桐原主任の手を何とか外すと、威嚇するように睨み上げた。

桐原主任は私の威嚇なんてどこ吹く風、両腕を前で組む。

「お前が！ いま！ ここで！ 浮かれきった話してただろうが！」

「盗み聞きですか！ うわ、サイテー」

「お前の態度の方が最低だ！ 社会人として！ 女として！」

ゼーはーゼーはー

ぎりぎりと睨み合う私たちの間にあるのは、息切れの音。

ご飯食べた後の怒鳴り合いって、胃に悪いと思う。切実に。

「ていうかさー、よくこの衆人環視の中、二人の世界に入っているよね」

どちらが動くか、そんな捕食現場に割り込んできたのは、のほほんとした軽そうな声。

最近よく聞く声なので、私たちの態度はひとつも変わりません。すると大きな溜息を疲れました。

「あのさ、少しくらいこっち見てくれてもいいと思わない？」

「思わない」

「目を逸らしたら負けなので、今は無理です」

軽い声に応える言葉は、異口同音、否定。

「いつから勝負になったの」

途端、目の前にこれまたでかい手のひらが出てきました。

視線を遮られて、それまで固まっていた身体がふいに動く。

そこでやっと、軽い声の持ち主に顔を向けた。

「工藤主任、こんにちは」

「はい、こんにちは」

その明るい笑顔に、少し恥ずかしさが戻ってくる。
ちらりと辺りに視線を廻らすと、面白そうにこっちを見ている社員
の姿。

いけないいけない、またやってしまった。

男の人、ちょっと苦手。

とか言ってる私ですが、この桐原主任だけは“ねずみ”発言以降、
“男”のカテゴリから外したわけです。

敵、もしくは抹殺目標！

でも、基本的男の人は若干苦手なので、工藤主任には恥ずかしさが
前面に出ます。

「器用な脳みそだな」

なんで人の心の声を読むんだ、桐原主任め。
人事課だから？ ↑ そんなわけない

「工藤主任は、これからお昼ですか？」

五感から桐原主任を消去して、工藤主任に話しかける。
上着は置いてきたのだろう、Yシャツ姿が目には沁みる。

いや、物理的に。

真っ白に反射する、日の光の所為で。

「そう、今帰ってきたんだよ」

軽く持ち上げる右手には、コンビニのビニール袋。

工藤主任は桐原主任の同期。

営業二課所属。

桐原主任と同じ様に、入社前研修で他のチームのリーダーをしてい

た。

それでも話す機会があったから、一応見知り合いくらいだったんだけど。

“ねずみ”発言で桐原主任と対立し始めてから、よく話してくれるようになった。

でも、まだ馴れるまではいかないんだよね。

「じゃあ、私総務に戻ります。失礼します」

工藤主任にだけ頭を下げて、ランチバッグを掴むと屋上からビル内に入る。

「――」

後ろからついてくる不機嫌オーラにエレベーターで追いつかれて、ぎりっと睨みあげる。

「桐原主任、わざわざついてこないでください」

「お前が俺の前を歩いていただけだ」

「工藤主任と話してもして来ればいいのに」

「別に、用はない」

お互い顔を見合わせないまま言い合っていていれば、やっと上がってきたエレベーターのドアが開いた。

無言で勢いよく、乗り込む。

一階までのこの無言空間、ハッキリ言って居心地は最悪。

「……入社前は殊勝な態度だったのに、よくまあ百八十度変われるな。ある意味、尊敬」

人が文句を言いたいのを頑張って黙っていたのに、腕を前で組みながら溜息混じりに言われればやっぱりむかつくわけで。

「あのですね……」

落ち着け……、落ち着け私……

呪文のように心の中で繰り返しながら、口を開く。

「尊敬できる方には、ちゃんと接します。それでもない桐原主任だけは、それなりの対応をします」

「俺、限定かよ」

「ですね」

軽い電子音がして、エレベーターの動きが止まる。

開くドアを待っていたら、ぼそりと爆弾を投下しやがった！

「ねずみのくせに」

かーっと頭に血が上って、繰り返ししていた呪文は頭の隅に飛んでいく。

「ねずみねずみ、うるさいわ！ 主任は猫ですか！！ お腹すいてんですか！ 私はご飯じゃない！」

「……そうねえ、とりあえずは人間ね」

叫び倒した私に、笑いを堪えるような声が掛かった。

その声に、自分の置かれた状況にはたと動きが止まる。

ここは、エレベーター。

開いたドア。

その前に、人事の女性社員・皆川さんーがファイルを手に、笑いながらこっちを見ていた。

「……う、うるさくしてすみません……」

我に返った私は、慌てて皆川さんに頭を下げる。

隣で“そっちかよ”と呟く声が聞こえるけれど、はなから無視。

皆川さんはくすくすと笑いながら、私が出られるようにその身体を斜めに下げた。

「どうせうちの桐原が絡んでるんでしょ？ 本当にごめんなさいね」

「皆川さん、大好きー！」

「あら、うれし」

艶のある唇を弧に描いて笑う皆川さんは、大人の女性。

桐原主任が同期とは思えない！

エレベーターから降りて振り返ると、ドアが閉まる所だった。

その向こうには、にやりと笑う皆川さんと呆気にとられた桐原主任の姿。

降りしてもらえなかったらしい。

「ざまーみる」

もやもやした気持ちが少し晴れて、私は総務へと戻った。

「……なんだよ」

ドアの閉まったエレベーターの中。

不機嫌さを増した桐原の目が、隣に立つ皆川を睨む。

皆川はそんなものはどこ吹く風、ファイルを持ち直すと溜息をついた。

「子供じゃないんだから。ばかじゃないの？」

桐原は視線を逸らして、口を嚙む。

「あのねえ、ああいう子にあんな態度とったって、あんたの望むような結果にはならないわよ」

「別に、俺は……」

「バレバレ。隠さなくてもいいわよー」

桐原の言葉を遮って、少し軽めに言う事で呆れている今の心情を突きつけた。

どう考えたって、好きな子苛めてる中学生。

二十八歳の大人がやることじゃない。

仕事は出来てもこういうことに不器用な桐原を、皆川は苦笑気味に横目で見上げた。

桐原は一瞬反論しようとしたのか口を開いたけれど、すぐにそれを閉じると口端だけ軽く上げた。

「……？」

三階のランプが点滅し、ゆっくりとエレベーターの速度が落とされた。

怪訝そうに首をかしげると、皆川は開いたドアから外に出る。

桐原は元々一階に戻るつもりだったから、降りずにそのまま。

「捕食、するか」

閉まる寸前、エレベーターから聞こえてきたその言葉に、皆川は動きを止めた。

エレベーターは、再び一階に向かって動き出す。

それを音で感じながら、内心由比へと謝罪の言葉を思い浮かべた。

——上条さん、ごめんなさい

私、焚き付けちゃったみたい

「由比、終わった？ 大丈夫なら、帰ろうよ」

終業時刻になると、学校の授業の鐘が鳴るのが地味に好き。
じゃなくて。

「終わった終わった、かえろー」

ノー残業をスローガンに掲げる総務は、当番で週に一度だけ電話番号という名の残業をするけれど、それ以外の日は終業の鐘〓帰宅！という、素晴らしい課。

事務課の平社員はほとんどこれに準じ、役職持ちでもあまり残業はしない。

ちなみに私の残業当番は明日。

いいか悪いか、ゴールデンウィークの前日。

まあ、翌朝寝坊できるからいっかな。

机の上を片付け、ノートPCを鍵付きの引き出しに入れ終わると、
鞆を持って立ち上がる。

「それじゃ、お先に失礼します」

桜と二人、総務の人たちに挨拶をすると、会社を出た。

会社を出て駅までの道のりは、五分もない。

卸会社が多いこの地区は、人通りも車通りも多く、帰社時間帯は結構な混雑。

「由比のこの後のご予定は？」

桜が腕時計を確認しながら聞いてくるから、即答。

「タイムサービス一直線」

握り拳もオプシオンで。

桜はくすくす笑いながらいつも通りね、と駅の改札をくぐっていった。

その後姿を見送って、駅の構内を突っ切る。

反対側の入り口は、駅に向かう人も出ていく人も少ない。

やっと体の力をぬいて、息を吐き出した。

そう、私の住んでいるアパートは会社と最寄り駅が一緒なのだ。

まあ、ここからアパートまでが大分遠いけど。

道のりにして、約二十分。

荷物を持つと、もっとかかる時もある。

それでも節約を目指す私としては、本当にいい場所に就職できたなあ。と駅をくぐるたびに思う。

あまり人通りのない道を歩き出そうと足を動かした途端、後ろから肩を掴まれて流石に飛び上がった。

鼓動が、急激に早くなる。

「ゆーい」

声も出ないほど心臓がばくばく意っている私の耳に届いたのは、楽しそうな男の子の声。

聞き覚えのあるそれに、思わず胸を押さえた手のひらから、ゆっくり力を抜いた。

「しょう、た」

それでも強張る身体が、声を震わせる。

「ん、由比？ ごめん、そんなに驚いた？」

私の声に翔太の方が驚いたらしく、慌てて正面に回りこむと私の顔を覗きこんできた。

黒い学ランが、目に映る。

「ん、大丈夫。ちょっとびっくり、した、ただだから」

大丈夫といいつつ、まだ震えそうな声を何とか絞り出す。

翔太は困ったように目の前で私を見ていて、どうにかしないといけないと思いつつ、身体は言う事を聞かなかった。

頭の中で、大丈夫大丈夫と何度も繰り返す。

ごめんねと謝罪を口にする翔太を、見上げた。

大丈夫、“あの人”じゃない。

焦ったような、困ったような、とにかく少し泣きそうに見える翔太を見て、やっと身体から緊張が抜けた。

「大丈夫、しょ……」

「上条？」

……え？

私の言葉を遮るように後ろから掛けられた声に、顔だけ振り返る。

「桐原主任？」

少し後ろに、桐原主任が立っていた。

——なんで？

桐原主任はゆっくりと私達に近づくと、ぽんつと私の頭に手のひらを乗せる。

「お前、流石に子供に襲われてるとか言っなよ？」

「は？」

襲われてる？

ぽかん、と口を空けたまま桐原主任を見上げると、眉を顰めた顔がさつきよりも近くにあつて驚いて一步後ずさった。

「っと……」

ら、翔太に体当たり。

ごめん、そういえば目の前にいたんだよね。

慌てて翔太に謝ろうとしたら、頭にのつていた桐原主任の手がぐいっと私を引き寄せた。

「わっ」

よろけた身体を支えきれなくて、そのまま桐原主任にぶち当たる。

ちよっ、首っ！ 首がごきつていったじゃないか！！

「痛いです！ なんなんですか、桐原主任ってば！」

頭で人を操作するんじゃない！

鞆を持っていない方の手で主任の身体を押し返すと、今度は両肩を引かれて後ろによろけた。

背中が翔太の身体に当たる。

一体、何。この状況は。

——っか、頭がくらくらしてきた。

「ね、由比。この人誰？」

頭の上の方から、翔太の声が掛かる。

「その前に、この手を離そうか。翔太」

「ね、誰？」

人の話をまったく聞かない翔太に、私は溜息一つで諦める。

「会社の上司。桐原主任、そういえばどうしたんですか？ こんな所で」

確か主任は電車通勤じゃなかったでしたっけ。

「そのガキはなんだ？」

こいつも話聞かないよ。

私の周りは、何でもこんなに話を聞かない奴ばかりなんだろう。

だんだん、どーでもよくなってる自分が切ない。

「ガキってやめてくださいよ。お隣さんです。で、主任は一体……」

「ね、由比。今日の夕飯って何？」

「は？」

私の言葉を遮る翔太に、つい怪訝な声を返してしまった。

そこは許して。

なぜここで夕ご飯の話になるのかよく分からないけれど、もう諦めの境地なので何も考えずに昨日冷凍したおかずを思い出す。

「なんか、鶏肉食べたいからその味噌漬けかな。昨日、冷凍しておいたから。なんで？」

「由比、料理上手いもんね。昨日のシチューおいしかったし」

「あ、そう？ それは嬉しい」

料理を褒められると、ある意味、無条件で嬉しい。

じゃあ、お昼に考えていた事も、受け入れてもらえるのかな。

一人分作るより、多く作った方がおいしいんだよね。

食材をたくさん使えるから。

だしとかうまみとか、いっぱい出そうじゃない？

「上条、それって……」

桐原主任が怪訝そうに口を開いた時、後ろのロータリーに車が止まった。

その音に首だけそっちに向けると、シルバーの車から降りてきたのは。

「圭介さん！」

やたっ、救世主！

やっと話を聞いてくれそうな人が来て、思わず嬉しそうな叫びになつてしまった。

「……」

しまった、桐原主任の眼光が突き刺さる。

「由比さん？」

圭介さんは私の声に不思議そうにこちらを見た。

そりゃ、不思議な光景ですよ。

でかい男に挟まれるチビ女は、さぞかし面白い光景に違いない。

さながら連行される宇宙人……

言つてて、寂しくなつてきた。

歩いてきた圭介さんはとりあえずともいうように、私の両肩から翔太の手を剥がした。

後ろで翔太の舌打ちが聞こえたけれど、無視しておこう。

あんな可愛い顔から舌打ちとか、聞きたくない。

「由比さん、ごめんね？ また翔太が迷惑掛けたみたいだね」

ほわんとしたその笑顔に、すみません、顔が赤くなるのは止められません。

「あ、いえ。特に迷惑を掛けられたわけでは……」

両手で頬を押さえる私。どれだけ純情なんでしょう。はい、すみません、純情じゃなくてそこだけただの子供です。

自分突込みは忘れずに。とりあえず落ち着くから。

圭介さんはそんな私の態度にも突っ込まず、帰りですか？ と話を続ける。

「はい。これからスーパーにタイムサービス目指していく予定です！」

そこまで言わなくていいと思うよ、私。

言ってから突っ込む。

圭介さんはくすりと笑うと、それじゃあと車に視線を向けた。

「一緒に行く？ 私も翔太を拾ったら、買い物に行くつもりだったから」

「え、ホントですか？」

荷物持つて、歩かなくて済むわけですね！

喜んだ後、まてよ、と考え込む。

ちよつと図々しい気もするよね、私。

しかも、昨日警戒心を持てたことを圭介さんに言われたばかりなのに。

黙り込んだ私に、圭介さんが何か気付いたようにふわりと笑う。

「昨日私が言った事なら、気にしないで。もうまったく見も知らないわけじゃないし、由比さんさえよければ」

「図々しくてすみません、じゃあお願いできますか？」

「ついでに、鶏の味噌漬け頂戴」

「翔太」

口を挟んできた翔太に、圭介さんの声が飛ぶ。

いい加減にしなさいとでも言うその視線に、私は苦笑した。

「いいですよ、何枚も冷凍してありますし」

「早く帰ろ、お腹すいた」

翔太の言葉に笑いながら、はたと気付いて後ろを振り向いた。

「桐原主任」

そういえば、いること忘れてたよ。ごめんなさい。

じつとこつちを見ていた桐原主任は、私の声に視線だけ動かしした。

「なんだ」

「いや、なんだは私のセリフなんですけどね。こつちに何か御用でもあったんですか？」

さつきから聞いているのに、あっさり流してるんですが。

桐原主任は少し視線を動かしてから、もう終わったと呟く。
終わった？

聞き返そうとした私より先に、翔太が口を開いた。

「もしかして、由比に用があったんじゃないですか？」

「私？」

「僕がいたから話せなかったとか。すみません、邪魔してしまいましたが？」

ていうか僕って何。

何、猫かぶってんの翔太。

呆気にとられて翔太を見上げたら、私の視線に気付いたのか口端だけ微かに持ち上げた。

——こわっ、外面だ！ 昨日の孝美さんの時の翔太だ！

そんなことを考えていたら、溜息をつく音に桐原主任を見上げる。

「仕事の話が少しあったただだから、別に。明日会社で話すから、いい」

「仕事ですか？ なんです？」

気になるじゃないか、そんな言われ方！

桐原主任は明日でいい、と後ろの二人に頭を軽く下げて駅の改札をくぐっていった。

それを見送って、圭介さんの車に乗り込む。

「一体なんだろう、仕事の話って」

助手席の後ろに座りながら、シートベルトを締める。

助手席に座ればいいのに後部座席に乗り込んでいる翔太が、私を見

てにやりと笑った。

「由比つて、鈍いとか言われない？」

「言われない」

即答する私に、翔太の盛大な笑い声が押し付けられた。

スーパーのタイムサービス、間に合いました！

卵一人一パック¥98！

ひき肉、百グラム¥68！

キッチンペーパー 一人二点まで¥98！

五箱BOXティッシュ¥178！

これが目当てでした。

三人で行ったおかげで、大変効率よく大漁買いできて幸せ。

車が、アパートの駐車場に止まる。

とても安全運転な、安心できる道のりでしたよありがとうございます
す圭介さん。

内心手を合わせながら、車から降りた。

「ありがとうございます、圭介さん。かさばるものばかりだったから、凄く助かりました」

トランクから荷物を出していた圭介さんは、それを翔太に持たせながらこちらこそと笑う。「いい買い物が出来たよ。なんせうちには食べ盛りの高校生がいるから、節約しないとね」

「ああ、確かに」

教師のお給料がどの程度かは知らないけれど、男二人って食費かかりそうだなあ。

「早く行こうぜ、腹へってんだって」

両手に荷物を抱えた翔太は既に階段に足をかけていて、少しイライ

ラしているのが見て取れる。

お腹すくと、誰でもイライラするよね。確かに。

圭介さんと翔太の後ろから、階段を上る。

「翔太、駅からの道は大体覚えたのか？」

「ん？ ああ、なんとなく」

先に行く翔太が、振り返りもせずに答える。

「明日から自転車で駅までいける、大丈夫」

「ああ、道がうる覚えだったから、圭介さんが駅まで迎えに来たんですね」

私の言葉に圭介さんが頷いた。

「学校から乗せればよかったんだけど、駅に着いてから翔太が連絡してきたから。でもそのおかげで買物できたし、よかったかな」

「前向きですね」

くすくすと笑いながら、自分の部屋の鍵をバッグから取り出した。

翔太は既に私の部屋の前で、荷物を持って待っている。

「ああ、そうだ由比さん」

キーケースを手にした圭介さんが、ドアの前で私を見下ろした。

「なんですか？」

「敬語、お互いに止めようっていったよね？」

ふわりと笑うその顔は、……ある意味凶悪ではないでしょうか。

「おい、由比！ 早くー、手、ちぎれるー」

思わず固まった私は、翔太の声に飛び上がった。

「う、はいっ。……その、はい」

上では、くすくすと笑う声がする。

余計顔に血が集まりそうで、私は目を逸らした。

とにかく頷いて翔太の待つ自分の部屋のドアまで、早足で駆け寄る。後ろでは、部屋に入る音。

くっ、あの笑顔にやられる女生徒の気持ち分かるっ！

「ごめん、翔太。すぐに開けるから」

顔が赤いのは、駆け寄ったからだよと主張するように呼吸を早めた。いや、ホントはそうじゃなくても呼吸が速いんだけどね。

ついでに鼓動もね。

急いでドアを開けると、玄関先に買った荷物を置いてくれた。

それにお礼を言っただけで翔太が出て行くのを、ドアを押さえながら待つ。

「ね、由比」

玄関から外に出ようとした翔太は、何を思ったのか私が押さええているドアを左手で掴んだ。

「？」

なんだろうと顔を上げると、反対の右手が壁に置かれる。

ドアと翔太に挟まれた格好に、首を傾げた。

「……何？」

圭介さんより低いとはいえ、百五十そこそこの私から見れば結構高い。

そんな所から見下ろされれば、ちよつとした威圧感があるんですが、でも、怖さを感じないのはさんざんからかわれたから。

翔太はじつと上から私を見下ろしていて。

真面目に見えるその表情に、眉を顰めた。

「翔太、どうしたの？」

「さっきの。彼氏？」

出てきた言葉は、あまりにもなものでした。

「ない、ありえない。絶対ない。ていうか、想像されるだけでも私への冒瀆」

「……え？」

昼のやり取りを思い出して、一気にイライラしてくる。

「あの人は、確実に私の敵。抹殺対象。——なんで？」

ぶつぶつ文句を言い募ってから疑問を口にすると、面白そうに翔太が笑い出した。

「そりゃ、あの人もかわいそうに。由比ってそーいえば彼氏っていないの？」

「……悪かったわね」

はつきりと答えるのが嫌で、悪態が口をつく。

翔太はまだ笑いを抑えられないまま、上体を少し屈めて私と目線を合わせた。

「いたら、圭介相手に真っ赤になんてならないか」

「……っ、うつうるさいわねっ。だから、免疫少ないっていつてるでしょ!？」

おもいつきり凶星を指されて余計顔が赤くなる。今度は羞恥心と怒りとで。

「さっきのひと、俺は平気なのに」

ゆつくりと両手を下ろす翔太は、そのままドア枠に背中をつける。

圧迫感みたいなのがなくなっ、肩から力が抜けた。

いくら子供とはいえ、上から見下ろされると圧迫されて嫌だ。

「だって、抹殺対象と子供相手じゃ、赤くなる事なんてありえない」

「また、子供子供言う。大人に片足くらいは突っ込んでるっての」

頬を膨らませて口を曲げるこいつに、大人を語ってほしくないと思う。

そう言ったら、機嫌が悪くなるのかな。

笑っちゃいけないと思いつつ緩む口元を何とか押さえて、玄関に入った。

靴を脱いで上がると、まだそこにいる翔太を振り返る。

「鳥肉の味噌漬け、圭介さんと一枚ずつでいい？ あとで焼いて持

っていくから」

「え、マジでいいの！？ やった！」

ふてくされていた顔が、一気に満面の笑みに変わった。
可愛い顔が笑うと、なんとも眩しい。

きらきらしてます、背景に何か見えそう。

「帰りに車に乗せてもらったお礼。圭介さんにも伝えておいて？
おかず作る量が変わるかもしれないから」

「うん！」

元氣よく返事をして、翔太は隣の部屋に駆け込んでいった。

あまりの勢いに呆氣に取られた私は、思わず噴出して大笑いしてしまったのは言うまでもない。

この次期は天気の良い日が多くて、幸せ。
花粉症は辛いけど。それももうすぐ終わる。
薬を飲むのは、最優先事項！

「おはようございます」

アパートの階段を降りきった所で、後ろから声を掛けられて振り向いた。

「圭介さん、おはようございます」

丁度部屋から出てきた圭介さんが、私を見つけて早足で歩いてきた。うん、昨日も思ったけれど、かつこいい人はスーツを着ると色々割り増しされるよね。

朝からいい目の保養。

トントンと軽い音を立てて階段を降りてきた圭介さんと、歩き出す車が止まっているのは、アパートの入り口横にある駐車スペース。その横まで一緒に行って、立ち止まった。

「昨日は帰り、ありがとうございました。助かりましたー」

軽く頭を下げると、車の鍵を開けていた圭介さんがこちらこそと笑う。

「おかずが一品増えて、私も翔太も大喜び。本当においしかった、ありがとう」

珍しく（といっても、あつてまだ三日目なんだけど）おどけたような言葉遣いに、笑いが漏れる。

「ていうか由比さん、まだ敬語？ 止めようって決めたよね？」

運転席のドアを開けて腰を降ろしながら、優しそうな声で少し責め

るような言葉に私は首元に手をやってごまかすように俯いた。

「でも、私より六歳も年上の方ですから。圭介さんが私に敬語を使うのはおかしいけれど、私が使うのは普通ですよ」

「翔太は、あなたより四つ下でタメ口でしょ？」

「翔太は……その……」

私が言う前から、普通にタメ口だったから……。

ぶつぶつという私に、圭介さんは大きな溜息をついた。

「翔太はよくて私はダメって、なんだか嫌われてるみたいだな」

圭介さんの言葉に、俯けていた頭をがばつと勢いよく上げた。

「そつ、そんな事ないです。そういうことじゃなくてっ。じゃ、敬語止めるから！」

これでいい?! と焦ってまくし立てる私の顔を見て、圭介さんは右の拳を口元に軽く当てた。

「ふっ……」

「……え？」

その顔は……

「笑ってます……?」

今、ふつとかいいましたよね?

じろりと上から見下ろせば、圭介さんは当てていた手を軽く振ってごめんごめんと笑う。

「こうでもないし、由比さんは聞いてくれなさそうだから。なんか、頑な」

「……圭介さんも頑固だと思うけど」

お互い目を合わせて笑いあう。

ある意味、似たもの同士なのかもしれない。そんなことを言い合いながら。

そこではたと気づいて腕時計に視線を移すと、いつの間にか結構な

時間がたっていた。

「じゃ、圭介さん。私そろそろ……」

「ああ、引き止めてごめんね」

もう一度頭を下げて歩き出そうとする私に、気がついたように圭介さんが声を掛けた。

「そういえば昨日車に乗ったから、駅まで歩きだよね？ よければ駅まで送っていくよ」

運転席に腰掛けたままの圭介さんに、慌てて両手を振って遠慮する。

「大丈夫です、いつも徒歩なんでお気になさらず。ではでは、行つてきます」

そのまま歩き出そうとした私の腕が、伸びてきた圭介さんの手に掴まれた。

後ろに引つ張られてよろけた身体を、足を踏ん張る事でなんとか止める。

——何？

「……徒歩？」

顔だけ振り向けると、怪訝そうな表情の圭介さんと目が合う。

「……徒歩、だけど」

なんか、この声音、聞いた事あるような。

シチュー、食べてた時に自覚しなさいって注意されたあの時の声……

…の、ような？

「乗って」

「え、いや、あの」

「乗って」

腕は離してくれたけど、ほんわか圭介さんとは思えない強い視線に抗えなくて諦めた。

「助手席、乗ってもらえる？ 話しづらいから」
後部座席に乗りうつとした私に、低い声が停止を掛ける。
話、づらい？

お説教、決定だ――

幾分頂垂れながら、助手席へと身体を沈めた。

駅まで、車で五分かかるかからないか。
徒歩で二十分近くかかるのに、車って便利。

「……」

やばい、静かだ。

このしんとした空間、凄く居づらい。

視線だけあげて、圭介さんを盗み見る。
眉間に皺を寄せて、まっすぐに前を見る姿。
やばい、怒りのオーラがしんと。

「由比さん」

「はいっ」

思わず、びくりと身体が震えた。
だって、凄い低い声。
これ、怒ってるよね？
なんで、どうして？ 徒歩って、ダメ？

圭介さんは前を見たまま、口を開いた。

「やっぱり、由比さんは自覚が少し足りない。朝はいいけど、夜、あまり明るい道のりじゃないよね？ アパートまで」

……まあ、否定はしない。

住宅街と商店街が途中まであるけれど、その後は工場とか野原が続いている場所がある。

アパートの近くまで来れば、住宅街にスーパーもあるから明るいけれど。

「一応……、なるべく明るい道を歩いて、周りを見ながら帰宅するけど」

「もしものがあつたらどうするの？　せめて自転車で行くとか」
自転車……

その言葉に、眉を顰める。

「それは、その、避けたいというか」

「避ける？」

怪訝そうな声に、思わず俯く。

言わなきゃ、ダメ？

馬鹿にされそうなんだけど。

ちらりと圭介さんを見上げれば、赤信号で止まったのかばっちり目が合った。

複雑な表情に、はあと溜息をつく。

「自転車、乗れないの」

「……え？」

「だから、自転車乗れないんです。恥ずかしい事に！」

分かったか、このやろうつて勢いで告白してみました！！

えーえー、二十二歳にもなって乗れないですよ、自転車。

「で、バス便もないし、徒歩通勤するしかないじゃないですか」
「……なる、ほど」

驚いたらしい圭介さんは、途切れ途切れ返事をしながら頷いた。
まあ、珍しいかもね。

自転車乗れない人って。

「ここに住んで六年、もう慣れっこだから大丈夫」

先生って、心配するのも仕事みたいなもんなんだろうな。

うんうん、ちょっとお説教は怖いけど、心配してもらえるのは嬉しいからね。

「その、心配してもらえて、それは嬉しいので」

につこり笑って頭を下げると、申し訳なさそうに圭介さんまで頭を下げる。

「何も知らないのに、ごめんね」

「いえいえ、普通はそう思いますもん」

だから気にしないでと笑うと、信号が変わったのか圭介さんが前を向いた。

「いい人だね、由比さんは」

ふわりと、前を向いたまま笑う圭介さんから、さっきまでの怖い雰囲気が消える。

気持ち緊張していた身体から、やっと力が抜けた。

思わず、右手で左の腕をさする。

それを見ていたのだろう、圭介さんがもう一度謝った。

「怖がらせちゃったみたいだね、本当にごめん。ただ……」
目の前に駅のコンコースが見えてきた。

見慣れたその風景に、鞆を両手で持ち直して降りる準備をする。

そして“ただ……”の続きが気になって、圭介さんを見た。

「心配だから。遅くなる時は、翔太を呼び出して？」

「え？ いやいやいや」

首を振って、それを辞退する。

「今まで大丈夫だったんだから」

そう言うと、溜息をついた圭介さんはロータリーに車を止めた。サイドブレーキを掛けてから、私を見た。

「今までが必ず続くとは限らない。だから、ちゃんと呼んで。確かに絶対に迎えにいけるとは言い切れないけど、できる限りは……ね？」

「でも——」

「口答えは却下。もし気になるなら、夕食のおかず、たまに分けてもらえると嬉しいな。昨日の鶏肉、本当においしかったから」
そう言うてにつこり笑う圭介さんに、抗える人がいたらお目にかかりたい……。

携帯のアドレスと番号を交換して、車を降りた。

「あれ？ 由比、今日当番なの？」

自分のデスクでノートPC相手ににらめっこしていた私は、桜の声で現実に戻された。

顔を上げると、既に帰る用意を終えている桜とその向こうに終業時刻を過ぎた壁時計が見える。

後期行事のスケジュールをエクセルで清書していたら、思いの外没頭してしまったらしい。

間違いの無いよう保存だけして、もう一度桜に顔を向ける。

「うん、そう」

「明日から休みなのに、お疲れ様」

そう言っただけから小さな包みを取り出すと、私のデスクに置いて帰っていた。

続くように帰っていく総務の同僚に、頭を下げた挨拶をする。

「明日から休みだから、終業前に用があるなら連絡をとって取引先には言っただけ。だからそんなに電話は来ないと思うけれど。必要なら事務課長が役員階に在社してるから、連絡を取って」

「はい、お疲れ様でした」

総務主任の言葉に、頭を下げた見送った。

ドアの閉まる音に続くのは、しんとした静かな空間。

窓の外は暗くなり始めた風景が広がる。

そこに歩み寄って、ブラインドを閉めた。

シャツ――

静かだから、響く音。

聞こえるのは、窓から少しだけ漏れ聞こえる雑踏。

小さく溜息をついて、自分のデスクに戻る。

「あ、そういえば……」

桜が置いていった包みてなんだろう。

薄い茶色のレーススパーパーを開くと、中から小さなチョコレートがいくつか出てきた。

……優しいなあ、桜。

桜の気遣いに、心がほっこりと温かくなる。

桜とは、入社式で仲良くなった。

綺麗な子がいると、内定式で噂的だった桜。

実際、本当に綺麗で。

少し色素の薄い栗毛のロングストレート。

女性にしては高い方に入る、百六十センチ後半のスレンダーな体躯。

凛とした彼女を、同期は皆羨望の眼差しで見ていた。

そんな彼女が入社式の終わった会場のトイレで、零していた言葉。

「ったく、人を珍獣でも見る目付きで眺めてんじゃないっての——」

そして、たまたま同じタイミングで、トイレに入ってきた私。

「——」

「……えへ」

静まり返ったトイレで響く、私のあのごまかしの言葉は無かったわ！。

今思い出しても恥ずかしい。

驚いたように目を見開いていた桜が、思いつきり噴出して大笑いを始めたのだ。

「えへって、何歳よ。どんな誤魔化しなの？ もっと上手い言葉は見つかんないの？」

面白そうに目に涙を溜めて笑う彼女に、私は真っ赤になりつつもほっとしてしまった。

彼女の愚痴を聞いてしまったことで、ギクシャクするのは嫌だったから。

「自分だって、いつもと言葉遣い違うじゃない」

もつと大人しい、丁寧な話し方だったはず！

そう指摘すると、まだ止められない笑いを耐えるようにお腹を押さえながら、仕方ないでしょと洗面台に身体をもたせ掛けた。

「それを望まれちゃうんだから、素を見せる方が面倒だって」

「うーわー、上から目線」

「なんですって？」

これが、桜と話した最初。

この後二人で笑いこけて疲れて、お茶をのみに行って仲良くなった。綺麗な人には綺麗な人なりの悩みがあるってこと、頭で分かっても実感した事なかったから。

悩みの無い人間はいない、はっきりと分からせられた日だった。

たった一ヶ月くらいしかたっていないけれど、なんだかもう懐かしい。

それほど、桜との間は親密なものになっていた。

レースペーパーに包まれたチョコを一つ、指先で持ち上げる。

「まったく桜は、優しいんだから」

口に出さない優しさが、本当に素敵だと思う。

ペリペリと包装を剥がして、一粒口に入れた。

舌の上で蕩けるチョコに、思わず顔がにやける。

おいしいわ

手元のお茶を飲んで一息つくと、さっきまで取り掛かっていたスケ

ジュールの清書に集中していった。

「……じょう、……か……、上条！」
「！」

名前を呼ばれいきなり肩を掴まれて、飛び上がるほどの驚きが身体を襲う。

声にならない叫びを口の中で飲み込みながら、肩に置いてある手を視線で伝うと呆れた顔をした桐原主任と目が合った。

「き、りはら、主任」

ほっと安堵しながらその名前を呟くと、いつも不機嫌そうな顔がもつと不機嫌そうに口を歪めた。

「お前、いつまでいるつもりだ？ もう終わりじゃないのか？」
「え？」

そういわれて時計に視線を移すと、その針は八時過ぎを指していた。

「あ、ホントだ」

また仕事に没頭していたらしい。

電話番号という名の残業だったのに、一件も電話が無かった為仕事の方に集中してしまった。

おかげで清書は完成し、事務課長宛にメールで送れたけれど。

ノートPCの電源を落としてから、ややあと気付く。

「何してるんですか？」

ずっと後ろで立っている桐原主任の存在に。

桐原主任は目を少し眇めて、私の頭にどんっとその思い手のひらを乗せた。

「お前、声を掛けてやったお礼は無いのか。あっさりと流しやがって」

そういうと、ぐいぐいと私の頭を押さえつけてくる。

「いつ、痛いっ！ 暴力反対！ 痛いですってば！」

慌てて両手で手首を掴んで引っ張ってみるけれど、まったく動かない。

なんなんだ、この人は！

思わず出た舌打ちは許せ。

イライラしながら視線を手元に落とすと、丁度桜から貰ったチョコレートが目についた。

一瞬桜の顔が脳裏に浮かんだけれど、心の中で謝ってそれを一粒指先で持ち上げる。

「じゃあこれあげますよ。お礼を強請るって、どんだけなんだろこの上司」

思わず悪態をつく、なんだと？ と言葉が返ってきたので黙ってみる。

「お前、ホント口悪くなったよな。なんだか、信じられないくらい」

「それは、桐原主任の所為だと思います。主任以外には、ちゃんと話していますよ」

「ああ、そうかよ」

頭の上で溜息をつかれた気がするけれど、私は一つも悪いことはない。ってない。

断じて。

とりあえずチョコで納得したのか頭の上から手が退かされた事に、ほっとしてにやりと笑う。

「これ、桜から貰ったチョコですから。プレミアムですよ、ラッキーでしたね主任」

なんたって、今、社内で一番人気の桜ですから。

そう続けると、チョコを摘み上げようとしていた指が止まった。

「……？ 主任？」

中途半端な状態で上げている手が疲れるので、さっさと取って欲し

いんですけど。

そんな意味を込めて座ったまま桐原主任を見上げると、むっとしたように眉を顰めていることに気付いた。

「どうかしました？」

チョコ嫌いとか？

でも、さっき取ろうとしてたよね？

尋ねると、桐原主任はチョコを摘もうとしていた手を下ろしてじつとこつちを見た。

「貰いもんを、礼として渡すんじゃない」

「は？」

そこ？

「いや、別にいいじゃないですか。貰った時点で私のものだし、っていうかどこに引つかかかってるんですか。他にお礼のしょうが無いので、これで我慢していただけると嬉しいんですけど」

ていうか、嫌だったらお礼は無しって方向で。

そう言外に含めて言うとか、それなら……と人差し指でチョコをつついた。

「今食うから、包み剥がせ」

「はあ？」

「そのくらいやれ。別に口移して寄越せといってるわけじゃない」

「それ言われたら、セクハラで訴えます」

なんだろう、このよく分からない会話の応酬は。

溜息をつきながら、手のひらに載せたチョコを指でつまんだ。

銀色のアルミ箔で覆われたそれは、さっき食べたけれどほんの少しの熱でも溶けてしまうほど柔らかい。

舌の上でなくなってしまうほど。

レースペーパーの上には、あと五つ残っている。

翔太と圭介さんにあげようかな。

甘い好きかしら。

そんなことを考えながらアルミ箔を剥がすと、どうぞと桐原主任の手に差し出した。

「早く取ってください、溶けちゃうんで」

「ああ、そうか」

そう言う主任はおもむろに私の手を掴むと、チョコを持っている指を……

「ちよっ……！」

……口に入れた。

思わず、頭の中が真っ白になったのは言うまでもない。

瞬きを忘れたように、桐原主任の口の中に入った自分の指を見つめた。

既に指先にはチョコの感触は無く、溶けてしまったであろうことが推測される。

が、指は、開放されない。

私は信じられないものを見るように、呆氣にとられたまま桐原主任を見つめた。

「な……、何を……」

指先を舐めるように這わされるその生暖かい感触に、何をなんて聞かなくてもされている事は分かっているんだけど。
されている意味が、分からなかった。

桐原主任は私に見せ付けるように、含んでいた私の指からゆっくりと口を離れた。

ひやりとする指に、今までされていた事が突きつけられる。

目を見開いたまま桐原主任を見上げたら、顔を少し顰めて口を開いた。

「甘え」

人の指まで舐めといて、その言い草は何!!?

桐原主任は、私をみるとニヤリと意地悪そうな顔で笑った。

「お前の、指」

「——は？」

甘え……お前の、指

言われた事を復唱して意味を理解した私は、ぼわっと顔が熱くなるのを止められなかった。

怒りだから！　これ、怒ってるんだから！

「何で、人の指まで食べるんですか！？　猫？　やっぱり猫なんですよ！？　人のことねずみとか言って、ホントに捕食対象だったわけですか！！」

「ああ」

「……え！？　肯定した！？　ホントに猫？　ていうか、人食べるの？　信じらんない、わあああん、汚いよぉ！」

思わず舐められた指を伸ばして、右手首を左手で掴む。

他の指につく前に、トイレへ！　洗わなきゃ、洗浄しなきゃ、消毒しなきゃあああっ！

思わず立ち上がった私に、桐原主任は不機嫌そうに眇めた目を向けて右手を頭に乗せた。

「お前、汚いってどーいうことだコラ」

ぐいぐいと頭を押されて、走り出す格好のまま動けずに無駄に体力が消耗していく。

「離してくださいっ！ ああ、なんでこんな事につ
私、悪い事何もしてないのにつ

ぐるる、と犬にでもなったかのように喉を鳴らして見上げると、
桐原主任の目が真剣な色を帯びた。
なんでって……、と呟く。

「あのガキが……」

そこまで言っで、言いよどむ。

「ガキ？ って、ああ翔太の事ですか？ そういえば、昨日言っ
た仕事の話ってなんだったんです？」

明日話すとか言っでたけど、私聞いてない。

一瞬視線を逸らした桐原主任は、ふうつと息を吐いて私を見下ろし
た。

「お前、あいつらとどんな関係なんだよ」

「あいつら？ 翔太と圭介さんですか？ 昨日も言っただように、お
隣さんですけど」

それ以上でも、以下でもありませんが。

「一緒にメシ食ってんだろ？」

「はあ？」

一緒にご飯？

食べてな……、ああ、最初の日の事かな。

そういえば、昨日翔太がそのこと言っただもんね。

「それは……」

そう、私が口を開いた時だった。

いきなりドアが開いて、事務課長が顔を出した。

「上条、まだ帰ってないのか？」

その手には、分厚いファイルをいくつか抱えている。

「あ、はい」

思わず反射で答えてしまった私の脊髄に乾杯↑違っし

そういえば総務の主任が、役職階に課長がいるって言ってたっけ。

ドアの開く音に素早い反応を見せた桐原主任の手は、私の頭から既に外れていて。

ある意味凄いな、とか思ってしまった。

事務課長はそのまま中に入ってくると、ドアの影になって見えなかったのかそこで初めて桐原主任を見て少し驚いたように瞬きをした。

「ああ、人事の桐原か。どうした、総務に何か用か？」

「あ、ええ。帰ろうとしたらまだ電気がついていたので。当番にしたら遅いと思つて、声を掛けたんです」

その受け答えに、思わずイラッとする。

私に対しては適当な対応するくせに、上司に対してはそれですか。さいてー

事務課長はそんな私の胡乱な雰囲気気付かず、自分のデスクにファイルを置いて一息ついた。

「そうか、それはありがとう。上条、もうここはいいから帰りなさい。お疲れ様」

事務課長の言葉に返事をする、左手で（ここ重要！）残っていた

チヨコを鞆にしまいこむ。

そしてそれを肩にかけると、事務課長に挨拶をして総務を出た。

桐原主任と一緒に。――なぜだ。

「桐原主任、お疲れ様でした！」

「あつ、おい……」

呼び止める桐原主任を無視して、トイレにダッシュ！

鞆を洗面台に置いて石鹸をこれでもかかってほど手に取ると、ガシユガシユと音を立てながらおもいつき手を浄化（そんな気分）する。丁度あった爪ブラシも拝借して、それはもう念入りに。何回か洗って、アルコール除菌。

――かんつぺき！

洗いあがった手のひらをかざしてあまりの完璧さに惚れ惚れしながら、鞆を肩に掛けてトイレを出た。

携帯のマナーモードを解除しながらロビーを突っ切って、自動ドアから出る。

外は真つ暗だ。残業後だからね。

「さー、かえ……」

ろ……、と続くはずの言葉は、発する前に口の中に消えた。

自動ドア近くの壁に、なぜか抹殺た……じゃなかった、桐原主任が背をもたせ掛けてこつちを見ていたから。

一瞬間まってしまった私は、手に持っていた携帯の着信音にびくりと身体を震わせた。

「う、あ……」

恐ろしく意味不明な単語を呟きながら、とつさに通話ボタンを押して耳に当てた。

「由比？」

聞こえてきたのは、元気な男の子の声で。

一瞬にして、力が抜ける。

「ど、したの？」

翔太の呼びかけに応えながら、駅に向かって歩き出す。

ちらりと視線を足元に向けると、想像したとおり後ろから桐原主任がくつついてきている。

なんで――

このまま駅まで行くと、私の住んでるアパートが反対側にあるってことばれそうだなあ。

一緒に帰る桜は知ってるけど、極力知られたくないわけ。だって、面倒じゃない。

「あのさー、圭介から駅まで由比を迎えに行くように言われてんだけど、もうそろそろ仕事終わる？」

「え？ うわ、圭介さんホントに手を回したわけ？」

その言い方に、携帯の向こうで翔太が笑い出す。

「センセだからねえ、心配事は放っておけないんじゃないの？」
確かに。

でも、これは過保護すぎじゃないでしょうかね。

「私は大丈夫だから気にしないで」

「いいって。その代わりおかずくれるんでしょ？ それを思えば、軽い軽い」

「あはは、ありがと。うーん、じゃあ圭介さんが怖いからお願いします。もう、駅に向かってるんだ」

「俺、もうすぐ駅に着くから。それじゃあロータリーで」

「分かった。翔太、気をつけてきてね」

私の言葉に元気のいい返事が返ってきて、思わず口元が緩む。かわいいわ、和む！

携帯を鞆にしまって、早足で歩き出そうとした瞬間。

「……しよつた？」

ん？

後ろから声に、顔だけ斜めに傾けて桐原主任を見ると……

「……！！」

不機嫌マックスの姿がおられました。

「あのガキから、か」

何、その地を這うような声。

思わず、顔が引き攣る。

なんだかよく分からないけれど、翔太とあわせちゃいけない気がする。

でもこのまま行けば、くつついてくるだろう桐原主任と翔太はばったりってことになる……よね。

「上条」

そう言ってこっちに伸ばしてきたその手から、飛びのくように逃れる。

なんだ、ねずみな私には可愛い弟的な子がいるのも許されないのか！
人権侵害だ！

人と、思われてなさそうだけど！

飛びのいた私が気に入らなかったのか、再び伸ばしてきたその手からも思いつきり逃げてそのまま走り出した。

「上条！」

後ろでイラついた声が聞こえるけど、無視！

こついう時、身長の小さい私の身体は凄く重宝する。

人波に紛れ込むのは大得意。

ちよこまかと人波を縫うように駆け抜けると、駅を突っ切らずに横道に反れる。

そこで道端に隠れるようにしゃがむと、翔太に電話した。

「どうしたの？」

数コールで出た翔太に簡単に説明して、駅から少し離れた高架下の隋道に回ってもらってそこで落ち合った。

ここは夜に通るのは遠慮したい場所。

男の子がいるし、緊急事態だから今日は特別。

「何があつたのー、由比つてば」

黒い学ランを着た翔太は、少し心配そうな顔を傾げながら隧道のこちら側で待っていてくれた。

その手元には自転車。

今日から自転車で駅まで行くなって、確か言ってたもんね。

「ごめんね、面倒なことさせて」

そう謝ると、一緒に連れ立ってアパートへと歩き出す。

ああ、きつと今頃、桐原主任は駅で怒りを増幅させてるんだろうな。ゴールデンウィーク明けが、怖い。

けど、猶予が長いから、忘れてくれるかな。

翔太は一体何があつたのかと聞いてくる。

そりゃそうだよな。こんな所にまで呼び出されて。

なので、鬼畜桐原についてどれだけ鬼畜なのか、さっきあったことをつらつらと説明してみた。

アパートまで、結構距離あるしね。
暇つぶし程度に。

翔太は心配そうに聞いていた顔を、最後は苦笑で締めくくりました。

「由比つて、鈍いと言われない？」

「言われない」

即答する私に、翔太の盛大な笑い声が押し付けられた。

なんか、覚えのあるやり取りだよね。

——さて？

さあ、ゴールデンウィークが始まりました！

早速、初日ですが！！

——掃除と洗濯で終わりましたよ。

一人暮らしの社会人なんて、こんなもんさ。

「おはよう、出かけるの？」

生活観溢れた初日はとつくに過ぎて、本日二日目。

少し大きめのバッグを持った私は、アパートを出てすぐの所で圭介さんに呼び止められた。

ほとんど人の通らない道だけど、少し路肩に寄せて車が止まる。

エンジンも切ったらしい。真面目な先生だ。

「はい。ちょっと、出てきます」

「また、敬語」

くすりと笑いながら指摘されて、慌ててごめんなさいと謝る。

私の慌てっぷりがおかしいのか、面白そうに口元を緩める圭介さんの姿は、格好いい。

うん、眼福眼福。

心の中で頷きながら、とりあえず少し睨むと謝りながら苦笑された。

「あんまりにも、由比さん可愛いから」

——爆弾投下！

ナチュラルにするりと言われて、つい呆気にとられてしまった。

恥ずかしさも出さず、爽やかに優しい笑顔でさらりと言われちゃったよ。

固まっている私をよそに、圭介さんは何か考えるように視線を上に向ける。

「なんていうの？ 猫って言うか……子犬って言うか、リスっぽいって言うか」

零れてきた言葉に、赤くなつた顔が平静に戻っていくのがよく分かる。

そーいう、可愛いね。

小動物っていうか。

「ああ、ハムスターが一番似合いそう」

——広義の意味で、桐原主任と言ってる事同じじゃないですか……

がつくりとうなだれつつも、まあねずみよりかはいいかと考え直す。

「同じ種類を指すにしても、ハムスターの方がまだいいよね……」

一昨日の桐原主任の行動を思い返しながら、思わず溜息をついた。

ネズミに見えるからって、指食べるってどうよ。

捕食対象とか、肯定されたしなあ。

「ん？ どういうこと？」

私の言葉に反応したのか、やっと笑いを収めた圭介さんが私を見上げた。

頭の回りに、ハテナマークが乱立してそうですよ、圭介さん。

「うちの会社の上司で、私のことを“ねずみ”って呼ぶ人がいるんですよ。酷いと思うよね？ 人扱いじゃないんだから」

なんとなく敬語とタメ口が混ざり合ってるけど、そこは聞かない振りを希望します！

圭介さんは、そうなの？ と呟くと、車のエンジンキーを回した。

「もし駅まで行くなら、乗せてくけど。お礼は、夕ご飯のおかずで」
なにやら、私の作るおかずは気に入ってもらえたらしい。

ちなみに昨日は、冷凍しておいたハンバーグとジャガイモ・にんじん・スナックエンドウを、デミグラスソースで煮込んだだけのもの。ハンバーグさえあれば、野菜を切るだけなのでめっちゃくちゃ簡単。確かにお弁当用のストックまで使い切っちゃったけど、また作ればいいわけだしね。

私的には喜んで食べてもらえるなら、別に等価交換みたいなものがないでもいいんだけど。

「今日の夜はちょっと用事があるんで、明日の夕飯のおかずでもいいですか？」

「もちろん」

「じゃ、お言葉に甘えます」

そうする事によって圭介さんの気持ちも落ち着くみたいだから、それに乗っかっておこう。

助手席を指で示されて、頷いて乗り込む。

彼女さんとかいたらまずいんじゃないかなあと思うけど、まあ、圭介さんがそこに座るように言うんだからいいのだろう。

圭介さんは私がシートベルトを締めたのを確認すると、アクセルを踏んだ。

ゆつくりと加速していく運転の仕方に、本当に穏やかな人だなあと内心つぶやく。

「圭介さんは、どちらに？」

てつきり仕事かと思っただけならいつもみたいなスーツじゃなくて、カジュアルシャツにジーンズを穿いていて、先生のする格好じゃないと思います。

圭介さんは前を向きながら、仕事だよ、と苦笑い。

「流石に生徒のいない日くらいは、スーツから開放されたいからなあ」

肩凝るんだよと笑う圭介さんに、なるほど……と返す。

確かにスーツって、肩凝るよね。

就職活動の時、嫌って言うほど経験しました。

会社もスーツって言えばそうだけど、リクルートスーツみたいじゃないものを着られるから、そこまで肩は凝らない。

楽だね。

「確かにそうですね。でもちょっと残念。圭介さん、スーツ姿格好いいから」

「え？」

丁度赤信号で止まったらしく、私の言葉に少し固まった圭介さんがぎこちなくこっちに顔を向けた。

「普段着も格好いいけど、スーツ姿は素敵に目の保養です。眼福」
「につこりと言うと、眼福って……と圭介さんも笑う。」

「上手いなあ、由比さん。ちょっと照れちゃったよ」「
「何言ってるんですか、さっき私だって照れましたよ」
うふふ、と笑いあう。

ここに翔太がいたら、確実に「二人とも鈍いと言われない？」と
聞いていただろう。↑作者突っ込み

正味五分、駅のロータリーに車が止まる。

サイドブレーキを掛けて私を見た圭介さんが、帰りは何時？ と至極普通に聞いてきて少し焦った。

だって、仕事でもないのに迎えに来てもらって私は何様。

「いえ、今日は大丈夫なんで」

シートベルトを外しながら、突っ込まれないようにさっさと降りようと車のドアを開けようとしたら――

「……あれ？」

がちつと音がして、指先が外れた。

もう一度試してみたけど、やっぱり開かない。

「……」

なんとなく運転席へと視線を向けると、圭介さんがにこりと微笑んでいた。

目が、笑ってないけど。

「何度言わせるのかな、由比さんは」

さすがに先生も怒るよ？ と、冗談めかしている口調の割りに、ホンキで目が笑ってない。

ああ、怒ってる。でも……

私は昨日から考えていたことを、少し迷った後思い切って言うてみ

た。

「……過保護だと思う、圭介さん。翔太になら分かるけど、他人の私にまで手は広げなくていいかと……」

しかも、まだ初めましてから三日しかたってない。

こんな浅い付き合いの私まで心配したら、身が持たないと思う。圭介さんは少し困ったように口を引き結ぶと、苦笑して息を吐き出した。

「ごめんね、分かってはいるんだ。面倒でしょう、こんな隣人」

その言葉に慌てて両手を振る。

「いえ、面倒とかそういうんじゃない。そこまでして頂くことが、申し訳ないなっと思って……」

だって、ただの隣人だよ？

圭介さんが大変だって……

圭介さんは私の気持ちに気付いたかのように、ありがとうと笑う。

「私が安心したいから、由比さんに対して過保護にしているんだ。

たった三日だけど、由比さんがとても素直でいい人だって分かったし。それに、翔太が……」

「翔太が？」

素直でいい人っていうストレートな褒め言葉に若干頬を熱くしながら、それでも言いよどむ様に視線を俯ける圭介さんを促すように、言葉尻を繰り返す。

「その……翔太が、由比さんに凄く懐いているから。それが嬉しいからかもしれない」

「……懐く？」

あれは、からかっているとかそういう意味合いなのでは？

私から不穏な空気を感じたのか、緩く首を横に振る。

「なんでか無条件に由比さんに本音を出してる。だから、余計にそうしてしまうのかも」

うん……

翔太の態度に関しては納得いくような、いけないような。でも、その理由ならこの過保護の意味が分かる気がするし、ある意味ほっとする。

「じゃあ、翔太の為にってこと？」

私の言葉に何を焦ったのか、いやそれだけじゃなくて……と圭介さんは私の右腕を掴んだ。

既に背中をシートから浮かせていた私は、圭介さんの力に引っ張られて身体が傾く。

倒れないように、手のひらでシートの座面を押さえて耐えてみる。けれど圭介さんはそんな私の体勢に気付かないようで、焦ったように口を開いた。

「最初にも言ったけど、由比さんだから過保護にしているのが一番の理由。翔太の為だけじゃなくて……っ」

「はい？」

思わず間の抜けた返答になってしまった私に、言い募る言葉。

「だから、私がそうしたくてしてるって事で！」

勢いよく、叫ばれました。

しかも腕を掴んでいたはずの手が、いつの間にか両肩を掴む状態になっていて。

若干、痛いです。

圭介さんの勢いに呆気にとられながら、私はゆっくりと頷いた。

「えと、ご好意、感謝します……っ？」

なんていつていいか分からなかった私は、とりあえずお礼を言おうと口にした言葉はこれ。

しかも、なぜに疑問系？

へへ……、自分で突っ込んでみる。

さっきまで焦っていたはずの圭介さんは、一瞬きよんとして、思いつきり笑い出した。

「由比さん、面白すぎ。ホント、もう……可愛いなあ」

そう言って右手を頭にのせると、ゆつくりと撫でられた。

目を細めて微笑む圭介さんの姿は、いうなれば姪っ子甥っ子を見るそんな表情で。

——子供か、私は

それでも一昨日桐原主任に頭を押さえ込まれたのを思い出して、圭介さんからされると嫌な気持ちが起こらないのが不思議と、その温かい手のひらから与えられる安心感を甘受していた。

圭介さんはゆつくりと撫でていたその手を下ろすと、多分……と呟く。

「妹みたいに、見えるのかも。由比さん、素直だし頑張ってるし、凄く可愛い」

“凄く可愛い”、多分今日中は頭の中でリフレインしてかみ締めること決定。

まあ、“妹”が付くんだけどね。

「あー、妹。確かに、おにーちゃんって感じ。圭介さん、若干口う

るさいもん」

「口うるさいは余計」

口にすると、昨日圭介さんに対して感じていた安心感や温かさが、なんとなく意味を持った気がする。

それに、妹、と明確な立ち位置を指定された事で、“男”のカテゴリから外れてくれた。

だから、恥ずかしいとか怖いとか、そんな感情も安心感に塗り替えられていく。

そう、ゆつくりと。

——あれ、私、単純？

でも……

圭介さんを見ると、何？　とでも言うように首を傾げて微笑んでいる。

優しくて安心できる雰囲気、それを向けられている幸せな気持ち。

圭介さんだから、信じられるんだろうと内心納得する。

「本当に、ありがとうございます。口うるさいおにーちゃん、そして今後は甘えさせていただきますが今日はホントに大丈夫なんで」
まだそういう、と笑いながら、本当に？　と念を押された。
それに頷くと、肩からずれていたバッグの肩紐を掴み上げた。

「あまり話していると圭介さん、お仕事遅れちゃうから。もう行きま
すね」

「あ、ホントだ」

車についているデジタル時計は、駅に着いてから十五分近くたって

いることを知らせていた。

「で、鍵が開かないんだけど——」

「——あ、はい」

指で鍵を指しながら伝えたと、圭介さんは思い出したように手元のボタンでロックを外してくれた。

「由比さん頑固だから、運転席側でロックしてたんだ」

「——これ、他人にやったら監禁っぽい」

「やらないよ、由井さんが頑固にならなければ」

てことは、私限定でやるんですか！　もしかしたら、また！

そんなに頑固かなあとぶつぶつ呟きながらドアを開けると、頑固だよと圭介さんから返事が来た。

いや、別に聞いているわけじゃないんだけど。

「それじゃ、ありがとーです。お仕事頑張ってくださいね」

「面白い言葉遣いになってる。まあ、いいけどね。それじゃ、由比さんも気をつけて」

遅くなるなら連絡ね、と言い残すと走り去っていった。

——うん、圭介さんの方が絶対頑固

私は自分の言葉に納得すると、目的のバス停目指して歩き出した。

そこは、静かで。

そこは、穏やかで。

ただただ、波の音を聞いて過ごす。

そうして沈んでいく夕日に溜息をついて。

半分だけ満たされた心を抱えて、私はまた日常に戻っていく。

毎月繰り返す、一日だけの非日常。

空を見上げる。

海と空の境界線が、ゆっくりと青く暗く溶け合って。

綺麗で寂しい景色が、心の中に沈んでいった――

バスに揺られて、長時間移動。

座りっぱなしの腰が、大変痛い。

いつも会社から歩く道をバスに揺られて通り過ぎると、終点の駅のロータリーで降りた。

既に八時を回っていて、あたりは暗い。

いつもならもう少し早く帰るんだけど、ここ数日楽しい事があったからかつい長居してしまった。

腕時計を見て、両腕を前で組む。

さて。

この時間、圭介さんに怒られないだろうか。一人で帰っても
一昨日、翔太に迎えに来てもらった時間と一緒にだったり。

怒られるよね、うん。（確実）

さてはて。

目に浮かぶ、圭介さんの笑ってない笑顔。
仕方ない、途中から電話しようかな。

ふむ、と小さく頷いて歩き出そうとしたその時。

「上条」

低くドスのきいた声が聞こえて、私の首元に長い腕が巻きついた。
「うあつ」

後ろに引かれて支えきれなかった身体がよろける。
けれどすぐに背中が温かいものに当たって、止まった。

「……な、に？」

巻きついている腕をとっさに掴んでそこから抜け出そうともがくと、
頭の上から不機嫌そうな声が降ってきた。

「一昨日は、よくも逃げやがったな」

……おとといは、よくもにげやったな？

その内容とその声が、頭の中にある人物を浮かび上がらせる。外そうとしていた腕を見ると、スーツに包まれていて。掴んだまま顔を斜め後ろに向けながら上げると――

「桐原主任……」

――不機嫌そう……ではなく、不機嫌な桐原主任と目が合った。

固まったのは、言うまでもない――

――とと、固まってる場合じゃなかった。

人を捕食対象としてみている桐原主任相手に、この体勢はまずい。指じゃなくて、腕でも食べられそうだ。

大体……

ふと疑問を感じて、顔を前に戻す。

今、思い浮かぶ疑問点。

その一　なぜ、休みなのにスーツを着てここにいるのか
その二　なぜ、こんなにタイミングよくここで会うのか
その三　なぜ、この体勢なのか

――さて？

とりあえず是正できる所から、頑張ろう。私。

腕を掴んでいる手に力を込めて、思いっきり引き剥がす……つもり
だったけど、無理だった。

んじゃあ――

おもむろに足を上げて、桐原主任の靴の上に思いっきり落としてみ
ました。

「……っ」

頭の上から、息を呑む音。

効いたみたいです、踵落とし。

さて、この隙に腕を外して逃げときますかね。

もう一度手に力を込めたら。

「てめえ……」

地を這うような声とともに、腕を持っていた手を反対の手に掴まれ
てそのまま歩き出されてしまった。

「うあっ、首！ 首が絞まる……っ」
首に巻きついていて腕もそのままに、近くの定食屋に引きずられて
いききました。

——なんで？

向かいの席には、味噌汁を啜る桐原主任の姿。
目の前には、おいしそうな鯖味噌定食。

どんな、シチュエーションですか？　これ。

「こつち見てないで、食べ。いらなら、さつさとよこせ」
「いえ、食べます。ご飯に罪はない」

両の手のひらを合わせてから、箸を取った。
味の馴染んだ鯖は、柔らかくおいしくて。
口に入れると、ほろりと崩れる。

思わずにやけてしまう頬を、桐原主任が伸ばした指でつまみ上げた。

「ちよつ、痛いんですが？」

まあ、少し引つ張られてるだけだからそこまで痛くないけど、食べ辛い。

おいしい物を食べている最中の意地悪は、止めていただきたい！
そんな意味を込めて睨みつけると、桐原主任は面白そうに口端を上げてその指を離す。

「さっきまで嫌そうな顔で膨れていたくせに、飯食った途端幸せそうにしゃがって」

箸を持ったまま笑う桐原主任は、いつもより不機嫌さが払拭されている。

そのかわり、いつもより少し優しくそうな目つきになっているのはなぜだろう。

離れた頬を片手でさすりながら、そう言えば……と疑問に思っていたことを口にしてみる。

「主任は今日、出勤だったんですか？　しかも、こんな遅い時間まで」

せめて終業時刻に帰ってくれていれば、絶対会わなかったのに。とは、口にすまい。

桐原主任は食べていたしょうが焼きを一気に口に入れると、その上からご飯を放り込んで口を動かした。

少し待てとも言つように、箸を持った手をこちらに見せて。

ていうか、豪快な食べ方だなあ。

少し感心しながら、私も鯖を食べ進める。

おいしくご飯を食べる人に、嫌な人はいない。
そんな私の座右の銘が、崩されてしまいそうだ。

いつも不機嫌そうだし、表情も少ない。

けれど、格好いい部類に入る主任は、意外に人気があると知ったのは入社してすぐの事だった。

“ねずみ”発言後に言い争う事が多くなった私に、同僚が教えてくれたのだ。

人気のある人だから、恋愛感情がないならあまり近づかない方が身の為だよって。

そんな修羅場な状況になりたくないから頷いていたんだけど、いかんせん主任が絡んでくるからどうにもならず。

今は気にしないことにしてる。

まわりもただ私が遊ばれているだけって見えているらしくて、表立って何かされる事はないし。

だいたい、恋愛感情がわたし達の間にあるわけがない。

こんな挑戦的な求愛行動、嫌。

だったら、圭介さんの方がいいなあ。

あんな優しい人が彼氏だったら、ほんわかと毎日過ごせそう。

まあ、妹なんだけどね。

それはそれで、嬉しい。

だって、自分をその人の領域に入れてもらえたみたいじゃない。

恋愛っていう有償の感情じゃなくて、家族に向けるような無償の感情。

あんなに優しい笑顔で言われたら、“男の人”と身構えずに接する事ができそう。

例えば初日や次の日みたいに、ただ普通の話をするだけで赤くなる事は少なく出来そうだから。

まあ……“凄く可愛い”に、少しどきんとしてしまったのは許して。そして、“妹みたい”の言葉に、嬉しくも少しだけ落ちた感情も許して。

だってもしまたあの笑顔で“可愛い”なんて言われたら、妹的立場でも赤くなる気がする。

「何、考えてんだよ」

「え？ けいす……。いえ、この鯖はおいしいなと」

いつの間にか口の中のを飲み込んだのか、お茶を手にした桐原主任が目を細めてこっちを見ていた。

……不機嫌そう……

睨まれる覚えはないけれど普通に怖いので、手元の鯖味噌定食に視線を固定する。

といっても今考え事しながら食べ進めてしまったので、残っているのはお味噌汁のみ。

これ飲んだら、間が持たなくなっちゃうな……

「食べ終わっただ、二つとも下げて」

その言葉に、がばつと勢いよくお味噌汁を飲み干しました。

つか、何、この強制っ。

呼ばれて来た店員のおねーさんが、手早くトレーを下げていった。
しかも、なぜかワタシへの睨みつけ付き。
だから、なんで。

思わず溜息をつきながらお茶を啜ると、向こうは湯飲みをテーブルに置いた。

「休み明け、うちの会社、入社面接があるんだよ。その準備」
「は？」

いきなりなんだと思いながら首を傾げると、今日出勤した理由、と続いた。

「お前こそ、どうした？ 総務は全員休みだろう？」

——今日、何をしていたのか。

別に、絶対秘密なわけじゃないんだけど。

でも——

「あの、」

口から出た言葉は、これで。
その後が、続かなかった。

「その、」

口を開いた途端、鞆に入っていた携帯が鳴り出してびくりと肩を震わす。

「あ、あのっ」

天の助けと思いながら携帯を手にとって桐原主任を見ると、一つ溜息をついて椅子から立ち上がった。

それに頷いて、荷物を手にお店から出る。

お金は後で割り勘にすればいいね。

道路に出て慌てて通話ボタンを押すと、

「——由比さん、まさか一人で帰ろうとしてないよね？」

圭介さんの、静かな声が流れてきました——

——説教、確実みたいです

「もちろん、今から電話しようと思ってましたよ？ 圭介さんてば、疑り深いなあ」

誤魔化しているのがばれないように、爽やかに笑ってみた。

「そうさせてるのは、誰かな？」

はい、この四日間の私です。

はっはっは。

ていうか優しそうな声だけど、確実に信じてませんね。私の言葉。

「どうした、上条」

後ろから会計を済ませてきただろう桐原主任が、往来で引き攣った笑い声を上げている私の傍に立った。

その声が聞こえたのか、圭介さんが謝りの声を上げる。

「ああごめん、人がいるんだね。もしかして送ってもらうつもりだったのかな？ だったら——」

「違います！」

圭介さんの言葉を遮る。

「は？」

「圭介さん、その勘違いだけは勘弁してください。この人は捕食者です、抹殺対象者です！」

「て、コラ。それは俺のことか？」

思わず叫んだ言葉に横にいた桐原主任が、私の頭をがっしりと掴んだ。

そのままギリギリと締め付けてくる。

「いつ、痛いっ！ 離して下さい、主任っ」

携帯を持ったまま反対の手で主任の手首を引っ張ってみたけど、ま

まったく動かない。

電話中に何すんだ、この上司！

「由比さん！？」

「あ……」

携帯から圭介さんの焦ったような声が聞こえて、慌てて耳に押し当てる。

「すみません、うるさくて！」

「そっじゃない、大丈夫なの？！」

耳元で叫ばれて、思わず携帯を遠ざける。

きーんっていつてる。耳。

すると何を思ったか、その携帯を桐原主任が取り上げた。

「えっ、ちよつ……！」

「お話中に、失礼します。私、上条の職場の同僚で桐原と申します
が……」

私の頭を押さえた腕をピンと伸ばしているから、懸命に腕を伸ばしても携帯にまったく手が届かない。

ていうか、なんで人の携帯に出る……！！

「私が引き止めたものですから……、あ、そうですか。いえ、私が送らせて貰おうかと……」

「却下！ 圭介さん、お迎え希望……！」

桐原主任の言葉を遮って携帯に向かって叫ぶと、主任がものすごい目で睨みつけてきておもいきり目を逸らす。
怖いけど、これだけは譲れんっ！

家がばれちゃう、最寄り駅がばれてしまう……！！

「はい、分かりました。そう伝えさせていただきます。失礼します」
いつの間にか話は終わったのか、切断ボタンを押してその携帯を私

に向けて放り投げた。

慌てて両手を出して、ぎりぎりキャッチ。

さすが、私。

「迎えに来るってよ、もう職場を出てるから五分くらいだと」

「そうですか。ていうか、一体なんなんですか？ 他人の携帯に出て」

戻ってきた携帯をさすった後、鞆にしまいこんで駅へと歩き出す。といっても、駅のロータリー近くでご飯食べてたから、すぐそこなんだけどね。

「とりあえず家族に面識を持ってもらうのは、先決だろ」

「は？ 上司だからって、そこまでします？」

どこの世界に、家族に自分の存在アピールする上司がいるっての！「お前に対してだけはする」

「なんで！ 意味がまったく分からないんですけど！」

そう叫ぶと、桐原主任は苦虫を噛み潰したような顔で、ぼそりと呟いた。

「……“ねずみ”が吠えてんじゃねえ。黙って俺の話、聞け」

「……！」

その言葉を聞いて、カツと頭に血が上った。

“ねずみ”発言もむかつくけれど、どこかと自分の領域に踏み込まれるのは何よりも嫌！

「そこまでして、私を食べたいのか！」

私の言葉に一瞬息を呑んだ主任は、負けずに怒鳴り返してきた。

「ああ、食いたいね！」

ホントに捕食なわけ？！

「——どんなきわどい会話をしてるんです、お二方」

声がした方を見ると、圭介さんが呆れたような表情で立っていた。

私と同じ様に桐原主任も圭介さんを見たらしく、少し目を見開いて

“一昨日の……”と呟いているのが聞こえた。

それを無視して、圭介さんの傍による。

「圭介さん、ごめんね。お仕事で疲れてるのに、迎えに来させて」
「……」

圭介さんは私の声に気が付かないのか、じつと桐原主任を見ている。
なぜかその視線はとても強く、この数日でも見たことのないもので
思わずシャツの裾を掴んでしまった。

その振動で気付いたのか、私を見下ろして目を細める。

「ああ、ごめんね由比さん」

それは既に、いつもの圭介さんで。

優しい表情に、息を吐き出す。

そんな私に気付いたのか、頭を緩く撫でられて苦笑する。

怖がらせたと、思ったらしい。

うん、ちよっと怖かったけど。

「じゃ、帰ろう。翔太も待ってるし」

「あ、ご飯まだ？　なら、帰ってから何か作るよ」

お礼に、と続けるとふわりと笑顔を見せてくれた。

——いや、妹でも結構恥ずかしいな

赤くなりそうな頬を隠すように俯いて、反対側のロータリーへと歩き出す。

「ちょっと、待て」

改札前を抜けて反対側に出た私達は、桐原主任に呼び止められた。ていうか、まだいたんだ。

だいが失礼な事を頭の中で考えながら、思い出したことに小さく声を上げて振り返る。

「すみません、主任！ ご飯のお金！」

さっき、お金払わせたりきり……！

慌てて鞆から財布を取り出すと、数歩後ろにいる主任に駆け寄る。

桐原主任は不機嫌そうに目を眇めると、いらん、と財布を持った私の手を押しのけた。

「別に、いい。それより……」

「よくない！！ 主任に借りとか、嫌過ぎる」

財布から千円札を取り出して、主任の鞆におもいつきり突っ込む。

「てめ、上条っ」

その手を掴まれて鞆から引張り出されると、掴まれた手を他の手に持っていていかれたのはほぼ同時だった。

自分の手が攫われた先は、いつの間にか横に立っていた圭介さんの手の中。

「すみません、先ほど携帯に出られた方ですよ？ 私、由比さんの隣に住んでいる遠野と申します」

ほんわかとした笑みを浮かべる圭介さんは、私の手を持ったまま桐原主任に頭を下げた。

それを、桐原主任は胡乱な表情で見ている。

「私が言う事ではないとは思いますが、もう少し女性に対しての行動は考えないと。由比さんが怪我をしてしまいますから」

「……余計なお世話だ」

桐原主任は不機嫌そうではあるが、凶星を指されたようで抑えた声で返答している。

いい気味だ。

これで、私への対応を考え直せばいいのだ。

内心ふんぞり返りながら桐原主任に舌を出していた私はまだ掴まれたままの手に気付いて、圭介さんの名を呼ぶと“ああ”と頷いてその手を持ち上げた。

「ごめんね、由比さん。先に車、行つてくれる？ 路駐で捕まったら悲しいから」

そう言つて私の手のひらに、車の鍵を落とす。

「え？」

反射的に聞き返した私。

「先に、行つてください」

その声に、なんとなく逆らえない気持ちになる。

……なんだかおかしい雰囲気だけど、とりあえず頷いておこう。

「じゃ、桐原主任。お先に失礼します」

「……ああ」

いつも通りの不機嫌オーラにある意味安心して、私は圭介さんの車へと歩いていった。

由比がいなくなった後――

「なんか用かよ」

由比の後姿を見ていた圭介に、桐原が言い放つ。

不機嫌そのものの態度に、圭介は思わず口端を上げた。

「私からは特に。貴方が何か言いたそうだったので」

「お優しい事で。一体おまえら、なんなんだよ」

「何、とは？」

「あいつと、どんな関係だっていつてんだ」

噛み付けば淡々と返される、そんな事はこの数分で気がついていたが、桐原はどうしても言葉を止められなかった。

圭介はそんな桐原を、ゆるく笑ってみている。

「関係、ですか？ 四日前に彼女の隣の部屋に越してきた、隣人ですが」

「四日？ たったの？」

驚いたように見開かれるその目に、微笑む圭介の姿が映りこむ。

「ええ。確かに由比さんを妹のように思っている自分はいませんが、貴方が睨むような相手ではありませんよ。ただ、あのような扱いは止めて頂きたいとだけお伝えします」

それだけ言つと、くるつと踵を返して車へと歩き出す。

「それが……妹見る、目がよ」

何か後ろで桐原が呟いていたけれど、圭介の耳には届かなかった。

駅を出た車は、真っ暗な道をゆっくりとアパートへと向かっていく。

隣ではいかに桐原が理不尽かを、由比が懸命に話している。

圭介はそれに相槌を打ちながら、思考には別のことを浮かべていた。

たったの。

確かに、たったの四日。

驚くほど距離が縮まったと、圭介自身もそう思う。

それは多分、翔太の存在が大きい。

他人に表面しか見せない翔太が、なぜか最初から由比に対して心を許していたから。

そんな翔太の事が嬉しくて、由比と仲良くなろうと、距離を縮めようとしたのは嘘じゃない。

たったの。

確かに、たったの四日。

それでも、由比が充分信用できる人間だと分かった。

人に頼らず、自分の事は自分でやる彼女に好感が持てた。

今朝、由比を車に乗せて話していた時。

必要以上に過保護になっている自分に、改めて気付いた。

由比に対してその理由を言い募る自分に、その焦りに。

確かに、ありえないと、思った。

そんなに自分は、いい人間じゃない。

無条件に守りたいと思うのは、翔太だけで充分だ。

なのに彼女を見ると、守りたくなるのはなぜだろう。

その時、翔太と彼女が、なぜか重なった。

自分でもよく分からなかったが、なぜかすっと納得した。
彼女は。

翔太と同じ、自分にとって庇護する対象なのだろうと。
向けられるその表情に、感情に、彼女を守りたいと思う自分がいる
のだろうと。

翔太は、自分の弟。
ならば、彼女は妹。

そう伝えて、彼女を安心させてやりたい。

いつも自分と話す時、顔を真っ赤にする由比さんを。

そうすれば、もっと距離が近づくんじゃないかと――

そう思って……

――妹みたいに、見えるのかも

……伝えた。

素直に喜んでくれる由比さんを見て、これで彼女を怖がらせずすむとほっとしながら。

喜ばれた事実、それに少し寂しさを感じた。

なぜかしっくり来ない感情の小さな欠片が、残ったような感じで。

——あー、妹。確かに、おにーちゃんって感じ

その欠片はなんだろうと内心首を傾げていたら、由比さんは苦笑しながらさっきよりも少し碎けた雰囲気になって話してくれて。

その事実には温かい気持ちになって、その欠片から意識的に視線を逸らした。

あんなに楽しみにしていたゴールデンウィークも早々に終わり、あつというまに出勤日。

なんで楽しい時間って早く過ぎ去るんだろって翔太に言ったら、毎日楽しくすればいいんじゃない？　といわれました。

……しめてイイデスか？

「え？　じゃあ、会社の人、由比が同じ駅に住んでるって事知らないの？」

朝、翔太と肩を並べて、駅までの道のりを歩く。

朝は危なくないからいいと辞退したけれど、あっさり鞆を取られて一緒に歩いていくことになった。

その道すがら先日圭介さんに迎えに来てもらった時の事を聞かれて、ついでだからとその事も伝えたのだ。

だからもし私の会社の人と会っても、言わないでね、と。

「でもそれって難しくない？　由比はなんて言って誤魔化してるの？」

翔太の横でからからいつてる、自転車が憎い。

これに乗れば、他人に迷惑などかけないのに。

「ああ、適当に。コンビ二に用があるとか。それに、一緒に帰る事が多い人だけには言ってるから」

桜には、誤魔化しがきかなかったから。

それに、彼女になら別にはばれてもいい。

「へえ？ それ、男？」

「？ 何で？」

性別、なんか必要？

よく分らず聞き返すと、足を止めてきよとした顔で私を見下ろす。

ゆっくりと右手で鞆を指差すと、につこりと微笑んだ。

「男なの？」

首を傾げるその姿は可愛いんだけど、鞆を物質にしてる時点でやってることはキャッチのおにーさんと変わらないよ。翔太。

「すっごい綺麗な女の人。見たら紹介してって言われそうなくらい」
しないけどね。桜が嫌がるから。

ああ、でも翔太なら普通に話せるかな。

「っそ」

翔太は何事もなかったかのように、自転車を押しながら歩き出す。

それにあわせて足を動かしながら、この兄弟結構危ないと溜息を零した。

人を勘違いさせる行動が多い。

「女の子にやったら、絶対誤解されると思う」

「何が？」

何がつて……

聞き返されながらどう答えようか、頭の中で考える。

自意識過剰みたいで、なんだか嫌だけど。

「そうやって、一緒に帰る人の性別聞きだしたりって事。自分に気があるんじゃないかって勘違いする人がいても、おかしくないと思うよ。気をつけないと」

そうそう、女の子は思い込みが激しい生き物なんだよー
しかもこんな可愛いお顔の男の子。
頼まれなくても、勘違いしたくなるじゃない。

そう言っで自分で納得するようにうんうんと頷くと、翔太はそっかなーと顎に手をやってる。
分からない所が危ないっての。

見えてきた駅に、視線を移した。

誰かと話しながら来ると、案外近く感じるなあ。

翔太は自転車を預けるために、ロータリー傍にある駐輪場へと入っていく。

そこで気付く。

鞆、籠に入れたままだ。

なんか荷物持ちまでさせて、私、何様だろう。

案の定、翔太は私の鞆を手に戻ってきた。

「ごめん、翔太。荷物持たせて」

それを受け取りながら謝ると、別にと可愛い笑顔が返ってくる。

ああ、腹黒さえなければ天使とでも言いたくなる顔なのにつ

惜しいつと、内心残念になりながら歩き出すと、その肩を翔太に掴まれた。

「何？」

上にある翔太の顔を覗きこむ。

「別に、勘違いじゃないと思うんだけど」

言った言葉は、意味不明。

「は？ 何が？」

聞き返すと、可愛い笑顔を全開に上体を屈めてきた。
いや、身長差があるから話すにはありがたいけど、別に普通に聞けるから。

離れようとする、掴まれた肩に力が入る。

「だから、由比限定の行動だから、勘違いじゃないんだけど」
「は？」

だから、何が？ と続けると、翔太は苦笑して私の鞆を指差した。

「……由比の鞆って、美味そう匂いがする」

いきなりの話題転換に私は首を傾げながら鞆を開けると、中からランチバックを取り出して持ち上げる。

「これ？」

それに鼻先を近づける姿は、もう、子供！

可愛いっ！

「これこれ。ホント、由比って料理美味いよなあ」

その言葉に、一気にテンションが上がる。

「翔太、持ってく？」

そう言っ、翔太にランチバックを差し出す。

珍しくうるたえた様に頭を振る翔太に、ぐいぐいと押し付ける。

「ここまで歩きで一緒に来てもらったし、そのお礼ってことで！」
「いや、そうしたら由比の昼飯なくなっちゃうじゃんか」
さすがの翔太も遠慮という言葉は知っているらしい。
でもっ

「いいのいいの、ご飯を美味しいって言って食べてもらえるのって、ホント嬉しいのよ。はいつ、じゃあね！」

翔太の手にランチバックを握らせると、私は手を振ってそこから走り出した。

振り返らずに走り去った私は、翔太がしばらくこっちを見つめていた事にはまったく気付かなかった。

「本当に、鈍いな」

故に、呟いた言葉もまったく知らない――

「あれ？ お昼、持ってきてないの？ 由比にしては珍しいね」
ランチバッグを手にした桜と、一緒に社食に向かう。

「うん、隣の子にあげてきた」

「……そうなんだ」

少し呆気にとられたような桜に頷きながら、食券を買って列に並ぶ。桜は席を確保しに、先にテーブルへと歩いていった。

その後姿を見ながら、周りの人の視線に思わず苦笑する。

普段社食に來ないから、桜に向かう視線がまるで見えるようだ。

「あらあ上条さん、今日はお弁当持ってこなかったの？」

後ろに並んだ女性に声を掛けられて、振り向く。

そこには、人事の皆川さんが立っていた。

「皆川さん、お疲れ様です」

「お疲れ様。珍しいわねえ」

入社して一ヶ月、初めからお弁当派だったのに、と首をかしげる。
大人の女性がやると、異常に可愛く見えるのはなぜだろう。

私は出されたパスタをトレーに乗せると、少しずつ皆川さんを待つ。
つ。

「あはは、ちよつと……」

皆川さんはトレーにのった定食を持つと、一緒にいい？ と私の後が続いて歩き出した。

「はい。今、桜が席を取っておいてくれますから」

そう言つて見回すと、窓際の席でこっちに小さく手を振る桜を見つけて足を向ける。

「都築さん、私も混ぜてもらっていいかしら」

私の横に立った皆川さんが、桜にも了承を得てから椅子に腰を降ろした。

「有名二人組みが食堂にいるから、つい声掛けたくなっちゃって」「何言ってるんですか、有名なのは桜であって私は入っていませんよ」

皆川さんの言葉に突っ込むと、くすくすと笑い声が帰ってきた。

「あら？ 上条さんも結構有名だけどね、うちの主任との攻防戦」

「攻防戦？ それ、できれば一方的に絡まれているだけって言いきりて欲しいです」

何に対して、攻めて守ってるのやら。

「まあ確かに、桐原の一方通行ではあるけどね」

「そうです、一方的にからかわれてホント頭にきます」

「気に入られてるものね、由比」

お弁当箱を手にとって箸を動かしていた桜に、冷たい視線を送る。

「やめて、本気で。あれは気に食わないから苛めてるだけ。気に入ってる相手に“ねずみ”とか言わない。嫌われてるんだよ」

「え？」

冷静に淡々と桜に説明していたら、隣から呆気にとられたような声が上がった。

思わず横に目を向けると、皆川さんが瞬きを幾度かして私を見ている。

「まだ、何も言われてないの？」

「は？ 何がですか？」

「だから、桐原に。私煽っちゃったみたいだったから、ちょっと心配してたのよね」

……煽っちゃった？

「何を？」

眉を顰めて皆川さんを見ると、彼女は苦笑しながら頭を横に振った。
「これだから、ちゃんと言いなさいって言ってるのに。都築さんには分かってもらえるのかしら、この話」

途中から桜に向けて言うと、是の返答に皆川さんは笑った。

「知らぬは本人だけってね」

「え、どういう意味ですか？」

言われている事の意味が分からず持っていたフォークを置いて聞くと、皆川さんは少し困ったような顔をして箸を手に持った。

「それは本人に聞いてよ。私が言う事じゃないわ。まあ……」

箸を持った手で頬杖を作ると、面白いものでも見つけたかのようににやりと口端を上げる。

「桐原が思った以上にバカで使えないヘタレ男だってことは、よおつく分かった」

「……それ、今更です」

私の言葉に、なぜか大爆笑された。

——何ゆえ？

よく分からない雰囲気になれた疑問だらけの昼食も終わり、既に終業時刻。

疑問はとりあえず置いておいて、指示された仕事の終了とともに片づけを始める。

今日は桜が当番だから、声を掛けて総務を後にした。

総務の先輩達が帰るのを待ってから出たからか、廊下にはそんなに

人がいない。

さあ帰ろうと頭の中に今日のタイムサービスはどこが一番安かったかなと、チラシを思い浮かべながら歩いていたら。

「上条さん」

ビルを出たところで、呼び止められた。

「皆川さん……、と桐原主任」

皆川さんの後ろにいる人に胡乱な声で呼びかけながら、立ち止まる。

「ね、上条さんこの後空いてる？ 飲みに行かない？」

「皆川さんですか？」

暗に桐原主任とだけは嫌だ、と言葉に含む。

二人ともそれに気づいたのか、皆川さんは苦笑し桐原主任は不機嫌さを増す。

「お財布がいれば楽よ？ 役職持ちなんだから、私達より実入りはいいはずだし」

「いや、まあそうかもしれませんが」

それ以上に、また意地悪されるかと思うと気が重いんですが。

「私が居るから大丈夫よ。それより、日々の鬱憤を桐原のお金で発散しましょ」

ね？ と目を細めて笑う皆川さんに、私は少し迷った後頷いた。

連れてこられたのは、会社から少し離れた小さな居酒屋さん。奥座敷に腰を降ろして、一息つく。

「私、適当に頼むからね」

との言葉通り、皆川さんがいろいろ頼んでくれて遠慮せずに食べる事ができた。

しばらく三人でたわいもない話をしていたけれど、皆川さんがお手洗いに立った後、その時は訪れた。

The 沈黙

しんとした部屋の中は、ものすごく居づらい。

これを恐れていたわけです。

主任とは怒鳴りあうことばかりで、ほとんど会話らしいものはなくこの何もない状況で、何を話せばいいかまったく分からないわけです。

視線だけ上げて主任を見ると、何か考え込んでいる様子。

ていうか、今日、すごく会話少ないよね。

いつもなら人がむかつく言葉をガツガツ言ってくるのに、なんでもんなに神妙なの？

私は聞こえないように息を吐くと、テーブルに手をついて立ち上がった。

「私もお手洗いいってきます」

「んあ、あつ、上条っ」

私の声に驚いたように顔を上げた桐原主任は、いきなり私の腕を掴んで引き止めた。

「わっ」

引っ張られた身体をテーブルに置いた手で支えて、主任を見る。

「？」

引き結ばれた口、じつとこちらを見る視線に、普段じゃない桐原主任を感じて首をかしげた。

「どうしたんですか？ 体調悪いとか……」

「いや、そうじゃない」

そうじゃないなら、なんだろう。

とりあえず、腕を離してくれないだろうか。

そんな私の思考もお構いなしに（分からないんだからそうなんだけど）、主任は何かを決意したように口を開いた。

「俺は、別に……お前を嫌ってるわけじゃない」

「は？」

なんだろう、突然。

「だから、気に食わなくてお前を構ってるわけじゃなくて」

「はあ」

何が言いたいんだろ。

少し顔を俯けていた主任が、がばりと勢いよく顔を上げた。

「お前の事が、好きなんだ」

そう言い切った主任の顔を見ながら、思わず口が開いた。

「うわ、勘弁。ありえない」

思わず、背に悪寒が走った。
目の前の主任が、固まってる。

「なんですかそれ、私が騙されるとでも思ったんですか？ おかしいと思っただですよ、いきなり飲みに行こうなんて」

「……は？」

力が抜けた主任の手から、自分の腕を奪還する。

「なんですか、新手の苛めですか？ 甘いんですー、今までどれだけ主任のいじめに耐えてきたか！ これくらいじゃ、騙されませんっ」

「かみ、じょう？」

「うつわー、無理無理。今のは酒の席ってことで、水に流して遠くに沈めますから。明日以降、この手の意地悪は止めてくださいね。皆川さんに迷惑です」

そこまで言い切ると、今まで呆然としていた主任がいきなり立ち上がった。

「こつちだって、誰がお前なんかと。少しは告白された喜び味わえたかよ」

けっ、と言葉がついているんじゃないかという感じで、ぷいっとそっぽを向く。

その姿にうんざりして、鞆を手を取った。

「えーえー、ご親切にありがとうございましたっ。私は先に帰ります、ご馳走様でした！」

踵を返してふすまを開ける。

するとそこには、なぜか両手を挙げた皆川さんが立っていた。

「皆川さん、いらっしやったんですか」

いつまでも帰ってこないと思ったら。

皆川さんは気まずそうに笑いながら、その手を下ろした。

そして口を開こうとするのを、先に話すことで遮る。

「まーた桐原主任が分けわかんない事言い出すんですよ。私、先に帰りますね？ いっぱい食べて懲らしめてくださいっ」

「え、あの、上条さん？」

「お先です」

私を引きとめようとする皆川さんから離れて、さっさと居酒屋を出る。

私は頭を沸騰させながら、帰りの迎えの為に翔太に電話した。

「ねえ、あんた最悪なんだけど」

由比が帰った後、しばらく呆けていた皆川は開けっ放しの襖を閉めて座布団に腰を降ろした。

目の前に座る桐原は不機嫌の境地をさらけ出して、頬杖付いたままそっぽを向いている。

その態度にため息をつきながら、宥める様に皆川はことさらゆつくりと桐原に問いかける。

「どれだけ彼女を怒らせていたか、分かった？ 信頼を回復するのはかなり難しいと思うわよ？」

「……」

優しく言ってやってるのに何も答えない桐原に、押さえようとしていたイライラが頭をもたげる。

「大体、なんで彼女の事“ねずみ”って呼ぶの？ あの子、あんたの前で言うのもなんだけど可愛いわよ？ あんたが変に構うから言わないだけで、結構見てる男性社員多いんだから」

「誰」

横を向いていた顔が、怒りを湛えて皆川の方を向いた。

それを見て、もう一度ため息をつく。

「言うわけないでしょ？ 容赦なく、あんたに潰されそうだもので、なんで？ どうして“ねずみ”？」

皆川が“由比を見ている男性社員”を言わない事に腹は立つが、追求されるのを面倒に感じた桐原は顔を横に向けてぼそつと何か呟いた。

「は？ 聞こえないわよ」

小さすぎて聞こえなかった答えを、皆川は聞き返す。

すると桐原は不貞腐れたように言った。

「可愛かったから」

思わず、目を見開く。

かわいい〃ねずみ……？

皆川はあまりイコールにならないその方式を、復唱する。

「可愛いと、ねずみ……なの？」

桐原はうるさいとでも言うように、頬杖をついていた手で前髪を掻き揚げた。

「ちょこちょこ動いて懸命に前を見ようとする姿が、そう見えただ」

悪いか、と付きそうなくらい不機嫌な桐原は、また口を噤んでしまった。

それを見て、一気に皆川は脱力する。

「あんだ……。もっと可愛いものに、例えられなかったの……？」

リスとかネコとかハムスターとか！

なんで、よりにもよってねずみ？

「つい、口から出ちまったんだよ。上条が挨拶に来た時。しまったって思ったけど、言い直せるもんでもないし。そのうちあいつが噛み付いてくるのが面白くて、そう呼んでた」

「あんだ、ホント馬鹿？ ヘタレ？ ツーか、仕事はそつなくこなすのに、何なのよその恋愛ベタ。今時、中学生でもそんな事しないわよ」

ツンデレてーか、桐原の場合ツンツンばかりでベースがヘタレとき

た。

思わず誰か助けると、望んだ皆川に罪はない。

「うるせえな……」

桐原は皆川の残念なものを見るような視線に、不貞腐れた声を上げる。

「俺だって、一応しまったとは思ってたんだよ」

小さな声でぶつぶつ言うその姿に、皆川は思いつきりため息をついた。

その俯いたままの体勢で鞆に手を伸ばすと、携帯を取り出す。

「すぐに謝りなさいよ、ちゃんと言いたいことを言いなさい」

「言ったけど、流されたって」

「自業自得。好きなら足掻きなさい」

面倒くさそうに言う桐原を尻目に、皆川は通話ボタンを押して耳に当てた。

数コール後、出た声はいつもより低く。

怒ってるな〜と口を引き攣らせつつ、皆川はいつもより優しい声を出した。

「上条さん、ちょっと話があるんだけどいいかしら」

携帯の向こうでは、こちらを探るような雰囲気醸し出している。

ああ、とうとう私まで警戒する人間に入ってしまったかと肩を落とす。

「今どこにいるの？ 駅？ じゃ、すぐに行くから待っていてくれないかしら」

物凄く長い沈黙の後、やっとの事で了承してもらえてほっと息を吐いた。

携帯を鞆に戻して立ち上がる。

「ほら、行くわよ」

「別に……」

「うざったい。あんた本当に面倒」

盛大にため息をつくと、むっとした表情のまま桐原が立ち上がる。皆川は会計を桐原に押し付けると、店の前で出てくるのを待つ。

「ったく……」

何度目かになるため息を零して、苦笑する。

ここまで面倒見ることもないんだけど、どうしても手を出したくなってしまう。

あの、傍若無人桐原が、他人に無関心な桐原がここまで惹かれていたのだから。

同期のよしみで、何とかしてやりたいと思ってしまう。

「下の弟に似てるからかしらねえ」

桐原が聞いていたら、無言で小突かれそうな言葉を思わず零した。

「皆川さん、なんだろ」

通話の切れた携帯を見つめながら、それをたたんで鞆にしまった。翔太に電話しちゃったから、十分くらいで用事が終わってくれればいいんだけど。

すでに自宅アパートのある方の出口にいたけれど、一つため息をついて踵を返す。

すぐ前に通った改札前を越えて、会社のある出口へ向かう。ほんの数分で、皆川さんはやってきた。その後ろから、不機嫌な人物をつれて。

「皆川さん、どうしたんですか？」

後ろには視線を向けず、皆川さんに問いかける。

途端、不機嫌オーラが増した気がするけれど、完全無視。

皆川さんは少し気まずそうな表情を浮かべたまま、私の背中を軽く押した。

「ここだと目立つから、向こうに行きましょう？　ね？」

促されるままに、もう一度反対側の出口へと歩いていく。

「あの、何か……？」

少し上にある皆川さんに問うても、苦笑いが返ってくるだけ。

再び、アパート側の出口に来てしまった。

まずいなあ、ここに翔太が迎えにきたらアパートがこの駅ってばれるよね。

あまり、知られたくないんだけどなあ……。

困ったような表情を向けると、ごめんなさいね、と言われて首を振る。

よく分からないけれど、何か用事があるんだろう。

「それで、あの……」

辺りに人がいないのを確認すると、皆川さんは後ろを向いた。

「ほら、言いたい事あんのはあんたでしょ？」

ぐいつと腕を引っ張られて、しぶしぶ前に出てきたその人は、分かっているけど桐原主任。

目を眇めて私を見下ろすその顔は、威嚇しているとしか思えない。

「なんですか」

とりあえず、声を抑えて聞いてみる。

「別に」

「桐原」

ふいつと顔を逸らした桐原主任に、どすのきいた皆川さんの声がとぶ。

桐原主任はその声に眉を顰めると、大きく息を吐いた。

「ああ、いい。なんでもねえから」

「ちよつ、きりは……っ」

桐原主任に皆川さんが何か言いかけたその時、

「あれ、由比？」

掛けられた声に、私は顔だけ斜め後ろに向けた。

「あ、翔太」

自転車に跨った翔太が、すぐ傍に停まるところだった。

キュツと音をさせて、ブレーキと共にアスファルトに足をつく。

Tシャツに無地のシャツを羽織って、ジーンズを穿いた翔太は立派に……幼い（笑

思わず笑いそうになるのを堪えて、身体ごと向き合った。

「ごめんね、翔太。迎えに来てもらって」

「うん、別にいいけど……？」

翔太は小さく首を傾げながら、自転車のスタンドを立てて横に立つ。

「あ、桐原さんでしたっけ。こんばんは」

猫かぶり翔太が、につこりと満面の笑顔で桐原主任に声を掛ける。

「……ああ」

主任は舌打ちでもしそうな勢いで、ふいっと顔を背ける。

こっちはこっちで、愛想のない……

といいつつ、愛想のいい桐原主任なんて想像つかないんだけど。

「上条さん……、ちよつとっ」

その声にそっちを見ると、皆川さんが翔太を見ながら私の腕を引いた。

「何、彼氏？ 若くない？」

「お隣の子です」

皆川さんの言葉を、思いつきり冷静に遮る。

「お隣？」

なぜかほつとしたようで、胸を押さえて息を吐いている。

「初めまして、お姉さん。僕、由比の隣に住んでいる遠野です。迎えに来たんですけど、お仕事のお話ですか？」

「……っ」

衝撃を受けたように顔を真っ赤にさせる皆川さんを、つい生ぬるい

眼で見る。

ああ、翔太の猫かぶりにやられたね。

そうそう、腹黒さを見せないでこんなに可愛い顔でにつこり微笑まれば“くる”よね。

うん。

きつと、最初翔太と衝撃の出会い方をしていなければ、もっとドキドキしてた気がするもの。

皆川さんは両手を前で振ると、がしつと桐原主任の腕を掴んだ。

「いいのいいの、明日で大丈夫だから」

ほらいくわよつ、とそのまま引つ張っていこうとした腕が、主任が動かないものだから外れてしまう。

眉を顰めて振り返った皆川さんは、桐原主任を見上げた。

私もつられるように視線を動かすと、目が合って動きを止める。

射るような、視線。て、こういう事を言うんじゃないだろうか。

確かに今までも怒鳴られたり弄られたりしたけれど、ここまで睨まれた事はない。

瞬きをする事も忘れるくらい、目を逸らせない。

「上条」

びくり、と肩が揺れた。

なんだろう、名前を呼ばただけなのに怖い。

「……」

口をあけようとしたけれど、それさえも出来なかった。

「さっきのは、嘘じゃない」

「…………え？」

さっき……？

疑問を頭に浮かべながら、やっと出たのは聞き返すような小さな声。

桐原主任は、じっと私を見つめながら口を開く。

「俺は、お前が好きだ」

——頭が、真っ白になった。

でもそれは一秒か五秒かほんの一瞬で、次の瞬間、いきなり頭が動き出す。

好き？ 桐原主任が私を？

あれだけ人のこと遊んでおいて、好き？

好きの意味、分かっている？

「信じられないのは分かっている、さんざんからかってきたし。でも、本当だから。俺は、お前のことが好きだ」

私の思考を読んだ様な言葉に、鼓動が早くなる。

本気で……？

衝撃の事実（甘いものとかどきどきとか可愛らしいものではなくて）に、やっと理解をし始めた私の肩に、ぽんっと翔太が手のひらをのせた。

「うわ、由比。告白されちゃったね。桐原さんも凄いな、こんな人がいるところで告白できるなんて」

猫かぶり続行中の翔太を見上げると、可愛らしい笑みを浮かべている。

……何か、よからぬことを考えている気がするけど……

ふとよぎった不安を肯定するように、にやりと翔太が口端を上げた。

「でも僕も由比のこと好きだから、簡単には渡さないけどね」

「は？」

好き？

ぽかんと翔太を見つめると、肩に置いた手を頭にのせて軽くバウンドさせた。

「さ、帰ろうよ由比。今日もご飯食べさせてくれるんでしょ？」

「ちよつ、翔太？」

何がなんだかわからないまま、背中を押されて促されるままに足を動かす。

けれど気になつて顔を主任の方に向けると、さっき見せていた表情とは一変してあまり見ない笑みを浮かべていた。

「ああ、別にいい。どうせ、俺は嫌われてるだろうからな。すぐに返事をくれなんていわねえよ」

「桐原主任……」

「ただ全力で落とす、それだけ覚悟しておけ」

「……」

ばわつと真つ赤になる頬を隠すように、“お疲れ様です”とだけ言
って私はその場を早足で歩き去った。

後に残された皆川は、踵を返す桐原に慌てて駆け寄る。

「ちよつ、何あんた！ 誤魔化そうとしたくせに、何いきなり告つ
てんのよ」

少しでも格好いいと思ったのは、口には出さないけれど。

桐原はそれには答えずスーツの内ポケットから定期を出すと、改札
を抜けてホームへと上がる。

やっと立ち止まった桐原に、皆川が何か言おうと口を開いた時、大
きく息を吐かれて遮られた。

「あの目、ガキのくせにすげえわ」

そう言われて翔太のことをすぐ思い出したが、別に怖い事は一つも
なかったしどんな目？ と首を傾げた。

「可愛い子だったじゃない。お隣のお姉ちゃんを取られたくないん
でしょ？」

子供よねえと笑う皆川に、桐原は苦笑した。

「すっかり騙されてんな。まあ、いいけど」

それだけ言って口を噤む。

皆川は意味がわからないと眉を顰めていたけれど、黙り込む桐原に
諦めてため息をついた。

桐原はストラックスのポケットに手をつ突っ込みながら、翔太の姿を思

い出していた。

あの、挑むようなキツイ目。

誤魔化そうとしていたのに、思わず上条に言ってしまった。

あんなガキに煽られたなんて、こっちはいいい大人だというのに。

そう思いながら、ふと由比の顔が浮かぶ。

真っ赤になって、目を見開いていた表情。

いつもはむかつきとかイライラとか呆れとか、不の感情しか向けられたことがなかったから。

思い出すと、顔の筋肉がつい緩む。

「ちょっと桐原、にやけてる。気持ち悪い」

「……うるせえ」

そう言いながら、口元に力を込める。

「大体、人前で告白できるならさっさと行動に移せばよかったじゃない。ヘタレだと思ってたけど、なんだかよくわかんないわ」

呆れたように見上げてくる皆川に、桐原は“うるせえよ”と答えてまた口を噤んだ。

「いやー、生告白って圭介以外初めて見た」

「ちよつ、……なんかリアル過ぎてあれだから、その言い方やめて」
駅を出て自転車をひく翔太と、アパートまでの道のりを歩く。

……今日だけは、拷問のようだ。

さつきから翔太は面白そうに、へえーとかふうんとか言ってる話を
変えてくれない。

「でもさ、由比つては桐原さんのことものつごく嫌ってたよね。返
事、どうするの?」

目下の悩み事になってしまったそれを、いとも簡単に尋ねられて口
ごもる。

「あー、うー」

頬に集まっていく血を、コントロールして身体の各方面に逃がせな
いものでしょうか。

翔太はくすくすと笑いながら、私を見下ろしている。

「真っ赤な由比は、可愛いねえ」

とか、ほざいている。

くう、子供のクセに大人びた言葉遣いして……っ。

「由比は恋愛ごと、鈍くさそうだもんねえ。あ、もしかして他の事
もだった?」

「翔太っ。あのねえ、人の傷口抉って楽しい?」

「てことは、他の事もなんだ」

「……」

違うもん、他の事は言われた事のないもん。
けど、桐原主任に関してはちっとも気付かなかった。
ていうか、未だに信じられないんですけど。

あれが愛情表現なら、どんだけアマノジャクなわけですか！

「ねえねえ、由比。返事は？」

「え？」

頭の中で、パニックを通り越して桐原主任に怒りをぶつけていた私は、翔太の言葉に顔を上げた。

「返事」

視線の先の翔太はにこにこ笑っていて、人の不幸？ を楽しんでいるその様子には私はむっと口を尖らせた。

「桐原主任は抹殺対象としか思ってたから、恋愛に結びつかない。驚きの方が上回る」

そう一気に言っただけ息をつく、翔太はなんでもないので頷いた。

「それも気になるけど、俺に返事は？」

「……翔太に返事？」

「なんの？」

意味が分からず首を傾げたら、仕方がないとも言つ風に肩を竦められてしまった。

年下に、呆れられたよ……

その事実には衝撃を受けていたら、翔太は私の頭を軽く叩くと笑みを浮かべた。

「俺も、由比のこと好きって言ったんだけど」

「……、ああ！」

ぱんつと右の拳で左の手のひらを叩いて、声を上げる。
そうそう、そういうえばそんな事言ってくれてた！

私は翔太を見上げて、ありがとう、と目を細めた。

「嬉しかったよ、翔太！」

そう伝えると、翔太は歩いていた足を止めて私を見下ろしたまま目を見開いた。

「え、それじゃ……」

言いかけた言葉に、うんつと力強く頷く。

「気持ち伝わったよ、ホント。ありがとうね、短期間でこんなに
懐いてくれるとは思わなかったもの」

「……なつ……？」

途中まで少し嬉しそうだった翔太の表情が、曇る。

その変化に首を傾げつつ、私は言葉が続けた。

「これ、やっぱり餌付けが成功した感じ？ 大丈夫だよ、例え桐原
主任とどうなろうと他の人とどうなろうと、たまにご飯は食べても
らうから！」

「……へ？」

「お隣のおねーちゃんに対する独占欲って言うの？ わかるー、私
も小さい頃隣のおにーちゃんが結婚するって聞いた時、大泣きした
もの。そういうもんだよねー」

前を向いて人差し指を立てながら歩き出した私は、翔太がついてき
ていないことに気付いて振り返った。

翔太はさっきの所で立ち止まったままで。

「どうしたの？」

声を掛けると、離れていても分かるくらい盛大なため息をつかれた。

なんで？

「翔太？」

もう一度声を掛けたら、やっと私の傍まで歩いてきた。

「なんか、俺、桐原さんの気持ちが分かるというか……」

「え、なんで？」

ほとんど会った事のない翔太が、なぜ？

驚いたように見上げる私の背中を押して、歩くように促される。

それに従うように足を動かしながら、翔太の言葉の意味を知りたくてじつと見上げる。

翔太はそれに気づいているだろうに何も言っではくれず、そうそう、と自転車の前かごに放り込んであったバッグから何かを取り出した。

「おべんと、ごっそーさま。おいしかったー、また今度作ってね」

その手から下がっているのは今日の朝、翔太に渡したランチバッグだった。

「あ、ホント？ それはよかった」

自分の手のひらに降ろされるそれを見て、ふと思いつく。

「よかったら、明日からお弁当作るうか？」

「え？」

驚いたように足を止める翔太。

つられて私も立ち止まりながら、ランチバッグを手に提げる。

「翔太が嫌じゃなければ」

「嫌じゃないけど、それはさすがに由比に悪いから」

おお、翔太が遠慮している！

翔太なのに。

「別に悪くないよ。こうやって送り迎えしてもらってるし、ご飯食べてもらえるのは嬉しいし。あ、圭介さんは？ もしお弁当もって

いけるなら作るよ？」

「圭介は、いつもコンビニとか出前とか使ってるみたいだけど、でも――」

「うーん、恥ずかしいかな」

大の男が、結婚もしてないのにお弁当持っていくなんて。

「別にそれは……、でも本当にいいの？」

おずおずと聞いてくる翔太の姿に、きゅん、としてしまったのは決して歳の所為じゃない！

両手を伸ばして思いつき翔太の頭を撫でまくる。

「わっ、なっ何!？」

「何って、もー可愛いんだものーっ！ ヤバイね、翔太。将来年上女性に騙されそうっ。ていうか、翔太が騙しそう!」

「なんだよ、それっ」

だいぶ失礼な事を言っている自覚はあるけど、だって可愛いんだもん!。

口では嫌々しているけど、大人しく撫でられている翔太に口元が緩む。

可愛いわー、何この生まれ持ったの弟気質。

しかもさっき“由比に悪いから”とか言いながら、凄い期待に満ちたお目々してましたよ、翔太ってば。

思う存分撫で回して満足した私は、軽くその髪を整えてあげてから歩き出した。

翔太もそれにあわせて歩きながら、片手で髪を撫で付けてる。

「嫌じゃなかったら作らせて。あと、圭介さんには迷惑じゃないか聞いておいてくれないかな？　ありがた迷惑って言つのもあるしね」

「大丈夫だと思うけど、一応聞いとく。俺、卵焼き甘くない奴」

「……遠慮してたはずなのに、リクエストが来た！」

「遠慮はするけど、建前」

「……悪い大人になっちゃ駄目よ」

最後は二人で笑いながら、何のおかずが好きか、言い合いながら帰った。

——のんびりしすぎて、圭介さんに心配させたのは言うまでもない。

ついでに、この時点で桐原主任のことが私の頭からすっかり消えていたのは、決して記憶力が悪いからじゃない……と、信じたい（涙

基本 周りで起こる事って

当事者だけが 何も気付かなかったりするわけ――

五月も終わりのころになると、まったく祝日のない六月を前にだるい雰囲気漂うが。

遠野兄弟がいる高校では、七月の初めに学祭があるためゴールデンウィークから引き続き騒がしさに拍車がかかっていた。

「子供は、ホント元気ですよねえ……」

圭介の隣の席に座っている男性教諭が、ギシリと背もたれに体重を掛けて両腕を組んだ。

体育担当の溝口がそれをやると、威圧感があって少し羨ましいなと密かに思う。

圭介はそんなことを考えながら、鞆から取り出したお弁当箱を机に置いた。

「おや、今日も弁当ですか。羨ましい」

背にしている窓から校庭を見下ろしていた溝口が、本当に羨ましそうに隣から覗き込んできた。

圭介は包みを解くと、箸を持った手を軽く合わせて“いただきます”と呟く。

その仕草を面白そうに見ていた溝口に、圭介はのほほんとした柔ら

かな笑みを向けた。

「ありがたいことですよ。うちは食べ盛りの高校生がいて、食費がかかって仕方ないものですから」

ぱこつと音がしそうな感じでふたを開けると、そこには和風なおかずが鎮座ましていた。

あわせるように、主食はラップに包まれたおにぎり。

具は梅干としゃけ。

翔太のは、たらことしゃけだと今朝会った由比が言っていた。

煮物や箸休めのお漬物、卵焼きがある中で、毎日必ず揚げ物が焼き物が一つ入っているのは、成長期の翔太の為の様だ。

煮物のレンコンを口に運ぶと、しゃくしゃくと小気味良い音がして思わず口元が緩む。

久しぶりに食べる優しい味の煮物に、箸が進んだ。

圭介も料理はするが、どちらかというと洋食中心。

しかも、焼いたり炒めたりという、簡単なものしかできない。

惣菜を買う事もあるが（いや、結構頻繁に）、どうしても味つけが濃いことが多く、由比の作ってくれる和食は、本当においしかった。いや、洋食もおいしいけれど。

「嬉しそうですねえ……」

学食の弁当を食べ始めた溝口は、にこにこしながら食べている圭介を少し呆れ気味に見た。

「おいしいですから。あ、差し上げませんよ？　言い続けています
が」

「分かってますよ。頑なだなあ、顔に似合わず」

そう言って、自分の弁当を手にとってガツガツと擬音をくつつけた
いほど豪快に食べる。

その姿を見ながら、圭介は再びおかずを口に運び始めた。

由比が弁当を作らせて欲しいと言ってきたのは、確か二週間くらい前。

仕事帰りの由比を迎えにいった翔太が、そう伝えるように言われたと帰ってきて言い出した。

現に、その日、翔太は由比の弁当を食べたらしい。

圭介はたまに貰うおかずの味を思い出して、即答しそうになる口を噤んだ。

たまにとはいえ、おかずを貰って食費を使わせているというのに。今日もおかずを持ってくるって、と言われた圭介は、炊飯器の中のご飯を確認してから両腕を組んだ。

申し出は、本当に嬉しいしありがたい。

男二人分の昼食代は、意外と馬鹿にならないから。

しかも圭介には同僚との付き合いも、たまにだがある。

教師の給料で、それは痛い出費だった。

それは、目先の出錢を考えた上での悩み。

翔太を大学に行かせるための資金を、もう少し貯めたい。

先月引越してくる前までバイトをしていた翔太は、今は何もしていない。

受験勉強もあるから、強制的に止めさせた。

本人は、もう少し落ち着いたら短期バイトを探すと言ってはいるが。

「圭介？」

翔太に呼びかけられて振り返ると、そこにはひょこつとドアから顔を出した由比の姿があった。

「あ、由比さん」

慌てて短い廊下を歩いて傍に行くとき既ににおかずのお皿は手渡された後らしく、翔太がすぐ傍のテーブルに置いてペリペリとラップを剥がしている。

玄関先で、と苦笑する由比に翔太がいーじゃん別にと軽く言葉を返す。

「おー、ロールキャベツ！」

ふわりと漂う匂いに、思わず喉が鳴った。

「じゃ、私戻りますね」

何も言い出さない自分に痺れを切らしたのか、由比さんが開けたままのドアから身体を引っ込めようとしたその瞬間、思わず手を伸ばして由比の腕を掴んだ。

「えっ？」

驚いたように立ち止まった由比に、そのまま居るように伝えたと、自分の部屋として使っている六畳の和室に入った。

そこから、食費としてよけてある封筒を手に由比の元に戻る。

「さっき翔太から聞いたんだけど、お弁当、本当にお願ひしいの？」

由比は頷いて、リビングに戻って楽しそうに食器をテーブルに並べている翔太を見た。

「ご飯を食べてもらえるのって、本当に嬉しいの」

「でも、大変だよ？」

「どうせ自分の分もつくるし、言い方悪いけどついできていうものもあるし。それに、量を作ると少なく作るよりおいしいんだよ？」

そついいながら、だしがどうとか旨みがどうとか言う由比に目を細める。

可愛いな、と、ふと浮かんだ。

自分にご飯を作ってくれる、しかも楽しそうに……嬉しそうに。

それに、翔太の分も入っていても。

可愛い。

妹がいたら、こんな感じなんだろうか。

少しだけ当てはまらない感情に首を傾げながら、圭介は封筒から一万円札を数枚出して由比に渡した。

「え、これって？」

思わずといった風にそれを手にした由比は、その金額に圭介を見上げた。

「お弁当と夕飯の材料代。さすがに、送り迎えだけじゃ由比さんの割に合わない」

「えっ、そんなのいいです！」

圭介は自分に向けてそれを返そうとする由比の手を、そつと押し返した。

「駄目。じゃないと、おいしく食べられなさそうだから。せつかくの由比さんのお弁当だし……、ね？」

諭すように言うと、既にロールキャベツを食べ始めていた翔太が、貰ったときなよーと声を上げる。

「学食行ってもコンビニ行っても、結構かかるし。その分だと思えばさー」

「え、でも」

「うん、そうだよ。それを受け取ってもらっても、うちは金銭的に助かるんだから」

翔太の言葉に重ねて言い募る。

「つーか、せっかくのおかず冷めちゃうよー。由比のも冷めてるんじゃない？」

すると翔太も気付いたのか、追いつきをかけるように言った。

由比は少し困ったように眉を顰めると、うちのはお鍋に入ってるから……と呟いた。

「じゃあ、これだけ、頂いていいですか？」

由比は一枚だけ抜き取ると、残りを圭介の手に押し付けた。とっさにそれを掴んでから、由比を見る。

「それじゃ少ない、お弁当と夕飯、しかも二人分……」

「大丈夫！ 節約得意だし、おかずは毎日じゃないし。しかも、駅までの送迎付きなんだから。じゃ、おやすみなさい！」

「あつ、由比さ……っ」

伸ばした手は、閉められたドアに遮られた。

その後リビングに移動して食べたロールキャベツは、本当においしくて。

翌日から始まった弁当は、夕飯のおかずが続いて楽しみの一つになった。

「あー、旨そうな手作り弁当見ながらのコンビニ弁当って、すげえ味気ない」

溝口がぼやいた言葉で、意識が現実に戻される。無意識にも箸は動かしていたようで、弁当箱におかずはもうない。

圭介はそのふたを閉めると、ふうとため息をついた。

考え込むのは、自分の悪い癖だと分かっているのに。おいしいはずのおかずは、無意識に胃袋に収めてしまった。

「溝口先生も、お弁当にはいかがですか？」

弁当を持ってきてからずっと隣でぐちぐちと言う溝口に、温和な圭介もいい加減閉口していた。

珍しく嫌味を口にした圭介を、溝口は胡乱な視線を向ける。

「あー、そうですね。とりあえず弁当を作ってくれる、そんな可愛い彼女を作る事が先決ですねー」

食べ終えた弁当箱を鞆にしまうと、圭介は珈琲を買うために職員室を後にした。

後ろで溝口が何か言っているのを、聞き流しながら。

「遠野先生の彼女は、どんな方が噂の的ですがねえ……」

「遠野センセ、もう弁当食った？」

学食近くの自動販売機で缶珈琲を買っていた圭介は、後ろから背中を叩かれたはずみで手にした缶が廊下を転がった。

圭介は息を吐いて屈めていた上体を起こすと、後ろにいるはずの男子生徒を振り返る。

「翔太。いきなり人のことを叩かない」

「だってせんせーがそこにいるから」

「私は、山じゃない」

そう言つて、転がった缶を取り上げる。

昼休みも終盤、人もまばらな学食に翔太と連れ立って入ると、奥の席に腰を降ろした。

周りに人がいないから、話しやすいといえそう。

目立つといえ、そうかもしれないが。

翔太は圭介の前の席に座つて、パックのジュースにストローを差し込む。

「遠野せんせーは、学祭なんかやることあんの？」

いきなり聞かれた言葉に、圭介は珈琲に口をつけながら視線を上向ける。

やること……？

「準備段階では特に無いよ。生徒が残るのに付き合っつて、職員室が準備室にいるだけ。当日は、見回りがあるが。どうして？」

「由比の迎え。朝は大丈夫だけど、夜は俺もクラスの準備でたまに残ったりするから。出来る限り俺が行くけど、駄目そうな日があるからさー。先に伝えておこうと思って」

「ああ、なるほど」

圭介は持っていた珈琲の缶をテーブルに置くと、白衣のポケットから手帳を取り出した。

それを渡すと、翔太は一緒に渡されたペンで何箇所か日にちを丸でぐるりと囲む。

「そんなに無いけど、圭介行けそう？ 無理なら、どーにかするかさ」

返された手帳を確認して、圭介は大丈夫と頷いた。

「調整はつくから大丈夫。翔太こそ、あまり無理するんじゃないよ」

「んー。んじゃ、俺行くわ」

「ああ」

小さく片手を上げると、翔太は伸びをしながら学食から出て行った。その後姿を見送って、頼杖をつく。

他人を受け入れないように生活していた翔太が、由比のことになるとまるで態度が変わってしまうことにある種、安堵している自分がいる。

やっと自分以外で、心を許せる人ができたことが兄として嬉しい。

……けれど。

「由比さん……か」

由比の姿を思い浮かべる。

今朝、駅まで送ったのは圭介。

翔太と駅に行くのと違って、車に“乗せてもらう”、この状態が由比にとっては恐縮の極みらしくて。

車に促すと、困ったような笑みを零す。

——朝だから、一人でも大丈夫

そう言い出しそうな口元に気付くと、圭介はなぜかもやもやとした気持ちに捕まってしまう。

その言葉さえ、聞くのが嫌なのだ。

翔太とは、遠慮せずに一緒に行くのに……と。

妹……

「妹がいたら、シスコンにでもなりそうだな……俺は」

翔太にさえ少なからず対抗心を持ってしまった自分に、苦笑しか浮かばない。

ため息をついた圭介の耳に、予鈴が響く。

次の時間は授業が入っていないから焦る事はないけれど、とりあえず準備室に戻るか……と椅子から立ち上がると出しっぱなしの手帳を白衣のポケットに収めて、学食から出て行った。

その後姿を固唾を呑んで、見送っている影が三つ。

圭介がいた席の後ろ、パーティションで区切られた掃除用具入れのあるスペース。

そこからこっそり出していた顔を、圭介が学食を出た途端引っ込めてお互い顔を付き合わせた。

「……ちよつと……、聞いた？」

「……聞いた。“ゆい”って誰？」

「知らない。でも、多分遠野先生と翔太くんのお弁当作ってる人なんじゃない？ 送り迎えがどのつて……」

三人の女生徒が、こそこそと小さな声でまくし立てる。

「妹って言ってたし、なんか年下？」

「もしかして……、学校の生徒じゃないでしょうね？」

「えーっ、もしそうなら分かるって！ それに、同じ学校で送り迎えはおかしくない？ でも最近だよ、お弁当持ってきて始めたのって」

「誰のものでもないから、目の保養なのにつ。誰よ、“ゆい”って！」

今、学校の大半が興味を持っている、遠野先生と翔太のお弁当を作っている人に関する秘密を知ってしまったようで、悔しい思いながらもなぜか気持ちが高揚していく。

探偵にでもなったような。

偶然知ってしまったその秘密から、犯人……渦中の人を、暴きたいというよく分からない使命感。

誰も命令などしていないのに、与えられた指令のように三人は導き出せる答えを懸命に考える。

「材料が少ないわよね。もった何か……」

「あ、ねえ。溝口先生なら、何か知ってるんじゃない？ 職員室の席、隣でしょ？」

「確かに。それにあの先生なら、聞きやすいし？」

きらりと光りそうなくらい、使命感に燃えた六つの瞳が一つの目的を持つ。

「……放課後、聞きにいつてみる？」

「いくいく、どうせ体育教官室でしょ？ 今日、部活休みだし」

ちなみに、今しゃべってる一人は、溝口が担当している陸上部に所属している。

——にやり

まさかさっきまで自分がいた場所で、そんな企みがスタートしているとはまったく気付いていない圭介は、社会科準備室でのんびりとお茶を啜っていた。

「翔太くん、このあと時間ある？」

全ての授業が終わり、放課後と名のつく時間帯。

帰り支度をしていた翔太は、声を掛けられて顔を上げた。

そこには一人の女生徒。

翔太の座る椅子の横に立つ彼女は、クラスメイトであり委員長でもある沢渡。

両手を机について、自分を伺うように首を傾げる姿は一般的に可愛いというのだろう。

翔太は同じ臭いのする沢渡を見上げたまま、革靴のマグネットボタンをパチリと閉めた。

そして申し訳なさそうな表情を意図的に作り上げ、眉尻を下げる。

「沢渡さん。僕この後、用事があるんだ」

沢渡は落胆の色をその表情に浮かべると、腕を机にのせるようにしやがみこんだ。

「そうなの？　　なんだか翔太くん、最近忙しそうね。少しも付き合いつてくれない」

拗ねたように上目遣いで見上げる沢渡に、翔太はごめんねと呟く。

「でも、沢渡さんのお手伝いなら僕じゃなくても立候補する奴らが沢山いるよ？」

ね？　と目を細めると、沢渡は頬を膨らませた。

その姿に、後ろを向いた斜め前の席の奴が頬を赤くしている。

沢渡は断る翔太にそれでも縫うようにじっと見上げてくるけれど、翔太は何も動じないように椅子を下げて立ち上がった。

「それじゃ、沢渡さん。また明日」

「翔太くん……」

沢渡の呟きを聞かない振りして、翔太は教室から廊下へと出る。周りに気付かれないよう、小さく息を吐き出した。

昇降口から外に出て、校庭を横目に校門を過ぎる。

最寄り駅は、高校から徒歩五分。

そこから電車に乗って六つ目、そこが今住んでいる場所。

アパートから、片道四十分近くかかる。

だから別にこんなに早く帰らなくてもいいのは、分かってる。

沢渡の申し出を受けても、充分間に合うだろう。

所詮由比の仕事が終わって迎えに行くのは、七時近くなのだから。

駅の改札近くにある時計は、三時四十五分を指していて。

まだまだ、由比に会うまで三時間近く待たなければならないことを、知らせてくる。

翔太はホームへと歩くと、その途中、アルバイト情報誌をフリーペーパーのラックから手にとって鞆と一緒に持った。

前に住んでいた場所は、高校から二駅もない場所です。

自転車だけで通っていた。

だからバイトもしやすかったのだけど――

嫌な記憶が脳裏をよぎって、翔太は思わず顔を顰めた。

思い出すまいとすればするほど、浮かび上がってくる記憶に思い切り頭を横にふる。

違う事を考えようと、アルバイト情報誌を捲った。

ただでさえ、圭介に迷惑を掛けている。

高校に行かせてもらっているだけじゃなく、大学も出るように言ってくれる。

若い教師の給料で、男子高生を一人養って大学に行かせるのは大変な事だと思う。

少しでも生活費を入れなければ、バイトに行かなくてもいいと言う圭介には悪いが、自分自身がいたたまれなくなる。

この状態を作り出したのは、自分なのだから。

ホームに滑り込んできた電車に乗り込み、ドアに凭れて窓の外に視線を向ける。

まだまだ明るい空は、綺麗に青く澄んでいて。

由比に初めてあった日を思い出させた。

突然話しかけて驚かせたのに、由比のいるベランダに行こうと身を乗り出した俺に慌ててしがみ付いた、隣室の女性。

からかうだけのつもりが、怯えさせてしまった事に少なからず罪悪感を覚えた。

しがみつくように腰に回されたその腕が、微かに震えていたから。

まあ、冗談が通じないことは、その後、嫌と言うほど分かったけどね。

——さすがに子供は大丈夫——

圭介を見て顔を赤くした由比は、俺を見てそういいのけた。分かってるよ、どうせ俺の顔は童顔だよ。背はあるのに、顔だけ大人びないってどういうことなんだって、まあそんなこと言っても仕方ないけどさ。

俺を、男として見ない由比が新鮮だった。

俺を、利用材料として見ない由比が新鮮だった。

圭介ほどじゃないけど、俺だってそれなりにもてる。

まあ、圭介目的で近づいてくる女も多いけど。

俺を落としてあわよくば……って感じだったから、少なくとも下心ありの表情ばかりだった。

だから、俺は“遠野翔太”を演じてる。

自分を守るために、嘘の表情を作り上げて嘘の言葉を紡ぎながら。偽りの人格を、作り上げている。

さっきの沢渡もそう。

あいつも、自分が可愛く見えるように“沢渡 美樹”を演じてる。

そうやって、上手く生きてきたつもりだった。

嘘で塗り固めれば、そのうちそれが自分になるんじゃないかかと思ってた。

信じる人は、圭介だけでいい……そう思ってたのに。

——ええっ！　嘘だあっ！　そんな可愛いのに、高三なんてありえない！　女への冒瀆だわ、その顔寄越せっ

俺の歳を知った時の由比の顔も声も、面白すぎた。

目を細めて、口元を押さえる。

思い出すと、つい笑いそうになってしまう。

可愛くて邪気のない、人好きする性格を作り上げていた俺に……俺自身ではなくこの顔を寄越せと叫ぶ由比が面白かった。

「由比……」

小さく、大切な名前を呟く。

ね、由比は信じてくれなかったけど、本当にあなたが好きなんだ。

あの桐原って奴が由比を好きだと言ったとき、誰が渡すか……と独占欲が沸いた。

他を見て欲しくない。

確かに気に入っではいたけど、あそこまでの感情とはそれまで気付かなかった。

由比は何の裏もなく、屈託の無い笑顔を……感情を俺に向けてくれる。

自分を、ただの人間として見てくれた、ただの人間として向けてくれるその笑顔がとても嬉しくて。

ただそれだけの事が……、俺にとって何にも変えがたい幸せだったんだ。

「今日も、翔太くんいないのね」

沢渡が委員会に行くと、教室のドアを開けた途端残念そうな声が返ってきた。

まだ集まっていらないらしく、一人だけ座っていた。

内心舌打ちをしながら、沢渡はあてがわれた席に座る。

うるさいな、この女……

ただでさえ翔太くんに断られてイラついているのに、これ以上人の神経逆なでしないですよ……

しかし目の前の女生徒に通じるわけもなく、両腕を組んで見下すように笑いながら目を細めてくる。

「流石の沢渡さんも、お弁当の彼女には負けちゃうのねえ」

くすくすと笑う、目の前の女生徒をじっと見つめる。

「なあに？ 凶星過ぎて何も言えない？」

沢渡は何も言わずに、目を逸らした。

楽しそうに嫌味を言ってくるこの女は、同学年のクラス委員。

翔太のことを狙ってる、女生徒の一人。

って言っても、狙ってる子は少なくないけど。

沢渡は自分もその一人だと認識はしている。

けれど、他の誰よりも近い存在だと思っていた。

いや、思い込んでいた。

三年になって、いつもどおり押し付けられるクラス委員という立場になった時、面倒と思いながら一つだけ役得があることに気付いた。

この高校は七月に学祭がある。

故に、男女一名ずつのクラス委員のどちらかが、学祭実行委員として活動しなければならないことになっていた。

ということは必然的にクラス委員の仕事を、一人でやらなくちゃいけない。

いつも忙しいわけじゃないからいいんだけど、その補充として一人手伝いにつれてきてもいいことになっていた。

人当たりがよくて、可愛くて、優しい遠野翔太くん。

頼みごとをしても、嫌な顔一つせず頷いてくれる。

さすが、あの遠野先生の弟。

そう噂される遠野翔太と、初めて同じクラスになったのだ。

これは自分の立場を利用しない手は無いと、こっさりほくそ笑んでいた。

現に四月の終わりの委員会の時に頼んでみたら、いいよ、と可愛らしい笑みで頷いてくれた。

委員会に連れて行った時の周りの反応の、気持ちいいこと。

優越感どころの話じゃない。

あの遠野翔太が、自分の隣で自分のお願いを聞いてここにいてくれるのだから。

それが、一体どうしてこうなったのか。

それから数回、頼めば委員会に付き合ってくれていたのに。
ほんの三・四回で、断られてしまった。

部活に所属していない翔太は、放課後に残る事はない。

それでもよくクラスメイトと話したりして、時間を潰していた。

けれど最近、HRが終わるとすぐに帰ってしまう。

その上、いかにも手作りのお弁当を昼ご飯として持ってくるようになった。

しかも遠野先生まで持ってきているから、たちまち噂が広まった。

今までずっと学食やコンビニのご飯を食べていたのに、いきなりお弁当。

イコールどちらかに彼女が出来たって事。

途端、それまで流れていた噂が消えた。

沢渡……自分と翔太が付き合っているんじゃないかという、自分にとっては願ってもない噂。

例え嘘でも、そう言われる事が嬉しかった。

周囲への、優越感だった。

なのに……

「あー、やっぱり翔太くん来てない」

ガラリというドアを開ける音と共に聞こえた声に、沢渡は唇をかみ締める。

遅れてきた、下の学年のクラス委員達。

「本当に彼女出来ちゃったのかね、残念」

そう言いながら、席に座る彼女達に笑顔を向ける。

「用があるんですって。なんだか忙しそうなのよ」

少しぎこちない笑みを返してくる彼女達は、きっと心の中で私を笑っているんだろう。

「ふふ、いつまで忙しいのかしらねえ」

嫌味を呟く目の前の女には、微かに笑みをむけるだけで言葉は全力で無視した。

悔しい。

悔しい。

こんな扱い、許せない。

誰なのよ、翔太くんたちのお弁当を作ってる女。

きつと、私の方が可愛いのに――

――私の方が、ふさわしいのにつ

「あ、沢渡さん」

怒りのあまり膝の上に置いた手をぎゅっと握っていたところに、開いていたドアから顔を出した担任に呼ばれて顔を上げた。

「はい、なんですか？」

顔に笑みを貼り付けて、沢渡は立ち上がると担任の傍に駆け寄る。担任は抱えていたドキュメントファイルからクリップで留められた書類を数枚、沢渡に手渡した。

「学祭で使う資材の希望書、ほぼ通ったから。あとは、体育館にある暗幕の枚数確認して必要数あるようならそのまま使っていいて」

沢渡は担任の言葉を聞きながら、書類に目を通す。

希望リストの横にはチェックがされており、暗幕のみ空欄になっていた。

「分かりました。暗幕のチェックは、明日でもいいですか？」

書類を胸に抱いて、小さく首を傾げる。

担任はファイルを脇に抱えなおすと、頷いた後、でも……と付け加えた。

「明日でもいいが早めにな。早い者勝ちらしくてな、それもあってお前に渡しにきたんだ。学祭実行委員はもう会議始まってるし、あいつ、この後部活あるだろ？」

頭に思い浮かべる、もう一人の委員長であり学祭実行委員。

確か文科系の部活に所属していたから、学祭の話し合いの後に行けと言っても遅くなってしまうそうだ。

沢渡はにこりと笑って、頷いた。

渡りに舟。

こんなところ、少しでもいいから離れていたい。

「では、今行つてきちゃいますね？ まだ委員会始まらないようですし」

集合時間まであと十五分はあるから、体育教官室の先生に声を掛け

て見せてもらっただけなら間に合うだろう。

「ああ、頼んだ」

担任は片手を上げて礼を言つと、廊下を歩いて戻っていった。
沢渡はその反対側、体育教官室へと早足で向かつていった。

「相談って言うから何事かと思つたら、そんなことか」

放課後、三人の女生徒を目の前に、溝口は体育教官室の自分の席で思いつきり頂垂れた。

部活が休みだつて言うのに体育教官室を訪ねてきた女生徒を招き入れたのは、つい先程。

なぜか所属していない生徒も二人くつついてきた事に、溝口は何か深刻な悩みなのかと部屋にいた他の教員に出ていってもらつてまで話を聞く体勢を整えたのだ。
なのに。

「遠野先生の彼女の話、何か知りませんか？」

開口一番、口から出たのはこの言葉だつた。

脱力するのは、仕方ない事だと思う。な、思うだろ？

心の中で誰に向けるまでもなくばやいた溝口は、机に頬杖をついて女生徒を見た。

「んなくだらねえこと探つてないで、学祭か期末の準備でもしたらどうだ」

特にお前、と、所属部の女生徒を見た。

「唐沢、お前日本史苦手じゃなかったっけ？ 遠野先生の彼女の心配するくらいなら、担当教科で恥じかかない位の点でも取つて喜ばせてみたらどうだ」

唐沢と呼ばれた女生徒は、気まずそうに視線を逸らす。

するとその横に立つ、野田が声を上げた。

「気になつて勉強どこじゃないですよ」

ね？ と、一番端に立つ、神谷を見た。
それを受けるように頷くと、神谷は俺を見る。

「先生だって、本当は気になってるんじゃないですかあ？」

小馬鹿にしたようなその表情が、少し癪に障る。

しかし溝口は“俺は大人”と怒りを抑えながら、別に、と呟いた。

まあ、本当は気になるけれど、と心の中で零す。

あののほほんとした温厚な……といえば聞こえのいい、ぼうつとした圭介が昼に弁当の事で嫌味を口にしたことを思い出す。

あの口から、そんな言葉が出たのを初めて聞いた。

もう何年も、隣に机を並べているのに。

それを言わせるほど弁当を作ってくれる女を大切にしているのかと、信じられない気持ちだった。

苦々しい気持ちでため息をつく、と、唐沢が少し声のトーンを落として溝口に近づいた。

「だって聞いちゃったんですよ。それらしき人の名前」

「は？ 名前？」

どうこいつらを追っ払おう、と考え始めていた溝口は唐沢の言葉に思わず声を大きくした。

「名前って、彼女の？」

神妙に頷く唐沢を、溝口は見上げる。

「なんでお前がそんな事、知って……」

「昼に学食で、翔太さんと遠野先生が話してるのを聞いちゃったんです」

「へえ、なんて？」

無意識に、身を乗り出す。

「妹がいたら、シスコンにでもなりそうだな、俺は。って」

……俺？ 圭介の一人称、私、しか聞いたことねえぞ？

「で、名前は？」

唐沢はにやりと笑うと、屈めていた上体をゆっくりと戻した。

溝口はその笑みに、怪訝そうな視線を返す。

「なんだよ」

何か嫌な雰囲気、ばんばんと漂ってくる。

唐沢はそんな溝口の警戒を裏切らず、目を細めて見下ろしてきた。

「聞いたら、先生も協力してくださいね？」

「は？ 協力？ なんの」

「遠野先生の彼女を、学祭に連れてくるように仕向ける」

「はあ？ なんで俺がそんな事……」

「だって気になるでしょ？」

……こいつら、会社に入ったら仕事しないで給湯室を根城にしそうだな

溝口はため息をついて、右手を振った。

「別にいいよ、知らなかった。いい加減お前ら出てけ。もっと深刻な話かと思っただらこんなのかよ。出て行ってもらった先生方に、凄え悪いことした」

「えーっ、先生付き合い悪いっ！」

身体を机に向きなおして、溝口は手元の日誌のページを捲る。

「何でお前らの言う事、聞かなきゃならん。おら、早く出る。俺は仕事があるんだ」

それだけ言い切ると、どれだけ三人がわめこうが溝口は相手にしなかった。

しばらく何かぐちぐちと言っていたが、溝口が何も言わない事に諦めたのか三人は部屋から出て行った。

ドアの閉まる音に、溝口はため息をつく。

「気になるっちゃあ気になるが。あいつらの企みに加担した後の方が、俺は怖い」

広げていた日誌を、音を立てて閉じた。

まあ、俺は自分の方法で聞き出してみるかねえ。

あののほほんとした顔の、焦った表情を見てみたいからなあ。

大体、“俺”って。

圭介の口から、俺なんて聞いた事もないし、似あわねえな。

つかやっぱりあの性格は、作ってんのかねえ。

思わず黒い笑みが浮かぶ溝口の耳に、教官室のドアを叩く音が聞こえてそちらを見る。

「誰だ？」

まさか、また戻ってきたのか？ あいつら。

怪訝そうな溝口の声にゆっくりとドアを開けて入ってきたのは、三年二組の委員長、沢渡。

ふんわりした茶色の猫っ毛、白い肌、黒目がちの瞳。

どれをとっても完璧な美少女。

教師を含めて、知らない奴はいないだろう。

「どうした沢渡。こんなところに」

意味もなく、彼女が来る場所じゃない。

沢渡は溝口の傍まで来ると、手に持っていた書類を見せた。

「学祭で暗幕を使いたいです。体育館の倉庫にある枚数を確認したいので、鍵を貸して頂けますか？」

で、首をことんと横に傾げた。

「……」

こいつ、すげえかわいいんですけど。

つか、無意識にやってたらすげえわ。

反対に、計算だったらもつとすげえ……

溝口はそんなことを考えながら立ち上がると、壁に作りつけてあるキーボックスを配布されている鍵で開ける。

そこから体育館と倉庫の鍵を取り出すと、沢渡に渡した。

「お前一人で大丈夫か？」

沢渡は幾度か瞬きをしてから、大丈夫です、と笑った。

「お気遣いくださって、ありがとうございます」

その無邪気な笑いに、思わず一緒に微笑んでしまった溝口に罪はない。……はず。

沢渡は受け取った鍵を持って、体育教官室を出た。

そのまま体育館へと足を向ける。

けれど頭の中は、どろどろした感情が渦巻いていた。

さっき体育教官室の中から聞こえた、女生徒の声。

——だって聞いちゃったんですよ。それらしき人の名前

遠野先生の、お弁当を作っている人の、名前。

必然的に、翔太くんのお弁当も作っているだろう人の名前。

やっぱり、女がいた。

私じゃない、誰かがいた。

誰もいない体育館に入ると、倉庫で暗幕を探す。
やる事はやらないと、周りからの自分の評価を下げてしまう。
それは、嫌。

今すぐ女生徒を追いかけたくなる気持ちを抑えて、沢渡は仕事を終えたと急いで委員会の会議をする教室に戻った。

既に会議は始まっていて、遅刻した事を詫びながら席に着く。
ニヤニヤと笑う、目の前の女を無視しながら黒板に書かれている連絡事項を走り書きでノートに書き出す。

悔しい……
悔しい……

思い浮かぶのは、その言葉だけ。

相手の女、どんな子なのか……見ないことには気が収まらない。

脳裏に、体育教官室から出てきた女生徒の一人を思い浮かべる。
あれは確か二年の唐沢さん……
去年見に行った、陸上大会に出ていた子。

確認しなきゃ。
相手の、名前を――

「お、今日は洋食ですね」

唐沢から話を聞いてからここ何日か窺ってきたチャンスがやっと来た、溝口は見えないようにほくそ笑んだ。

「ええ、そのようですね」

隣に座る圭介は溝口の内心など気づくわけもなく、ここ最近繰り返される言葉にいつもどおり返してくる。

圭介の手元にある弁当箱は二段になっていて、下の段にオムライス上の段に、鳥のから揚げをメインに洋風のおかずが詰められていた。しかも、ミニパックで野菜つき。

翔太の分も作っていると、手間も時間もだいぶ掛かっているんだろう。

それが分かっているからか、圭介は凄く嬉しそうな表情で食べている。

なんか、すっぱームカツク。

無言なのに、顔で惚気られている気分だっ！

「いい人なんですねえ、弁当を作ってくれている女性は」
「？」

羨ましいとかおかずをくれとかそういうのじゃない溝口の言葉に、圭介はきょとんとした顔を上げた。

溝口は机に頬杖をつきながら、圭介の弁当を覗き込む。

「朝からこれだけの弁当を、少なくとも二個作ってるってことでし

よ？ 手間も時間もかかるだろうに、ほとんど毎日じゃないですか。凄いですよ」

邪気のない（溝口の普段比八割増）表情で言うと、圭介は箸を持つたまま申し訳なさそうな笑みを浮かべる。

「本当に、頭の下がる思いです。彼女は、自分のお弁当も作っていますから」

「へえ、凄い。よほど料理が上手なんですねえ」

「おいしいですよ、差し上げませんけど」

「言ってますんよ、まだ」

普通に話していたのに、よっぽど取られたくないらしい。

「でもあれですね、そこまでしてもらってるなら何かお返しとかしているんですか？」

「お返しですか？」

再び箸を動かそうとしていた圭介の動きが止まる。

箸を持っている手を口元に当てて、小さく唸る。

「まあ一応等価交換みたいにはしてますけど、それでも彼女のウエイトの方が大きい気がします。何かしないと、思ってるんですけれどね」

「等価交換？」

「溝口先生には、関係のない話ですよ」

隙を突こうとすると、シャットアウトされる。

本当にこの男、本心が見えない奴だよ。

「……来月はうちも学祭ですねえ」

溝口はあえて話を弁当の話題から逸らして、自分もいつもの如くコンビニ弁当を食べ始めた。

圭介も話が変わったことに気を緩めたのか、そうですね、と相槌を打つ。

「俺らにとっては毎年の事で大して目新しい事じゃないけど、学外の人にとってはけっこう面白かったりするんですよえ」

「そんなものなんだろうかね」

オムライスを口に運ぶ圭介。

少なくとも圭介は六年間、溝口にいたっては八年間同じことを繰り返してきている。

最初こそ懐かしさと面白さで結構楽しみにしていたけれど、それも回数を重ねれば生徒が面倒ごとを起こす事が多いイベントというものに変化していった。

それは修学旅行も体育祭も然り。

教師なんて、面倒ごとをおさめるためだけにいるんじゃないかと思うくらい。

ま、クラスを受け持っていないから気は楽だけど。

「少なくとも、俺の知人は来たがりますよ。うちの学祭。つっても配布される券は一人二枚だから、そうそう呼べませんけどねえ」

「そうですか、学祭に、ね……」

お、上手い具合に釣れたか？

にやりと、圭介に見えないように笑う。

圭介をけしかけて、弁当の彼女を学祭に連れてこさせよう作戦、成功か？

隣で腹黒いことを考えられているとは気付かない圭介は、食べ終わった弁当箱をランチバッグに入れて鞆にしまう。

学祭ね……

まあ、確かに学生の頃はそれなりに楽しかったけど、教師になるとそこまで楽しい行事ではないな……。

差し入れといったは、クラスで作ったものを持つてくる女生徒。

たまに起こる喧嘩の仲裁や、クレームの処理。

頭の痛くなる事が多い。

そんなので、由比さんは楽しめるんだろか。

最近、由比さんに元気がない。

帰日も遅いことが多く、理由を聞いてもいつも疲れたような笑みを浮かべるだけ。

少しでも気晴らしになるなら、聞いてみるかな……

鋭いようである意味鈍い圭介は、まんまと溝口の策略に釣られていた。

表面上は、穏やかでいたって普通の日常が続いていた。

学祭を前に浮き足立つ生徒達に隠れて、沢渡が二年の唐沢と接触したのは誰が知るわけでもないこと。

名前だけ手に入れても仕方ない。

反対にその存在が現実味を帯びて、余計に感情を波立たせる。

沢渡は顔に笑みを貼り付けながら、イライラとした感情をもてあましながら日々を送っていた。

そんなことに気づくはずもない翔太と圭介も、いつも通りの日常を過ごしていて。

けれどももっともつと気づくはずのない由比は、なぜかいつもとは違う日常に少し前から直面していた。

とある企業のとある部署。

……すみませんー、とあるとか言いましたあー。総務部ですうー。
総務部所属 上条由比 二十二歳 女 独身……

「……とりあえず、現実逃避から帰ってこようか、由比」

ぶつぶつ言っていたら、隣で私の様子を見ていた桜に現実に引き戻された。

その顔は、同情色に染まっている。

ぶわりと涙が出そうな目を見開いて、桜の腕を掴む。

「だって、だって！　なんで？　どーして私の仕事ばかり増えるの？」

机に乗る書類の束を片手で叩きながら訴えると、桜は困ったように笑う。

「それは……ねえ？　隣の部署にいる桐原とかいう主任の所為でしょ？　分かりきった事、聞かないでよ」

手伝つてゐるこつちの身にもなつて、そういわんばかりの溜息に私の手が桜から外れた。

そのまま書類に視線を移して、私は思いっきり溜息をついた。

総務に所属している社員は、五人。

課長、主任、リーダー、そして私たち二人。

入社して二ヶ月経ったから、それぞれの担当が決まっていた。大きなミスもなく、上手く回っていたのに。

ここ最近、私の担当する“備品・消耗品の管理、倉庫・資料室の管理”の仕事が多いのだ。

発注で上がった消耗品を届けに行けば、頼んだものが違うだの遅いだの文句を付けられ。

前日に片付けた資料室は、翌日の夜には嵐でも来たのかよ、位に荒れ果てる。

視線を窓に向けると、既に真つ暗闇。

今日は桜の当番日で、私は残業。

八時に届きそうな時間に、まだ終わらない書類が机に鎮座ましている。

これを早く終わらせて、明日か明後日には倉庫の片付けに回らないと。

……はあ……

ため息しかでないよ。

私の幸せは、どのくらい逃げていったかなあ。

それもこれも……

「お前ら、まだ残ってるのか？ そろそろ時間だろ」
いきなり開いたドアから、憎むべき奴が顔を出した。
つやつやと生気みなぎる顔しやがってっ！

桐原主任はドアを閉めると、一番手前の私の机の隣に立つ。

「お前どんだけ仕事ためてんだ」

「……遅いもので」

一言だけ答えると、私は主任から顔を逸らして手元の書類に目を落とした。

桜が何か言いたそうに横目でこっちを見てくるけれど、あえて流す。
桐原主任は怪訝そうに、私を見下ろしているようだ。

しんとした、室内。

桜の叩くキーボードの音だけが、カタカタと軽く響いている。

「上条？ お前、なんかあったのか？」

「なんにもないですよ。ただ疲れてるんです。桐原主任と言い合う
気力は少しもありません」

冷たいかな、とも思える声でついきっぱりと言ってしまった。
少し気まずいけど、まあいいよ。

疲れてるのは本当だから。

「手伝おうか？」

手に持っていた鞆を床に置こうとする桐原主任に、慌てて私は立ち上がった。

多分無表情ではあるだろうけど、そこは許して欲しい。

「全然大丈夫です。人事の主任にして頂くことはひとつもありませんので。はいはい、早く帰ってくださいよ。主任、歳なんですから」

そう言つて、桐原主任の背中を押してドアから追い出す。

「おい上条？」

顔だけ振り向けながら少し困ったような顔をされたけど、一切無視！

「お気遣い、ありがとうございます。お疲れ様でした！」

思いつきり、ドアを閉めた。

ついでに鍵も。

案の定、ドアノブが回ったけれど鍵が閉まっていることに気付いて、桐原主任は諦めたらしい。

しばらくして、帰っていった。

足音が消えたのを確認して、鍵を開ける。

廊下には誰もいなかった。

ふう、と息を吐いて自分の席に戻る。

「もう少し、誤魔化すとかできないの？ 由比」

キーボードに手を乗せたまま、桜が私を見る。

「私としては、かなり誤魔化しているつもりなんだけど」

どこらへんが、と呟く桜は呆れた表情を浮かべていて。

「どう考えても、何かありましたって言ってるようなもんよ。今の態度」

「仕方ないでしょ、だって本当に何かあったんだから。それを隠しているだけでも、私は偉いもんねっ」

言い捨てて、仕事に戻る。

桜もため息をついてから、そうね……と呟いた。

「まあ、我慢してるのは認めるわ。ホント、頑張ってるわよね」
「でしょ」

目を見合わせて、力なく笑った。

それから一時間、桜が残業して手伝ってくれた事もあって、一人だつたら二日は掛かりそうな仕事を何とか片付けて職場を後にした。これで、明日は倉庫の片付けに手を付けられる。遅くなればなるほど、嫌味言われるんだろっなあ。話したこともないようなおねーさんに。

「じゃ、私今日は用があるから」

そういうと、桜は駅とは反対の方向へと歩いていく。

そう、この後の待ち合わせまで、時間つぶしと称して残業に付き合ってもらっていたのだ。

桜の後姿を見送って、駅へと歩き出す。

さすがに九時近い事もあって、駅へと向かう人は少ない。必然、ぼうつとしながら歩いていても、人にぶつかる事もなく。ここ最近の出来事が、脳裏を駆け巡る。

——俺は、お前が好きだ

そう桐原主任から言われたのは、先月の事。ゴールデンウィーク明けの日だった。

帰り際、駅のロータリーで言われた時、頭が真っ白になった。

だって、ネズミとか言ってた人から告白とか、ありえないでしょ…

…？

それを見越したのか、桐原主任から返事はいいと言われて。
そして翔太と話しながら帰った私は、すっかり記憶の奥底に追いや
っていたわけで。

翌日から、桐原主任の態度が変わったことに戸惑いを隠せなかった。

「……甘い……甘いんだよ……」

ため息とともに、言い捨てる。

あの翌日の昼から、なぜか私達の傍で食事をするようになった桐原
主任。

今までも近くにはいたけど、傍まで寄ってこなかったのに。

しかも、“ねずみ”って呼ばなくなったし。

憎まれ口やぶつきらばうな口調は変わらなかったけど、その顔が甘
いのだ。

言葉の端々が、甘いんだってば！

そのおかげで、入社当初、同僚に受けていた警告が実際のものとな
ったわけです。

こんなくだらない悪戯をして相手を潰したくなるほど、桐原主任で
ば人気があつたんですねえ。
びっくりだ。

こっちは、いい迷惑だし。

そう、もつと言えはすでに私は桐原主任に断っている。

付き合うことを。

だって、ありえないし。

そしたら、すごい目でにられました。

——今は聞かなかったことにする

——は？ 何言って……

——すぐに返事をすると言ったはずだ

ええ、このように一刀両断されてしまったわけです。

どこの俺様なの……

と言うことで、心身ともにしんどい上条由比 二十二歳 独身……
ふらふらと再び現実逃避したくなってきた頭を支えて、駅の改札前
を抜けた。

今日のお迎えは圭介さんのはず。

さつき学校を出るとメールで連絡が来たから、そろそろ駅に着いて
いるところだろう。

翔太は学祭の準備で忙しいらしい。

……学祭があ、ずいぶん珍しい時期にやるなあ

懐かしい記憶を掘り起こそうとした時、目の端に圭介さんの姿が映
った。

ロータリーに車を止めて、ドアのところに寄りかかっている。

……うーん、やっぱり格好いいね。圭介さんてば。

私の高校の時の日本史の先生って白衣着てたけど、圭介さんも着る

のかなあ。

眼鏡、スーツ。

私の好きなものを全部装備している圭介さん、是非、白衣姿も見せてください。

頭の中をミハー女子並みにお花畑にしながら、圭介さんの方へと足を向けた時。

「上条」

後ろから響いてきたドスの聞いた声に、私の思考は一時停止した。

恐る恐る振り返ると、すぐ傍に桐原主任の姿。いかにも不機嫌そうな顔を、私に向けている。

なんとなくじりじりと後ろに下がりながら、ヘタに刺激しないように引き攣りながら笑みを作った。

「帰ったんじゃないかったんですか、主任」

もう一時間は経ってますよ、主任！

桐原主任は後ろに下がろうとする私の腕を掴むと、口を開く。

「お前、何を隠してる？」

「何も」

反射で言った答えは、桐原主任の不信感を煽っただけのようだ。眉を顰めていた表情は、いつの間にか眉間に皺を刻みこむ。

「隠し事をしたいのなら、相手に見抜かれなくらい完璧な嘘をつけ。それが出来ないなら、正直に話せ」

「桐原主任に言いたい事は、何もないです。大丈夫ですから、離してください」

あまりにも頑なな態度だつて、分かつてる。

本当は、言いたいしどうにかして欲しい。

でも、絶対。これだけは、絶対。

桐原主任に助けを求めた時点で、嫌がらせは絶対エスカレートする。しかも、私が桐原主任を好きなら我慢するけど、そうではない現状。助けを求めるのは、きつと間違ってる。

「本当に大丈夫です」

とどめとばかりに冷たい声音をだすと、私の腕を掴む主任の手に力が入った。

「上条っ！」

荒げられた声と、掴む手の強さにびくりと震える体。

途端――

「前に警告しましたよね？ 女性に対しての行動は、よく考えてください……と」

ふわり……、と肩を引き寄せられて後ろに身体が傾ぐ。そのまま、温かいものが背中に触れて身体は止まった。いつの間にか、桐原主任の手が私の腕から外れてる……。

「……圭介……さん？」

顔を上げると、圭介さんの顔があった。

顎から喉仏のラインがよく見える。

で、背中があったかい。

……

「わっ、ごっごめんなさ……っ」

背中を圭介さんに預けるかたちで支えられている事に気づいて、慌

てて離れようと足に力をこめる。

すると肩に乗っていた圭介さんの手に力が入って、押し止められた。さっきよりも強く、圭介さんに寄りかかる。

「……いいから」

その声はいつもの優しい声音だけど、お説教の時のような有無を言わせない響きを持っていた。

口を開きかけて、俯く。

正直、圭介さんの体温に強張っていた身体がゆっくりとほぐれていったから。

桐原主任の声に、“怖さ”を感じていたから。

どうしようもない今の現状に、辛さを感じていたから――

――その温もりが、優しくて

「……上条と話がある。少し外してくれないか？」

桐原主任の声に、無意識に肩を竦めてしまった。

こんなことしたら、桐原主任が余計気にするのに……。っ。

「……今日はお引取り願えますか？ 由比さん、疲れているようですので」

「上条」

圭介さんが断つても、当たり前だけど桐原主任は私をじっと見ていて。

私からの返事を待ってる。

……分かってる。

言葉遣いはぶっきらぼうで、短気で、すぐ怒鳴るけど。根は、優しい。研修の時から、それは知ってる。

きつと、いつかは桐原主任の耳にも入るだろう。

根が優しい主任は、傷つくかもしれない。

桐原主任が、何か行動を起こしたら。

例えば、嫌がらせをしてくる社員に何か言いにいったら。

今よりも、数段苦しい状況に陥る事は目に見えてる。

——そんな状況、会社で作りたくない……

「……すみません、主任。残業で疲れているだけなんです。帰らせてもらってもいいですか？」

何か言いたそうだったけれど、桐原主任は息を吐いて頷く。

「分かった」

それだけ言つと、踵を返して改札の向こうへと消えた。

いつもより早足で。

いつもより大股で。

「……行こうか、由比さん」

桐原主任の後姿が見えなくなった後、肩に置かれた圭介さんの手が

ぼんぼんと軽くバウンドした。

その優しい感触に、ほっと息を吐く。

「うん。ごめんね、圭介さん。迷惑掛けて」

背中に添えられた手に促されるように、ゆっくりとロータリーへ歩き出す。

圭介さんは私の言葉に頭を横に振ると、息を吐き出した。

「いや、ちよつと図々しかったかな？ 本当は桐原さんと、何か話があるんでしょう？」

「……何も」

「本当に？」

「話す事は、ないです」

俯いた私の頭の上で、ため息をつく微かな音。

圭介さんは車の鍵を開けて乗り込むと、助手席に座った私ににっこりと微笑んだ。

「今日は夕飯を食べに行こう？ 奢るから」

「え？」

驚いて聞き返す私を尻目に、圭介さんはスーツの内ポケットから携帯を出す。

「ちよ、あの圭介さん？」

「うん？ 何食べたい？」

「いえ、そーじゃなくて……」

そんなことを言っている間に、携帯は誰かを呼び出していて。

「圭介さ……」

「あ、翔太か？ お前、今何処？」

携帯の相手は、翔太らしく。

「クラスの子の家？ ん、ああそこか。なら今から迎えに行くから、

校門の近くで待つてなさい。ん？ たまには外食したくないか？」
圭介さんの言葉に、携帯から翔太の喜ぶ声が聞こえてくる。

声、おっきい……

圭介さんは二・三言葉を交わすと、通話を切って携帯をポケットにしまった。

そのままシートベルトを着けると、車のエンジンをかける。

「あの圭介さんっ。私は平気なので、あの……っ」

ちらりと私を見た圭介さんは、すぐに視線を前に戻して車を発進させた。

身体が後ろに傾いで、背中がシートにつく。

「由比さんが断ったら、翔太、悲しむな。外食、久しぶりだからきつと凄く喜んで」

微笑む表情は、得意げなものも含まれていて。

私が断れないように、先に翔太に連絡したことに気付く。

「……策略家」

気を遣ってもらってるのに、上手くことを運ばれた悔しさに眩くと、
「お褒めの言葉をありがとう」

そう、返ってきた。

私はふて腐れた表情で、窓の外に視線を移す。

そこには、外が暗いからか私の顔が窓に映りこんでいる。

嬉しそうな……泣きそうな顔。

じっと見つめて、目を瞑った。

他人から受ける優しさは、とても嬉しくて。

与えてくれる人がいるって事は、とても幸せで。

でもその幸せを知ってしまうと、とても怖くなる。

いつかは失うもの、だから。

その時、自分が耐えられるのか……それが、怖い――

圭介さんや翔太の通う高校は、車で三十分位のところにあった。

つて、まあほとんど窓の外を見ていて時計を確認していなかったから、大体だけど。

住宅街に囲まれているそこは、まだ人がいるのかいくつもの窓に明かりが点っている。

校門の前は住宅も無く広い通りになっていて、圭介さんは手馴れたように道路脇に車を止めた。

「さて、と。由比さんはここで待ってて。多分翔太、校門の中にいるから」

「そうなの？」

「うん。流石に夜遅いから、こういう時の待ち合わせは校門の中にあるベンチを指定してる」

……過保護圭介さん、光臨（笑

夜遅いって言っても、校門前は街灯がいくつもあつて明るいし学校にはまだ人がいるのに。

ああ、でもこういう考えはいけないよね。

自分を守る為に、できる事はしなきゃいけない。

圭介さんが正しい。

「ごめん、圭介さん」

「は？」

ドアを開けて足を地面に下ろしたまま、圭介さんがきょとした顔で振り向く。

「何？」

そりゃ、そうだ。疑問だよな。

脳内思考に対しての答えを口に出されちゃ……。

まあ、今の“ごめん”はそれだけじゃないけど……

不思議そうなの顔に笑みを向けて、首を振る。

「なんでもない。私も一緒に行つていい？」

「え？」

圭介さんの返事を聞かず、シートベルトを外して助手席側のドアを開けた。

慌てて圭介さんが降りる音が聞こえる。

「由比さんっ」

私が車から降りてドアを閉めると同時に、圭介さんがこちらに回りこんできた。

その顔は、少し困惑気味で。

何を困っているのだろうと、首を傾げる。

圭介さんは口を開いて何か言おうとしたみたいだけど、少し逡巡するように視線をさまよわせてからため息をついた。

「大丈夫？」

いきなり聞かれた言葉に、何が？ と反射で返す。

だって、何が大丈夫なわけ……？

私の返答に、圭介さんの眉が顰められていく。

「あのね由比さん、本当に疲れた顔してるよ？ このまま帰したら私達の為に夕飯作りそうだったから気晴らしにと思つて誘つたけど、出来れば必要以上動かないで座つて欲しい」

心配そうに言つと、右手が私の頭に伸びてきた。

ゆっくりと、頭を撫でられる。

その触れ方が、優しくくて。

涙が出そうになって、慌てて顔を俯けた。

圭介さんの手のひらが、私から外れる。

「ホント、圭介さんってば過保護なんだから。ただちょーっと疲れただけですよ」

さ、早く行こう、と校門の方に歩き出そうとした私の腕を、圭介さんは掴んで引き止める。

「……っ」

思いの外強い力に、びくりと身体が強張った。
その反応に驚いたのか、圭介さんはすぐに離してくれた。

桐原主任が掴んだ場所と同じ。

心配してくれる、その気持ちも同じ。

「ごめん、由比さん。驚かせて」

その言葉に首を振りながら、さっき会った桐原主任の言葉が脳裏に浮かんだ。

——お前、何を隠してる？

その記憶に引きづられるように、いつもより早足で帰って行った桐原主任の姿を思い出して、思わず目を瞑った。

言えば、よかったんだろうか。
今の私の状況を。

桐原主任のことは、嫌いじゃない。
傷つけないと思うのは、私の思い上がりなんだろうか。

そんなことを考えて立ち尽くしていた私の斜め前に、圭介さんが立った。

様子を窺うように、少し上体を屈めて。

「何か、悩みがあるんだよね？ それを、私……というか人に聞かせたくないから、我慢しているんだろう？」

「……」

「同じ様な表情、見たことあるから隠しても無駄だよ。もしかして、桐原さん？」

主任の名前に、どくり、と心臓が音を立てた。

違う、と言いたいのには口はそう伝えてくれない。

頭の上で、息を吐く音が聞こえた。

「まったく、私達の大切な由比さんに何をしてくれるんだろうね。桐原さんは」

……私達の大切な……？

その言葉に、思わず顔を上げた。
が、そのまま頭が横に傾ぐ。

「なに泣かせてんだよ、圭介」

「……え？」

ぼん、と頬が温かいものに触れた。
頭に回されている、大きな手。

視線だけ上げると、翔太の顔がすぐ近くにあった。

「由比、大丈夫？」

心配そうに覗き込む翔太に、ぶんぶんと思いつきり首を立てに振る。

「ただだ、大丈夫っ」

近いっ、近い！

翔太から離れようと胸に手を置いて押しても、びくともしない。

そんな私を見下ろしてから、翔太は顔を上げた。

「で、なんで泣いてるの？」

「私じゃないよ、原因は。あ、でも泣かせてしまったのは私の所為になるのかな」

苦笑する圭介さんに向けて、首を振った。

「由比、何があったの？」

幾分穏やかになった翔太の声に、ひっこんだはずの涙が滲んできた。

なんなの、この百パーセント優しさで出来てますみたいな兄弟！

おにーちゃんと、子供！ と、頭の中で叫びながら、翔太の手から抜け出す。

目の前には、心配そうに私を見る圭介さんと翔太の姿。

二人を見ながら、満面の笑みを浮かべた。

最近張り付いていた、作り笑いじゃなくて。

「大丈夫、うんっ。なんかホント元気もらった！」

「由比……」

翔太が何か言いたそうに口を開いたけれど、それを遮るように言葉を続ける。

「もう少し自分で頑張る！でも踏ん張れなくなったら、その時はっ、お願いしますっ！」

がばっ、と頭を下げると、一瞬の間のこと、ため息をつく音とくすくす笑う声が響いた。

「由比さんは、本当に可愛いんだから」

「うえっ？」

圭介さんっ、おにーさんスマイルだとしても赤くなりそうですっ。うろたえる私を見て、翔太が息を吐き出した。

「なんか、俺、まったく状況見えてないんだけど。……まあ、いつか」

自己完結したのか顰めていた表情をすぐに戻して、にこりと笑う。

「由比が元気なら、それでよしっ。圭介、早く飯！」

私の背中に手を当てて、車の方に押していく。

転ばないように足を動かしながら、顔だけ後ろの方に向けて二人を視界に映す。

「二人とも、本当にありがとう」

一瞬動きを止めた二人は、優しい笑顔を見せてくれた。

「「どういたしまして」」

抑えられなかった涙が、一筋だけ、頬を伝っていった。

「ここは、学校の目の前なんですけどー」

圭介達の乗った車が走り去った後、校門の内側から体格のいい男がゆっくりと顔を出した。

体育教師、溝口。

見回り途中にベンチに座る翔太を見かけて、遅くまで残っている事を注意しようと近づいた時、いきなり翔太が校門の外に駆け出したのを見てこっそり覗いていたのだ。

……暇人とか、言うな

そこには帰宅したはずの遠野が、女と立っていて。

しかも、その彼女が泣いているような雰囲気です。

翔太が慰めるように、その隣に立っていて……

状況を把握した溝口は、驚くと共に顔が思わずにやけた。

あれが、噂の弁当の彼女だよな……きっと。
しかも、なんか痴話げんか中？

ていうか、どっちの彼女？

他人の不幸は、じゃないけどつい興味本位で最後まで覗いてしまった。

街灯に照らされた彼女の顔も、ばつちりと。

溝口は塀に身体を預けて、両腕を身体の前で組む。

「うーん、思ったより普通の子だったけど……」

二人の溺愛ぶりがハンパなかった……

そう呟いた後、おもわずにんまりと笑った。

「おはよ、由比。あんたの今日の仕事は遊びに行くこと？」

翌朝ロッカーで着替えてきた私は、丁度出勤してきた桜に呆れた目を向けられた。

まあ、言われても仕方のない格好だけど。

視線を下に向けて、自分の格好を確認する。

長袖のロングTシャツに、ジーンズ。

ギャルソンエプロンをつけて、そこにカッターやマジックペンを装着。

まるで、引越しをこれからしようとする人。

私は苦笑いしながら、桜を見る。

「そ、倉庫っていう場所で、お片づけって言う遊び」

「なるほど」

途端、呆れの色はすぐに消え、ふう……と息を吐く。

椅子に座った桜は、鞆の中からちいさな紙袋を取り出して私に差し出した。

「はい、おやつ。遊びの途中で、食べて頂戴」

「？」

手のひらを差し出すと、そこに置かれる茶色の紙袋。

何？ と視線で訴えると、PCを立ち上げ始めた桜は私の方を見ずに口を開いた。

「前にあげたチョコ。おいしいっていったから、また持ってきたの。手伝ってあげられないから、せめて……ね」

「ありがと。じゃ、行ってくるね」

そう告げると、課長に頭を下げて総務課を出た。

うちの社内に倉庫は三箇所。

二階と三階と地下。

基本的には階ごとに担当が決まっていてそれを補助する形で管理を手伝うけれど、地下のみ私がメインで管理している。

荒れているのは、そこ。

ほとんど社員と言っても役付きじゃない、私と同じ下っ端の社員が出入りする場所だから、格好の餌食になったらしい。

少しくらいの汚さなら業務の合間に片付けるけれど、書類仕事に振り回されていてこっちに手が出せなかった。

そしたら物の見事に、嵐の後の状態。

一応課長に申告して（もうどうにもならないと思ったから）、一日、倉庫の整理に時間をもらった。

この格好も申告済み。

この倉庫をぐっちゃぐちゃにしてくださいさっとおねーさま達を庇う気持ちは、毛頭ございません。

課長に気付かれないようにこっそりなんて、絶対無理。

ばれたくなかったら、私ひとりの手に余らない感じで荒らしてください。

一階奥の非常階段から、地下に降りる。

ここは社員の地下駐車場になっていて、自動ドア越しに何台もの車が止まっているのが見える。

中には白いバンもあって、これは多分営業とか広報とかが使う社用車なんだろう。

それを横目で見ながら、奥にある備品倉庫のドアを開けた。

視界に広がる、めちゃくちゃな状態。

これ、片付けんの……？

くらりと眩暈がして額を押さえながら後ろによろけたら、なぜか身

体が何かに当たって止まった。

「……っ」

驚いて顔を上げると、

「これはまた、凄い惨状で」

「工藤主任っ！」

慌てて目の前のドアを閉めた。

大きな音が、廊下に響く。

部屋の中を見た時よりも目を見開いた工藤主任が、私を見下ろしていた。

「上条さん？」

それは怪訝そうな声音で。

しまった、と振り向いていた顔を前に戻した。

こんな態度とつたら、おかしいって思われる……っ。

「うん、とりあえずドアを開けようか」

工藤主任の声に、肩を震わす。

この態度の後で、この部屋を見せる勇気が私には……

ドアノブを掴んだまま硬直していたら、その手に工藤主任の右手が重なった。

「ちよっ、あのっ」

「ん、何？ 俺はこの部屋に入りたいただけなんだけど」

パニックになっている私を尻目に、手のひら越しに力を込められてドアノブが回っていく。

見られたくないっ、特に工藤主任には……！

懸命に手を動かさないように力を入れたけど、無駄だった。

ガチャリと金属の軽い音がして、簡単にドアは内側に開いていく。そこでやっと手を離されたけれど、肩を押されて倉庫の中に促された。

「もう、観念しなさい」

猶も外で踏みとどまろうとしたけれど、強く背を押されて工藤主任と共に倉庫に入る。

工藤主任がつけた電気に晒された倉庫は、本当にぐちゃぐちゃだった。

散乱した使用済みファイル。

積み上げられていたはずのダンボールは、崩れていて。

使用済みトナーが置かれている場所は、残っていたインクが零れたのか床に黒い染みを作っている。

「駐車場にいたら上条さんが私服で歩いているの見かけて何事かと思っただけ……、片付けのためね。納得」

工藤主任はそう言いながら立ち尽くしたままの私を置いて、スチールラックの後ろを覗き込んだ。

「うわああ、見えないところが一番酷いかも」

驚いたような呆れたような、そんな声。

私はそんなことでは驚かない、既に確認済みだから。

ふう、と息を吐いて顔を上げた。

そこには、丁度ラックの後ろから戻って来た工藤主任の姿。

口調とは違い心配しているようなその表情を見て、私は顔に笑みを浮かべた。

「ばれちゃあ仕方ないですね、工藤主任」

へらりと笑うと、工藤主任は少し驚いたように瞬きをして苦笑した。

「開き直った？」

言いながら、傍まで歩いてくる。

私は少し距離を置きながら、腰に両手を当てた。

「見られちゃったら、開き直るしかないじゃないですか。どうせ、原因もお見通しなんですよね」

「そりゃあ……、まあね」

困ったような表情で、両腕を前で組む。

ぐると倉庫の中を見渡してから、もう一度私を見た。

「桐原だろ？ 原因」

「やっぱりお見通しですね。てことで、工藤主任にお願いが」

「？ お願ひ？」

少し首を傾げる仕草に、私は大きく頷いた。

「桐原主任には、内緒の方向で」

「は？」

ぼかん、と口を開けた工藤主任は、ちよつと間抜け顔。

そんな状況じゃないのに、それに微かに笑む。

「いや、これは桐原に言うべきだろ。ていうか、もしかしてこんな事結構あるわけ？」

「まあ、倉庫は放っておいたんでこんな状況ですが、書類や備品関係は結構。でも、別にいいんです」

苦笑する私に、工藤主任は数歩こちらによってまっすぐに私を見下ろした。

「笑う状況じゃないだろう？ ただの妬みじゃないか、上条さんが許す事じゃないだろ？」

その目は、少し怒っているように見える。

心配して、怒ってくれる。

この人も、優しいんだなあ……。

「許してませんし、庇うつもりありませんよ。ただ、桐原主任に知られたくないだけです。面倒ごとになりそうじゃないですか」

「面倒ごと？」

不思議そうに聞き返してくる工藤主任の言葉に、深く頷き返す。

「考えなしにこれやったおねーさん達のトコ、行っちゃいそうじゃないですか。証拠も何にもないんだし、何よりも原因である桐原主任がそんなことしたら、余計やつかみが酷くなります」

「考えなしにつて……、でも確かに。あいつ、直情型だからな」
否定しようとしたけれど無理だったらしく、うーん……と唸る。

「だから私一人で対処できる事ならやりますから。これ以上酷くなったら、仕事にならないんで総務課長に話を上げますけどね」
にこりと笑いかけると眉を顰めていた工藤主任は、大きく息を吐き出した。

「さつきは凄く怯えていたからどうにかしてやらないとって思ったけど、意外と上条さん強いね」

「分かってもらえましたか？」

「うん、理解は出来た。でも、納得はしないかな。俺は桐原に言いたい」

何満面の笑みで人の言った事否定してるんですかつ。

「言わなくていいですからね？　っていうか、言わないでください
ね！？」

工藤主任は困ったように首を傾げながら、ドアに向かう。

その後ろから懸命に声を掛けるけど、まったく振り向かない。

「工藤主任！」

ドアノブに手を掛けたところで叫ぶと、やっとこっちを向いてくれた。

「言わない。けど、桐原は現状を知るべきだ。上条さんが隠せば隠すほど、桐原は情けない奴になるだけなんだよ？」

「工藤主任……」

「それじゃ、ね。俺、今から外回りなんだ」

言いたいことだけ言って、工藤主任は倉庫から出て行った。

しばらくして聞こえてきた車の発進する音に、私の身体から力が抜けた。

隠せば隠すほど、桐原主任が情けない奴になるだけ？

工藤主任の言った言葉がぐるぐると頭を回って、しばらく私は立ち
尽くしていた。

「……とりあえず、目に見える場所はどうかになったかな……」

夜七時。定時から一時間を回ったところで、ゆっくりと顔を上げた。散乱していたファイル、崩れたダンボール、その他諸々とりあえず見られるようには片付いた。

ついでにファイルの中の書類も整理したし、ダンボールも外から分かりやすいように明細もつけたし。

ちよつと、私凄くない？

思いつきり両手を腰に当てて自画自賛していたら、ちよつと気が晴れた。

そうよね、大掃除するために荷物を崩しておいてくれたと思えばいいのよ。

人生一度きり！ 悩んでいても仕方ない！ 泣いてたって悩んでたって同じだけ時が経つなら――

そこまで考えて、反っていた背をゆっくりと戻す。ゆるく息を吐き出して、にいつと笑った。

笑顔で。

笑顔で、生きていこう。

私にとって“今”は、日常ではないんだから……

その時、倉庫のドアが開いて桜が顔を出した。

「あら、綺麗になってるじゃない。頑張ったわね」

感心したように倉庫内を見回しながら入ってきた桜の手には、私の荷物。

帰りロッカーに行こうとするとどうしても一階に上がらなくてはならず、桐原主任と遭遇する確立が高い為、ロッカーの鍵を桜に預けてあったのだ。

「桐原主任、まだ上にいるみたいよ。皆川さんと話す声が、人事課からの電話で聞こえたから……」

「そっか。ありがとね、桜」

持っている荷物を受け取って、服を着替える。

この姿のまま外に出たら、目立つだろうし。

汗でしっとりしてしまったロングTシャツを脱いで、いつも通勤できているカジジュアルスーツに着替える。

今日はシャツワンピース。

ジーンズに着替えやすかったからね。

「今日は早く帰ってシャワー浴びよー。汗臭いわ」

着替えながら桜に言くと、倉庫を歩き回っていた彼女の足が止まる。そこは、スチールラックの後ろ。

「……、掃除の期間はあと何日？」

前のボタンを止めながら顔を上げると、眉を顰めた桜の姿。

綺麗な人は、どんな表情も見惚れるほど綺麗だわ。

そんな関係のないことを考えながら、ボタンを留め終える。

「一応、課長から了承を得ているのは三日間。だから明後日まで」

片付けのついでに書類整理や倉庫内のレイアウト変更も言いつかつたから、多めに日にちをもらえたのだ。
まあ片付くし綺麗になるし、ある意味一石二鳥。

桜は呆れたように、ため息をつく。

「課長も、ただじゃ起きないわね。とりあえず、由比の受け持ちの書類は私と課長で処理してあるから、安心して片付けに専念して頂戴」

ね？ と苦笑する桜に、思いつきり抱きつく。

「ありがとう！」

片付けに三日間もらえたのは嬉しかったけど、それが一番不安だったのだ。

一日でも抜けると凄く未処理書類が溜まるのに、三日ってどーなっちゃうのって思ってたから。

ぎゅっと首に回した腕に力をこめると、私の背中を軽く叩いて桜が笑う。

「ふふ、汗臭い」

「ごめんね」

いろいろ、迷惑掛けて。

そういう意味を込めて一言伝えると、もう一度私の背中を叩いて桜は身体を離れた。

「さ、帰りましょ？ あー、面倒だから駐車場からでちゃっつ。」

「うん、そーしよっか」

非常階段で一階に上がるの、面倒だしね。

着替えを入れたトートバッグを肩に掛けると、桜と二人、倉庫から外に出た。

駅に着くと、いつもの場所に翔太が自転車を停めて立っていた。すでに私服で。

「翔太、待たせてごめんね」

「由比、お帰り」

につこりと笑う翔太の姿に、ほっと息を吐く。
なんかもう、ホント癒されるなあこの兄弟。

翔太は見えていた携帯をジーンズのポケットにしまうと、自転車のスタンドを足で軽く蹴る。

暗い中、アパートへと歩き出す。

「ね、翔太。学祭もうすぐなんでしょ？ 準備とかで疲れるだろうから、迎えに来なくても大丈夫だからね？」

「あれ？ 圭介のお説教また聞きたいの？ 由比にマゾツ気があるとは知らなかったなあ。いい事を聞いた」

「あるか、そんなもんっ！ あのね、そういうことじゃなくて」

「そういうことでしょ。ね、それよりもさ。来月の第一土曜、空いてる？」

それよりもじゃないってのに……、そうぶつぶついながら翔太の言葉に頷く。

「空いてるけど、何？」

やった、と少し嬉しそうな声を上げて、翔太が二つに折りたたまれた細長い紙をポケットから出した。

それは、手作り感溢れるチケットで。

「うちの学祭、来てよ」

手渡されたそれを両手で広げて、街灯の明かりに晒す。

外部に発注する高校もあると聞いたけれど、翔太のところは厚紙に

印刷したチケットを自分たちで裁断したのだろう。
少し台形のように歪んでいるのが、微笑ましい。

そこには来月初めの金土の日にちと曜日が、高校名と共に印刷されていた。

それを指でなぞりながら、口を開く。

「翔太は何やるの？」

「ん？ ヒミツ」

にたり、と笑うその顔は、何か企んでる……？

「……三年何組？」

「ヒミツ」

くっ、パンフもらったら確認しようと思ったけど、これもダメか。
まあいいや、あとで圭介さんに聞いてみよう。

「圭介に聞いても、無駄だからね？ 口止めしとくし？」

……君は、何がしたいんだもう……。

「ま、いいや。当日楽しみにしてます。翔太探し」

「うん、楽しみにしてて。で、一緒に回る？」

……

「え？」

一緒に？

ふと俯いて、考え込む。

隣からは自転車のカラカラという軽い音と、翔太の履くスニーカーの地面を踏みしめる音が響いてくる。

「それは、ダメでしょう」

ゆつくりと、否定の言葉を口にした。

「なんで」

少し驚いたような翔太の声に、当然、と口にして見上げる。

「翔太には翔太の友達がいるでしょ？ 学祭は皆で楽しまなきゃ。」

私がそこにいたら、邪魔なだけだよ」

「俺は、由比と回りたい」

「学祭って学生時代の大事なイベントでしょ。学生同士で楽しまなくて、どうするの」

「由比」

翔太が私の名前を口にして、足を止めた。

少し遅れた私が、一歩進んだところで足を止めて振り返る。

「俺は、由比と回りたいんだけど。なんで、同じ学生同士じゃないのさ」

「え？」

「じゃあ、圭介となら？ 圭介となら、由比は一緒に回るわけ？」

「翔太……？」

私を見下ろしてくる翔太の目が、いつになく冷たく感じるのはなぜ？戸惑いを隠すことが出来ず、目を伏せて口を開く。

「そんな事ないよ。圭介さんは、お仕事なんだから。一緒に回るとか、無理でしょう？」

「無理じゃなかったら？ 由比の為に時間作つたら？」

私を追い詰めるように言葉を重ねる翔太の雰囲気、怖い。なんで？ どうしてそんな顔、するの？

「ね、どうしたの翔太。何か……」

「答えてよ、由比」

じつと見下ろされて、居心地が凄く悪い。

けれど逃げ出せない雰囲気、視線を彷徨わせる。

翔太はどうしたんだろう。

何でこんなに怒るんだろう。

私はつぐんでいた口を開いて、聞こえないように小さく息を吐いた。
「翔太ならとか圭介さんならとか、そういうの、関係ない。ただ、翔太には翔太の世界があるから、そこに私が入るのは違うって思っただけ」

本心を、口に出す。

信じてもらえるように、ちゃんと目を見て。

なぜ怒らせてしまったのかよく分からないけど、決して翔太と一緒に回りたくないのではない。

一緒に回ることで、翔太に迷惑を掛けたくないだけ。

翔太はぱちぱちと幾度か瞬きをして、ゆっくりとその冷たい表情を和らげた。

「そっか、そういうことか。そんな事、由比気にしないで？」

幾分和らいだ声音にほっと息をつくと、翔太を見上げる。

「気にするわよ」

「んじゃさ、金曜はクラスの奴らと回るから。それでどう？ 土曜だけ由比という」

「翔太ってば、なんでそんなにこだわるの？」

すっかり機嫌が直ったのか、歩き出す翔太の隣で首を傾げる。
そこまでして、なんで一緒に回りたいんだらう。

「由比が好きっていったじゃん、もう忘れたの？」

私の顔を屈んだ状態で覗きこんでくる翔太が、その笑顔がとても可愛くて。

思わず頭をぐりぐりと撫で回す。

「やった何、嫉妬？ ヤキモチですか、翔太くん！」

もう、かわいいんだからーっ

「ちよっ、由比っ。やめっ」

「だって可愛いんだものーっ！ 分かったわよっ、おねーちゃんと一緒に回ろっね」

「由比つてば、現金だなあ」

ああ、癒される。

そうだよ、翔太と圭介さんから元気もらったんだから！
あんな事ぐらいで、落ち込んでることないじゃない。

気持ちを浮上させてくれた翔太に向けて、満面の笑みを浮かべた。

「ありがとね、翔太。楽しみにしてるから」

その笑顔に、翔太も口元を緩める。

「楽しみにしてて、時間が合ったら圭介冷やかして遊ぼう」

「何それ、可哀想に」

くすくすと笑いながら、二人はアパートへと帰った。

由比を部屋に送り届けた後、まだ圭介が戻ってきていない部屋に翔太が入る。

目の前に広がるのは、月明かりでぼんやりと薄暗い部屋。いつもの日常。

生活観溢れるここは、唯一信じられる圭介と一緒に暮らす場所。

……唯一、信じられる、人、なのに。

翔太は靴も脱がずに、玄関に立ち尽くす。

何で俺は、学生なんだろう。

どんなに背伸びしたって、子供である範疇から抜けない。

十八歳になればと思うけど、まだ五ヶ月ある。
しかも、その年齢になったって制服も脱げない、ただの高校生。

——学生同士で楽しまなくてどうするの

由比が、言った、言葉。

分かってる。俺の事を思ってた言葉。そんなことは分か
ってる。

けれど、圭介がよく口にする言葉と重なった。

——学生だからこそ、出来ることが沢山ある。遠慮せずに、沢
山で沢山学べよ？

俺たち大人は、お前たちがそうやって歩いていくのを見守るのが仕
事なんだから

由比と同じ立場で、俺を見る。

社会人、大人。

俺は一人子供。

養われる立場、守られる立場。

唯一、信じられる、人、なのに。

学生だからと否定された由比の言葉に、思わず感情が昂ぶった。
なら、誘ったのが圭介だったら？

口には出さなかったけど、桐原だったら？

思わず嫉妬にも似た感情を、圭介に向けてしまった。

ドアに背を預けて、天井を仰ぐ。

もう少ししたら、きっとドアを叩く音がする。

開けたそこには、由比がいて。

今日の夕飯のおかずを、嬉しそうに渡してくれる。

自分を、男としてみない由比に、新鮮さを感じて。

屈託のないその笑顔を、独占したいと思った。

皮肉にも、今はそれが一番のネックになっている。

ねえ、由比。

どうやってたら、俺を男としてみてくれる？

子供じゃなくて、由比と同じ立場に。

募る焦燥感に、翔太は目を瞑った。

「年齢だけは、どうやっても太刀打ちできない……」

「私、あんたの事、本気で嫌いになっただかも」

少し時は遡って。

由比が桜と会社を出た頃――

人事課では、ものすつごい不穏な空気が流れていた。それはもう、課長でさえ何も理由を聞かずにさっさと帰ってしまうほど。

六月。

既に来年度の採用試験は終わり、月末には採否を通知しなければならぬ。

その上、今年度入社の新人に向けての中期研修も人事課が請け負っているため、主任である桐原はもちろん役付きではない皆川でさえも、仕事に追われていた。

いつもなら定時で帰宅する事の多い人事課ではあるが（役付き以外）、六月末まではそうはいかないようだ。

今日もここ最近の終業と同じ様に、定時を過ぎても全員が残っていた。

――しかし。

皆川の雰囲気がおかしい。

顔は笑っているのに、後ろに悪魔でも従えているんじゃないかと探

したくなるほど、怖い。

そして、黒い。

室内灯は煌々と照っているのに、なんだか空気がどんより黒い。暗いじゃなくて。

朝は普通だったのに、昼休憩から戻ってきた時には既に今の状態だった。

言葉遣いが多少厳しくてもにこやかにてきぱきと仕事をこなす皆川だけを見ていた新入社員は、定時をしばらくすぎると耐え切れなくなったのか頭を下げて帰っていった。

課長はしばらく頑張っていたけれど、七時を過ぎた辺りにそそくさと出て行ってしまった。

実働部隊は課長ではなく桐原であるので、最終判断を受け持つ課長が帰ってもそこまでの影響はないけれど。

仕事量的にどうしても帰ることが出来ない桐原は、内心イライラとしながらPCと向き合っていた。

——そして、冒頭に戻る。

皆川の言葉に、ずっとキーボードを叩いていた桐原が顔を上げた。

「……何か言ったか？」

視線の先には、皆川。

向かいの席に座っているため、正面から見ることになる。

その顔は綺麗な笑みを浮かべていて、入社して五年、ずっと顔を付き合わせてきた桐原でさえも威圧を感じる雰囲気をもっていた。

桐原と目が合った皆川は、椅子の背もたれに体重をかけて深く座ると、キーボードに置いていた手を外して前で組む。

「ああ、ごめんなさい。いい間違えたわ」
「は？」

いい間違えた？ ていうか、何を言ったのか聞いていなかったんだが。

怪訝そうな表情を浮かべる桐原を、皆川は目を細めて見据えた。

「私、あんたの事、本気で嫌い」

「……」

一瞬、目を見張る。

が、桐原はすぐに気を取り直して顔だけではなく上体を起こして、皆川に向き合った。

「今まで、お前に好かれたためしがないだろう。俺はどうでもいいが、そんな事で感情を剥き出してるなら迷惑だからすぐ止める。お前が怖くて皆帰ったんだからな」

「それが私の所為なら原因はあんただからね、桐原。それに一つ訂正してあげる」

淡々と言葉を紡ぐ皆川の声は、冷たくきつい。

桐原は皆川の言葉を聞きながら、目を細める。

何を言われるのかと、心の準備を一瞬にして整えた。

「私はあるが嫌いだつた事、入社して今日まで一度もなかったわよ。不器用で融通が利かなくて扱いづらいけど、根は優しいし面倒見もいい。何よりも仕事に対する姿勢は、同期として先に役付きになった事でさえ納得できる」

「……気持ち悪いな、槍でも降るか？」

皆川に面と向かってどころか噂話でも褒められた事のない桐原は、居心地悪そうに眉を顰めた。

皆川は桐原の言葉を鼻で笑うと、冷たい視線を浴びせた。

「槍くらい、私があるためがけて叩き込んでやるわよ」

その口調は侮蔑を含んでいることが、表情からも見て取れた。

桐原はただならぬ皆川の雰囲気、いつもの事だとたかを括つていた思考を切り替えた。

「皆川、何が言いたい」

「あんた、今日、何を聞きに営業部に行ったわけ？」

「営業？」

突然出てきた部署名に、いつの間にか眉間に皺を刻み始めた桐原が繰り返して呟く。

そしてそのまま、目を逸らして舌打ちをした。

皆川はその態度を見てから、口を開く。

「間違わないで。工藤から聞いたわけじゃないわよ」

「じゃあ、なんだよ」

「あんた営業部で、誰の名前出した？」

「誰のつて……」

桐原は、言おうとした言葉を飲み込んで口を噤んだ。

昼、屋上に飯を食いに行ったら、いつもいるはずの上条達の姿が見

えなかった。

昨日、嫌な別れ方をしてしまったし話を誤魔化されているのがもろ分かりだったから、問いただそうと思っていたのに。

仕方なく昼飯を終わらせてから、総務に様子を見に行った。

しかしそこに上条の姿はなく、都築もいなかった。

諦めて帰ろうとした所に、総務課長から頼まれたのだ。

営業に届けてもらいたいものがある……、と。

何で俺がと思ったが人事でも決済印が必要な書類だったため、それを受け取って営業部に顔を出した。

そこにたまたま、外回りから帰ってきた工藤と鉢合わせしたのだ。

そこで――

「上条の事で、何か知ってる事はないか？ …… あんた、そう工藤に聞いたそうね。しかも、営業部の前の廊下で」

昼の事を思い出していた桐原は、皆川の声で現実に戻された。

皆川の言葉を頭に入れながら、頷く。

「ああ。でも工藤に聞いたんじゃないなら、何でそんな事お前が知ってるんだ」

「馬鹿じゃないの、あんた。融通が利かないんじゃないじゃなくて頭が回ってないのよ。あんたをけしかけた自覚があるだけに、彼女に対しての罪悪感が半端ないわ」

「は？」

皆川が忌々しそうに話す言葉の半分が、桐原には理解が出来なかった。

確かに、皆川にけしかけられた気持ちはある。

けしかけられたというよりは、助言されたという感じだが。

ただ、なぜ頭が回ってないといわれなければならない？

なぜ、皆川が上条に対して罪悪感を抱くんだ？

「ちょっと待て、皆川。俺はお前の言っている事が、理解できていない。どういう事だ？」

まだ文句を言い出しそうな皆川に、桐原はなんとか先を制して問いかけた。

皆川は開いた口を噤んで深く息を吐き出すと、冷静さを取り戻そうとしているのか一度目を瞑って再び桐原を見た。

「言いたくないけど。あんた自分が女性社員に人気ある事、分かっている？」

「は？ そんなのしらねえよ」

くだらない、そう続きそうな桐原の言葉に、冷静になりかけた皆川の思考が再び怒りに染まった。

「察しなさいよ、馬鹿！ 把握していて知らない振りならいいけど、まったく気づかないのはただの馬鹿っていうのよ！」

……

桐原は口元が引き攣っていくのを感じながら、それでも先を聞こうと感情を何とか押さえ込む。

皆川はそんな桐原の内心に感じているのか、じっと睨みつけながらも話し始めた。

「私が知ってるのは、社食で噂になってたから。“桐原主任が上条さんの事で、何か調べているみたい”ってね」

「調べてるって、聞いたのは工藤だけだ。しかも今日初めてだって言うのに、何でそんな噂が立つ」

「だから頭がまわらないって言うの。同じ部署でもないあんたが、女性社員の事で他部署に聞きに行ったら、噂になるに決まってるでしょ？ 上条さんがどれだけ我慢しても、当の本人がこれじゃどうにもならないじゃない！」

叫ぶように、皆川は桐原を責める。

しかし桐原は、今の言葉の中に気になる箇所を見つけて椅子から身を乗り出した。

「上条が我慢って、どういうことだ」

そのまま椅子から立ち上がった、皆川の傍に立った。

皆川はじつと桐原を睨みながら、手早くPCの電源を切る。

「言わないわよ。工藤だって、言わなかったでしょ？ 桐原が自分で気づかなきゃ意味がないんだから。大体こうやって言ってるのだから、あんたを助けてる気がして気に食わない。あんたはずっと何も知らないまま、守られていればいいんだわ」

「皆川っ」

肝心な事を口にしない皆川に苛立った桐原は、立ち上がった彼女の腕をとつさに掴んだ。

その手を見て、皆川は桐原を見上げる。

「自分で考えなさいよ。ここ最近のあんたの行動を」

そう言って、力任せにその手を振りほどいた。

「私帰るわ。……ああ、プリンターのトナーが切れてるから、変えて置いてくださいね」

鞆を掴んで桐原に言い放った皆川は、途中から敬語へと言葉遣いを変えながらジャケットを手に取った。

「役付きの桐原主任でも、たまにはそういう事をなさった方がいいと思いますわ。ついでに五年前の入社資料、取ってきておいてくれます？ 私には重いので」

「なんで五年も前の資料が、今必要なんだよ」

「いちいちそんなこと申請しなきゃいけないんですか？ 桐原主任様」

そう言つと、さっさとドアに向かって歩き出す。

「おい、皆川……っ」

桐原にしてみたら、ここで話を終えられるのはたまったものじゃない。

慌てて手を伸ばすが、皆川はするりとそれをかわしてドアノブを掴む。

「もっと周りに目を向けた方がいいと思います、視覚的にも精神的にも。まっすぐな性格は時として、最悪な結果を招きますから」

それだけ言っと、桐原を置いて人事課をでた。

パタンと、音を立ててドアが閉まる。

そこに背中をつけて一呼吸置いてから、皆川は廊下を歩き出した。

叫んだからか、喉が少しひりひりと痛む。
けれどそんなことは、どうでもいい。
昂ぶる感情が、彼女の足音を高くする。

好きな子を苛めるというイマドキの中学生でもやらないような感情表現で、上条さんに接していた桐原。

やっとその想いを彼女に伝える事ができて、桐原を傍で見してきた皆川はたと思いが通じていなくても心底ほっとしたし嬉しかった。
なのに。

翌日から、今までの態度を百八十度覆すような桐原が誕生してしまった。

ぶっきらぼうな言葉遣いやからかうスタンスは変わっていないにしろ、上条さんを見るその雰囲気はとても甘い。

周りから見ても、一目瞭然。

桐原が総務課の上条由比を女性として気に入っているという噂は、翌日の昼までには女性社員の間を駆け抜けた。

恋愛感情の範疇外だと思われていた彼女だったのに。

それだけに今までまったく眼中になかった由比の存在に、桐原に目をつけていた女性社員が一斉に嫌がらせを開始したのだ。

それは備品発注などで上条さんの仕事を増やすという子供っぽい悪戯だが、やられるほうはたまったものではない。

皆川も心配して由比に声を掛けていたが、余計な事をすれば嫌がらせがエスカレートするから何もしないで欲しいと頼まれてしまった。

由比の言いたい事も分かる。

大体嫌がらせをしていることからして、やってるほうは自己中心的な性格をしているのだろう。

由比を助ければ助けるほど、余計、感情を逆なでしてしまうかもしれない。

だから内心もややしなながらも、桐原にも言わず、気付かれない程度にフォローするしかなかったのに。

「あの馬鹿……」

我慢できなくなつて、思わず呻く様な声が口から漏れた。

事務課の廊下ならいざ知らず、営業部の廊下で由比の名前を口にするなんて。

営業部のある階には、広報部も企画部もある。

タバコを吸う人達の為の、喫煙室もある。

どこで誰が聞いているのか、分からないのに。

現にその後すぐ、社食で昼食を終えて同僚と珈琲を飲んでいた皆川の耳に、届いたのだ。

——桐原主任がわざわざ営業まで来て、上条さんの事聞いてたよ。
何か調べてるんじゃない？

楽しそうにこそこそ話をするそいつらを、どれだけ怒鳴り飛ばしたかったか。

他人ごとだと思って、面白そうに話すんじゃないわよ、と。

でもそれ以上に、桐原を怒鳴りつけたかった。

そしてそれを止めなかった工藤も。

とりあえず……と、社食をですぐに工藤に連絡した。
状況を聞こうと思って。

でも。

そこで知る事になる。

倉庫の惨状と、朝の由比のことを。

——俺は倉庫の事を、桐原に言わない、と彼女に約束させられたから、何も出来ない。

……言いたいこと、分かるか？

話の最後に言った、工藤の言葉。

皆川は頷いて即答した。

——分かってるわよ

倉庫の事、私は口止めされてないからね。

かといって、一から十までは話さない。

これ以上、桐原に幻滅させられなくなかった。

「ヒントはあげたからね。あとは、自分でどうにかしなさい」

そう呟くと、皆川は駅へと続く道を歩いていった。

その頃、桐原は使用済みのプリンターのトナーを持って、非常階段を降りていた。

皆川に怒鳴られた後しばらく呆然と立ち尽くしていたが、そんなことをしていても何も変わらないと、とりあえず皆川に言われたことに手をつけた。

一体、なんだったのか……

階段を降り終え、廊下の奥にある備品倉庫のドアを開ける。

地下という事もあって、比較的ひんやりとした空気が漂っていた。

「久しぶりに来たな」

思わず独りごちりながら、入って奥にあるトナーが積まれている場所に近寄った。

備品倉庫は、ほとんどくることがない。

備品を取りにくるのは、基本、役付きの人間はしないことだからだ。そうじゃなくても、プリンターのトナーを変えに来る以外、ここには用事がない。

たまに、資料を取りにくるくらいで。

各々の課にはスチールラックが置いてあって、そこに過去三年分の資料が置いてある。

この倉庫はそれ以上前の資料が、鍵付きのラックにしまわれていた。そんな昔の資料、ほとんど使わないし。

そう思いながら新しいトナーをドアの傍に置いて、資料のあるスチールラックに歩み寄る。

それは二つ向き合わせになっていて、人事課の資料は裏向きの方。少し狭くなっているその場所に足を踏み入れて、桐原は動きを止めた。

「なんだ……、これは」

思わず出た言葉は、桐原の思考そのままを表していた。

整理されているのは、ドアから見える範囲だけ。

足を踏み入れたラック裏は、先に進みたくても立ち止まらざるをえない状況だった。

腰を落としてしゃがみこむと、散らばっている紙を一枚取り上げる。なんでもない、会社の古いパンフレットの原稿。

機密性の低いこの手の書類は、鍵の無いスチールラックにファイリングされてしまわれているはず。

顔を上げて立ち上がると一番奥、壁際にある棚の引き出しを開ける。そこには、綺麗にファイルが収まっていた。

手に取ると、拍子抜けするほど軽くて。

それもそのはずだ。中身が、一枚も入っていないかった。

それを手に、もう一度書類が散乱している場所に戻る。

ざっと見ただけでも、何冊ものファイルの中身をぶちまけたんだろう事が見て取れた。

——なぜ？

こここの管理者は、気付いていないのか？

倉庫にはそれぞれメインで管理している社員が、必ず一人いる。

こここの管理者は……

桐原はファイルを手に持ったまま、ドアに向けて歩き出す。

その横に置いたトナーの傍にファイルを立ててドアを開けると、その横の壁に貼ってある管理担当者の名前を見て絶句した。

――備品倉庫 総務課担当

管理責任者 上条

「上条？」

一瞬目を逸らして、再び確認する。

見間違いではなく、それは上条の名前。

右手をゆるく握って、口元に当てる。

そのまま再び倉庫の中に戻った。

黙って考え込んでいた桐原は何かに気付いたように、口元に当てていた手のひらを見てから、綺麗に片付いている場所に視線を向けた。備品倉庫。

管理者がいるとはいえ、毎日掃除をしているわけではない。

さつきトナーに触れた時、埃が少しも手についていない。

大股でトナーの詰まれている場所に向かう。

綺麗に整頓されているが、何か気になる。

眉を顰めて床に目を凝らすと、その違和感に気付いた。

「インクの……臭い？」

使用済みトナーは、ビニールに包まれてここに置かれている。

多少臭いはするが、ここまで強くないはずだ。

しゃがんで床に目を凝らすと、うつすらと残る黒い染み。

綺麗にしたばかりと主張されているような、インクを取り除いた跡。

顔を上げれば整理してつまれているダンボールには、全ての箱の側面に綺麗に在庫表が貼ってある。

それは全て同じもので、まだインクが黒々と綺麗に発色している。

色落ちの無い、まるで印刷したばかりのもの。

ぐるりと見渡した後、足はスチールラックの裏に向いていて、その惨状を目にした時、皆川の言葉が頭に響いた。

——上条さんがどれだけ我慢しても、当の本人がこれじゃどうにもならないじゃない！

上条が、我慢、していた。

当の本人……俺が、原因で。

意味が分からず理解できていなかった皆川の言葉が、だんだん見えてくる。

なぜ、今日上条は昼を食いに屋上に来ていなかった？

なぜ、総務にいなかった？

何か知っているかと思って聞いた時の工藤の顔が、無表情だったのはなぜだ？

皆川が、あれほど敵意をむき出しにしていたのは、なぜ……

——同じ部署でもないあんたが、女性社員の事で他部署に聞きに行ったら、噂になるに決まってるでしょ？

噂。

人気がある、そう皆川は言っていた。

そんなもの俺には関係ない、そう思う。

不特定多数に好かれたって、好きな奴に思いが通じなければ何の意味も無い。

けれどその不特定多数が、特定の人間に敵意を向けたら……？

俺が、そいつを、好きだ、それだけの理由で――

足元が、揺れる。

思わず壁に背をつけた。

冷たく硬い壁が、余計俺の体温を下げていく。

そのままずるずると床に座り込むと、片手で顔を覆った。

――あんたはずっと何も知らないまま、守られていればいいんだわ

まも……られて、いた。

守られて、いた？

そうだ、そうだ……上条……。

最近、残業が多かった。

疲れたような顔で、もくもくと仕事をしていた。

罵倒されても、いい存在なのに。

その権利は、上条にあるのに。

それでも笑みを含んだ表情で、俺と話していた。

何も知らされず、守られていたってわけか。

いや、違うな。

何も知ろうとしていなかっただけ、か。

言われなくても気付かなければならなかったこと、か。

周りなんてどうでもいい、心底、今でもそう思う。

けれど、その周りを含めた場所で仕事をしているのだから……、周りを無視するなんてのは出来ることじゃなかった……。

言いよつの無い罪悪感を、拳を振り上げて壁にぶち当てる。

骨に伝わる衝撃が痺れに変わって、肩まで上がってきた。

痛み？ そんなもの、何も感じない。

上条が、感じていたものに比べれば……

込み上げてくる感情を、再び壁にぶつけたときだった。

ガツツという拳の音と同時に、ドアの開く音。

桐原は俯けていた顔を、勢いよく上げた。

もしかして、上条――

「びっくりした。上条さんが残ってるのかと思っちゃったよ、俺」

そう言って顔を出したのは、営業からの帰りなのかスーツの上着を肩に掛けた工藤だった。

目を見開く俺を見て、ぷつ、と噴出す。

「なんて顔してんだよ、桐原。この世の終わりじゃないぞー、明日もちゃんと日常は続いていくぞー」

上着をさっき俺が置いたトナーの横に掛けると、そこにおきっぱなしにしてあったファイルを手俺の傍に来た。

「ちゃんと、理解、出来たか？」

「工藤、お前……」

この倉庫のこと、知ってた……？

上条の現状を知っていたとしても、倉庫のことは知らないと思っていた。

工藤は俺の横にしゃがみこむと、手に持ったファイルを横に置いた。

「知ってたよ。つか、今朝、ここで上条さんに会ったから」

「なっ、それならなんで……っ」

立ち上がりかけた俺の身体を、肩を掴んで止める。

「理解、したんだろ？　なら分かるな？　営業部の廊下でお前が上条さんの名前を口にしたこと、どれだけ彼女に迷惑をかけたか」

「……、後で言う事もしてはもらえないのか」

例えばメールでも、人のいない場所を選んででも。

でも桐原は、浮かした腰を降ろして頭を振った。

「いや、違う。言われないでも、気付かなければならなかったことだ。お前にこういうことを言うこと自体、間違ってる」

悪い、そう言っただけ顔を俯ける。

工藤はそんな桐原を見ながら、足元に広がる書類を一枚ずつ手に取っていく。

「ま、例え周りに人がいなくても、俺は言わなかったけどな。上条さんに、口止めされたし。でもまあ、一日でよくここまで綺麗にしたもんだ」

そう淡々と話す工藤に、桐原はちらりと視線を向ける。

「そんなに酷かったのか」

「ああ、酷いなんてもんじゃなかったねえ。俺、一瞬眩暈起こしそうになったもの。桐原って、もてるねーって」

「……茶化すな」

足回りの書類を拾い終えた工藤が、顔を上げて桐原を見た。

「茶化してないよ。それだけ、自分の言動と行動に責任を持てって事さ」

「……皆川にも、同じ様なこと言われた」

周りを見る、と。

「そうした方がいいと、俺も思う。ま、そんな顔してるお前に、言う言葉はないさ。自分で分かるだろ？　どうするべきか」

その言葉に桐原はあげていた顔を、まだ書類の散らばっている床に向けた。

「そうだ、な。分かってる。とりあえず、人事の部屋戸締りしてくれるわ」

「はいよ、俺は書類拾ってます。二人でやりゃあ、今日中には帰れるだろ」

顔色の悪いまま立ち上がる桐原を、工藤はしゃがんだまま見上げる。

「ま、殴りこみに行くのだけはよしてくれよ？」

そう笑う工藤に、桐原は口端だけ上げて笑みを作った。

「今の俺なら、やんねえよ」

前のお前ならやるんかい、倉庫から出て行く桐原の後姿を見ながら工藤は心の中で呟いた。

「これは、どーいうことだろう」

呆然と、立ち尽くした。

前日、目に見える範囲しか出来なかった片付け。

翌朝来てみると、なぜか長机が二つ置いてあった。

そしてその上には、種類別に分けられた書類。

慌ててスチールラックの後ろに回ってみれば、そこは綺麗に片付けられていた。

てことは、長机の上に置いてある書類は、ここにあったもので。

てことは、誰かが片付けてくれたって事で。

……

「てことは、こんだけ汚くした管理責任者の私は、始末書ものですか！！」

バレたの！？ 誰かにここの惨状がバレたのーっ！！？

いや、私がやったわけじゃないんだけど。

ぐるぐると頭の中で始末書のレイアウトを思い出しながら、私は叫んだ。

「私、悪くないのに！！」

「だね、悪くない」

「……！！」

いきなり声を掛けられて驚いた私は、両手を上げて後ろを振り向く。そこには、スーツ姿の工藤主任。

「……また朝から外回りですか？」

でかい声を上げた恥ずかしさから、つい早口になってしまふのは許してください。切に。

工藤主任はくすくす笑いながら、倉庫のドアを閉める。

「いい反応してくれるねえ、嬉しいわー上条さん」

そう言いながら、下げるのを忘れていた私の両手を掴んで下に降ろした。

……すみません、私は嬉しくないです
って、一体何の用があって……っ

そこで気付いて、勢いよく工藤主任を見上げた。

「もしかして、工藤主任ですか？ 片付けてくれたの……」

途中から視線を後ろの長机に向けると、それに気づいた工藤主任は机の上にあつた書類を一枚ぺらりと指先で摘み上げる。

「さあねえ。小人さんじゃない？」

「……工藤主任って、そーいう人だったんですか」

まともな人だと思つてました、そう続けると摘んでいた紙を元に戻して上着を脱いだ。

「そーいう人だったんですよ、さあ小人さんの続きをとつとやつてしまおうか」

明らかに誤魔化そうとしているに、不安がよぎる。

「工藤主任？ もしかして……」

「俺は言っていないよ」

「……」

やっぱり、これ……

口を噤んで、長机に視線を向ける。

桐原主任に、ばれた……んだよね。きつと。

「工藤主任じゃなければ、誰が……」

「俺はこれをやった奴のこと、口にしてないけど？ 君の憶測で話を進めちゃだめだよ」

脱いだ上着をドア横の机に置くと、Ｙシャツの袖を捲り上げながらくすりと笑う。

「でもその憶測は百パーセント当たってますよね？ 工藤主任」

脱力しそうな身体を長机に凭せ掛けながら、同じ様に袖をまくる。それを見ながら工藤主任は、手前の紙の束を手にとった。

「俺は言っていない。誰も言っていない。さて、一時間だけ手伝うわ。今日も元気に営業なんだよねー」

もうこの話は終わりとでも言うような口調に、思わず苦笑する。

「憶測だからと、前置きしておきます。ありがとうございました、工藤主任」

きつと桐原主任だけじゃない、工藤主任も昨夜の小人さんの一人なんだろう。

「小人さんも頑張った甲斐があったと思うよ。じゃ、はじめようか」もうその言い方で、分かりますよ。

「はい」

頷いた私はもう一度お礼を言ってから、書類の仕分けを始めた。

「あら？ 早かったわね、由比」

お昼時間の終わり頃総務に戻ると、桜が少し驚いたように私を見た。それはそうだろう。

三日ももらっている掃除時間。昼も別々に食べようと言っていたのに、そんな私が着替えも終えて戻ってきたのだから。

桜の声に、机に鞆を置いてその中からランチバッグを取り出した。そして室内に桜しかないのいい事に、行儀悪く机に浅く腰掛け

る。

「小人さんが途中まで手伝ってくれたんだ」

「小人さん？」

「うん、昨日も小人さん達が書類を纏めておいてくれたみたいでさ。もう片付け終わっちゃった」

「小人さん……」

私の言葉に考えるように顎に指先を当てていた桜は、くすつと笑ってPCの電源を落とした。

「詮索はやめておきましょう。想像はつくから。お昼、行く？」

「うん、二日ぶりの陽の目だわ」

総務のチーフが戻ってきたところで、私達は昼を食べに課をでた。そのままエントランスに行くと、丁度外に食べに行っていた人たちが帰ってきたところだったらしく、なんだか好奇心な目で見られてるのがしばし伝わってくる。

思わず身長に物を言わせて桜の前に隠れたら、お腹が無理ねえと摘まれた。

それを外しながらむうつと睨むと、桜は面白そうに口元を押さえて笑う。

「由比つてば、人気者」

桜が少し呆れたように笑いながら、こっちを見ている社員達を盗み見ていて。

私は振り向きもせず、エレベーターが降りてくるのををじつと待つ。

「こんなことで、人気者になんかなりたくなかったけどね」

はあ、と溜息をつくと丁度エレベーターが上から降りてきた。ゆっくりと開く扉をぼやつと見ていたら……

「あ」

中にいた人と目が合って、お互い固まる。

「あら、上条さん」

固まっている人の後ろから、皆川さんがその人を避けるように前に出てきた。

「あ、あ……と皆川さん、こんにちは」

皆川さんは艶のある唇で綺麗に弧を描くと、目を細めて笑う。

「こんにちは。今からお昼？」

「はい」

そう、と言いながらどいてくれたけれど、もう一人の人間が壁になっ
ていて入れない。

「……、桐原主任どいていただけますか？」

少し眉を顰めた桜が、固まっている人間——桐原主任——に声を掛けた。

「んあ、ああ」

桜の声に頷くと、ぎこちない動作で横に退いた。

そこで、ふと考える。

とりあえず内容言わないまでも、お礼はしといたほうがいいのか。昨夜の小人その一に。

さらつと言えば、後ろの社員達にはバレまい。

「失礼します……、あの……ありがとうございました」

そう言つて横を通り過ぎようとしたら、桐原主任の目が一瞬後ろに向けられて次の瞬間低い声が聞こえてきた。

「面倒だから、俺に話しかけんなよ」

しかも、結構なでかい声で。

思わず、既に通り過ぎた桐原主任を振り返る。

目が、合う。

けれどすぐに前を向いてしまい、私の目にはその背中しか映らない。横で、皆川さんが目を丸くして見開いているのが少し見えただけ、

桐原主任の表情は窺えない。

そのまま、エレベーターのドアが閉まった。

独特の浮遊感が、身体を襲う。

ゆっくりと、エレベーターは三階へと向かって上がっていく。

「びっくり、した」

思わず、呟いた言葉はこれだった。

「そうね。流石の私もびっくりよ」

くすりと笑う桜に、視線を向けて苦笑する。

「桐原主任って、ホント良いも悪いも直情型だね」

「でも、一応周りは信じるかもね。あの人、嘘をつけないの、有名なもの」

「……やっぱり、そういうことだよな」

「あら、由比もそう思ったから……」

桜がエレベーターが開く直前、私の頬を撫でた。

「いたって普通の表情なんでしょう？」

開いたドアから、三階に降りる。

そのまま屋上に出る階段を上がりながら、ランチバッグを持ち直した。

屋上に出ると、昼休憩がもう終わるからか誰もいない。

それでも周りを見渡して確認してから、いつもの場所に腰掛けた。

「きつと、桐原主任。今頃落ち込んでるんでしょうねえ」

早々にお弁当を広げた桜が、おかずを口に入れる。

それに頷きながら、私もお弁当を広げた。

「ホント……、気付いてしまえば分かりやすい性格なんだよね」
あの人。

今まで桐原主任に対して感じたことのなかった感情……それは恋愛感情ではなく……、年上だというのにまるで弟を見るようなその気持ちに、正直笑いが漏れた。

直情型の人が好きな女性はやっぱり直情型なのか、その日以降、悪意ある悪戯は格段に減った。

なんだか、今までのことが嘘みたいにあっけなく。

まあ、全部っていうわけじゃないんだけど。

そしてびっくりなことが一つ。

あの直情型桐原主任が、何も行動を起こさなかった事だ。

怒鳴り込みに行くかと思ったのに、それも無く。

そしてあれから一週間、桐原主任と話していない。

様子を見に来ていた残業の時でさえも、昼ご飯の時でさえも。

駅でも、待たなくなつた。

めちやくちゃあからさまなのに、なんでそれ皆信じるの？ て思うくらい。

いやー、ここまで徹底されるとさすがに驚く。

なんだろう、今まで子供っぽい態度だったのがいきなり大人の対応になつた感じ。

どうしちゃつたんだろ、ね。

そんなことを考えていた金曜日、あっさりと定時はやってきた。

減った悪戯は仕事を早く終わらせてくれて、本当にありがたい。

頼むから、全て終わりにしてくれないかな。

倉庫を汚すのだけ、なかなか収まらないんだよね。

執念深いおねーさまがいたもんだ。

そんな人に思いを寄せられる桐原主任を少しだけ可哀想とか思いながら、当番で残る桜に手を振って総務課を出た。

一応、倉庫、見てから帰ろう。

その時、隣の人事課のドアが開いて、少しドクンと鼓動が高くなる。しかしそこから顔を出したのは、皆川さんだった。

ほっと、息を吐く。

ドアを閉めようとした皆川さんが、立ち止まった私に気付いてにこりと笑った。

「帰り？」

その言葉に、強張った体の力が抜ける。

「はい。ちよつと下に行つてから、帰ろうと思ひまして」

「下に？ ああ、そうなの。気をつけてね、お疲れ様」

もつと突つ込まれそうな感じがしたけれど、あっさりと話を終わらせてくれたので違和感を感じながらも頭を下げる。

その間にドアを閉めたらしい、そんな音が耳に届いた。

「はい、お疲れ様です」

そう言つて、皆川さんの横を通り抜ける。

閉められたドアの向こうは、窺い知る事はできない。

ただ、根は優しい不器用な桐原主任が、あんまり悩んでなければいいなと、そう思った。

非常階段を降りて、備品倉庫に向かう。

ドアを開けてくるりと見渡しても、廊下から漏れる明かりに照らされるそこに特におかしな場所はない。

よかった。

もう、こつちを荒らす人いなくなったのかな。

そう思つてドアを閉めようとした時。

後ろから階段を降りてくる硬質な音が聞こえてきて、慌てて倉庫の中に入って静かにドアを閉めた。

わー、もしかしてこれから悪戯タイムだったー？

最悪な時に来ちゃったなあ。

とりあえず電気もつけてないし、どうにか誤魔化せるかな。

スチールラックを通り過ぎて、奥の壁際。

そこには布の被せられたスチールデスク。

その埃よけの布を掴んで机の下に入ると、自分を隠すように布を元に戻した。

なんか、ちっちゃい頃遊んだかくれんぼのようだね。

落ち着いている自分がおかしいけど、あそこまでやられるとある意味馴れてしまうのか、あまり怖くない。

なんていうか、吹っ切れてしまう。

私が布を戻すと同時に、ドアが開いて電気がついた。

布越しに明るくなる部屋に、やっぱり誰か来たんだなーとぼんやりと考える。

息を殺していると、足音がゆっくりと倉庫内を歩き回っているのに気付く。

そして――

「……上条、いるのか」

その声に、がばっと布を捲って顔を上げた。

今の、声！

衣擦れの音に気がついたのだろっ、声の主がスチールラックの向こうから顔を出す。

「……いた」

そうやって微かに笑むと、傍に来ようとする足がふと止まった。

そして顔がドアの方に向く。

つられるようにラックが邪魔で見えないドアをの方に目を向けた私の耳に、不穏な音が聞こえてきた。

カツカツと響く硬質な細い音……それは、女性もののパンプス。
うぎゃ、ホントにおねーさま来たんじゃないの？

ちよつとまで、倉庫に二人きりつて絶対まずい、これホンキでまずい。

驚きで固まっている私に一瞬視線を向けると、足音を立てずにドアに向かう。

小さな音がして、電気が消えた。

「……？」

いきなり暗くなった私の目は順応せず、何も見えない。

慌てて瞬きを繰り返していたら、隣に何か滑り込んできて被っていた布を引き上げられる。

「え」

声を出した途端、倉庫のドアが開く音が響いた。

続いて付けられた明かりに、自分の今の状況を知った。

ぎゅっと押さえられた、私の口元には大きな手。

目だけを動かすと、隣に座るスーツ姿の人。

丁度私を見たその目と、私の目が合う。

——桐原主任。

久しぶりに、顔を見た。

少し驚いたような顔をした桐原主任は、音がしないように私から手を外す。

そのままそっぽを向いてしまった。

うーん、この状況はどうかと思うけど、まあ仕方ない。

息を殺して、様子を伺う。

倉庫に入ってきたのは、二人以上の女の人らしかった。

「あれだけ汚くしたのに短期間にここまでって、けっこ根性ある

よね。あの子」

感心したように呟く声。

おっ、私褒められた！

「そうだねー、なんか桐原主任と最近ほとんど話してないらしいし。噂は噂だったって事？」

「でも、あれだけいちやつきオーラ出してて、噂ってことないんじゃないの？」

「いちやつきオーラ！！」

なんじゃそのオーラは！

その名称に愕然としていたら、桐原主任もぽかんと口を開けていた。

おお、ある意味レア顔！

おねーさん達に気付かれたくないけど、見せてあげたいかもっ。

「もう面倒だし、やめようよ」

お、いい感じに話が流れていますね？

「でも、なんか悔しい」

あれ、一瞬で希望は潰えるわけですか？

「でもさー、よく考えたら主任の方があの子を気にしてた感じじゃない」

「そんな事無いっ！」

いや、そんな事あります。

もう一度桐原主任を盗み見たら、真っ赤な顔で口をまっすぐ嚙んでいました。

恥ずかしいんですね、そうなんですネ。

ホント、分かってしまえば簡単単純な性格だわ。

ああ、もしかしてだから無表情を基本にしているのかな。

しかし、ここまで桐原主任に聞かれてしまうと、なんだか複雑な心境だなあ。

ずっと隠してきたのに。

倉庫を片付けてくれた時点で知ってるとは思うけど、自分の目の前

で聞かれるのはなんだか複雑。

ふう、と息を吐いてから意識をおねーさん達の会話に向ける。

ちよつと面倒だなー

一人だけ納得していないおねーさんがいるみたいですな。

「じゃあ、あんただけやれば？ 正直、本当に面倒。それに上にはれたら元も子もないし」

「ちよつ、何よ……っ」

それだけ言つとヒールの音を響かせて、二人とも倉庫から出て行った。

再び薄暗くなる、倉庫内。

耳を澄まして廊下に音がなくなったことを確認してから、隣に座っていた桐原主任がドア横にある電気をつけに立ち上がった。

つられるように机の下から出て、伸びをする。

スチールラックの後ろから出ると、丁度電気がついて眩しさに一瞬目を瞑った。

「眩しいっ」

手の甲で光を遮ると、慣れてきた視界に桐原主任の姿が映った。もう一度瞬きをしてから、その手を下ろす。

「こんな所に、どうかしましたか？ 桐原主任」

わざわざ倉庫なんか。

「トナーとか？ あ、でも使用済みのもの持ってないですね」

手元にも、ドア横のスチールデスクにも何ものっていない。

しかも役付きだし、そんなことは後輩君がやるよね。

桐原主任は少し視線をさ迷わせてから、一・二歩私の方に近づくとがばつと頭を下げた。

「俺の所為で、嫌な思いをさせた。悪かった」

「へ？」

思わず、首を傾げる。

「なんですか、いきなり」

もう、そのお話は終わった事ですよ。

桐原主任は頭を上げると、眉を顰めて私を見下ろす。

「さっきの社員達みたいな奴に、嫌がらせされていたんだらう？」

気付かなくてすまなかった、本当に悪かった。それに……」

また頭を下げそうな勢いの桐原主任の頭を、思わず受け止めて持ち上げる。

私の行動に驚いたのか、目を丸くしたその顔が……なんだか笑いを誘う。

「いいですよ、分かってますから」

それに、の後に続く言葉はもう分かっている。

あんな風に、私に言った事。

でもそれが噂となって社内に広がったおかげで、嫌がらせが減ったんだから。

噂で嫌がらせされたなら……と、それを逆手に取ったある意味作戦だったんだらう。

まあ、いきなりやられたこっちは驚いたけどね。

しかもそれで本当に嫌がらせが減ったから、凄じびっくりだけどね。

私の言葉に困ったようなほっとしたような複雑な表情をしたまま、

桐原主任はこちらを見ていて。

抑えていた笑いが、止まらずに口から漏れた。

「ホント……、不器用ですねえ」

もっと上手く立ち回れないものなのかと、六つも年上の上司に思ってしまう。

桐原主任は私の言葉に目を見開いてそのまま近寄ると、両手で私の頭を抱きしめた。

「ちよつ、桐原主任？」

いきなりのその行動に離れようと身じろぐと、頭の上からくぐもった声が聞こえてきた。

「俺、お前の事、本当に好きだ」

一語一語をゆつくりと呟くその声は、……今まで聞いた事がないほど優しく。

今までみたいに押し付けるような、威圧を感じるようなものじゃなかった。

だからかもしれないけど、離れようとしていた気持ちが和らぐ。

私は俯いたまま、くすりと笑った。

「ありがとうございます。でも、ごめんなさい」

明るめの声で伝えると、頭の上で笑った感じがして頭のそばにある肩が小刻みに揺れた。

「あっさりだな、随分と」

「いや、前にも言いましたし」

聞いちゃくれませんでしたけどね。

そう続けると、まあな、と笑う。

「本当に、悪かった」

「もういいですよ、桐原主任は五十パーセントくらいしか悪くないから」

「半分か」

「これでも軽くしてあげているんです。だから……もう、大丈夫ですよ」

私の言葉に溜息をつく音と、離れていく腕。

少し離れた……でもまだ手の届く範囲にいる桐原主任を見上げる。そこには、最近ずつと見ていた不機嫌そうな表情ではなくて、吹っ

切れたような気まずそうなもの。

「また、何かあったら……その時は言ってくれとありがたい。気をつけるけれど、俺はそういうことに鈍いから」

「自分で言わないでくださいよ」

「最近のことを考えたら、大見得切れないだろう。なら、情けなくとも伝えておいた方がいい」

後頭部手をまわして、がしがしと頭をかく。

それから息を吐くと、私を見た。

「それじゃ、気をつけて帰れよ」

くるりと身体を反転させて、ドアに向かう。

その背中を見ながら、私は口を開いた。

「ほとぼり冷めたら、奢ってください。高いもの。それでチャラってことで」

ドアノブに手を置いた桐原主任が、弾かれたように顔をこちらに向ける。

「桜と皆川さんと工藤主任、全員で桐原主任にたかりますから」

桐原主任は、その言葉に瞬きを幾度かして口端を上げる。

「今から節約して、資金貯めておくか」

「それが無難かと」

にこりと笑うと、主任も微かに目元を緩めた。

「ああ、じゃあな。お疲れ」

そのまま片手を上げて、ドアの向こうに消えた。

翌日は、カレンダーどおりの休日を持つ社会人が今か今かと待ちわびる週末。

土曜日。

そんな幸せな日の私の寝起きは、最低だった。

ベットから上半身だけ起き上がって、肘をつく。

片手を伸ばして開けたカーテンの向こうには、真つ青な空。

所々浮かぶ雲も、とても綺麗。

「起きなきゃ……」

霞む目を擦りながら、既にお昼近い時間にベッドから這い出した。

簡単に身支度をして、冷蔵庫からペットボトルの紅茶を取り出す。

そのまま窓を開けると、目の前には日の光に照らされる川面。

水面がキラキラと光ってる。

「ああ、綺麗だな……」

誘われるように、ベランダに立った。

ペットボトルを開けて、紅茶を一口飲み込む。

喉を流れる冷たい紅茶が、少し頭をすっきりとさせてくれる。

「もう……、嫌だな」

ベランダの手すりに両腕を置いて、その上に顔を伏せる。

脳裏に浮かぶ記憶に、苦しくなって目を瞑った。

何で、気付くのがいつも遅いんだろう。

「おはよう、由比さん。もう、お昼だけだね」
隣から掛けられた声に、顔を上げる。

そこにはベランダに背をつけた、圭介さんの姿。

私は手すりにおいていた両腕を解いて、だらりともたれかかる。

「じゃあ、こんにちはですね」

そう言つて笑うと、圭介さんが目を細める。

「何かあったの？」

……今の独り言、聞かれた？

心配そうな表情に、慌てて頭を振った。

その隙に、顔にいつもの笑みを貼り付ける。

「何も無いですよ。あ、いいことならありました！」

「いいこと？」

不思議そうな声に、今度は頭を縦に振る。

「先週の悩み、解決したんですよ。本当にありがとうございました」

圭介さんは少し驚いたように、そうなんだ、と呟く。

「いや、私は何もしてないよ。でも随分悩んでいたみたいなのに、

よかったね。そんなに時間掛からずに解決して」

「何言ってるんですか、凄くおいしかった。奢ってもらった和食屋さん」

先週翔太を迎えに行つて食べに行ったのは、少し離れた場所にある和食屋さんだった。

まあ、翔太はがつつり肉食べてたけどね。

雑炊のついたミニ会席をご馳走になって、少し疲れていた胃にはとても優しい食事だった。

圭介さんは嬉しそうに目を細めると、それはよかったと口を開いた。

「今日は、由比さんはどうするの？」

温かくなってきたペットボトルを手のひらで転がしながら、うーんと唸る。

「買い物、かな。冷蔵庫の中、補充しなきゃだし」

今日も夕飯のおかずを持っていくつもりだから、それもあわせて買わないとね。

「私も買い物に行くから、もし良ければ一緒にどう?」

さらりと誘ってくれる圭介さんに、思わず苦笑する。

「またあ、過保護光臨だ。一人で行けますよ買い物くらい。そんな、休みの日まで圭介さんに迷惑かけられないし」

笑いながら手を振ると、すつごくにこやかな笑みと顔が合いました。

「由比さん」

その声は、笑っているのに強い。

「あ、あれ?」

何か怒らせちゃったかな……?

圭介さんはその笑みのまま、腕時計を私に向けた。

「三十分で用意、できる?」

……

「え?」

さんじゅつぷんって?

意味が分からず目で問いかけると、圭介さんはにっこりと笑う。

「三十分後、ドアの前で。遅れたら……さて、どうしようかな?」

その語尾は、なぜか楽しそうに上がっていて。

思わず口を噤んだ私は、どたばたと部屋の中に駆け込んだ。

「さすが由比さん、五分前行動は社会人の鉄則だね」

どたばたと大きな音をさせながら部屋のドアを開けると、既に圭介さんは自室のドアに寄りかかっいて。

ほんわかと笑いながら、ドアから背を離す。

そしてドアを開けたまま肩で息をしている私の傍に立つと、開けたままのドアに手を置いた。

「はい。ゆっくりでいいから、戸締りガス・湯沸かし器。もう一度見てきて？　ごめんね、私が急がせてしまったから気になって」

「へ？」

やっと静まってきた呼吸に一息ついて圭介さんを見上げると、ね？

と爽やかな笑顔が返ってきました。

「……はい」

まったく、過保護な上に心配性だ。

圭介さんの言葉に素直に頷くと、履いていた靴を脱いでもう一度戸締りを確認。

「お待たせさまでした」

全てを確認し終えてから部屋を出ると、車の鍵を手にした圭介さんが背をつけていたドアから重心を戻す。

「じゃ、行こうか」

「はい」

歩き出す圭介さんの後ろから、パタパタとくつついていく。

「そつえば翔太はどうしたんです？」

土曜日なのに、いないとは。

圭介さんは振り返らずに、階段を降りていく。

「今日は、学祭の準備で学校に行ってるんですよ」

「なるほど」

だからいないのか。

そう納得しながら階段をおりきると、駐車場に停まっている車の助手席のドアを開けた。

圭介さんの車は、おいしそうなラムネの匂い。

どんな芳香剤か知らないけれど、翔太が面白がって無くなると買っ

てくるんだそうだ。

圭介さんは特にこだわりがないらしく、というか翔太が凝り始めるまでは何も置いていなかったと言っていた。

仕事が終わって車に乗ると、この匂いを嗅いでお腹がすくとも。

胃の辺りが動いた気がして、思わず手で押さえる。

……確かにそうかも。

「どうしたの？ 由比さん」

思わず苦笑したら、たまたま信号で止まった圭介さんが私の行動に気付いたようだ。

私はおかしくない動きで胃に当てていた手を下ろすと、なんでもないと頭を振る。

「お弁当のおかずとか、夕飯とか、何かリクエストないですか？」

「ん？ リクエスト？」

「そう。何が食べたいとか、あ……あれは嫌いとか？」

ああ、と納得したような圭介さんが口を開く前に、言葉を遮る。

「なんでもいいは、ダメですからね。一番、それが難しいんですよ」
少し口を開けたまま、ぱちぱちと瞬きをして圭介さんはくすりと笑った。

「お母さんみたいだね、由比さん」

「……二十二歳で、十八歳と二十八歳の子持ちですか？ 手が掛かりますねえ」

「ははっ、実際手が掛かってるでしょ」

そっさいながら、信号が変わったのか車が動き出す。

「ちなみに翔太は、甘くない卵焼きって言ってた」

家庭によつて違うからね、卵焼きの味って。

だし、しょうゆ、砂糖。

ちなみに、私は出し巻きが一番好き。

圭介さんは前を見たまま、甘くない奴ね、と同じ言葉を口にする。

「そういえば翔太の母親が作る卵焼きは、確かに甘くなかったからね。うん、由比さんの作る出し巻き玉子に似てる」

「……じゃあ、翔太の口にもあったかな？」

「由比さんの作るご飯はおいしいから。翔太もだろうけど、私も好きだよ」

「よかった。そう言ってもらえると、作りがいがある」
ご飯を作って食べてもらう事、本当に嬉しいんだ。

「で？ 圭介さんの好きなものは？」

最近、おかず考えるときに悩むから、聞いておかないと。

すると圭介さんはそうだなあと呟きながら、ハンドルを左に切った。

「何でも食べるけど……、肉じゃが？」

その言葉に、思わず噴出す。

「なんですか、そのテンプレ！ 肉じゃがに騙される男でしたか、圭介さん」

「聞いておいて何かな、その言い方。いいじゃないか、煮物が好きなんだよ」

少し言葉遣いがいつもと違うのは、照れ隠しなのか。

止められない笑いにお腹を押さえていたら、ふと知らない風景が目映って顔を上げた。

「あれ？ いつものスーパーに行く道じゃないですよね？」

「たまには、違うところでもいいかなと思って。まあ、楽しみにしてて」

「楽しみ？」

スーパーに楽しみ？

一瞬傾げそとなった首を、ピンツと伸ばす。

「お買い得品！？ お買い得品ですか、もしかして！！」

お買い得、セール、バーゲン！ どれも大好物な言葉ですっ！

「あはは。本当に面白いね、由比さんは
目を細めて言わないでください。
なんたって……」

「主婦にとって、セールは正義です！」
そう拳を振り上げながら、いつの間に主婦になったわけ？ と内心
首を傾げた、上条 由比 二十二歳 独身 ある土曜日の午前中の
ことでした。

「ほほう、これが圭介さんのいうお買い得という事ですか」

「まあ、私はそうとは言わなかったけどね。お買い得と言うよりも、役得の方があつてゐるかな？」

目の前には、おいしそうなパスタ。
横に顔を向ければ、緑の綺麗な山。

圭介さんに連れてこられたのは、アパートから少し離れた俗に言う
“道の駅”。

テーマパーク化してる道の駅が多い中、ここも小規模ながらいろいろな区画があるらしい。

小川の流れる散策路とか、子供向けのアスレチックとか、お弁当を
食べられる広場とか。

そして何よりも、道の駅だけに素晴らしいのは農産物直売所。

そして今、私達がいる場所は。

その直売所の横に併設されている、地域の野菜を使った食事を出す
カフェレストラン。

うん、とっても素敵なところですよ。

ご飯はおいしいし？ 風景は綺麗だし？ 目の保養も前に座つて
るし？

「確かに私の役得な気がします」

「何を言うの。私が役得なんだよ」

一人称だけ聞いていると、女の子二人みたいだね。

そんなアホな事を考えながら、くるくるとフォークにパスタを巻き取る。

「いい空気を吸えて可愛い子と食事が出来て、最高に役得」

そうにつこりと笑う圭介さんに、あはははーと笑い返す。

「圭介さんでも、そんな冗談言うんですねー。だったらもつと可愛い子を連れてこないと」

「……言い方を変えようか。可愛い由比さんと一緒においしいものを食べられて、私は役得だ」

お互い、フォークにパスタを絡ませたまま、じつと見る。

傍から見たら、見詰め合う恋人って？

会話の内容を聞いてからにしてください。

現在、ある意味争い中です。

「……圭介さん、口が上手い人だったですね」

「……そう来るか。由比さんは、なかなか手ごわい」

手ごわいって、頑固って事？

それを言うなら圭介さんのほうだと思うけどなー、そんなことを考えながら巻き取ったパスタを口に入れる。

うん、おいしい。

私が食べているのは、魚介のクリームパスタ。

アスパラガスとほうれん草、赤いラディッシュが色鮮やかに盛り付けてある。

なかなかクリームソースって、家でやっても、これ！って味にならないんだよね。

旨みを出すのが上手くないんだよね、きつと。

圭介さんは、ボンゴレ。

私もちよつと迷った。

こくがあつてさっぱりしてて、おいしいんだよね。想像すると、アサリの旨みが口に広がる。

どれだけ、食いしん坊なのか。

「食べる？」

「っ！」

勢いよく顔を上げると、にこにこ笑む圭介さんがお皿を少し私の方に押し出した。

「えっ、いやいやそんな。他人様のものをとるなんて」

つれてきてもらった上に、それはだいぶ図々しいのでは。

片手を振って否定したら、そう？ とお皿を元の位置に戻す。

それを顔を逸らしつつつい目で追っていたら、フォークとスプーンで器用にパスタを多めに巻いて取り皿に載せた。

ご丁寧に、スプーンでスープも掛けてくれて。

「はい、どうぞ」

私の目の前に、差し出してくれた。

「え？」

「もう取り分けたんだから、文句言わずに食べることに」

ね？ と笑う、圭介さんに視線をさ迷わせてから、そのお皿を手にとった。

「なんだか、ごめんなさい」

「謝るわりには、顔が笑ってるけど」

「素直なもんで」

パスタを口に運ぶと、想像以上のおいしさについて表情が緩む。

「おいしい！」

そんな私を見る圭介さんは、思いつきりおにーちゃんの目だ。

「それはよかった」

そう言つて、自分もパスタを口に運ぶ。

たわいも無い話をしながらパスタとサラダを胃に納めると、散策路の方に足を向けた。

その際、どっちがお金を払うかでレジ前で攻防を繰り広げたのは、言うまでも無い。

最終的には圭介さんに負けて、払ってもらいましたが。

「綺麗ですね。アパートからそんなに遠くないのに、空気がいい」

実際一時間くらいしか離れていないけれど、私は来た事がないから日帰り旅行にでも来た気分になる。

土曜日だからか人は結構いるけれど、それは子供向けのアスレチックや広場の方に集中していて、私達が今歩いている散策路にはほとんど誰もいない。

隣を歩いていた圭介さんは顔を少し私のほうに向けて、おもむろに頭をゆつくりと撫でた。

「喜んでくれたならよかった。今日は、由比さんへのご褒美だから……ご褒美、ですか？」

撫でられたことに驚いて圭介さんを見上げると、その表情はとても優しく。

細められた目が、眼鏡越しに私を見下ろす。

「頑張ってる由比さんに、私からご褒美」
頑張ってる？

つて、ああ……

ぱんつと圭介さんの腕を叩いて、一步先にでる。

「こんなことしてくれなくたって、ちゃんとお弁当もご飯も作りますよ。ホント、義理堅いというかなんといいか。でも、せっかくだから楽しませてもらっちゃいます」

「そういうことじゃないんだけど。ああ、ちゃんと下見て歩かないと……」

圭介さんを見上げながら笑う私に、過保護圭介さん光臨！

心配そうに私を見る圭介さんをからかう様に、後ろ向きで歩いていたら――

「っ、どわっっ！」

見事に躓きました。

しりもちをついた私を、呆れ顔の圭介さんが目の前に立って溜息をつく。

「言わんこと無い。まったく」

「……こういう事もあるって事で！」

「誤魔化しても、ダメ」

にへらつと笑ってみたけど、ダメでした。

ああ、説教圭介さんは光臨しないでくださいー。

せっかく綺麗な場所にいるんだから。

「はい」

どうやってご機嫌を取ろうと思っていた私の目の前に、圭介さんの手のひらが差し出された。

……この手を取れと。

子供じゃないんだし、恥ずかしい。

「……はい？」

思わず聞き返すと、眼鏡の奥の目が面白そうに細まる。

「早く、中腰は辛い」

「おじさ……」

「由比さん」

威圧的微笑に急かされて、ついその手を握った。

う、わ。

思わず赤面しそうになった顔を、圭介さんから反らす。

いや、うん。

恥ずかしい。

ちよつとどころじゃなく、凄く恥ずかしい！

大きくて温かい。

自分のとは違う硬い筋張ったその感触に、押さえようとしてもどんどん頬に血液が集まってきた。

圭介さんの手に引っ張られるように身体を起こすと、慌てて握っていた手を開く。

「あはは、ありがとうございましたっ」

……ん？

目の前には、開いた私の手とそれを握る圭介さんの手。

ぶんぶんと、振ってみる。

……取れない

既に手に対する感想じゃない言葉が、脳裏に浮かぶ。

仕方なくもう一度振ってみたら、握られた手を引かれて足が一・二歩前に進んだ。

「え、あのっ。圭介さん？」

なぜ、手を離してくださらないっ！

焦ったように見上げると、圭介さんは前を向いたままで。

何も言わず、ゆっくりと歩いていく。

うわあつ、何これっ。

人に手を引かれて歩くなんて経験、しかも相手が男の人って、ありえないんですがあつ。

その時、丁度近くを歩く女性と目が合った。

おばさま二人組。

その人達は、圭介さんと私を交互に見ながら、あらあらとか話してる。

うっわ、絶対……

——あらあら、若いっていいわねえ

——見てるこっちが恥ずかしいわあ

……とか、言われてるんだ！↑いつの時代（笑）
どんな羞恥プレイだ！

私は掴まれている手を引つ張って、圭介さんと呼ぶ。

「圭介さん、離してっ」

「ん？ ダメだよ、今、お仕置き中だから」

「は？」

なんか、今、圭介さんから発せられないような言葉が聞こえたよう
な。

思わず聞き返すと、くすくすと笑う圭介さんが握っている手を持ち

上げる。

「敬語。止めようって言ったのに、今日は朝から使ってる。気付いてたかな？」

敬語？

えーとえーと、使ってたような……？ よくわかんないんですけど！

「それにしても、お仕置きって……」

言葉が怪しいとか思っちゃう、私が怪しいですか？

「だって、言うこと聞かない生徒には、お仕置きだよね？」

生徒って……

「いや、学校では言わない方がいいですよ、その言葉」

「そう？」

「はい、確実に」

耳年増なイマドキの子には、違うお仕置きだと思われますよ。

しかも、お仕置きを強請られるかもですね。

圭介さんはくすくす笑いながら、ゆっくりと散策路を歩いていく。

「……まあ、分かって言ってるんだけどね。由比さん限定で」

「え？」

何とかして圭介さんの手を取ろうと格闘中だった私は、最初の方の言葉が聞こえなくて顔を上げた。

「何が、私限定なんです？」

見上げた先の圭介さんはほんわりといつももの笑みを浮かべていて、なんでもない、と言ったつきり私の手を握ったまま前を向いた。

「いや、豊作ですねっ」
「そうだね」

ルームミラーで後部座席を見る私の目には、山盛りの野菜たち。見えないけど、トランクにはお米や味噌、途中のスーパーで買ったお肉やキッチンペーパー等がつまれてる。

散策路から戻った私達は、もう、これでもかっていうくらい野菜を買った。

これで、お漬物作るぞー！

干し野菜作るぞー！

冷凍のおかずは何作るう。

西京味噌買ったから、酒粕と混ぜて味噌床作るう。

魚とか豚肉とか漬けたりしたら、おいしそうだなあ。

「由比さん、楽しそうだね」

うきうき何を作るうか考えていたら、圭介さんに見られていたらしい。

こほんと咳払いをしてから、圭介さんに目を向ける。

「楽しいですよ？ もう、何を作るうかと。明日は楽しみ」

既に夕方に近い時間。

今から出来ることは少ないから。

「ホント、料理好きなんだね」

「うん、好き」

「それは、よかった。うちは大助かり。感謝しても、したりません」
おどけたように笑うその声と共に、アパートの駐車場に車が停まる。

「到着ーっ。お疲れ様でしたー」

シートベルトを外して、外に出る。

家をでる時は青空を見せていた空は、すっかり濃いオレンジに変わっている。

「さて、荷物運ぶから由比さん、鍵開けてきてくれる？」

運転席から降りた圭介さんが、車越しにアパートの鍵を投げ渡してくる。

「ととっ」

慌てて手を出してそれを受け取ると、アパートの階段を上がる。

自分の部屋のドアを開けてから、圭介さん達の部屋の鍵を開けて階下に降りた。

すると一階の右端の部屋のドアが開いて、中から住人が顔を出した。

「由比ちゃん、お出かけかい？」

「あ、神野のおばさん。今帰ってきたんですっ……て……あ、ちょっと待っててもいいですか？」

神野のおばさんは、外に出していた植木鉢を引っ込めに出てきたらしい。

それを手にとって、不思議そうに頷いていた。

「圭介さん、ちょっと後部座席失礼しますね」

「ん？ どうしたの？」

トランクから米を取り出していた圭介さんは、屈めていた上半身を

起こして私を見る。

私は後部座席においてあつた野菜を入れた袋からほうれん草とキャベツ、大根とにんじんを手にとると神野のおばさんの元に戻った。

「今、道の駅に行つてきたんです。よければもらつてください」

植木鉢を中に入れ終わつてドア横に立つていた神野のおばさんは、私の手にある野菜を見て嬉しそうに笑つた。

「わあ、ありがとうございます。助かるわー」

私から受け取ると、玄関の中にそれをおく。

「あ、隣二件には私からおかず作つて分けておくから、いいわよ。なくなつちゃう」

「え、でも」

あとから渡しに行くつもりだった私は両手を振つて遠慮しようとしたけれど、神野のおばさんに止められた。

「いいのよ。それにしても、いつ見てもいい男ねえ」

おばさんお目は、既に私の後ろから歩いてきていた米を担いだ圭介さんに向かっていて。

「ですよー。眼福眼福」

「ホントにねー、眼福眼福」

「なんの呪文ですか、お二方とも」

なむなむと両手を合わせていたら、傍まで歩いてきた圭介さんに苦笑されました。

「お野菜ありがとうね、遠野さん」

「あ、とんでもない」

米を肩に担いだまま、両手を荷物で塞いでいる圭介さんはほんわか

な微笑を浮かべた。

そうだ、言っておかないと！

「見立ては私だけど、お金は圭介さんだから！ 拝んどきましよう」
やっぱり会計で攻防を繰り広げたけど、そこでも負けたのだ。

おばさんの腕に触れながらそう叫ぶと、おばさんはまあっといういな
がら両手を再び合わせた。

「そうね、なむなむ」

「なむなむ」

「ですから、どんな呪文ですか」

うん、困った圭介さんは可愛い。

翔太には劣るけど、可愛い。

いや、可愛さを競っても仕方ないんだけど。

そこで気付く。

肩に十キロの米を担いで、反対の手にスーパーの買い物袋を提げ
ている圭介さんに。

「あつ、重いのにごめんなさいっ。じゃ、神野のおばさん、お願い
します」

いけない、つい和んでしまった。

おばさんありがとうとねと言うと、部屋の中に入っていった。

私は車に駆け寄って、野菜を手取る。

……うん、重いね。

二家族分。しかも保存食や常備菜も作るうとしているから、凄い量

になっちゃったな。

両腕に掛かる重みに耐えながら、階段を上る。

「また由比さん、無理して。それ私が運ぶから、軽いのを持ってきたさい」

丁度荷物を置いた圭介さんと階段の途中であつて、怒られました。

しぶしぶ手の荷物を渡すと、もう一度車に戻る。

だから、過保護なんだってばー。

昔バイトでスーパーのおすしやさんにいた時、五キロの米びつとか運んでたから鍛えられてるのに。

助手席に置きっぱなしだった鞆とトランクに入れておいたキッチンペーパーを手にとつて顔を上げたら、既に荷物を置いた圭介さんが歩いてくるところだった。

「……意外と、力あるんだね。圭介さん」

私の隣で残りの荷物を車から出すと、そのまま鍵を閉めた。

私、一回しか運んでないんですが。

野菜と買い物の袋を両手に持つて、圭介さんが苦笑する。

「まあ、一応男だからね。由比さんより力が無かったら、それは情けない」

「そーかなー」

歩きながら、おねーな圭介さんを想像して気持ち悪くなった。

「何を想像してるのかな」

微妙な顔をしているのに気付かれたらしい。

慌てて笑顔を作つて、あははと軽く笑い飛ばす。

「おねーな圭介さんつて気持ち悪いなと」

「想像しなくていいから、そんなの」

きらきらの笑顔で、おっそろしい雰囲気出されました。

この兄弟、笑顔で人を威圧するの得意技なわけですか!?

とりあえず笑って誤魔化そう、そう思い立って自分の部屋の玄関に荷物を置く。

圭介さんも肩に担いでいた五キロのお米を、私の横から玄関に入って置いてくれた。

「じゃ、これで全部だね」

「はい、ありがとうございます」

そうお礼を言っていると、どういたしましてと頭の上から言葉が降ってきた。

降ってきたのはいいんだけど……。

「……？」

……うん。玄関狭いから向き合つとね。ちょっとね。

後ろの玄関は、開いている。

だから圭介さんが一足分でいい、横にずれてくれればこの状態から開放されるんだけど。

圭介さんは、目の前に立つたまま動かない。

「あの、圭介さん？」

俯いた視界には、圭介さんの足が見えている。

それが動かないんだから、上半身はそこからどいていないわけで。

伺うように名前を呼ぶと、微かに目の前の体が身じろいだのが雰囲気を感じる。

「由比さん」

「……はい？」

何か、さっきとは違う真面目な空気に思わず硬い声が出た。

圭介さんは少し逡巡するように黙ると、少し間をおいて口を開いた。

「本当に、解決したの？」

「……え？」

圭介さんの言葉に、頭から足元へと血の気が引いていく。

何で、今更……。

朝にベランダで独り言を聞かれて問われた時、誤魔化したらそのまま流してくれたのに。

だからなんとか平気な顔を作って、頭を縦に振る。

けれど圭介さんは、誤魔化されてくれる気はないらしい。

「ならどうして悩みが解決した翌日に、もう嫌だって顔を伏せながら呟くのかな」

声と共に肩に置かれた手のひらに、思わず身体が跳ねるように反応した。

「——っ！」

後ずさった背中が壁に当たって、反動で前にのめる。

けれどそこに圭介さんがいることに気付いて、前に手を出しながら身体を無理やり横に擦った。

「……っ」

けれど来るべき衝撃に目を瞑ったら、いつまでたってもそれが来ない。

そしてその理由に気付いて、思わず身体の動きが固まった。

腰と背中を感じる自分のものじゃない、温もりと感触。

押し付けられているそれは、多分、圭介さんの身体で。

床に倒れると思って早くなった鼓動が、違う意味で高鳴っていく。

「……由比、さん」

目の前の身体から直接振動が伝わってくる、圭介さんのいつもより

低い声。

けれどその声は、心配そうなものだというのに何か怒っているような雰囲気を感じていた。

「ごめんなさ……っ」

いつまでもしがみついているからかと思って離れようと手に力をこめると、それ以上の力で引き戻される。

「由比さん」

再び名前を呼ばれて、今度ははっきりと怒りを含んだ声に身体がびくりと震えた。

今まで、強い口調でお説教されたことはあるけれど、それは心配が先にたったものばかりで。

今は心配ではなく、怒り。

それは、隠そうとする私へのものなのだろうか。

圭介さんは私から離れようとせず、そのままの口調で話を続けた。

「桐原さんと話がしたい。携帯とか分かる？」

……え？

圭介さんの口から出てきた意外な名前に、それまで俯けていた顔がぱつと上げる。

見上げた先には、眉を顰めている圭介さんの顔。

見たことのないくらい、硬い表情をしている。

「桐原主任に、なんの話……」

圭介さんが話すことなんて、なにも……

「由比さんが何も言わないなら、桐原さんに聞くしかないからね」

その言葉に、慌てて頭を振った。

「ホントにもう解決したから、圭介さんが気にすることは何も……」

っ

「それが本当なら、どうして“嫌”なの？」

私の言葉を、圭介さんが遮る。

「それは……」

口ごもる私を見下ろして、圭介さんは息を吐いた。

「……由比さん、痩せたの知ってる？」

「……え？」

まだ硬い声は、ぽつりと呟いた。

「由比さん、ずっと空元気だったの気付いてる？」

「圭介さん……？」

背中に触れる手のひらが、肩に動いてぎゅっと力をこめる。

「それを見て、どれだけ心配したか……分かってる？」

どくん、と心臓が音を上げた。

同時に、足から力が抜けた。

思わず圭介さんのシャツを掴む。

大丈夫、一人で大丈夫ってそう思ってたのに。

我慢すれば、いつか終わるから大丈夫って……だから平気だっと思ってたのに。

「……由比さん、座る？」

圭介さんは少し離れると、力が抜けて座り込みそうになる私の身体をゆっくりと廊下に座らせた。

圭介さんはその前に、しゃがみこんで私を見る。

いつも頭の上にある顔が目の前に来て、少し上体を後ろに引いた。

そのまま顔を俯けた私は、一度目を瞑って深呼吸をする。

圭介さんが心配してくれているのは、分かっている。

そりゃ、駅で桐原主任と話していたのを見られたし。

今日の朝の言葉も聞かれたし。

理由が気になるのも……分かる、分かるけど。

でも……

言いたくない。

何も、誰にも。

一つ、気持ちを口にすれば……、どんどん自分が弱くなってしまっ。それを、分かっているから。

どうにかして、この状況を変えなければと考えを廻らす。
そして、圭介さんが話し始めるのを緊張しながら待った。

圭介さんは顔を上げない私に諦めたのか、そのまま話し出した。

「由比さん。桐原さんの……」

「あーっ！ お肉っ！ 魚が痛んじゃうっ！」

その言葉を遮るように叫ぶと、玄関においてあるスーパーの袋に視線を向ける。

圭介さんは意表をつかれたように目を見開いて、私の視線の先を目で追った。

そこで、ああと分かったように頷くと、立ち上がって玄関に置きっぱなしだったスーパーの袋を手取る。

「冷蔵庫に入ればいいかな」

「え」

靴を脱いで上がりそうになる圭介さんから、その袋を奪い取る。

「自分でやるから、大丈夫！ 圭介さんも、自分ちの入れないと腐っちゃうよ？」

ね？ と笑いかけながら、その袋を床に置いて立ち上がった。

がさり、と音を立てて袋の口から飛び出してきた魚の切り身のパックを目に留めながら、圭介さんが私を見下ろす。

けれど何も言わさないようにその身体を両手で押すと、戸惑ったように私を呼ぶ圭介さんの声。

「由比さん、ちょっと待って。まだ、話は……」

「ダメ！ 食材を駄目にしたら、ごはんの神様に怒られますよっ。

ほらほら、戻って！」

「由比さんっ」

勢いで何とか玄関から圭介さんを押し出す。

「今日はありがとうございました！ 凄く楽しかったです。明日からのおかず、楽しみにしてくださいね」
では！ と頭を下げると、私の勢いはまだ呆然としている圭介さんを視界に入れないようにして、ドアを閉めた。

カチリ

鍵を閉める、金属音が耳に響く。
そのまま、その場所を離れた。

アドリブは効かない。
誤魔化すのが下手なのは分かってる。
余計、心配させてしまう。分かってるけど……。

台所に入って、袋から冷蔵庫に食材を詰めていく。
一人暮らし用にしては少し大きい冷蔵庫。
一杯になったことのないその場所が、今までにないくらい食材で溢れてる。
ずっと一人で暮らしてた。
ずっと一人で……。

脳裏に浮かぶ、お隣の兄弟。
嬉しそうに、私のご飯を食べてくれる。
お弁当を持って行ってくれる。
些細なことかもしれないけど、とても幸せで。
誰かのために作ることが、誰かが食べてくれることが嬉しくて仕方なかった。

だから、甘えてしまったのかもしれない。
精神的に、頼ってしまっただのかもしれない。

こんなんじゃ、ダメ。

一人で立てる強さを、持ちたい。
持たなきゃ、いけないのに。

——なんで、上手くいかないんだろう。

「もう、嫌だ……。嫌、だなあ」

呟く。

目から零れていく温かいものが、頬を伝って手に落ちる。

こんな、弱い、自分は嫌い。

その時、玄関のチャイムが鳴った。
思わず肩を震わせて、玄関を見る。

「誰、だろう……」

涙を台所のタオルで拭って、玄関に向かう。
圭介さんだったら、出たくないな。
すると聞こえてきた声は、女の人の声で。

「由比ちゃん、ちょっといい？」

この声……

慌てて玄関の鍵を開けて、ドアを外に押し開く。
そこには優しそうなおばちゃんの姿。

「神野のおばちゃん、どうしたの？」

さつき、野菜を渡した一階の神野のおばちゃんがそこにいた。その手には、ほうれん草のおひたし。

「とりあえずぱつとね、作ってみたのよ。おもたせのもので悪いけど、よかつたら食べてねー」

差し出された小鉢を受け取って、頭を下げる。

「ありがとう、おばちゃんっ」

「こちらこそ、ありがとうねえ。それじゃ」

「はい」

小さく手をひらりとふったおばちゃんが、ドアの向こう側に声を掛ける。

「早く仲直りね？」

「……え？」

仲直り？

自分に言われたのかなんなのか、おばちゃんが言った言葉に首を傾げていたら。

開いたままのドアが、外から掴まれた。

「はい、すみません」

……え

その声に、表情が固まった。

「じゃあね。由比ちゃん、遠野さん」

その声に応えながら向こう側に開かれたドアから、中へと滑り込んでくるその人を呆気にとられながら見上げた。

私の視線に気付いたその人は、困ったように首の後ろに手を置く。

「あの後じゃ開けてくれないかと思って、丁度来た神野さんをお願いしたんだよ」

「圭介さん……」

そこにいたのは、圭介さんで。

私の声を聞いて、がばっと頭を下げた。

「ごめん、由比さん」

いきなりの行動に、思わず後ずさる。

「え？」

「心配で、つい……でしゃばりすぎた。……泣かせて、ごめんね」

「……っ」

伸びてきた指に目元をなぞられて、もう一步、後ろに下がった。

宙に浮いた手をそのままに、圭介さんは私を見下ろす。

「一人で、悩んだよね？ 言いたくても、我慢したんだろうに……」
その言葉に、俯け気味だった顔を上げた。

「なのに、責めてしまつてごめん。辛いのは由比さんなのに、私じゃないのに」

そう言うと、浮いたままの手を伸ばして私の頭にのせた。

「圭介さ……」

目を見開いた私は、まだ顔が強張っているだろう。

けれど、動くことが出来なかった。

頭の上をゆっくりと行き来するのは、優しくて温かい重みで。
幾度か撫でた後、髪を梳くように後ろに流れた。

ゆつくりと肩に置かれる、大きな手。

「内容は、言わなくていいから。もう、聞かない。……でも、由比さん。力を抜ける場所は、あるの?」

「……場所?」

問い返す私の言葉に、圭介さんは言葉を続けた。

「全員に対してじゃなくていい。全てをさらけ出せとは言わないけれど。心の中の、言葉。ちゃんと、吐き出す場所はあるの?」

心の中の……
瞬きを忘れたように見上げる私を、圭介さんは優しい目のまま見ていて。

「痩せてしまうほど辛くて、それでもどうにも出来なくて、原因であるだろう桐原さんにも何も言えなかった。苦しかったよね? 一人で我慢するのは」

だから……

そう言くと、誰しも皆安心してしまふような、穏やかな笑みを浮かべる。

「俺が、その場所になれたらって……。そう思つのは、由比さんにとって重荷かな」

「圭介さん……」

「辛いだけでもいい、苦しいだけでもいい。言葉にして、俺に預けて」

その目は、とても穏やかでとても真剣で。

抑え込んでいる涙が、目じりに溜まり始める。

なんでだろう。

責める言葉じゃなくて、優しい言葉の方が涙を止められない。

「一人で我慢することはないから。……ね？」

その言葉を聞いて、ドクンツ、と鼓動がはねた。

脳裏に浮かぶ、ここ最近の記憶。

大丈夫な振りをして、辛かった。

誰にも気付かれまいと思ってた。

誰にも、憐れまれなくなかった。

一人で、どうにかするって思ってた。

なんだか方向もやり方も言葉も間違っているけど、自分に好意を持つてくれた人に、それを伝えてくれた人に……。

その所為で、起きたという事実を知られなくなかった。

自分さえ我慢すればいいと思ってた。

全てが終わって、やっと緊張から抜け出せて。

これで、今までに戻れると喜んだ、昨日の夜。

寝る前に思い出したのは、桐原主任の辛そうな、目。

一週間前、エレベーターで会った時、私に辛らつな言葉をわざと言
い放った桐原主任。

言われて反射的に振り向いた先の桐原主任と一瞬だけ合った、目線。

苦しそうで悲しそうで、後悔を含んだその目。

桐原主任を苦しめた、その思いに至る。

桐原主任に言ったところで、何も変わらなかったかもしれない。もつと酷くなっていたかもしれない。

けれど、自分の知らないところで、自分が原因で人を傷つけていた。そんな思いを桐原主任に負わせてしまったのは、私だ。

余計な罪悪感を植えつけたのは、私だ。

あんな言葉を言わせてしまった原因は、私、だ。

自分にだけ精一杯で、周りのことを考えているつもりで本当にそれはまったくのつもりだけだった。

工藤主任に言われた、“上条さんが隠せば隠すほど、桐原は情けない奴になるだけなんだよ”この言葉。

私が、桐原主任を情けない人にしてしまった。

何も知らずに、何も聞かされずにいる当事者にしてしまった。あんなに、辛そうな顔をさせてしまった――

私がやったことは、ただの自己満足だったんじゃないか――

そう気付いたら、眠れなくなった。

心臓をつかまれたかのように、胸が痛くて仕方なかった。

私がやったことは、正しかった。

私がやったことは、正しくなかった。
どちらでもいいから、はっきりと言って欲しい。
誰でもいいから、そう言って欲しい。

でも――

「頼ることをおぼえると、弱い人間になっちゃうから……」

何とか、言葉を口にする。
心に思う、反対のことを。

「それは違うな、由比さん」

圭介さんは、穏やかな表情のまま目を細めた。

「人に頼ることで、弱くなるんじゃないよ。自分を消した時、人は弱くなるんだ」

「……消した時？」

自分を消すって、どういうこと？

鸚鵡返しのように聞いた私に、圭介さんは小さく頷いた。

「そう。自分で考えることを、放棄した時」

意味がよく分からない……。

「考えることをやめたら、それは現実から逃げているだけだから」

――現実から逃げている

その言葉が、心に引つ掛かった。

——現実から逃げている……

「由比さん」

俯いて両手を握り締めていた私を、圭介さんが呼ぶ。

けれど顔を上げることは出来なくて、じっと自分の手を見つめていた。

「辛いなら、言葉にして。ただ“辛い”とだけでいいから。泣きた
いなら、泣いていい。だから、そうやって……」

ぼやけ始めた視界に、細い指が入り込んできた。

そのまま目の下を拭っていく。

「声を殺して、泣かなくていいから」

拭われたことで、目じりに膨れていた涙が頬を伝い始める。
指先が、ゆっくりと優しくそれを拭う。

「由比さん、“辛い？”」

「由比さん、“悲しい？”」

「由比さん、“泣きたい？”」

その言葉に、私の感情は決壊した。

「ごめんなさい……」

あれから泣きたいだけ泣きつくした私は、涙が引つ込むと同時に今度は羞恥心にさいなまれることとなった。

あんなふうに言ってくれる人なんて、いなかったから。優しい言葉に、甘えてしまった。

擦りすぎてひりひりする目を手のひらで押さえながら圭介さんに言う、謝ることじゃないよ、と優しい声が返ってくる。

うう、なんなんだ。圭介さんってば、なんなんだよう……。一人で頑張れなくなるじゃないか。どうしてくれるんだ。

大きく息を吐き出して、顔を上げる。

「あー、もう大丈夫。圭介さん、ありがとう。もう、ホントいろいろと」

「いや？ 少しでもすすきりしたなら、それでいいよ」

「はは、そりゃもうすすきりというかさっぱりというか。大変楽になりました」

ありがとうと笑うと、圭介さんは目を細めて立ち上がった。

「うん、いいことだね。さて、そろそろ帰ろうかな」

翔太も帰ってくる頃だし、と玄関のドアを開ける。

ドアの向こうには、真っ暗な空が広がっていて。

そこでいつの間にか玄関の電気がつけられていたことに気がついた。圭介さんって、よく気がつくというかなんと言うか。

「やっぱり、いいなあ」

歩き出そうとした足を、私の言葉で止めて振り返る。

「……いいなあって、何が？」

不思議そうな顔で見下ろされる。

「いってそりゃ、もう。」

「圭介さんって、凄く優しくて、話もちやんと聞いてくれて、先生だからかすこし過保護すぎるけど頼りがいがあって」

「……由比さん？」

見る間に赤くなっていく圭介さんが、ちょっと可愛いかもしれない。珍しい表情を見れたことに笑いながら、圭介さんを見上げる。

「やっぱりおにーちゃんていいなあって。隣に越してきてくれて、私的すっごいラッキー」

「……おにい……ちゃん？」

鸚鵡返しのように繰り返す圭介さんに、うんうんとおもいつきり頷く。

「翔太が羨ましいな、ホント」

こんなに優しいおにーちゃんがいて。

「私、兄弟いないから凄くいいなあって思う。圭介さんと翔太って本当に仲いいもの」

全面的に圭介さんを信頼している翔太と、それを見守る圭介さん。なんだろう、絶対的な安心感と言うか。

必ず一緒にいるっていう、信頼感と言うか。

つらつらと話す私に、圭介さんはくすりと笑って頭を撫でた。

「由比さんも、私の妹、だよ」

「はは、うん、ありがとう」

気を遣ってもらっちゃってるのが、よく分かるから。

首の後ろを押さえながら笑うと、圭介さんはもう一度撫でてぽんぽんと軽くバウンドさせた。

そのまま手を下ろす。

「だから、嫌なことや悲しいことがあったら絶対に我慢しない事。

おにーちゃんに、頼りなさい。ね？」

「うん」

優しい言葉と、優しい表情と。

やっと引っ込んだ涙がまた滲み出しそうで、誤魔化すようにことさら明るい声で話を変えてみる。

「でも、圭介さんって、たまに一人称変わるんだね」

「え？」

「“俺”って、さっき言ってた。“私”としか聞いたことなかったから、ちよつとびっくりしちゃった。既にもう戻ってるし」

圭介さんは苦笑しながら、頬を指先でかく。

「あまり意識してないんだけど。まあ、忘れて」

「えー、なんかいつものギャップでいいと思うけどなあ。たまには」

「……そう？」

「うん。女子高生メロメロ」

圭介さんが、固まりました。

そして息を吐き出すと、ぽんつと私の額を押した。

「まったく、何を言いだすか分からない子だよ」

そう笑うと、開けたままだったドアを大きく開いた。

「それじゃ。少し休んでから動くんだよ？」

「はいはい、過保護圭介さん。後で夕飯のおかず持っていくからね」

「あれ？ さつきは明日って言ってなかったっけ？」

意地悪そうに口端をあげた圭介さんを、軽く睨む。

「そーいう事言つと、翔太の分だけしかもっていきません」

「ごめんごめん、楽しみにして……っつと」

表に出た圭介さんが、横を見て一瞬、目を見開いた。

「？」

けれどすぐにその目を細めて、穏やかな笑みを浮かべる。

「翔太、お帰り」

「え？」

翔太？

スニーカーを履いて、圭介さんが支えたままのドアから顔を出す。そこには、丁度部屋のドアを開けようとしている翔太の姿。

「お帰りー、翔太」

「ただいま。どーかしたの？」

鍵だけ開けて、翔太がこっちに歩いてくる。

「あはは、なんもないよ。翔太、今日の夕飯期待しててね」

大泣きしてましたなんて、圭介さんに見られたのでさえ恥ずかしいのに翔太にまで知られたくないし。

恥ずかしい限りだ。

翔太は圭介さんが押さえていたドアを自分で押さえると、キラキラしい笑顔を浮かべる。

「マジで？ んじゃ、すげえ期待しとく」

「任せろ！ 沢山食材買ってきたし。ね、圭介さん」

「そうだね」

ふふふ、と笑いあう。

「じゃ、また後で」

そう私が言つと、二人は自分たちの部屋に帰っていった。

私はその場ではちりと、両頬を叩いて拳に力を込める。

「うん、大丈夫！」

なんだか思い出すと恥ずかしいけれど、本当に本当に心が軽くなったから。

「これからもよろしくお願いします、おにーちゃん」

そう呟いて、夕飯の支度に取り掛かった。

自分たちの部屋の玄関を開けると、圭介は翔太を先に入れてその後から上がった。

持っていた鞆を隅において上着を椅子に掛けた翔太は、冷蔵庫に手を伸ばす。

「いやー、疲れたわ。でも、ほとんど準備できた」

「へえ？ 早いな」

麦茶をグラスに入れて、冷蔵庫を閉めながら肩を竦めた。

「準備って言っても、女子がメインだから。俺らは言われたことをやるだけ」

「まあ、そんなものだよ。怒らせちゃいけない」

おどけたように笑うと、圭介は洗濯物を取り込むのだろつ。ベランダへと歩いていく。

その後姿を見送って、翔太は台所の椅子に腰掛けた。

麦茶を一口飲んで、ふう、と息を吐き出す。

少し前。

帰宅した翔太の耳に入っただのは、由比の部屋から聞こえてくる泣き声。

慌てて由比の部屋のドアを開けようとノブに手を伸ばした翔太は、泣き声の合間に聞こえてきた男の声に動きを止めた。

耳を澄ましてみると、それは圭介の声で。

宥めるように何か言っていた。

伸ばした手を、ゆっくりと引っ込めて立ち尽くす。

自分の知らない間に、何があったのか。
懸命に考えても、浮かぶわけがない。

けれど、由比が泣いている。

圭介のそばで。

ただ、立ち尽くすしかなかった。

部屋に戻ればいいと、頭の中では分かっているのに。

圭介に心を許すように泣いている由比の声を、聞いているのがつらいのに。

けれど、そこを離れることが出来なかった。

しばらくして、泣き声がやんで。

目の前のドアが開いた時に逃げようかどうしようか考えたけれど、
少しだけ開いたそれはそれ以上開くこともなく。

中の声が聞こえてきた。

「圭介さんって、凄く優しくて、話もちやんと聞いてくれて、先生
だからかすこーし過保護すぎるけど頼りがいがあった」

由比の、声。

凄く嬉しそうに、楽しそうに話す言葉。

圭介への、賛辞。

過去にも違う場面でよく聞いたその言葉に、背筋にひやりと汗が流れる。

由比、も？

由比も、圭介が……

「やっぱりおにーちゃんていいなあって。隣に越してきてくれて、私的すっごいラッキー」

ぎゅつと握り締めた拳が、思っても見なかった由比の言葉にふつと緩んだ。

同じ様に、顰めていた顔からも強張りが抜ける。

おにいちゃん？ と、ぎこちなく聞き返す圭介の声に、再びどくりと鼓動が早まったけれど。

翔太が羨ましいと笑う由比の言葉に、身体から力が抜けた。

ゆつくりとその場を離れて、部屋の鍵を取り出す。

ばれないうちに、部屋に入ってしまったおう。

そう思いながら鍵穴に鍵を差し込んだところで、出てきた圭介に見つかった。

間に合わなかった。

その後ろから顔を出した由比の目は、真っ赤に充血していて。

大泣きしていた声そのまま、少し泣きつかれた笑顔。

理由を聞いても、それは誤魔化された。

本当は、理由を教えてくれるまで聞きたかったけど。

変なプライドが、それを邪魔した。

誤魔化するためのその言葉に、のっかって……。

「ほら、翔太」

目の前に置かれた洗濯物が置かれて、考え事から意識を浮上させる。

横には圭介。

取り込んだ洗濯物を畳み終えたらしく、翔太の分をテーブルに置いて向かいの自分の席に座った。

手には、翔太の持つグラスと同じもの。

いつの間にか、麦茶をグラスに注いでいたらしい。

「圭介」

「ん？」

麦茶を飲んでいた圭介が、翔太に視線を向ける。

翔太は真剣な顔で、じつと圭介を見返した。

「俺、由比が好きなんだ」

「……」

分かっているとしても言うように頷かれて、翔太は少し語気を強める。

「由比が、好きなんだ」

同じ言葉を、圭介がどう受け取ったのか分からない。

けれど圭介は麦茶を飲み干すと、分かっているよとただそれだけを言っ
て夕飯の用意を始めた。

その後姿から目を逸らして、手元のグラスに落とす。

——圭介は？

その一言が、口に出せない……

「おはよ、由比。何してるの？」

翌日、プラスチック容器を持って階段を上がるうとしていたら、二階から声を掛けられて顔を上げた。

「ああ、翔太。おはよー」

上から降りてくる翔太と目が合って挨拶を返しながら、少し首を傾げる。

「翔太、どうしたの？」

目の前まで降りてきた翔太は、私の言葉に不思議そうな表情を浮かべて、何が？ と問い返してきた。

私は持っていた容器を階段に置くと、翔太の顔を覗きこむ。

「なんだか、凄く疲れた顔。何、そんなに学祭の準備って大変なの？」

疲れたというか、表情が暗いというか。

翔太は私の言葉に少し驚いたように目を見開いて、すぐさまその表情を笑顔へと戻した。

「別に、疲れてないよ？ それよりこれ運ぶの？」

……誤魔化した？

すぐに目を逸らした翔太の態度に不自然さを感じながらも、突っ込まずに頷く。

「うん、物置にしまっておいたんだけど……」

「運ぶから、ドア開けて」

そう言つて横から持ち上げようとするのを、慌てて制した。

「いいよ、重いから。自分で運ぶよ」

腰痛めちやうからと容器を持ち上げようとすると、さっさと取り上げられた。

「うわ、ホント重い。なにこれ」

「翔太、いいつてば」

手を伸ばすと、ひょいっとかわして階段を上がり始める。

「いいから。で、何するの、これ」

翔太の背中を見上げながら諦めると、ふうっと息を吐いて後ろからついていく。

「昨日買ってきた大根、なんちゃって千枚漬けにしようかと思ってしまつておいた漬物容器と重しを出してきたの」

翔太は階段を上りきつて廊下を歩き出すと、なるほどと頷いた。

「それで重いんだ。ほら、由比。ドア開けて」

そう言いながら少し身体を斜めにして、私がすり抜ける隙間を作る。それに従うように翔太の横を通り抜けると、部屋のドアを開けた。

翔太は玄関に容器を下ろすと、ドアを押さえていた私を振り返った。

そのまま出て行くでもなく、立ち止まったままの翔太と目が合う。

なんだろうと不思議そうな目で見返すと、翔太が口を開いた。

「……由比」

名前を呼ぶ少し暗い声に、さっき見た表情が重なる。

「……どしたの？」

問いかけた私に、翔太が口を開く……けれどすぐに閉じた。
いつもの翔太らしくない雰囲気、内心首を傾げる。

なんなんだろう。

さっきの暗い表情といい、今日の前にいる無表情の翔太といい。
いつもの、こつちを振り回している翔太じゃない。

何か、様子がおかしい……。

昨日はおかしくなかったよね？

もっていったおかず、嬉しそうに受け取ってくれたし。

「翔太？」

名前を呼ぶと、幾度か瞬きをしてからさっきまでと同じ様に笑いな
がら顔を部屋の中へと向けた。

「すげえいい匂い！　これから朝飯？」

「……」

不自然な話し方に、思わず翔太のＴシャツの裾を握る。

それに驚いたように翔太が私を見た。

「由比？」

問いかけてくるが、反対にこつちが聞きたいんだけど？

どう言葉にしていいか迷っていたら、翔太は首を少し傾げて私の手
を取った。

なぜか動いたというのに、冷たいその手のひらに目を見開く。

「翔太、手、冷たい」

驚いて両手で翔太の手を包む。

「なんでこんなに冷たいの？ 何、どうしたの？」

そっぴいながら顔を上げると、にっこりと笑う翔太と目が合った。

「腹減ったから」

「……」

話の流れ的に、流石の私でも言葉を額面どおりには受け取れませんが。

疑わしそうな視線を向けても、翔太の笑みは崩れない。

まあ、さっきの無表情が気になるって言うのもあるけど……

聞き出すのを諦めて、小さく息を吐き出す。

「圭介さんは？ 寝てるの？」

「さっき起きたばかり」

昨日、結構動いたもんなあ。

翔太の手を離して、靴を脱いで上がる。

そして容器を持ち上げると、翔太を振り返った。

「ほら、ご飯食べるんですよ？ 圭介さんも呼んできて？」

「え、上がっていいの？」

台所へと歩き出しながら、いいよと答えた。

「人んちの台所使うより、自分ちの方が早いもん」

「やいい」

翔太はドアを閉めると、そのまま後ろをついてくる。

そのまま台所の端に容器を置くと、物珍しそうにきょろきょろと部

屋を見渡ししている翔太の背中を叩いて椅子に促した。

「圭介さんは？」

翔太は椅子に座りながらジーンズのポケットから携帯を出して、それを開ける。

「呼びに行ったら、絶対止められる。そして、由比は怒られる」

「えー、怒られないよ。初対面じゃないし、昨日も妹って言うてくれたしね」

翔太は一瞬目を上げて私を見たけれど、すぐに携帯に目を落とす。

「俺は？ 俺、由比の事、ねーちゃんとか思っただけ」

「え、おかーさん？」

餌付けしてるから。

「こんなちっちゃいカーさん、ありえない」

「なんですって？」

翔太はメールで圭介を呼び出したのか、操作し終わった携帯をポケットに突っ込んだ。

「俺、出汁巻き食べたい」

丁度冷蔵庫から卵を取り出していた私に、テーブルに頬杖をついた翔太がリクエストをしてくる。

そういえば、甘くない卵焼きが好きなんだっけ。

「はいはい」

冷蔵庫にストックしてあるだし汁を取り出して、たまごを割り入れたボウルに入れる。

薄口しょうゆとみりんを味をつけて、準備完了。

シンク下から卵焼き用のフライパンを出してざっと水で洗うと、それをコンロの上に置く。

「今日、和食な気分だから、卵焼きとたらこと海苔とー、お味噌汁だけど。若者よ、それでいい？」

パンとかの方がいいんじゃないかなあ。

卵液の入ったボウルを手に翔太を見ると、頬杖をついたままの彼と目が合った。

その顔は、なぜかとても幸せそうで。

「どうしたの、翔太」

さっきの無表情とのギャップが……。

翔太は体勢はそのまま、目を細める。

「由比が母親つてのは却下だけど、こーいうの、いいな」

「？　こーいうの？」

温まったフライパンに向き直って、油をひく。

だから、翔太がどんな表情をしていたのか、その後は分からなかったけど。

「うん、こーいうの」

ただ、その声はとても穏やかで。

様子がおかしかったから、その変化にほっとする。

背を向けている翔太を気にしながら、たらこをアルミホイルにのせてオーブントースターに入れる。

その時、隣の部屋のドアが勢いよく閉まる音が振動と共に響いた。思わず肩を竦めて、玄関に顔を向ける。

台所のドアの向こうだから、開いたとしても直接玄関を見ることは出来ないけれど。

「ほーら、怒られるよ。あの勢いじゃ」

楽しそうにくすくす笑う翔太につられるように、私まで笑いが漏れる。

「過保護だよねえ、圭介さん」

「だな」

そのあとすぐにうちの玄関のドアが開いて台所に駆け込んできた圭介さんの必死なその顔に、私と翔太は思わず大声を上げて笑ってしまった。

……その後、ものすつごく怒られたのは言うまでもない。

……ていうか、

なんで。

「おはよう、由比さん」

「…………おはようございます」

翌朝、こっそりとアパートから出て行こうとした挙動不審な私は、表道路に出た直後、とっても優しくとってもほんわか…………なはずなのに、冷や汗が背中を伝いそうになるくらい恐ろしい笑顔と対面しました。

路肩に車を止めてそれに寄りかかるようにしていた圭介さんは、にっこりと笑みを湛えたまま助手席のドアを開けた。

「どうぞ?」

「…………」

どどど、どうぞと言われても。

なにやらいたって普通の助手席が、牢獄の特等席のように見えるのは私だけですか?

何も言えずに固まっていた私は、ダメ押しのような圭介さんの笑顔にロボットのようなきこちない動きで、助手席に乗り込んだ。

圭介さんはドアを閉めると、運転席に回りこんでそこに座る。

ボタンと閉められたドアの音が、裁判官の鳴らす“カンカン”て木槌みたいな音に重なるのは気のせいですか?

エンジンを掛けた車が、静かに走り出した。

「何をこそこそしていたのかな?」

静かな空間を破ったのは、静かな圭介さんの声でした。

「こつ、こつこそなんて。そんな」

あはははは、と軽く笑うと、前を向く圭介さんから威圧オーラが流れてくる。

「何をこそこそしていたのかな、由比さん」

名前を追加されただけで、怖いんですけどー。

誤魔化すのを諦めて、逆切れのような開き直った気持ちで息を盛大に吐き出した。

「だって、圭介さん怖いんだもの」

「私が、怖い？」

「うん、怖い」

疑問系や断定のイントネーションはあるけれど、抑揚のない静かな声音に思いつきり頭を縦に降る。

「あんなに怒らなくてもいいのに」

ぼそつと呟いた声は、圭介さんの溜息に消されました。

「悪かったよ、少し感情的になりすぎた。私も別に二人を押さえつけたいわけじゃないから、許してもらえないかな」

そう、昨日。

翔太を部屋に上げて圭介さんを、食事に呼び出した後。

部屋に飛び込んできた圭介さんは、物凄い必死な表情をしている。

思わず翔太と大爆笑してしまったわけで。

私達の姿にばかりと呆けた圭介さんは状況を把握すると、満面の笑みに戻った。

おっそろしく冷たい、怒りの笑みに。
それはそう、さつき朝に私を待ち伏せしていた時のような笑顔。

「どういうことだ、翔太」

静かに言い放つその声に、ようやく私達は笑い声を納めた。
というか、ひやりとした雰囲気になったという方が正しい。

けれど翔太は慣れているのか、頬杖をついたまま圭介さんを見上げて首を傾げた。

「メールの通りだけど」

「メールの通りって……」

少し眉を顰めた状態で、私に視線を移す。

その表情に、ぴしつと背筋を伸ばしてしまった私はどれだけへたれ子さんなんだろうか。

「由比さん、本当に？ どうしてそんな事……」

本当につて……

翔太がどういった文面でメールを送ったのかわからないけど、こうやって圭介さんが来たことは内容は伝わっているはずで……
ゆつくりと頷くと、少し放心したように片手で口元を押さえた。

「別に隣なんだから、そこまで……。いや、その前に本当に？」

隣だからそこまで？ その言葉に首を傾げつつも、しつこく“本当に？”を繰り返す圭介さんに口を開く。

「隣だからこそ、なんじゃないかって。だから本当ですよ」

伝わってるからこそ圭介さんは怒っていて、うちに来たんじゃないの？

無防備だー無防備だーって。

翔太や圭介さん相手に、そんな失礼なこと考えませんよ。

圭介さんは力が抜けたように、テーブルに片手を置いて寄りかかる。私は焼いていた出汁巻きを皿に取り出すと、テーブルに置いた。

「やっぱりダメ？ 自分ちの台所の方が使いやすいんだけど。いちいちご飯作って隣にもって行く方が、面倒」

あえて言うなら、今日だけじゃなくずっとご飯はうちで食べて欲しいくらい。

「もう二人にも慣れたし、二人も私に慣れてくれないかなあ。洗い物とかレパートリーとか考えると、そのほうが楽なんだけどなあ」

「……え？」

少し呆然としていた圭介さんは、私の言葉に短く反応した。

「二人？」

え、疑問そこ？

オーブントースターからたらこを出して、お味噌汁を温める。

味噌を入れた後の味噌汁を温めるときは、傍にいないとね。

突沸したりするからね。

くるくるとお玉でそれをかき混ぜながら、温まってきた味噌汁にたまごを三つ落とす。

半熟加減で食べるのが、一番おいしいのよねえ。

沸騰直前で火を止めると、黙ったままの圭介さんを振り返る。

そっいえば、返答してなかった。

客用の箸を取り出してテーブルに置くと、そこに立ったままの圭介さんを見上げた。

「二人ですよ。他に人上げようにもスペースないし、他に人いないし。圭介さんもその方が楽でしょ？ 予定あわせておけば、ご飯を炊くところから私やれるし」

おお、口に出したら凄くいい考えじゃない？

一人だから、炊飯器で炊くよりも電子レンジで専用おわんで米を炊く方が多い私。

なんか、二合とか三合とか炊きたいのよね。

やっぱり、なんとなく量を炊いた方がおいしそうだしさあ。

「え、と。あれ？」

圭介さんは混乱したようにぶつぶつと口を動かした後、ゆっくりと翔太を見下ろした。

「……少し、外に来い」

「……」

言われた相手は翔太だというのに、いきなり低くなった声に私の方がびくつと震えた。

それに気付いた圭介さんが口元を緩めて、にこりと笑う。

「すぐに戻るから、ちよつとごめんね？」

ハテナマークをつけながらも、断定だよねその口調。

面倒くさい〜つとぶつぶつ言う翔太の首根っこを持って引きずりながら、圭介さんは廊下へと出て行った。

しばし呆然としてしまった私は、玄関のドアが閉まる音に我に返って体から力を抜いた。

「翔太、余計なことをメールに書いたんだね。きつと」

何を書いたのか知らないけど、圭介さんのあの剣幕を見ると、ふざけてからかったに違いない。

自業自得だね、私はそんなことを考えながらご飯の支度を再開した。

――が

その後戻ってきた圭介さんに、小言を喰らったわけですよ。まあ、食事は普通に楽しく終えましたけどね。

その後はじめて二人だけになるので、気まずいなあと……会わないうちに会社に行っちゃえとか思ったわけですよ。

掴まりましたが。

私の行動を見越して表道路で待ってるなんて、流石先生は察しいい。

先生関係ないか（涙

「まあ、圭介さんが心配してくれているのは分かるから、許すも許さないもないんだけど。でも、別にいいでしょ？　うちでご飯食べても」

昨日はうやむやにされてしまったから、今日ちゃんと返事をもらう。

圭介さんは前を向いたまま、小さく唸る。

「どうして、由比さんはそこまでこだわるの？　そりゃ、私達にとってはありがたい申し出だけど、由比さんにとってのメリットがよく分からない」

「……メリットって」

なにその言い方。某シャンプーじゃあるまいし。

「別に、メリットがあるから圭介さん達とご近所づきあいしているわけじゃないんだけど」

前を向く圭介さんの横顔を睨みつけると、焦ったような表情を浮かべて車を路肩に停めた。

「え、圭介さ……？」

サイドブレーキを掛ける圭介さんを不思議そうに呼ぶと、エンジンを切って私に向き直った。

「ごめん、今のは失言だった。メリット・デメリットで由比さんが行動するような人だとは思ってない。本当にごめん」

そのまま、がばりと頭を下げる。

その行動に驚いて思わず両手を差し出してしまった私は、手の上ののった圭介さんの額を押し上げて顔を上げさせた。

「こっちこそ、ごめんなさい。心配してくれることをありがたく思わなきゃいけないのに」

そう言っと、ほっとしたように目じりを下げた。

「いや、私のほうこそ押し付けになってしまって。……由比さん、少し時間大丈夫？」

車の備え付けのデジタル時計を見て、圭介さんの言葉に頷く。

するとシートベルトを外して、圭介さんは再び私を見た。

「一緒に食事をしようって言う、その理由を聞いてもいい？」

その声音は、決して怖いものではなく純粹に理由を知りたいという問いかけで。

一瞬逡巡した後、口を開く。

「作るのが、楽だから」

「……」

言い切った私を、じっと圭介さんが見つめてくる。
逸らせば今の言葉が嘘だと、ばれてしまう。

圭介さんは、何も言わない。

きつと傍から見れば、見詰め合ってる男女だよね。
実際は、駆け引き状態なんだけど。

「由比さん」

圭介さんは他には何も言わず、ただ私の名前を呼ぶ。

「何？」

「由比さん」

すぐに返答すれば、やはり口にするのは名前だけ。

そこに込められているのは。

“ 本当の理由は？ ”

それだ。

しばらく……といっても、数分もない間、じっと見合っていて。
負けたのは、私だった。

「食事の支度が楽って言うのも、本当」
「も？」

すぐに聞き返してくる圭介さんに、小さく頷く。

「翔太のね、様子が少しおかしかったから」

「翔太の？」

思ってもいなかった答えだったらしく、圭介さんが鸚鵡返しのように
に呟いた。

「そう。なんか少し暗い雰囲気で、どうしたのかなって思ったら手
が凄く冷たくて……」

「握ったの?!」

え、突っ込みどこはそこ?!

いきなり身を乗り出してきた圭介さんの勢いに、少し状態を後ろに
下げる。

狭い車内、あまり意味はないけれど。

「握ったっていうか、まあ。流れで」

「流れって……」

そう呟く圭介さんの顔が、なにやら小言を言いそうな表情に見えて
慌てて話を続けた。

「で、部屋に上げた後、食事の支度をする私を見て“こーいの、
いいな”って」

「こーいの？」

「うん。それでね、考えたんだ。翔太って、何だかんだいってまた
十七歳でしょ? 母親って言うか、家庭の雰囲気は懂れてるのかな
って」

「家庭の……」

一緒に住んでる圭介さんには、あまり言い言葉とは思えない。けれども。

「……詳しくは知らないし、聞き出そうとも思わないけれど」

そう言つて、一度口をつぐむ。

実は、ずっと気になっていたことがある。

土曜日、圭介さんに聞いた言葉。

「圭介さんと翔太のお母さんつて、別の人……なんじゃないかなつて」

斜め上で、圭介さんが息を呑む音が聞こえた。

「それ、誰かに聞いたの……？」

少し、声が強張っているのは聞き間違いじゃないだろう。

「違う。土曜日、お弁当の話をしていた時に“翔太の母親が作る卵焼きは、確かに甘くなかったからね”つて、圭介さん言つてたからじゃあ、圭介さんのお母さんの作る卵焼きは違ったのかつて、普通に思っちゃつて。後から気付いたの」

圭介さんは一瞬目を見開いて、力が抜けたように座席に深く背を預けた。

「そつか。無意識に酷いことを言つてたんだな」

「酷いとは思わないけど。それに気付いた上で翔太の様子を考えたら、一緒に食卓を囲むっていうのも在りかなーとか思つて」

翔太自身気付かなくても、そういう雰囲気を求めているのかなって思った。

そういえば、少し暗かったのも理解できる。

家庭の雰囲気求めている人の唯一の家族である圭介さんを、土曜日独り占めしてしまった私に独占欲を刺激されちゃったのかもしれないし。

そう伝えると、確実にそれは違うと却下されちゃったけど。

圭介さんは少し困ったように眉を顰めて考え込んでいたけれど、しばらくして顔を上げた。

「それでも、由比さんに掛かる負担を考えると……」

「ううん。私もね、一緒にご飯食べられたらなって思う」

圭介さんの言葉を遮るように、口を開いた。

「私、ご飯食べてもらえるのが嬉しいっていったでしょ？ もし、

一緒に食べられたらもっと嬉しいなって思う」

そう言って、脳裏に浮かんだ記憶をゆっくりと沈める。

一度目を瞑って気持ちを落ち着けてから、再び目を開けた。

「私ずっと一人で食べてるから。自分の作った食事を、二人と一緒に食べられたら嬉しい」

そう言って、圭介さんが負担に感じないように目を細めて笑顔を作る。

「でも……圭介さんと翔太の中に、私が入るの、やっぱりおかしいかな」

優しい圭介さん、明るくて元気な翔太。

仲のいい兄弟の中に、他人の私が入ったら……

その考えは口に出さなくても、圭介さんには伝わったらしく。
ぽんぽん、と頭に優しい重みが加わった。
数回バウンドして、頭の上から降りていく。

顔を上げると、圭介さんの優しい目が私を見ていた。

「おかしくないよ、由比さん」

「圭介さん……」

私の言葉を聞いてにこりと笑うと、シートベルトを締めた。

「妹だつて言つたでしょう？ 例えそういう括りをしなくても私達にとつて大切な人だから。由比さんは私達家族の、一員だよ」
家族の、一員。

その言葉に、感情が溢れる。

圭介さんに分からないように、窓のほうに顔を向けた。

「ありがと、圭介さん」

「いいや、こっちこそ。でも……」

そう言つた声音が、最初の強気な圭介さん声になつていて顔をそちらに向ける。

「もし翔太と二人だけでご飯食べる時は、うちで食べて」
「？ なんで？」

意味が分からない。

作ること考えたら、うちの方が楽なのに……。

ここまで言ってもやっぱり圭介さんの過保護は揺るがせないのか？

と、内心溜息をついていたら。

その理由を思いついて、ぽんつと手を叩いた。

「そういうこと」

いきなり呟いた私の言葉に、圭介さんが不思議そうな顔をしていてその腕を軽く叩いて、笑い声を上げる。

「大丈夫だよ、圭介さんっ」

思い浮かんだその理由に、なるほどなるほどと自分で納得。

「翔太、大事だもんね？」

「え？」

駅のロータリーに車を停めて、再び私を見た圭介さんに思いつきり笑いかけた。

「大丈夫！　いくら翔太が可愛いからって、襲ったりしないから！」

「……は？」

真顔で聞き返されて、再び口を開く。

「大丈夫だよ、圭介さん。そんな心配しなくても！」

グツと親指を立てて、目の前に突き出す。

そうだよね。

いくら妹とか言ってくれても、実の弟が一番大切だよねっ。

「……」

圭介さんは大きく息を吐き出すと、はははと乾いた笑いを零した。

「私も翔太も大変だ」

「え？」

声が小さくて、聞き取れない。

顔を覗きこむように聞き返すと、なんでもないよと笑われた。

「それは圭介さんに同情一票」

「え、なんで」

お昼休み。

いつもどおり屋上に出てきた私は、お弁当を食べながら朝の顛末を桜に話した。

桜の反応は、私に冷たいものでした。

「疑問に思う方が、鈍いと思います」

「え、鈍いとかそういうことなの？ ていうか、なんで敬語？」

半目で私を見る桜の表情からは、私への呆れしか読み取れない。

「俺も、圭介さんとやらに一票」

「え？」

いきなり横から降ってきた声に驚いて顔を上げると、そこには工藤主任の姿。

その後ろには、皆川さんもいた。

「あれ、皆川さん。今日は食堂じゃないんですか？」

いつも食堂を使っている皆川さんは、工藤主任が持っているコンビ二袋を指差してニコリと笑う。

「ワイロに釣られてやってきたのよ」

「ワイロ？」

工藤主任と皆川さんは私達の前に座ると、袋の中から昼ごはんを出

した。

サンドイッチやおにぎりが、ごろごろといくつも広げたビニールの上へのせられる。

「いやあ、上条さんと話したくて。昼休憩以外で話しかけたら、おかしいだろ?」

じゅーぶん、この状況もおかしいと思いますけどね。

……でも

私はきよろりと辺りを見渡してから、あまり人がいないことを確認して口を開く。

「桐原主任はどうしたんです? 一人ご飯ですか?」

工藤主任がいれば、一緒に食べてることが多いのに。

おにぎりのラップを外していた工藤主任が、苦笑気味に肩をすくめた。

「流石に桐原をつれてくる度胸はないよ、俺には。まあ、あまり人もいない屋上だし大丈夫な気もするけど」

「大丈夫なわけないでしょ、まだおさまって一週間足らずなのに。

馬鹿じゃないの」

「お前の馬鹿じゃないの攻撃は、桐原にしか発揮されないと思っていた……」

シヨックを受けている工藤主任はさておかれ、皆川さんの視線は私へと向く。

「あのね、私も圭介さんの意見に一票よ」

真面目な表情の皆川さんを、思わず見返した。

「皆川さんもですか?」

私の味方がいない!

皆川さんはサンドイッチを食べながら、けれどゆつくりと確実に頷いた。

「可愛いからって、翔太くんも男の子だものね。先生でもあるわけだし、圭介さんも一応気にしてるんじゃないかな。あまりにも上条さんが無警戒だから」

「無警戒？ 私だって、いくらなんでも警戒くらいはしますよ」
え、そうなの？ という全員の視線は流しておこう。

「襲っちゃったら、ご近所付き合いどころじゃないですからね」
ふむ、と自分の言葉に納得するように頷く。

「え、そうなの？ 由比、ちゃんと分かってるんだ」

桜が驚いたように持っていた箸を弁当箱の上に落とし、工藤主任はうんうんと何度も頭を縦に振り、皆川さんは感極まったように私の頭を撫でた。

「上条さんも、ちゃんと成長しているのね？ ああ、おねーさん嬉しい」

……その言い方は、私うれしくありません。

なにさー、皆して馬鹿にして。

そりゃ、警戒くらいするよ！

「工藤、書類に判をくれ」

内心不貞腐れていたら、突然後ろから声が振ってきて背筋が伸びた。その声は。

「……桐原」

工藤主任が、少し驚いたように私の後ろ……桐原主任を見上げた。

「食堂で飯食うんじゃなかったのかよ」

「午後一提出の書類、お前判子押さずによく人に机に置きっぱなしにできたな」

ひらりと頭の上で手渡しされる書類を視線で追いながら、私の心は少し沈みこんでいた。

——私の、自己満足。

金曜の夜、気付いた、桐原主任への酷い仕打ち。

何も言う事も出来ず、ただ工藤主任と桐原主任が頭の上でやり取りしているのをずっと聞いていた。

軽く謝りながら手渡された書類に判子を押す工藤主任の手元を見ていたら、ぼそり、と小さな声が降ってきた。

「誰が、誰を襲うと思ってる？」

……

「え？」

問われた内容に自分に向けられた言葉と気付いて顔を上げようとして、それは制された。

「そのままです。主語述語つきで、もう一度言ってみる。さっきの言葉」

周りには聞こえないくらいの小声だけれど桜たちには聞こえているのか、工藤主任が判子をしまう動作が遅くなった。

意味はよく分からないけれど、そのまま手元を見つめながら言われ

たことに返答する。

「私が翔太を襲っちゃったなら、ご近所付き合いどころじゃない」

「……」

頭の上から、呆れたようなため息が聞こえて。

「お前今日当番だったよな」

まったく違うことを聞かれて、思わず是と答える。

「倉庫にいる」

それだけ言っていると、工藤主任から書類を受け取って桐原主任は屋上から出て行った。

階段を降りていく音に、思わず体から力が抜けた。

頭を上げると、私を見る三人の顔。

眉を顰めると、皆川さんが手を伸ばして私の頭を撫でる。

「……うん、気をつけようね。いろいろと」

可哀想な子を見るような、その目はなんなんだーっ。

夜、当番が終わった後。

地下の倉庫に行った私は、入った早々怒られた。

「何で来るんだろっな、お前は」

ドアをあけた途端言われた言葉に、思わずむっとして言い返す。

「桐原主任が言ったんじゃないですか。倉庫にいるって」

わざわざ呼び出すくらいだから、何か用があるのかとっ。

倉庫の中で整理をしていたのだろう桐原主任は、書類の並んだ長机に軽く腰を掛けて私を見下ろした。

「言われたからって振ったばかりの男に会いに、誰もいない倉庫に来るか？」

……その言い方って、なんか嫌だな。

「用がないなら、帰りますよ」

「用ならあるさ。俺も圭介の言うことに一票ってな」
なにそれ。しかも、呼び捨てですかい。

「それだけですか？ そんなの、昼に言えいいことなのに」

「お前がどれだけ鈍いか、お前自身に知ってもらいたかったからな」

「鈍い？」

「鈍い」

どこが。

ふう、と溜息をついて立ち上がった桐原主任が、私の方に近づいてくる。

それをじっと見ていたら、目の前まできた主任に頭を軽く叩かれた。ていうか、軽くても結構痛いよ、ちよっとっ。

叩かれた頭を押さえながら睨みあげると、呆れたように大きく息を

吐かれた。

「少しは警戒しろ。ったく、なんで俺がこんなこと言わなきゃならねえんだ」

「警戒なら、充分してますって」

「俺を襲わないようにって？」

「……襲いません。どんな間違いがあるうとも」

……なあねずみ、そう溜息とともに言われてきょとんと見返す。

久しぶりに呼ばれたなあ、その名前。

桐原主任は眉間に皺を寄せて、口を開く。

「反対を思え。俺に襲われるかもしれないだろ」

「はあ？」

思わず半目で、桐原主任を見返した。

「私相手に、ですか？」

「お前、俺がお前のことを好きだって言ったの、もう忘れたのか。ああそうか、ねずみだけに脳みそが……」

「……主任」

それが、好きだった人間に言うことが。

「分かりました。桐原主任には、警戒することにします」

人が罪悪感に苛まれているというのに、からかうために呼んだって？

「それもそうだが、頼むからあの二人にも少しは警戒しろ」

二人って……、話の流れ的に昼の内容だと考えれば、指す人は分かる。けど――

「でも、翔太も圭介さんもお隣さんだもの」

「だからなんだよ」

切り替えされて、思わず黙る。

「お隣でも、男は男だろ」

ふと、その言葉に昨日の翔太が脳裏に浮かんだ。

穏やかに笑う、翔太。

暗い雰囲気、翔太。

警戒？ する必要は無い。

翔太は、家族を求めているように見えるから。

「圭介さんも翔太も、そんな事する人達じゃないから。大丈夫ですよ」

「上条……」

「桐原主任、見えないけど優しいんですね。分かってますよ」
にこりと笑うと、怪訝そうな表情をされてしまった。

「なんだ気持ち悪い」

「心配してくれたんですね？ ありがとうございます」

「……ホント気持ち悪いな」

そう言って片手で口元を押さえると、そっぽを向いてしまった。

おお、照れてる照れてる。

思わず笑いそうになりながら、私はドアノブを掴んだ。

「本当に大丈夫ですから、ありがとうございます」

ドアを開けて振り返った私は、もう一度頭を下げてそこを後にした。

「……………あー……………」

中に残された桐原は口を押さえていた手で頭をガシガシとかくと、
先ほどまで書類整理をしていた机に腰を掛けた。
そのまま両手で頭を抱える。

「すげえ……………未練」

情けねえ……………、そう呟いた声は誰もいない倉庫に微かに響いた。

圭介・1

「おはようございます、遠野先生」

「おはようございます」

職員室の自分の席に座りながら、隣の溝口に挨拶を返した。

圭介はスーツの上着のボタンを外しながら、手帳を鞆から出す。

「遅かったですね、今日は。遅刻でもするのかと思いましたよ」

溝口はジャージの袖を捲くりながら、珍しそうに圭介を見る。

圭介は鞆を手にしたまま、溝口に答えた。

「ええ、少し用があつて。間に合つてよかつたです」

「用ですか。ああ、そういえば弁当の彼女は、学祭に誘えたんですか？」

そう言つてひょいっと圭介の鞆を覗き込んだ溝口は、あれ？ とでも言うように首を傾げた。

「今日は弁当なしですか？」

言われて、そういえば貰つてないなと気付いた圭介は、それでも表情は変えずに頷いて鞆を足元にしまう。

「いつも頂けるわけではありませんから」

「そうなんですか？ 持つてくるようになってから、一日も欠かしたことがなかったのに。あー、けんかでもしました？」

不思議そうだった溝口の顔がニヤついたにも関わつたのを見て、圭介は手帳に目を落とすと今日のページを開いた。

「してはいけませんよ、喧嘩なんて」

そう言つた圭介の顔は穏やかなはずなのにとても冷たく、溝口は肩を竦めて会話を止めた。

月曜日ということもあっていつもより長い時間掛かった朝礼を終え、圭介は準備室に移動した。

ここは社会科科目を受け持つ教師が使っている部屋で、圭介以外にも世界史・日本史担当教師が机を並べている。

地理や倫理の教師は資料室を挟んだ、隣の準備室を使っている。

今日は圭介以外は一時間目から授業があるらしく、誰もいなかった。準備室にいるか職員室にいるかは各々の仕事や都合にもよって違うから、ただ単にいないだけなのかもしれないが。

圭介は自分の席に腰を降ろすと、上着から携帯を取り出して机に置く。

そして二時間目にある三年の授業の用意をしようと、机の引き出しを開けた。

「……」

引き出しを開けたまま、目に入ってきた紙切れに体の動きを止めた。溝口の冷やかしが脳裏に甦って、思わず眉を顰める。

指先でそれをつまみあげると、身体を起こしながら引き出しを閉めた。

目と同じ高さにそれを持ち上げて、反対の腕で頬杖をつく。

午前中の明るい日差しに、チープな手作りの学祭のチケットが晒される。

それをしばらく見てから、圭介は机の上に放った。

ひらりと、机の上に落ちる今はもう必要の無い紙切れ。

そのまま背もたれに体重を預けて、背を逸らす。
天井を見上げて両腕を伸ばすと、それを下ろすと共に息を吐き出した。

由比に渡すつもりだった、学祭のチケット。

溝口に言われたからではないが、由比の気分転換にでもなればと用意したもの。

もう、用無しとなってしまうたけれど。

自分が渡す前に、翔太が由比を誘ってしまったから。

しかも、一緒にまわるらしいことを翔太は言っていた。

驚かせたいから、クラスの出し物を秘密にしたいと楽しそうに言っていた。

楽しそうに……

机の上の、チケットに視線を移す。

楽しそうに……

そして――

手を伸ばしてチケットを手にとると、くしゃりと握りつぶしてそれをゴミ箱に放った。

軽い音を立てて、足元のゴミ箱にそれが落ちる。

楽しそうに……

そして――

俺の反応を、窺うように。

ごみを放った手で、机の上の携帯を手取る。
ボタンをいくつか操作して、昨日翔太から送られたメールを表示させた。

土曜日、由比を誘って道の駅に行ったのは、あまりにも様子がおかしかった彼女の気分転換になればと思ったから。

けれどそうであるならば、翔太のいる日曜日に行ってもよかった。ある意味、その方が翔太にとってはよかっただろう。

けれど実際は翔太がクラスの用事で出かけた後、彼女と二人で出かけた。

きっかけは、偶然ベランダで聞いた彼女の独り言だったにしても、きつと買物なり何なり理由をつけて連れ出していただろう。

どうしても、由比の悩みを取り除いてやりたかった。
由比のためと言うよりも、半分以上、自分の為に。

苦しむ彼女の姿を見ていたくなかった。
悲しむ彼女の姿を見ていたくなかった。

それ以上に――

誰かのことで悩む彼女を、見ていたくなかったから。

だから詰め寄ってしまったし、泣かせてしまうほど追い詰めた。けれどそのおかげで、彼女の感情を見ることができた。いつも、笑顔に隠している“何かの感情”の欠片を。

彼女は、俺の言葉から翔太の背景に気付いた。

それほど、他人の言葉や感情に敏感なところがあるんだと思う。似てる、と思った。

誰に――？

――それは……、翔太に

自分の所為ではないのに、周囲の環境の影響で自分を隠すことを覚えてしまった翔太に。

こちらの思考の先回りをして、自己完結してしまう。
笑顔を盾に隠すことを武器に生きているのだろう。

翔太も、彼女も。

きつと、翔太がそうなった原因があるように、彼女にも何か理由があるのだろう。

でなければ、十六歳から女の子が……言っではなんだが、あんな古いアパートに住むだろうか。

最初に彼女に会った時アパートに面している川を見て、この綺麗な風景を見てこのアパートに住むことを決めたといっていた。

そしてその後の会話の中で、すでに六年住んでいると。

今、由比さんは二十二歳。

六年前といえば、十六歳。高校一年もしくは二年。

今の翔太よりも若い年齢で、すでにあのアパートに住み始めていたということ。

普通に考えて、やはり何かしら家庭の事情があるんだと思う。

それに――

今朝自分が言った言葉に、心から嬉しそうな表情を浮かべていた。
俺に気付かれないように窓の方を見ていたけど、サイドミラーに映

っていたのは泣きそうな笑顔だった。

本当は、今、自分が由比に持っている感情が、家族愛ではないことは分かってる。

けれど、俺と翔太の中に家族として入りたいというその言葉に、妹だと言葉が出てしまった。

由比の望む言葉を、口にしてしまった。

その言葉は、……“家族の一員”。

翔太だけじゃなく、由比もまた大切な家族の一員だとそう伝えた時の幸せそうな表情。

そして幸せだけではなく、胸を締め付けられそうなくらい切なく寂しい表情。

嬉しそうに、食事を作ってくれる由比。

負担も大きいだろうに、それがとても嬉しいと幸せそうに笑う。

何が、彼女をそうさせるのだろう。

その心の中にある感情を、いつか開放できる日が来ればいい。

……その時、傍にるのが自分であればいい。

そこまで考えて、手元の携帯に目を落とした。

——圭介、俺、今日から由比んちで飯食うことにしたから。圭介が何を言おうと、もう、部屋にいるし

挑発的な、メールの内容。

起きたばかりの頭は、なかなか理解してくれなくて。

一瞬真っ白になってから、思わず部屋を飛び出していた。

前日、俺に言い聞かせるように由比を好きだと繰り返していた、翔太。

その真剣な表情と声が、一瞬、脳裏に甦った。

そして、由比さんの笑顔も。

てつきり、翔太だけがそうするのかと、そしてそれを由比が了承したのかと思って駆け込んだのだけれど、それはまったくの杞憂だった。

反対に、翔太には何か気付かれてしまったのかもしれない。自分でも、まだ分かりかねていたこの感情を。

「妹……、か」

そして、今はもう……理解し始めているこの感情を……。

妹と、由比の存在が、どうしてもイコールにならなくなってきた。

最初感じた違和感が、どんどん大きくなって。

そして昨日の翔太のメールを読んだ時の自分の行動と感情で、それを理解してしまった。

その感情に名前がついてしまった。

なぜ、土曜日に彼女だけを連れ出したのか。

なぜ、彼女を過保護にしてしまうのか。
なぜ、他の人の為に悩む彼女を見たくなかったのか。

——自分が誘おうとして、翔太に先に越されてしまった。
——自分の知らないところで、傷ついて欲しくなかった。
——他の男が、心を占めているのが許せなかった。

“もし翔太と二人だけでご飯食べる時は、うちで食べて”

翔太が、由比の事を好きだということを知っているから。
由比の部屋で二人にはさせたくなかった。
押さえ込んでいる感情を、翔太が吐き出してしまったら。
どうなるかなんて、考えたくはないけれど。

「兄、失格かなあ」

思わず、声に出して呟く。

大切な大事な弟。

翔太を守るために、二人で暮らしているのに。

その弟が好きだと言う彼女を……由比さんを……

“俺、由比が好きなんだ”

そういいながら、俺がどんな反応を示すのか、どんな言葉をつづの
か窺っていた翔太。

「他の男に嫉妬してしまうくらいには……、俺も由比さんが好きみたいだよ」

それが答えだ。

……翔太。

翔太・1

呆けている間に、一時間目が終わってしまったらしい。

翔太は授業内容の全てが頭から通り過ぎてしまった現国の教科書を、ぱたりと閉じた。

後で、誰かにノートを借りなきゃ……そんなことを考えながら、ふと周囲に視線を向ける。

クラスが、少し騒がしい。

時間割に目を向けて、それに納得した。

二時間目は、日本史……圭介が担当する教科だ。

圭介の授業の前は、いつもそう。

当てられても絶対に間違えないように仲のいい奴らで課題の答え合わせをしたり、あわよくば写メを撮るためにどうやったら音を誤魔化せるか話し合っていたり。

日本史は二人担当教師がいるから、圭介の担当から外れたクラスはあからさまに落胆するし担当になったクラスはあからさまに喜ぶ。

もう一人の日本史の教師はもうすぐ定年を迎える穏やかな男性教師で、残念がるクラスを担当することになるけれど別に嫌な顔はしない。

毎年担当の発表の際、学生の反応を面白そうに見守っている。

学生も落胆はするけれど別にもう一人の教師を嫌っているわけではなく、少し時間がたてば穏やかなその教師に懐いていく。

それだけ女生徒に人気があれば同僚の男性教師や男子学生に反感を

もたれそうなものだけれど、そんなことはない。

弄られることはあっても、嫌がらせをされることはまったくいいほどない。

それもこれも、圭介の人柄の所為。

穏やかでそれでいてしつかりとした圭介の人柄に、皆、納得するらしい。

圭介本人は、人気があるということにあまり気がついていない節があるが。

恋愛感情とかじゃなく、先生を慕ってくれる可愛い学生、位にしか思っていない。

だから、嫌われたりしないということでもあるんだろうけど。

「翔太くん」

自分の思考に沈んでいた翔太は、横から声を掛けられて意識を現実
に引き戻された。

顔を上げると、そんなに離れていない場所にクラスメイトの顔。

「沢渡さん」

無表情だっただろう自分の顔に、ゆつくりと笑みを貼り付ける。

可愛くて優しくて、なんでも許容してくれそうな“遠野翔太”の表情を。

名前を呼ぶと、沢渡はにこりと笑う。

「どうしたの？ 授業中もぼうつとしていたでしょう？ 先生も気

付いていたみたいだけど、仕方ないなって笑ってたよ」

その言葉に、内心舌打ちをする。

変に、圭介に言われなきゃいいけど。

「少し昨日夜更かししちゃったんだ。で、何か用？」

八つ当たりになってしまつて分かつていても、今、他人の声を耳に入れたくない。

特に、沢渡のように自分を引き立てるために俺を利用しようとするような奴の声は。

さっさと用事を聞き出そうとする俺に、沢渡は微かに唇を震わせたけれどすぐに笑顔を浮かべた。

「あのね全然シャーペン持ってなかったから、ノート書いていないのかなって思っで。よかつたら使っで？」

そう言っで机に置かれたのは、女の子らしいピンク色のノート。可愛らしい丸文字で、名前が書いてある。

俺は机においていた両腕を動かさずに、そのノートから視線を外した。

「ありがとう、沢渡さん」

その言葉に顔をほころばせた彼女に、すぐ言葉を繋げる。

「でも、大丈夫だから」

「え、翔太くんっ？」

そのまま立ち上がると、悲しそうな表情で俺を見上げる彼女を見下ろす。

「僕、職員室に用があるから。ごめんね」

それだけ言っで、ノートに一度も触れず教室を後にした。

翔太はなんとなく適当に歩きながら、ぼうつと窓の外を見る。

自分の歩くのと同じくらい早さで、後ろに流れていく風景。

特に何の用事があるわけじゃない。

けれど、今は、誰とも口を聞きたくなかつた。

……特に、自分を見ているような沢渡とは。

由比の前では、素の自分でいたい。偽りだらけの遠野翔太じゃなくて。

そんなことを考えながら横を向いて歩いていたら、窓が途切れ視界に壁が映った途端、頭の横を衝撃が襲った。

「いてえっ」

思わず叫んで、両手で頭を抱えてしゃがみこむ。

何が起こったのかわからず、衝撃に目が霞んだ。

ずきずきと痛みを訴える頭の左側を押さえて涙目になりながら視線だけ上げると、廊下側に出っ張った柱が目映る

……うわ、だせえ

そう舌打ちをした時だった。

少し離れたところから駆けてくる足音に気付いて、視線を上げた。それは生徒が履く上履きのゴム底の音ではなく、ぺたぺたというサンドルの音。

まだ少し霞んでいる視界に、サンダル履きの足とひらひらと翻る白衣が見える。

……あー、なんつータイミング……

その人物が誰かに気がついた俺は、本気で頭を抱えなくなった。

サンダル履きの足は翔太の目の前で止まり、しゃがみ込む。

「大丈夫か、翔太」

ああ、やつぱり。

翔太はまだ痛む頭を片手で押さえながら、なんとか口端を上げて目一杯強がる。

「大丈夫ですよ、とーのセンセ」

こんな馬鹿なとこ、見せたくないよ……
いかにも何かを気にしてる見たいなさ。

内心こんなタイミングで現れないでよと八つ当たりしつつ、翔太は頭に当てていた手を下ろした。

まだ勢いよく痛みを訴えているけれど、この際我慢するしかない。さつさと教室に戻らないと、圭介に心配されるのもなんだか嫌だ。上げた視線の先、見慣れた顔の圭介が心配そうに眉を顰めている。それを見て罪悪感が少し浮かぶのは、昨日一昨日と、圭介の心情を探るような行動や言動をしてしまったことを自覚しているから。そんな行動をしているにもかかわらず、踏み込んでいけない自分を知っているから。

翔太は気付かれないように息を吐きながら立ち上がると、いつもの表情に戻る。

少し強張り気味なのは、仕方ない。

「大丈夫だから教室戻るわ。んじゃ……」

そう言って歩き出そうとした翔太の腕を、圭介が掴んだ。

動きを止められた衝撃で頭がクラリとした翔太が無意識に頭に手をやると、掴んだ腕を離れた圭介が背中を軽く叩いた。

「厚生室に行こう」

そう言って、覗き込まれる。

翔太はとっさに顔を上げて、片手を前に突き出した。

「大丈夫だよ、んな大げさな。圭介は過保護すぎなんだよ」

冗談じゃない、なんでこんなことで厚生室に行かなきゃならないんだ。

歩き出そうとしていた圭介はその足を止め、ゆっくりと振り返った。

その顔は、優しい笑顔だというのに物凄い威圧感で。

「行くよ、翔太。それとも、姫抱っこでもしてあげようか？」

……逆らえないのは、仕方なかったと思います↑後日談

養護教諭は用事があるらしく、表のドアに“職員室にいます”という大きな文字の書かれた紙が貼ってあった。

圭介は首を少し傾げながら厚生室に入ると翔太をベッドに促し、自分はいきなり氷嚢を作るべく冷凍庫から氷を出す。

翔太は大人しくベッドに入りながら、上体だけ起こして溜息をついた。

これで、次の時間休み決定だな。

「痛むのか？」

氷嚢に氷を入れながら、圭介が話しかける。

翔太は曖昧に返事をしながら、手を伸ばした。

「自分でやるから、圭介は授業に行つてよ」

「はいはい」

氷嚢の口を閉じた圭介は、それを持ってベッドの傍まで歩いてくる。そのまま氷嚢を翔太に手渡す。

翔太はそれを受け取って打ち付けたところに寄せると、圭介から視線を外した。

情けない。

大人になりたいと、由比や圭介と同じ場所に上がりたいと思っ
ながら、感情に左右されすぎる。

その状態を見られてしまったのが、情けなさすぎる。

「翔太」

動く気配の無い圭介はベッドの横に立ったまま、翔太を見下ろして

いて。

少し逡巡した後、傍にあった椅子に腰を降ろした。
見えなかった圭介の顔が視界に入って、翔太は視線だけそっちに向ける。

「何？」

小さく答えると、圭介は目を細めて微かに笑った。

「私も、由比さんの事、好きだよ」

「え……」

なんのタイミングでもなくいきなり言われた言葉に、翔太は口を開けたまま圭介を見返した。

圭介は、相変わらず笑んだままじっとこっちを見ていて。

「なんで、いきなり」

翔太はいささか混乱したまま、呆けたように圭介を見つめる。

「昨日、気がついたばかりだから」

「は？」

昨日？ あれだけ由比のことを過保護にしながら、気がついたのが昨日？

圭介は翔太の言いたいことに気がついたのか、自嘲気味に溜息をつく。

「こんなに自分が鈍いとは、思わなかったよ」

頭の痛みより圭介の言葉に頭が真っ白状態の翔太は、戻ってきた意識下で“鈍いだろ、いつも”と思いながら見開いていた目を少し伏せた。

「だからって、俺に、言わなくても、いい……だろ」

切れ切れになっている自分の言葉に内心舌打ちしながら、じっと手元を見つめる。

圭介は少し照れたように笑いながら、翔太の頭に視線を移した。

「土日、私に対して挑発まがいなことを言ったり行動をしたりする割には、罪悪感を感じてるみたいだから。可愛いなあと思って」

「……うるさいな。可愛いって何だよ！」

自分の心情を見通されていたことに、翔太の顔は余計下を向いていく。

恥ずかしさに顔が熱くなりそうで、持っていた氷嚢を頬にずらして圭介の視界から頬を隠した。

「ていうか、わざわざ言わなくても」

それだけ、自分に自信があるってことか？

捻くれそうな心情で思わず言い捨てるように呟いた言葉に、圭介は笑った。

「お前が先に宣言したんだろう？」

「……そりゃそうだけど」

普通、先に好きだって言ってる奴相手に、俺も好きになったとか言うかよ。

「大体、弟相手になんで遠慮しなきゃいけない？」

その言葉に、翔太の中で感情が昂ぶって……急速に冷えた。

“ 弟 ”

圭介が簡単に発するその言葉は、翔太には少し重い。

なぜなら……

「例え半分しか血が繋がっていなくても、お前は私の弟だろう？
なら、遠慮はしないよ。翔太もすることない。我慢する間柄でもな
いだろ」

冷えた感情に、圭介の言葉が広がる。

“弟”

思い出したくない、過去。

忘れない、過去。

半分しか血の繋がらない、圭介と俺。

圭介にとって、疎まれてもおかしくないのに。

笑って、俺を“弟”と言ってくれる。

我慢する間柄ではないと、言ってくれる。

翔太は目を瞑って、感情を押さえ込む。

圭介には、勝てない。

——でも。

「……由比は、どっちを選ぶかな」

「さあ、どっちも選ばないという選択肢もあるしね」

圭介は笑いながら、椅子から立ち上がる。

「このまま休んで、三時間目から戻るんだよ。いいね？」

「……はいはい、過保護遠野せんせい」

それにうるさいよと言葉を返して、圭介は出入り口のドアに手をかけた。

翔太はその背中に、声を掛ける。

目一杯、意地悪そうな声で。

「圭介は、確実に鈍いよ」

振り向いた圭介は、そうかなあと首を傾げながらドアの向こうに消えた。

廊下を歩いていくサンダルの音が、遠くへと消えていく。

「まったく、嫌になるほど“いいおにーちゃん”で」

翔太は窓に視線を向けて、溜息をついた。

「ほう、ついたー」

バス停から歩いて、ほんの少し。

見覚えのある、正門の傍に立った。

翔太と圭介の通う高校に、到着。

翔太たちの高校の学祭は、珍しく七月の初めに開催される。

この後すぐに期末考査なんじゃないかと思いつつ圭介さんに聞いてみたら、案の定、二週間後から突入だそうだ。

翔太たち学生は大変だねって言ったら、生徒の面倒を見ながらテスト問題を作らなきゃいけないのもなかなかのものだよ？ と、珍しく言い返されてしまいました。

笑顔だったけど。

——うん、疲れているようです。

結構引くよ。

笑顔だけど、目の下のクマって。

学生の頃は気づかなかったけど、先生って大変なのねえ。

圭介さんに許可してもらってから、用事のない土日はほとんど、平日は私が帰るのが早ければうちでご飯を食べるようになった。

それによって、変わったこと。

うちのリビングに、ちっちゃいホワイトボードが置かれるようになった。

りました。

予定表です（笑

一緒にご飯を食べられる日に丸を書く。

ついでに、ご飯のリクエストや献立を書き込んだりもする。

ドタキャンになりそうな時は、メール連絡になってます。

楽しそうに書き込む翔太の姿が面白くて笑ったら、リクエストを物凄く書かれてしまったけど。

玉子焼きは外さないらしい（笑

圭介さんも翔太ほど見えないけれど、やっぱり楽しそうで。

なんというか、おままごとみたいだなんて思う。

家族ごっこというか。

本当に家族じゃない私を受け入れて、“ごっこ”をしてくれる二人に本当に感謝。

そんなことを考えながらジーンズのポケットから携帯を取り出して、翔太にメールをする。

到着を知らせるメールだったのだけれど、すぐに折り返し電話が来た。

「由比？ 今どこら辺？」

「正門前。どこに行けばいい？」

そう。未だに翔太のクラスを、教えてもらえないのだ。

一体、なんなのか。

そこまで隠したいクラスの出し物って、なにさ。

翔太は歩きながら電話をしているのか、微かに足音が聞こえてくる。ふそのまま校舎の中に入って、五階の右端から二つ目の教室に入ってきてくれない？」

「右端から二つ目の教室？」

なんで……と口にしたときには、すでに電話は切れていた。

……一体なんなんだ。

よく分からないまま、言われた通り正門から一番近い昇降口から校舎内に入る。

十一時をすでに過ぎているから結構な人出で、校舎内にもパンフレットを持った確実に生徒じゃない人たちが沢山歩いている。

自分の高校の学祭なんて模擬店もないくらい身内だけの催しだったから、賑わっているのが珍しくて面白い。

最近色々なことがあったから、気持ちを高揚させてくれるこの雰囲気がとても心地いい。

そついうのもあって、翔太は呼んでくれたのかな。

腹黒だけど生意気だけど、周りに気を遣っているのは接していてよく分かるから。

気分転換に連れ出してくれた圭介さん、こうやって呼んでくれる翔太。

本当に、いいお隣さんを持ったよ私。

そんなことを考えながら、五階まで上がって右端へと歩く。

特別教室の並んでいる階らしく、ほとんど人がいない。

「被服室って、手芸部とか展示とかやらないのかしらね」

しんと静まり返っている被服室に視線を向けながら、言われた教室の前に立った。

そこは……

「図書準備室……」

一番奥は図書室らしく、やはり人気はない。

え、ここでいいの？

勝手に準備室とか入っていいわけ？

躊躇していたら、突然目の前のドアがガラリと開いて飛び上がる。

「何してるの、由比」

驚きに後ろに飛びのいた私の目に映ったのは、開いたドアからのぞいた……翔太だった。

目を丸くさせている私を面白そうに笑いながら、少し身体をずらし、準備室内に私を招き入れる。

「え、入っていいの？ 私、部外者なんだけど」

何か催し物をしている教室ならまだしも、確実に使っていないだろう準備室に……。

翔太は大丈夫と繰り返して、ドアを開けたまま中に戻っていく。残された私は逡巡しつつ、廊下に人影もないからいいかと準備室に入る。

ドアを閉めると、今まで聞こえていた微かな喧騒も耳に届かなくなつた。

「迷わずにこれた？」

窓際においてある紙袋を、ごそごそさせていた翔太は、こちらを見ずに話しかけてくる。

「はは、バス乗ってきた」

「え、バス？」

驚いたような声を上げて、翔太が振り返る。

「うん、だって迷ったら嫌だし」

そうついいながら、視線は翔太の手に釘付けになった。

「それにしたって、歩いて五分くらいなのに。どんだけだよ」

そう翔太は笑うけれど、それよりも気になるんですが。その手に持つてるもの。

「翔太。その、手に持つてるものは、何？」

「え？」

私の声に、翔太は自分の手に持つものを胸の辺りに持ち上げた。

一瞥して、もう一度私を見る。

「制服」

端的な言葉に、そんなことは見りや分かると裏拳で突っ込んでみる。そうじゃなくて。

制服は分かってただけど。

「翔太、それ着るのがクラスの出し物？」

翔太はにっこりと……久しぶりに見る腹黒笑顔で、私の方にその制服を突き出した。

「俺じゃないよ、由比が着るんだよ？」

言葉とともにひらりと広げた制服は、紛れもなく女子高生の制服で。

「……」

——翔太が変態になったああああっ

思わず、一步後ずさる。

腹黒笑顔満載の翔太は、同じ様に一步私に近づいてくる。

「大丈夫だよ、似合うから」

「突っ込みどころは、そこじゃない!」

裏拳したいけど近づきたくないの、諦め。

似合うとか似合わないとか、そう言うんじゃない!!

「翔太、ちょっと考えてみようよ」

なんとか、このお馬鹿高校生を宥めなければ。

「なあに?」

……可愛らしく小首傾げても、今更だからっ。

君の腹黒さは、この二ヶ月あまりでだいぶ理解したからね!?
右手を前に翳して、思いつきり振る。

「無理だから、ありえないから! 二十二歳、私これでも高校卒業してから年数たってるから!」

せめて十九歳辺りなら、……いやいやそうじゃなくてっ!
高校卒業したら、制服はないでしょう? まずいでしょっ!

「恥ずかしかったら眼鏡もあるよ?」

「眼鏡関係ないしっ!」

「由比言ってたよね? 学祭は、学生同士で楽しまなきゃって」
「だからって、社会人に学生の格好させんじゃないっ!」

にこにこ迫ってくる翔太から後ずさりながらこの状態をどう回避しようかと、懸命に頭をめぐらせた結果。

くるりと身体を反転させて、ドアに手を伸ばす。

逃げるが勝ち！

ドアに飛びついてあけようとした私の耳に、不穏な足音。
不穏な声。

「学祭だからって、特別教室に忍び込むほど暇な奴いないと思いま
すけどねえ」

「……」

どう考えても、大人の男の人の声。
どう考えても、学生じゃない会話の内容。

ドアを開けようとしていた手が、びくりと止まる。

……この学校の、先生だよね……

固まった私の耳に、近づいてくる声と足音。
そして……

「あちゃ、体育の溝口と兼田だ。見回りなんかしてんだ」

いつの間にか真横に来て一緒に耳を澄ませていたらしい翔太が、ぼ
そりと呟いた。

「……見回り？」

見回りって……

ドアを見つめたまま問いかけると、小声で返答が返された。

「たまに教室に忍び込む部外者がいてさ。それ見つけて校門までお
見送りするっていう、見回り」

たまに教室に忍び込む部外者……

校門までお見送り……

脳内で翔太の言葉を繰り返す。

部外者〃私

てことは。

「私見つかったら、校門まで連行!？」

学祭見られないのはまだいいけど、校門まで連行されるのはいやあああつ!

結構、人いたよ?

あの中を、さながら宇宙人状態で連行されるってわけ?

この後の自分を理解できた途端、ドアからおもいつきり離れて準備室の中を忙しく見渡した。

「どうしたの、由比」

落ち着いた翔太の声に突っ込む余裕もなく、壁際の本棚の横やら机の下やらを見て回る。

「隠れる場所がないっ!」

小声で叫ぶと、ぽんつと手に何かを渡された。

「……」

それは、さっき翔太が持っていた制服。

一瞬頭が真っ白になりかけて、気力で浮上する。

「ちよつ、これを着ると……」

他に何か逃げ道はないのかと準備室を見回しても、そんなステキなものは何もなく。

「部外者が駄目なだけだから。生徒は入っても、何も言われないし」

「で、でも……」

この歳で女子高生の制服とか……っ

迷ってる間にも、廊下から聞こえてくる見回りの先生の声と足音は
どんどん近づいてきて。

「大丈夫。スカートとベスト着てるだけって思えばいいよ」

につこりと笑う翔太を睨みあげると、あっち向け！ と小声で命令
して、本棚の影に駆け寄った。

全部隠れないけど、まあいいつ。

ああ、なんか自分という何かが壊れていく……

内心涙をのんで、けれど晒し者的お見送りだけは何とか回避するべ
く、ジーンズの上からスカートを履いて着替えていく。

チュニツクだけ脱いでタンクトップの上からブラウスを着て、ベス
トを被った。

その間にも隣の教室のドアを開けて中を確認する音が響いて、慌て
て脱いだ服を丸めて紙袋に突っ込む。

そこで――

「あ、溝口先生、兼田先生。見回りですか？」

……翔太っ！？

焦る私を尻目に、教師がドアを開ける前に翔太がドアを開けて廊下
に出る。

慌てて眼鏡をかけて、結んでいた髪を下ろした。

せめて、隠せるところは隠すっ！！

「あれ、遠野。お前、こんなところで何やってんだ？」

廊下では、溝口先生だか兼田先生だかの声が聞こえる。

「図書委員の方に頼まれて。図書室への寄贈本を募る、お願いの用紙を取りに来たんです」

「お前に頼むって、何やってんだよ図書委員。遠野関係ないだろ？ お前優しすぎ」

はらはらしながら服を入れた紙袋を、本棚の横に隠していたらひょいっと翔太がこっちを見た。

「そんな事ないですよ、溝口先生。もう一人僕と一緒に頼まれたお人よしさんもいますから」

「しよしよし……、何余計なことをっ！

ばらさずに、終わってくればよかったのにっ！

「もう一人？」

案の定準備室を覗き込んできた男の先生と目が合いそうになって、会釈をする振りして顔を伏せた。

「あ、ホントだ。まあ、あんまり使われないようになあ。そっちの娘も」

「は、はい」

蚊の鳴くような声とは、こういうのを言うんだろっ。

喉から搾り出すように返事をする、二人の先生は隣の図書室の鍵を確かめて廊下を戻っていった。

階段を降りる音に、肩から力が抜ける。

「やー、焦った焦った。まさか見回りが来るなんてねえ」

ドアを開けたまま私の傍に来た翔太は、脱力して机に手をついている私の顔をひょいっと覗きこむとにやりと笑った。

「じゃ、行こっか」

「……は？」

満面の笑みで言われた言葉に頭がついていかなくて、目の前で私の洋服の入った紙袋を手につき出す翔太を見てやっとその意味に気付

いて声を上げた。

「待て待て待て！ 行かないしっ！ 着替えるから、服……っ」
慌ててその後ろを追いかけようとした私に振り向こうともせず、開いたドアに向かっていく翔太。

手を伸ばして紙袋を掴んだ途端、くるりと顔だけこっちに向けた。

「ブラウスのボタン、しまっていないよ？」

「……！」

既にドアから体の出ている翔太のその言葉に、思わず紙袋から手を離してしまった。

その隙に、翔太は廊下に出て歩き出す。

顔を出すと、廊下の突き当たりに人の姿が見えて、慌てて準備室に引っ込む。

「くそう、翔太めっ」

「口悪いよ、由比」

廊下の少し先でにこにこ笑う翔太を睨みつけながらドアの後ろに隠れると、ブラウスのボタンを留めてそこをでた。

こうして、OLなのに女子高生の姿で学祭を回るはめになったのです。

圭介さんに会わないように、気をつけなきゃと思っわたしでありました（涙

翔太の腹黒おおっ！

こそこそこそ

「……」

さささっ

まるでかの有名な黒い虫が動く時のような音に、前を歩いていた翔太は溜息をつきながら後ろを振り返った。

そこには、壁や柱を使いながらなんとか隠れるようにして歩く私の姿。

翔太は何度目かになる溜息を終えた後、止めていた足を私に向けて動かした。

真横に來ると、腰に手を当てて再び深く息を吐きだす。

「あのね、由比。いい加減、諦めるとかしようよ」

その言葉に、自分より上にある翔太の顔を見上げた。

その顔は、ホンキで呆れているのが見て取れる。

うん、そうね。

分かるよ？ 私怪しいよね？
でも。

「翔太がこんな格好させるからいけないんじゃない。恥ずかしすぎ

るよ、この歳で制服とかこの歳で生足スカートとか」

せめて、タイツはきたい。

「うん、由比の気持ちも分かるけど、余計目立ってんだよなあ」

大体……と呟いてから、翔太は辺りを見渡した。

「ね、由比。ちょっと周り見て」

「は？」

周り？

翔太の陰に隠れるようにしながら、ぐるりと視線を廻らせる。

辺りには、結構な人数が自分達におかしな人がいる目線を向けているのが分かる。

私と同じ部外者も、生徒も。

「結構、人、いるだろ？」

「いるね」

「制服着てる奴、結構いるだろ？」

「うん、いるね。ていうか高校の学祭だし、制服着てる人いてもおかしくないんじゃない？」

確かに周囲にはこの生徒じゃないだろうけれど、他校の制服を着ている人も結構いる。

何を当たり前のことを言い出すんだろうと視線を戻すと、翔太はにやりと口端をあげた。

「うん、そう。でも、部外者も混じってる。うちの制服じゃない奴らの中には、高校生じゃない奴もいるんじゃないかなあ」

「はあっ?!」

部外者?! ていうか、部外者の上に高校生じゃない?!

思わず叫び声をあげた私の口を、翔太が咄嗟に手のひらで塞ぐ。

「ただでさえ目立ってるから、マジやめて。叫ぶのだけは」

「……」

うんうんと頭を縦に振ると、手のひらが口から離れていく。

私は口が自由になった途端、疑問をぶつけてみた。

「どういうこと、それっ」

翔太は私の手首を掴むと、廊下を歩き出した。

注目を浴びてきたので、移動するらしい。

うん、だよ。私も、ちよつと視線が痛い。

ていうか、なんか……半端なく見られてる気がするけど……気のせい？

そんなに、私おかしな人だったかな？

翔太に引つ張られたまま階段を三階まで降りると、廊下に出る。

「制服の中身が部外者ってどういうこと？　ねえってば」

掴まれている手をひっぱりながら問いかけると、翔太は階段から三つ目の教室の前で止まった。

三年三組の表示。

「あ、翔太のクラス？」

翔太は私の言葉に頷くと、よく分からないけど何か決意したような表情でドアに手をかけた。

「翔太？」

「……そ、俺のクラス。出し物は……」

なんだかいつもより強張った声の翔太に首を傾げていたら、がらりとドアが開く。

というか、翔太が開けた。

広がる光景に、目を丸くする。

「え？」

——そこには。

「コスプレ衣装貸し出し」

翔太の声と共に、一瞬、違う世界にいつてしまっていた意識が甦った。

ゆっくりと視線を動かせば、そこにはずらりと並べられたとりどりの服。

それはもう、着物やドレス、マントとか多分アニメのコスプレ衣装なんかもある。

その一角では、デジカメ片や携帯を構えている人達もいて、写真を撮ったりしていた。

ていうか、何、この盛況さ。

「由比が着てるのは、卒業生から借りた一着しかないこの学校の制服。まあ悪用されないように、うちのクラスの人間同伴でしか貸せないんだけどさ。後は制服に見える服をいくつか集めただけ」

「制服に見える……？」

「そう、だいたいスカートとブラウスとベスト着てれば、それなりに見えるだろ？」

「見える、けど……」

そこまでして制服を着たい人が、けっこういるってこと？

そんな事を頭の中で考えながら、見た事もない光景に思わず口を開けたまま呆けてしまった。

こんな出し物許されるんだ。この学校。

私が高校の時、こんなのがなかったけど。

しかも何でこんなに、混んでるわけ？

翔太は軽く私の背を押すと、教室の中に入っていく。

「ちょ、翔太？」

その背中を追いかけるように、私も非現実のような教室に足を踏み入れた。

ドアの近くには机を二つ並べて受付が置いてあって、女の子と男の子が一人ずつ、ノートを前にしゃべっている。

翔太はその前にゆっくりと立つ。

その背で机に影が落ちて、受付の二人が顔を上げた。

うわぁ、可愛い。

顔を上げた女の子のその姿に、思わず瞬きを繰り返す。

ふんわりした茶色の猫っ毛、白い肌、大きな瞳。

嬉しそうに顔を綻ばす彼女は、お人形さんのようで。

今の自分の恥ずかしさを忘れて、少し見惚れてしまった。

「あれ、翔太くん。どこに行ってたの？」

可愛らしく小首をかしげる姿もはまって、典型的美少女って感じでーのに、翔太は何で赤くもならない。つまらないなあ。

翔太は作っているほうの笑顔を浮かべて、机のノートに手を伸ばした。

「制服借りたから、名前書かせてくれる？」

「制服？」

不思議そうに呟いた彼女が、ふいつと私の方に視線を向けた。

「……」

うおっ、につ睨まれた感じ……？

嬉しそうに笑っていた表情は変えないまま、その眼だけが私を見据える。

その怒りのような驚愕の様な色は、すぐに抑えられたけれど。

「……友達？」

翔太に視線を戻した彼女は、先ほどまでの笑顔に戻っている。

……ははーん、あれだね。

嫉妬な感じ？

そうか、この子、たぶん翔太のこと好きなんだなー。

翔太はボールペンを手に取ると、借り出しの欄に自分の名前を書き始めた。

「翔太くんじゃなくて、この人の名前を書いてくれないとダメだよ」その声は、“この人”の部分だけ冷たく聞こえた気がするけれど。うんうん、そうだよね。

好きな人が知らない女つれていれば、嫌な気分になるよね。

大丈夫だよ、私はただの隣人。

翔太はその子の言葉に何の反応も示さず最後まで書き終わると、ペンを置いてもう一人の男の子によろしくと声をかけた。

「翔太くん!？」

咎めるようなその声に、歩き出そうとしていた翔太が振り返る。

「沢渡さんには関係ないよ、僕の名前を書いておけば大丈夫でしょう?」

ぱつさりと切ったような言葉に、彼女の表情が固まる。

うわー、美少女は怒っても青くなっても可愛いねえ。……じゃなくて。

すでに歩き出している翔太の腕を掴む。

「ちょっと翔太、そんな言い方ないでしょ?」

腕を引かれて振り向いた翔太は、いつもの表情に戻っていた。

「由比」

ニヤリじゃなくて、満面の笑みを浮かべる。
あえて言うなら、卵焼き出した時の表情。
いや、例えば食べ物で申し訳ないんだけど。

なんだか翔太の様子がおかしい感じがするけれど、まあそれは横に
おいといて。

「何、意味深な発言にしてんのよ。普通にりんじ……」

「違うつて言つてんのに、ホント由比はちゃんと聞かないんだから」
隣人と言おうとした私の言葉を、翔太が遮った。

「は？ 違うつ？」

意味が分からず聞き返すと、翔太が爆弾を落としやがった。

「普通のじゃなくて、好きな……」

「わあっはっはっ。さ、行こっか翔太」

今ここでいう言葉じゃないでしょうっ！

隣のおねーさんを好きとか、恋愛感情じゃないさういうものでも、
今言われたら絶対誤解される！

可愛い子に、恨まれたくないからねっ。

誤魔化しながら背中を叩いたら、あいてつと笑いながら翔太がドア
へと踵を返した。

「受付に來ただけだから。もうここはいいから、他のクラス回ろっ
よ」

「そんなもの、持ち出すときに名前書いてきてよねっ」
会わなくてもいい人に、この姿を見られたくないわっ。

はいはい、と笑いながら歩く翔太の後ろを追いかける。
その時、微かに聞こえた呟きに振り向いた。

それは受付の女の子の声で。

「ゆ……い？」

私の名前を呼ぶ、声で。

私は思わず首を傾げながら、瞬きを繰り返した。

あまりにも、呆然とした、表情だったから。

大きく見開かれた瞳は、私を映している。

「行くよ、由比」

足を止めてしまった私の腕を、翔太が掴んで教室から出て行く。

それに引きずられるように歩く私の目に映ったのは、クラス中の生徒がじっと私達を見ている光景だった。

がらり、と音がして目の前がドアで塞がれる。

廊下に出た翔太が、教室のドアを閉めたらしい。

視界がドア塞がれて、一瞬の後。

「きやあああつ！！」

物凄い叫び声に、私はマンガのようにドアから飛びのいた。

叫び声の元は、ドアの向こう。教室の中で。

その叫び声には、複数の男女の声が混じってて。

私はあまりの驚きに、ドアと翔太を交互に見やった。

「ちよつ、翔太っ？　ねえ、なんか凄いいんだけど……何、どうしたの？　このクラス」

翔太は、さあ？　とでも言うように笑って肩を竦めると、私の腕を引つ張って歩き出した。

その振動でずれた伊達眼鏡を直しながら、その後ろをついていく。

「なんか誤解されたんじゃないの？　やっぱり翔太、もてるのねえ」
「そんなことないし」

階段まで歩いて私の腕から手を外した翔太は、手すりに手を置いてパンフを差し出してきた。

あ、やっとパンフだ。

というか、私に制服着せたくて黙ってたわけね。自分のクラスの出し物。

知能犯め。

絶対、面白がってるなー。

……じゃなくてっ

自分に裏拳しながら顔を上げると、翔太はパンフをこちらに差し出したままにつこりと笑った。

「何見る？」

「いや、何って……」

パンフを受け取りつつ、釈然としないまま眉を顰める。

「わざわざ私連れて、クラスに行かなくてもよかったんじゃない……」

あの受付の女の子、絶対誤解したよー？

そう続けると、翔太は関係ないしと笑う。

「俺の好きな人、見せびらかしに行っただけだから」

「またそう言う事……。泣くよー？ 翔太の事、好きな子」
パンフを捲りながら、ふうっと溜息をついた。

あ、焼きうどんだ。食べたいかも。チョコバナナはベタだね。

既にお昼時と言う事もあって、目に付くのは模擬店ばかりで申し訳ない（笑）
じゃなくて。

翔太は手すりに背を預けながら、別に、と目を細める。

「それよりも、由比が本気にしてくれない方に泣きそうだよ」

その姿は拗ねている犬のような、可愛い顔の翔太にはまって。

あまりの可愛さに、パンフ片手に思いつき頭を撫でた。

「まーた、翔太ってば可愛いんだからっ！ 分かってるって。はい、おねーちゃんも翔太が好きだよー」

その可愛い顔は、ホントお得だねっ！

「ほら、本気にしない」

溜息と共に呟く翔太を、もう一度思いつき頭を撫でてあげた……
ら、余計拗ねられた。

思春期の子供の扱い方が、よく分かりません。おばちゃんには。

一階まで降りて中庭に出ている模擬店で昼ご飯を買うと、それを手に持って歩き出す。

「翔太、どこに行くの？」

そこらへんで食べちゃえばいいのに。

っていうか、あんまり動き回ると圭介さんに会っちゃうじゃないか。こんなイタイ格好、見られたくないんだけど。

腕に昼ご飯を入れたビニール袋、もう片手に私の服が入った紙袋を持った翔太は、いーからいーからとまったく答えになっていない返事を繰り返してさつきとは違う校舎に入った。

「あんまり人に見られたくないって言うワガママな由比の要望を叶えてあげるつてのに、黙ってついてきなよ」

「ワガママって、それは私じゃない。翔太でしょ、どう考えても」制服なんか着てなければ、恥ずかしくもなんともないんだから。

ぶつぶつと文句を言いながらも、仕方なく後ろをついていく。

この校舎はさつきと違って学生の姿は少なく……というか誰もいなくて、三階分ある教室は美術室や音楽室など特別教室として使っているらしい。

図書室や被服室は向こうにあるのに、なんで音楽室とか美術室はこっちにあるのかちつともわかんないけど。

翔太は三階まで上がると、廊下を歩き出す。

一体どこに向かおうとしてるんだか。

大体制服着てれば教室に入っても平気とか言ってたけど、必要以上にその効果を使うつもりないんだから。

「ちよつと翔太ってば……」

ずんずん歩いていく翔太を呼び止めようと声を掛けたら……

「ここ」

「いたっ」

いきなり立ち止まられて、顔が肩にぶつかってしまった。顔を抑えて翔太を睨みあげる。

「何しんの、由比つてば」

「何してんのじゃないでしょーが！ いきなり止まったら危ないでしょ？」

痛いなあっ

「で、ここが何？」

じんじんと痛む鼻を摩りながら顔を上げると、そこにはとあるプレート。

「……じゃ、そーいう事でっ」

それを見た途端、私はくるりと踵を返して走り出そうと……

「往生際が悪いっ」

……したけれど、腕を翔太に掴まれて動けないっ

「ちよっ、翔太っ！ 離せ！」

「うるさいよー」

見かけによらない力を発揮しながら、翔太がガラリと目の前のドアを開けた。

「昼飯持ってきたよ」

「うわあああっ」

馬鹿翔太ああっ！

なんとか逃げ出そうともがいてもどうにもならず、引きずられるようにその部屋の中に足を踏み入れた。中に入って、やっと翔太の手が外れる。

そこには。

「翔太？」

不思議そうな声。

椅子から立ち上がるような、何かが軋む音。ぺたぺたという、サンダルの足音。

ああああ、なんでいるのーってそりゃそうだよー。

脳裏に、ドアに掲げられていたプレートを思い浮かべる。

——社会科準備室 日本史／世界史——

なんでわざわざ圭介さんに会いに来るのかなあっ！

「その子は、クラスメイト？」

さっきよりも近くで聞こえてきた声に、思わずビシッと背筋が伸びた。

「はっはいつ！ しょっ翔太……くんに付き合ってきただけで！
それでは失礼しますっ！！」

ずれそうになる眼鏡を片手で抑えながらそう叫ぶと、くるりと身を翻して走りだそうと……

「って、ちよつと待って……？」

……したはずなのに、再び掴まれた腕に足が止まる。

気付かなくていいからっ！ お願い気付かないでえええっ

顔を覗きこむように状態を屈めた圭介さんが、指を伸ばして眼鏡を私から外した。

「由比、さん？」

驚いたような呆然とした声に、一気に顔に血が集まっていく。

「由比さん、だよね？」

確認するようにもう一度口にした圭介さんは、私から視線を外さずに翔太に声を掛けた。

「翔太、お前の仕業か。そういえば、お前のクラス衣装の貸し出しだったな」

だから由比さんにクラスを内緒にしていたのか、と続ける。

「いーじゃん、眼の保養だろ？ わざわざ連れて来てやったんだから」

わざわざ連れて来るなあっ！

もう隠せない事を悟った私は、未だ翔太が持っている紙袋に手を伸ばした。

「圭介さんも、何とか言ってくださいっ。ていうか、服着替えさせてっ」

「ホントに由比さんなんだ……」

私の剣幕と正反対の、なぜかかみ締めるように呟くその声にこれでもかと言っほど顔が熱くなっていく。

顔を上げれば、目を見開いて私を見る圭介さんの顔。

少し顔が赤いのは、私の見間違えという事にしてください！

「何のんびり状況把握してるんですかつ！ 恥ずかしいんですっ、早く着替えたいんですってば！」

紙袋を私から遠ざけるように逃げる翔太を追いかけてくても、圭介さんが腕を掴んでいるから動けない。

「圭介さんってば、ちよつと離し……」

仕方なく圭介さんの手を掴んで引き剥がそうとした私に、やさしい声が降ってきた。

内容は、まったく優しくないけど。

「可愛いよ、由比さん。似合ってる」

……

圭介さんはそう言つと、ほんわかとした笑みを浮かべた。

「え……あ……う……」

言われた私は、口をあんぐりと開けて違ふ世界に意識を飛ばした後、ゆでだこ状態で顔を俯けた。

「何でさりとそーいう事、言えるかな……。天然め……」
鼻血でそう。

ぶつぶつと呟いた言葉に、圭介さんは目を細めて首を傾げる。
「ん？　どうかした？」

赤くなっている自分を誤魔化そうと横目で翔太を見れば、さっさと紙袋を圭介さんのだろーデスクの奥に入れていて。

味方がいないと悟った、上条 由比 二十二歳 独身 なのでした

……

「じゃあ、まだ翔太のクラスしか行ってないんだね」
「うん」

その後、服を返せ！ 嫌だ！ の応酬を繰り返したけれど、まったく効果はなく。

可愛いから着てればいいのに、となぜか圭介さんにまでよく分からないお願いをされて、しぶしぶ従ったのだ。

まあ、これで私が社会人と知る人はいないから、開き直れちゃうけどねっ。

圭介さんは午後に見回りを受け持っているらしく、それまでここで食事をさせてもらう事にした。

というか、翔太はそれを狙ってご飯を買ってきたらしく、確信犯だなあと圭介さんは笑っていたけど。

圭介さんの問いに、すこしムスツとしながら頷く。

「行っただって言っても、受付の為に入っただけ。あれだけなら、私が行く事ないのに」

受付の可愛い彼女を悲しませる事もなかったのに！

そう続けると、翔太が眉間に皺を寄せながらペットボトルのコーラを一口飲む。

「だから見せびらかしに行っただって言ってるだろ」

「受付の彼女？」

ぴいっとそっぽを向いた翔太と反対に、不思議そうな圭介さんの声

に私は思わず手に持っていたたこ焼きのお皿を机に置いた。
握りこぶしを突き出す勢いで叫ぶ。

「もう、すっごく可愛いお人形さんみたいな女の子！ ふわふわの
髪の毛で大きな瞳に色白の肌っ！」

「お人形さん？」

そう言う圭介さんに、翔太がぼそりと呟いた。

「沢渡だよ、沢渡 美樹。うちのクラス委員の」

「ああ、委員長の女の子の方」

なんですか、そのまったく興味なっしんぐーな言い方は。

「あんなに可愛いのに、二人とも興味ないの？ 特に翔太！」

「何で俺だよ」

そう言い返されて、口籠もる。

いやー、それは本人が言うべきだよねえ。

絶対翔太の事好きだと思っけど。

圭介さんは首を傾げながら、持っていた箸をお皿に戻した。

「由比さんの方が、可愛い」

「……は？」

思わず、固まった。

ほんわかと微笑む圭介さんは、今日、どこかネジでも飛んじやっ
てるんじゃないだろうか？

さつきから、たらし発言連発中なのですが！

するとそっぽを向いていた翔太までもが、身を乗り出して頷いた。

「ずりい、圭介。俺だって由比の方が可愛いと思う！」

「はあ？」

なんなんだ、この兄弟。

「ていうか、私より可愛い翔太に言われても」

「またそれ言う……」

がつくりと肩を落とす翔太は、半端なく可愛い。

このまま段ボールに入れて“拾ってください”の立て札と共に外に出したら、五分もしないうちに拾われていくんじゃないだろうか。

「本当に可愛いなあ、翔太」

手を伸ばして頭を撫でると、不貞腐れた表情がもっと深くなっている。

「嬉しく、ねえし」

「口は悪いけど、可愛い」

「うん、翔太も可愛いな」

「てめ、圭介」

私に便乗して頭を撫でた圭介さんを、翔太が悔しそうに睨み上げる。

「いつからこんなに口が悪くなったのか、私の育て方が悪かったのかなあ」

払われた手を戻しながら、圭介さんが苦笑する。

翔太は、いいやと頭を振った。

「この顔に生んだ、かーさんが一番悪い」

「えー、いいじゃない。可愛い顔に生んでもらえて。絶対人生お得だと思うけどなあ」

しばらくして食べ終えた私達がお茶を飲みながら雑談していると、入り口のドアが控えめにノックされた。

圭介さんが首を傾げながら立ち上がる。

「はい」

ドアの向こうに声を掛けながら、その手には私が掛けていた眼鏡。

さつき圭介さんが外した後、そのまま机に放置していたのだ。

「掛けて、由比さん」

「？ うん」

渡されたそれを掛けて、顔を上げる。

すると丁度圭介さんがドアを開けるところだった。

そこには、女の子が三人。

圭介さん越しでよく見えないけれど、私と同じ制服を着ているということはこの学生さんなのだろう。

女の子達は圭介さんを見上げて、手に持っていたものを差し出した。

「遠野先生っ、これ、どうぞ！」

「クラスの模擬店で作ってて」

それはホットケーキらしい。

お皿にのったものに、ラップが掛けてある。

おお、流石圭介さん。

やっぱりもてるのねえ。

圭介さんはドアを押さえていた手をそのままに、困ったような声で答えた。

「ああ、ごめんね。私は甘いものが得意じゃないんだ。気持ちだけ頂くから、君達で食べて」

やんわりと断る圭介さんに、女生徒の不満そうな声が重なる。

「そんなに甘くないですから、大丈夫ですよ！」

「せめて中に入れてください！」

すでに違う要望が入り始めた彼女達に、圭介さんは身体を退かすことなく断っている。

ひゃー若いつていいわねー、とか思いながらペットボトルを手にした時。

その内の一人がひょいっという感じで、圭介さんの横からこっちに

視線を向けた。

「あ！ 翔太くんと、……え？」

嬉しそうに翔太の名前を叫んだ後、私を見て眉を顰める。

「私達はダメで、彼女はいいんですか？」

おっと、ヤバイ。

部外者がばれる……

圭介さんは覗き込む女性との前に腕を出して、こちらに向けられる視線を遮った。

「彼女は身内だから。それよりも、そろそろいいかな？」

「え、身内？」

そう囁くような声が耳に入ってきて、なんだか照れる。

いやあの、身内じゃないかもですが。

家族ごっこしてもらってる、アパートの隣人でー

なんて内心呟いてみるも、口に出して説明する事じゃないから黙ってるけどね。

するとドアを閉めようとした圭介さんの横から再び顔を出した女の子が、驚いたような声を上げた。

「もしかして、ゆい!？」

「……は？」

なぜ私の名前を……？ 知り合いだっけ？ ていうか、こんな若い知り合い、翔太以外いたっけ？

思わず聞き返してしまった私の声に、その子は口元に手を当てて叫びだす。

「ゆいだ！ ゆいだよ、ほらあの！」

私を見て叫んだ女の子が、ほかの二人を呼ぶように手を振る。

「え!？」

「嘘！」

圭介さんを押しのけるように部屋の中に足を踏み入れた三人は、何かの呪文のように“ゆいゆい”と私の名前を連呼しながら駆け寄ってきた。

「私らと同年くらいなんだ!？ しかも同じ学校？」

「うわーっ、噂の人に会っちゃった!」

「ね、ゆいでしょ？ ゆいだよね？」

まるで友達のように口々に話しかけられて、はつきり言って私の頭は呆けてしまっていた。

まあ、私らと同年くらいって言うのには、突っ込みいれたかったけど。

「ねえ。いきなり呼びすてって、君達何様？」

いささかむっとしたような翔太の声に、三人が口を噤んでびくりと肩を震わす。

「勝手に入ったらダメだよ？ 出口は向こう」

威圧感タップリな翔太の笑みに、彼女達は怯えの色を浮かばせた。なんとなく可哀想になった私は、呆氣にとられていた意識を何とか切り替えて翔太を見る。

「えーと……ダメだよ翔太、そんな怖い声で言っちゃ。可哀想じゃない」

翔太はそんな事を言われると思っていなかったのか、口を尖らせて机に頬杖をついた。

「えー、怒られるの俺なわけ？ 由比ってば、なんか女の子に優しい。そして俺に冷たい、さつきから」

拗ねたその言葉に、思わず噴出す。

「またそんなに拗ねなくても。まあ、男よりは女の子の方が可愛いからね、優しくなっちゃうでしょ」

「いや、由比さん……。今のは翔太の方が正しい気がするけどね」
いつの間にか傍に来ていた圭介さんが、私と女の子達の間腕を差し入れて視界を遮る。

「いきなり呼び捨てにされる謂れはないよ、由比さんに。君達、いい加減廊下に出なさい」

途中から彼女達に向けられた声は、珍しく冷たさが滲んでいて。

「それとも、他に何か用があるのか？」

最後通告のように言われた言葉に泣いちゃうんじゃないかと心配しながら見ていたら、なぜか彼女達は物凄い歓声を上げた。

「噂の彼女だああー!!」

きやあつ、と叫びながら三人は廊下へと駆け出す。

「翔太くんが、“俺”とか言ってる！」

「遠野先生が怒ってるの初めてみたあつ」

「女子高生でもいけるんだ！」

うん、最後の言葉、圭介さん宛だよね？

ちよつと変態っぽく聞こえるんだけど、その言葉。

ドアも閉めずに、彼女達は廊下を去っていく。

足音が遠くに消える頃、やっと私は声を出せた。

「今のは……なんだったの……？」

やっとでたのは、この言葉で。

翔太も圭介さんも、ぎこちない動きでさあと首を傾げる。

「えーと、何で私の名前、知ってるの？」

ドアを閉めた圭介さんが、口元に手を当てながらこっちに戻ってくる。

「もしかしたら、私と翔太の会話をどこかで聞かれたのかもしれないね。たまに、話していたし」

な、と翔太に向けていうと、不機嫌さを隠さない翔太がパイプ椅子の背もたれに体重をかけた。

「あー、確かに。つーか、さっき俺のクラスに行った時、名前で呼んだけど……まさかこんなに早く広まる分けないか」

「わけないでしょ、私如きの名前」

そんな有名人じゃないし。

翔太はそーだよなーと息を吐き出しながら、釈然としない表情を私に向けた。

「それよりもさ由比。やっぱり俺、怒られる方じゃないと思うんだけど」

両手を頭の後ろで組みながら、口を尖らせてこっちを見る翔太は……ごめん、さっきの女の子達より可愛いかも（笑）
ていうか、根に持ったか。

「ごめんて。だって、凄く怯えてたから。いつもの腹黒翔太に慣れてたら、さっきのは怖いでしょ……て、そういえば……」
ふと思い出して首を傾げる。

「翔太、私と話してる時、素に戻ってたけど大丈夫なの？ 俺って言わないんでしょ？ いつもは」

そんな事を叫びながら、彼女たちは逃げていった気が……
「いいんだよ、俺にとって由比は特別って皆にしらめたいだけだから」

「まーた、そんなこと言つて。おだてたって何もでませんよ？」
ねえ、圭介さんと口にしながらか横に立っているはずの彼を見上げたら、じつと翔太を見ていて。

あれ、なんかちょっと真面目な雰囲気かも？

そう気付いた私は、ごみを手に椅子から立ち上がった。

「由比さん？」

圭介さんが、歩き出した私の名を呼ぶ。

それに顔だけ振り向けて、ごみを持つ手を軽くあげた。

「ごみ捨てついでに、手を洗ってくるね」

そのまま、廊下に出てドアを閉める。

しんとした廊下を、ゆっくりと歩き出す。

なんだかよく分からない状況だけど、とりあえず圭介さんが翔太に何か話したそうにしていたからここはいないほうがいいよね。

そう思いながら、廊下に置いてあるゴミ箱にビニール袋を放り込む。そのまま階段のそばにあるトイレに、足を向けた。

「やつぱり、入り込めない何かがあるよね。ホントの家族の間にはさ……」

呟いて、息を吐き出した。

「なんだよ、圭介」

由比が出て行った後。

じつと自分を見る圭介に、翔太は背もたれから背中を離して頬杖をついた。

圭介は立ったまま、口を開く。

「どうした？」

何が、を、言葉にしないけれど翔太には伝わったらしく、にやりと笑った。

「別に、学校では今までどおりで行くよ？ でも、由比がいる時はTPO考えない事にした」

「TPO？」

「そ。圭介は置いとして、周りには今までどおりにする。でも由比に対してはそこに誰がいようと、そこがどこであろうといつもの“自分”で傍にいたい」

珍しく素直に答える翔太に、圭介は少し戸惑ったように瞳を揺らす。

「そんなに大切に思う由比さんを、どうしてここに連れてきたんだ？」

私も好きだといっただろう？、と言外に含めると、翔太は細めていた目を緩めて首元を手で押さえた。

「……前に、由比のことで馬鹿なことしたから」

馬鹿なこと？

首を傾げる圭介に、翔太はポケットに入れておいた携帯を取り出して机に置いた。

それで伝わったのだろう。

翔太が言っている、馬鹿なこと。

一緒にご飯を食べる事になったのを、些か婉曲して圭介に伝えたのだ。メールで。

それにのせられて行動した圭介は、由比に対しての感情を自覚するに至ったのだが。

「それと何の関係が……」

そんな事、とうに忘れていたけれど。

翔太は一度口を開いてすぐに閉じると、視線を彷徨わせながら幾度目かにぼそりと呟いた。

「悪い事したと、思ったから」

「悪い事？」

すぐさま聞き返すと、翔太はあーとかうーとか唸りながら諦めたように溜息をついた。

「圭介が由比の事どう思ってるか知りたくて、試すようなことしたから。まあ、それで自覚されて、しかも宣戦布告を受けて散々な結果になったけど。それに……」

自嘲気味に肩を竦めた翔太の言葉尻を、繰り返す。

「それに？」

「それに……、その……」

言いにくそうにぶつぶつと呟いていた翔太が、がばつと顔を上げた。

「なんつーか、その、俺は……だからっ！」

「うん？」

見る間に赤くなっていく翔太の顔を、不思議そうな顔で圭介が見下ろしている。

懸命に何かを言葉にしようとしていた翔太だったが、何かプチンと切れてしまったらしい。

「うるさいな！　じゃあ、見なくてもよかったんだな！？　連れて来なければよかったんだろ！？」

「……」

あまりの恥ずかしさに逆切れした翔太は、パイプ椅子をけり倒す勢いで立ち上がった。

圭介が呆気にとられたように、瞬きをしている。

「どうした、翔太……」

呆気にとられたようなその声に、翔太の羞恥心は一気にマックスまで駆け上った。

「もういい！　俺、由比とクラス回ってくるから！　じゃあなっ」
そう叫ぶと、逃げるように準備室を飛び出した。

後ろから自分の名前を呼ぶ圭介の声が聞こえたけれど、翔太の足は止まらなかった。

くそっ、改めて言えるか！

弟だから、遠慮する間柄じゃないって言われて嬉しかったとか！

自分は探る事しかできなかったのに、堂々と宣戦布告してきた圭介の態度に……

由比に対して、対等な関係だと暗に言われたみたいで嬉しかったとか！

考えるだけでも頭に血が上って、顔が真っ赤に変わっていく。

その時、丁度廊下をこっちに向かって歩いてくる由比が視界に映った。

その姿は、どう見ても高校生で。

童顔の由比を、社会人だと思っ人はきつとないだろう。

その時、顔を俯けていた由比が、何か気付いたように顔を上げた。何してるの？ とでも言うような、怪訝そうな表情。

その姿を認識した途端、翔太は一気に駆け寄ってその細い手首を掴んだ。

「行くよ、由比」

「は？ 何真っ赤な顔してるの、翔太ってば」

翔太に引っ張られるように階段を降り始めた由比の声に、何も答えず足を進める。

——由比に対してはそこに誰がいようと、そこがどこであるうといつもの自分で傍にいたい

さっき、圭介に言った言葉。

素直で、裏表のない、屈託無く笑う由比。

彼女の前だけは、誰にどう思われようと、
“自分”でいたい。
作り上げた遠野翔太ではなく、本当の“自分”で。

「ていうか、ちょっと翔太！ とりあえず、着替えさせてえええっ
！」

まだ諦めていなかったらしい由比の言葉に、翔太は満面の笑みを向けて頭を振った。

「嫌」

その言葉に、きょとん、と由比が瞬きをする。
けれどすぐに……

「可愛く言ってもダメだからあっつ！」

そう叫ぶ由比が可愛くて抱きしめたくなっただけの秘密。たのは、とりあえず自分

「ちよつ、翔太！ これ！ これ取りたいっ」

ちよつと持つてて、と、手にしていた紙袋をそばにいる翔太に押し付ける。

勢いのままそれを受け取ってしまった翔太は、呆れたような声を上げた。

「またあ？ ねえ、いい加減にしないと帰る時大変になるよ、これ」

「その時は、こっそり圭介さんの車に積んでおく！」

「誰が」

「翔太が！」

はあ、と盛大な溜息が聞こえてくるけれど、無視無視！

「ついでにこれも、そんななか入れといて」

持っていたミニバッグを、翔太の持つ紙袋に突っ込む。

お財布と携帯しか入っていないけど、邪魔なのよね！

紙袋を脇に抱えて肩を竦める翔太を尻目に、私はしゃがみこんで係りの学生さんに百円玉を渡した。

「一回、よろしく！」

「はいっ……て……っ！」

他のお客さんとしやべっていた学生さんは百円を受け取りながらも、視線は私の後ろ。

確実に見られている翔太は、そんな視線どこ吹く風で私の横にしゃがむ。

私達の目の前には、お菓子の掴み取り。

好きなものを積み上げて、それを崩さずに持ち上げてザルに乗せられたらOKらしい。

「翔太もやろうよ。童顔でも、私より手はでかい」

私の言葉にむっとしたのか、口を尖らせて紙袋を床に置く。

「童顔関係ないし。まー仕方ない。じゃ、俺も」

途中から受付の学生さんに言葉を向けたらしく、呻き声のような返答に苦笑しつつ翔太は百円を手渡した。

長袖シャツの袖を捲り上げながら、大きな箱に入っているお菓子を二人で物色する。

「いい、翔太。ポテチとベ。ースター、スナック系重要。あとクッキー系ね」

「そのころは」

「スナック系は食事の材料、クッキー系はお菓子作り」

「メニユーとしては」

「……もんじゃに揚げ物、サラダのトッピングetc。お菓子はチーズケーキにティラミス！」

「まかせろ！」

きつと今私達の後ろには、燃え上がる炎が見えるんじゃないだろうか。

箱物を下から積み上げて最後に小袋をのせる。

うーふーふー。見ていなさい、スーパー開催詰め放題常連のこの私の腕を！

さほど手の大きくない私でも、指を上手く使えば結構持てるものなのさ！

指がつりそうな感じで積み上げたお菓子を両手で掴むと、ゆっくりと受付の学生さんの目の前にあるザルに動かしていく。

息が止まりそうな緊張感の元、ゆっくりとそこに置くとザルの中でぐらりと崩れた。

「あっ！」

思わず小さく叫び声をあげてから、若干上目遣いで学生さんを見上

げる。

「こつ……ここで崩れてもセーフよね？」

さつきから全く言葉を発さない学生さんを見上げて問うと、弾かれた様に頭をぶんぶん縦に振った。

「セーフだよ！ おねーさん今のところ、一番！」

「やったねっ」

ざらざらと、ザルの中のお菓子をビニールに入れて差し出してくる。

それを受け取って横にずれると、翔太がこれでもかと言うほど両手を駆使してお菓子を持ち上げていた。

「おおっ、翔太頑張れ！」

「ちよ、黙ってろって……」

指の隙間から小袋が落ちそうになっているのをはらはらしながら見守っていると、案の定、ザルにたどり着く前に一つ下に落ちた。

「あー、何やってんのかな翔太はー」

ザルに手からお菓子を落とすと、翔太はうるさいなあと不貞腐れた声を出す。

「こんなに取ったのに文句かよ」

「だって落としたし」

二人でぶーぶー言い合っていたら、ザルの中身をビニール袋に入っていた学生さんが苦笑しながらさつき落ちた小袋をひょいとビニールに入れてくれた。

「内緒」

指を口に当てながらそれを渡してくれた学生さんに、満面の笑みを向ける。

「ありがとー。やったね、翔太」

「どうも」

ビニール袋を受け取りながらお礼を言う翔太に、学生さんがおずおずと口を開く。

「遠野の、彼女？」

「違うし」

私が即答すると、翔太はビニール袋を紙袋に纏めながら、はあ……と溜息をついた。

「まあ、こんな感じ？」

肩を竦める翔太に、なぜか興奮する学生さん。

多分、同じ三年生なのだろう。

きらきらと目を輝かせながら、まじかーとか呟いてる。

「翔太、その曖昧な返答よろうよ。学祭終わったら、微妙な噂が流れるよ」

「微妙な？」

その場を立ち去りながらちらりと教室を見ると、好奇心満載な視線がビシバシと……。

「翔太が絶賛片思い中とかさ。ちゃんと否定しないと、もてなくなっちゃうよ」

さっきから同じ様なことを行く先々で聞かれるんだけど、やっぱり同じ様な答えを返してるんだもの。

そうこそそと伝えると、大きな溜息を吐かれた。

「ここまで人の言葉を流せる性格って、どうすれば成立するんだろ」
「はあ？」

首を傾げつつ廊下を歩きながら、増えた紙袋を前で抱える。
重みでそこが抜けそう。

幸せの重み、食費が減る重み。

鼻歌でも歌い出しそうな気分ですれてきた紙袋を持ち直すと、翔太が階段を降りるように促してきた。

「一度圭介の車に置いてこよう。これじゃ、身動きが取れない」

「はは、確かに」

トントンと音を立てながら、階段を降りていく。

「鍵は？」

「スベア持つてるからへーき。ていうか、由比、もう恥ずかしくないんだ。制服」

「自分でごり押しして、いきなり何」

いきなり変わった話題に少し眉を顰めると、その剣呑な雰囲気翔太が視線を逸らした。

「いやあ、だってもう、満喫してるみたいだから」

満喫って……

「その、いかにも私が着たくてこの格好してるように言わないでよ。ちよつと変態な道に足を踏み入れた翔太の為に着てるのに」

「変態な道って何それ」

「変態でしょー、充分。社会人にこんなの着せて。でもまあ、普段髪も下ろさないし眼鏡も掛けない。これなら外で会っても誰にもばれないかなーと思ったら、諦めついた」

制服着るのも久しぶりだしねー、と笑うと、丁度一階について昇降口に向かって歩き出す。

じめりとした暑い空気が、開放されたドアから漂ってきて。それに顔を顰めながら翔太の後についていくと、視線だけ私に向けた翔太がくすりと笑って口端をあげた。

「充分、楽しんでるじゃん。制服着るの」

「……わけないでしょうが」

まあ、ちよつと楽しいかもしれないけど……

「ほら、楽しそう」

地面に下げていた視界に、ひょこつと翔太の顔が割り込んでくる。その顔は、腹黒系の笑顔で。

ふいつと視線を逸らして、口を開く。

「……どーせ着てるなら、楽しまなきゃ損じゃない」

体勢を戻した翔太は、くすくすと笑いながらついてくる。

「楽しんでるじゃん、やつぱ」

自分で着せたくせに、何さ、その言い方は。

なんとなく面白くない状況に、目に映ったベンチに直行する。

スタスタと歩調を速めた私を、翔太は余裕の歩幅で追ってきて。

あーっ、なんだかむかつくんですが！

むかむかする感情そのままに、どすりとそのベンチに腰を下ろした。そのまま、目の前に立つ翔太を見上げる。

「おねーさんはここで待ってるので、翔太くん、いつてらっしゃい」
「え？」

驚いたように聞き返されて、私は口端をあげて目を細めた。

「こんな格好させた罰！ 荷物置いてきて、私ここにいますから」

「え、いや。それは……」

「なあに？ おねーさんのお願いが聞けないの？」

ごり押しするように強い口調で言うと、翔太はどこがお願いだよ、とぶつぶつ言いながら私の持つている荷物を片手で取り上げた。

「ちゃんとここで待ってるよ？ 動くなよ？ 眠るなよ？ 落ちるなよ？」

「私の保護者ですか」

「すぐ戻るから」

そう言うのと、全力疾走で校舎の裏へと走っていった。

うんうん、かわいいねー。

顰めていた表情を戻してほんわかすると、私の目の前に影が差した。

「……………」

翔太の後姿を見ていた私は、顔を正面に向ける。

するとそこには……

茶色い髪をふんわりとさせて、大きな目で私を見つめる美少女。

さつき、翔太のクラスで受付していた女の子が、にっこりと可愛らしい笑みを浮かべて微笑んでいた。

おおお、目の保養がやってきた！

「ゆい、さんですか？」

一瞬苦笑しそうになって、それを押し止める。

もう、名前浸透してるわけですか。

「はい、ゆいですが」

同学年、もしくは年下と思わせねば。

意外と冷静な頭で問いに答えると、彼女は申し訳なさそうな表情で頭を下げてきた。

「あの、翔太くんが借りているそちらの制服なんです」

「……ありがとう！ 翔太が借りてるって言ってくれて！！
私が率先して着てるわけじゃないからね？」

そこところ、4649↑いつの時代だ（笑

「その……予約が入っていて、もう時間が過ぎてるんです」
「え！」

思わず叫んだ口を、両手で塞ぐ。

その声に少しびくりと肩を震わせた彼女は、両手を前で握り締めながら目を伏せた。

「本当に申し訳ないんですが、戻していただけないでしょうか」

「あ、ホント？ じゃあ荷物取ってくるから、少し待っていてもらえます？」

ベンチを立ち上がった私に、焦ったような声が掛かる。

「あの、本当に急いでいるので、すぐ着替えていただいてもいいですか？」

「え、でも今着替え持って無いし……」

圭介さんのところに行かないと……

すると彼女は足元においてあった紙袋を持ち上げた。

「代わりの服を持ってきたので。ついてきてください」
そう言くと、紙袋を持って校舎に向かって走り出した。

「えっ、ちよつと待って！」

声を掛けるも、既に走り出した彼女は校舎内に駆け込んでいて。
一瞬だけ翔太の行った方に目を向けて、諦めて走り出す。

彼女の背中を追いかけながら、翔太に怒られそうだなーと内心溜息をついた。

彼女に連れて行かれたのは、なんだか見覚えのある場所だった。
一番最初に来た、図書準備室。

「……うん、ここに来るなら圭介さんの方に行っても変わらなかった気がする」

ぼそぼそと溜息を吐くように呟くと、ドアの鍵を開けていた彼女が視線だけこっちに向ける。

「なにか？」

その声は、特に感情の入らないもので、私はそれに頭を振った。

「ううん、なんでもない。で、それに着替えればいいんですね？」

ドアを開けて、私を中に促す彼女が持っていた紙袋に視線を向ける。彼女はその紙袋をドア横に置くと、私に空の紙袋を差し出した。

「はい。代わりの服はここに置いておきますので、制服を脱いだらこっちの空の紙袋に入れてください」

「んじゃ着替えるから……」

「お願いします。本当に時間が無いんで、制服脱いだら先にそちらを渡していただけますか？」

不自然な態度に、眉を顰める。

けれど彼女はひるむことなく、ただ顔だけは申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

そんなに焦らなきゃいけない……？

まあ、一着しかないって言ってたからなあ。

なんとなく首を傾げながら、ベストを脱ぐ。

そんな私を見張るように見つめている彼女の視線に、思わず苦笑し

たくなる。

「そんなに見てなくても、すぐに着替えますよ」

そう言うと、少し頬を赤くして顔を背ける。

そこでドアを閉めていない事に気がついて、慌てて後ろ手で閉めた。

「すっ、すみません。ホント、その……焦ってて」

恥ずかしそうにうろたえるその姿に、少し前まで感じていた不信感がほんのちよつと薄れる。

うーん、思ってたのと違うのかな。

「うん、すぐだから。待ってて」

まあ、相手は女の子だし。

そう思いながらブラウスを脱いで、手を出してきた彼女に渡す。

「ぬくいけど、ごめんなさいね」

脱いだばかりだからね、ごめんね」

「いえ、こちらこそ焦らせてしまって……」

彼女はブラウスを畳んで、ベストと一緒に紙袋に入れる。

そして持ってきた代わりの服の中から、ミニスカートを出してきた。

「先にこれ、どうぞ」

……差し出されたそれに、目が丸くなる。

「……これ？」

ミニっというか……マイクロミニっというか……。

ある意味、制服着るより恥ずかしいよ、これ。

手にとってマジマジと見ていたら、がばつと頭を下げられた。

「すみませんっ、慌てて持ってきてしまっ！ あ、の、すぐに代わりのものを持ってきますから！」

そう言われてもな……と思いつつ、とりあえず何も無いよりはいいか。

制服の下からそれを履いて、スカートを脱いで畳む。

「これでいいです？」

それを差し出すと、彼女は嬉しそうな表情でもう一度頭を下げた。

「本当に、ご迷惑掛けてすみません！　すぐに戻ってきますので、このままここで待っていてください！」

そう叫ぶように言うと、スカートを紙袋に入れてドアを開ける。

なんか、動きが凄く素早くなったような？

「なるべく早くお願いしまーす」

「……」

閉める寸前、彼女が口端を上げていたのは気のせいだろうか。

彼女の雰囲気、変わっていたように見えるのは気のせいだろうか。

ガチャリ

……気のせいじゃなかったようだ。

「なぜ、鍵を閉めるのかな？」

思わず呟いた言葉に、帰ってくる声はなく。

恥ずかしそうに頬を染めて私に謝っていた女の子の姿を思い浮かべる。

こんなことするようには見えなかったけど、勘は外れなかったなあ。

「まあ、嫉妬、なんだろうけどね」

翔太とクラスに受付に行った時、凄い目で見てたもんね。
私のこと。

なんとなく予想がついていた展開に、ドアの内鍵に手を伸ばす。
それは学校でよく見る極普通の鍵で、押し下げれば開く。

ガチャンガチャンと試しに開け閉めをしてみても、それは確認できた。

「……？ 詰めが甘いというか……」

内側から開けられるなら、別に鍵を閉めていなくても……

そう首を傾げながら、代わりの服が入っている紙袋を手にとって覗き込む。

「……」

一度視線を反らして、再度覗き込む。

うん、詰め、甘くないね。

下着が見えてしまいそうなほど短い、マイクロミニを穿いている私が紙袋から引き出したのは。

向こうが透けて見えるくらい薄いストールだった。

「……あれ？」

駐車場から駆け足で戻ってきた翔太が目にしたのは、誰もいないベンチ。

思わずその場に立って、辺りを見渡す。

トイレ？

首を傾げながら、ベンチに腰を掛けた。

どこにも行くなって言ったのに。

背もたれに体重を掛けながら、目を瞑る。

走った事で上がった呼吸を整えるように、大きく息を吐き出した。

脳裏に浮かぶ、由比の制服姿に思わずにやけそうになって片手で口元を覆う。

やばいなー、こんなに楽しいと思わなかった。

ある意味、ちょっとしたお遊びのつもりだった。

由比に来て欲しいと思った時、一番の心配事は学祭後に何かあったら困るというもので。

圭介はいわずもがな、圭介の弟としての自分とも仲がいいと知れた時、由比に文句をつける人間が出たら面倒だとそう思って。

変装でもさせるかなーと、でもどーやって言いくるめるかなーと考えていた時。

上手い具合に自分のクラスの出し物が、衣装貸し出しという、なんともやる気のあるのかないのかわからないものに決まった。

まあ既製服以外にも作るとか言い出したから、結構大変な準備だったけれど。

その中で、たった一着、うちの学校の制服をクラスの人間同伴を条件で貸し出すことになった。

目をつけたのは、言うまでもない。

自分より、年上の由比。

絶対にありえないシチュエーションに惹かれたのが、理由の大半を占めるのは……否めない。

うん、ごめん。

制服の由比と学校を歩いてみたかった、かなり邪な理由。

でも、それによって普段スーツを着て会社に行っている由比に学校の奴らが会ったとしても、イコールにならないだろうと踏んだのだ。現に、いつも結わえている長い髪を垂らして眼鏡を掛けた由比は、童顔もあいまってどこから見ても高校生に変身した。

ある意味、クラスの奴らより幼く見えた。

あの姿を見たとき、自分の目論見が上手くいった事に内心ガッツポーズ状態だった。

圭介も由比を見て驚いていたけれど、かなり喜んだと見た。

うーん、コスプレってある意味男のロマンだよなー。

あ、お前だけだとか突っ込まないでくれよな。

圭介も、生徒と先生状態体験できて喜んだはず。

さすが、俺！

……邪な理由だらけだな、こりゃ。

思い浮かべる内容に苦笑しながら、腕時計に目を落とした。
デジタルの数字が表示するその時刻に、思わず眉を顰めた。

「……どこ行っただろ」

自分が戻ってきてから五分は経っている。

辺りを見ても、由比の姿は見えない。

翔太は首をかしげながら、ズボンのポケットから携帯を取り出すと着信を確認した。

そこに、由比からのものはメールも含めて無い。

……トイレにしては、遅いよな

なんとなくよぎった不安に、思わず立ち上がる。

まさかと、思うけど。

なんかされてたり……とか、しないよな？

由比の番号を出して発信ボタンを押してみる。

耳に当たった携帯からは、無機質な電子音のみが響いていて。

コール音が鳴っても、全く出る気配が無い。

「……え、ちょっと待て」

浮かれていた気持ち、すうっと足元へと引いていく。

貧血のような状態で、ふらつきそうになる身体をベンチの背もたれを掴んで何とか支えた。

どくどくと耳障りなほど、自分の鼓動が頭に響く。

……まさか？

脳裏に浮かんだその単語が、思考を侵食していく。

——翔太

微かに聞こえた記憶に染み付く声に、思いきり目を瞑った。

……まさか……

思い出したくない記憶が、微かに浮かび上がってそれを頭を振る事でかき消す。

「とりあえず……探さないと……」

言葉に出して冷静になろうとしたけれど、余計不安を掻き立てられてしまい舌打ちをしながら駆け出した。

かなり必死な顔をしているのだろう。

廊下ですれ違う奴らが、怪訝そうな表情で俺を見ているけれど気にしていない。

一階から順繰りに教室を覗く。

何事も無いように学祭を楽しむ生徒の姿。

——由比の姿はない。

「……由比」

思わず口に出た言葉に、ドクリと鼓動が大きくなる。

——翔太、すぐに帰るから……

大きくなる鼓動と同じ様にずきずきと頭が痛む。

……大丈夫

由比は……、由比は「「じゃない

強く頭を振って、目の前のドアに手を掛けた。

「きゃっ」

「っ！」

自分のクラスのドアを開けた翔太の前に沢渡が丁度立っていて、ぶち当たりそうになって足を止めた。

「翔太くん、どうしたの？」

少し驚いた表情を浮かべた沢渡が、前からどいて翔太を見上げる。内心舌打ちをしながら、いつもの顔を作り上げた。

「……僕と一緒にいた女の人、知らない？」

一瞬にして“自分”を作れる自分に、ある意味恐ろしくなる。

沢渡は少し首を傾げてから、困ったように眉尻を下げた。

「私は見てないけど……。いなくなっちゃったの？」

心底心配そうなその表情に、思わず目を細める。

俺と、似てる沢渡。

自分を演じられる……

「本当に、見てない？」

もう一度確かめるように問うと、うん、と頷いてまっすぐに見返された。

上目遣いの大きな瞳が、じっと翔太を見つめる。

「ねえ、翔太くん。僕、なの？」

「え？」

よく分らない問いに反射的に聞き返した翔太に、沢渡は口を開いた。「一緒にいた女の人には、俺って言うたでしょう？　なんで今は僕なの？」

くだらない問いに、苛立ちが募る。

そんな事、今聞いている暇ないんだけど。

苛立ち紛れに息を吐き出すと、じっと沢渡を見下ろした。

「そんな事、沢渡さんに関係ない」

言った途端、沢渡の顔が歪んで頬が赤くなるのが見えたけれど、そこで会話を打ち切った。

踵を返して、廊下を駆け出す。

沢渡じゃないなら、誰が？

それとも、俺が心配しすぎなのか？

走りながら携帯を取り出してみても、由比からの着信は無く、焦る気持ちを抑えながら、翔太は校舎内で由比を探していた。

——その頃、探されている由比は……

案の定戻ってこない女の子を半ば諦めつつ待ちながら、図書準備室の窓際にある椅子に腰掛けて、ぼーっと校庭を見つめていた。

そこに翔太の姿はない。

着替えている最中に、私を探しに校舎内に入ってしまったのだろうか。

心配してるだろうなあ。

そう思いながら、自分の服装に目を落とした。

「でもねえ……。さすがに、これじゃあねえ」

マイクロミニのスカート、元々自分が着ていたタンクトップ。羽織っているのは、夏用の薄手のストールで。

うん、若い子なら外歩けるかもしれない。もう七月だしね。でも……

「さすがに、私には無理だから」

はあ、と溜息をついて窓枠に頬杖をついた。

翔太に連絡したいけど、それもできないし。

携帯とお財布を入れたミニバッグを、さっきのお菓子積み上げのところで、紙袋に入れちゃったのよね。

しかもそれを翔太に渡したままだから、今は圭介さんの車の中かしら。

翔太がそれに気付いてくれればいいけど、気付かないまま携帯に電話してたらしゃれにならないよねえ。

あーあ、怒られちゃうかなあ。

とりあえず身動き取れないから、探してもらえるのを待つしかないよね。

一番怖いのは見回りに来るかもしれない、先生。

でもさっきの話だと圭介さんが午後は回るらしいから、一緒にいる先生にばれないように気付いてもらうしかない。

もう一度溜息をつくとき、私は窓から空を見上げた。

そこには、七月のすっきりとした青空が広がっている。

「きれいだなー」

翔太がどんな状況か分らない私は、のんきに空を見上げていた。

……ねえ、由比。由比は自分の名前の意味、知ってる？

優しい、暖かな声。

それに苦笑しながら答える。

——意味なんてわかんないよ。普通“ゆい”なら結衣とか唯とか、
そういう漢字だよな。どうして由比って書くの？
私が聞きたいくらいなんだけど、おかーさん。

……元々結ぶで“結”にしようとしてたんだよ。上条 結。結構い
い名前だろ？ “ゆい”にはな、「共同作業」って意味があるんだ。

深く柔らかいその声音に、耳を傾ける。

——共同作業？ ゆい、に？ ということ、おとーさん。

……昔はな、例えば田んぼを作るにしても屋根を葺き直すにしても、
その家族だけじゃ人員も労力も足りなかった。

それを皆で助け合って共同で作業をする為の集まりの事を“ゆい”
って言ったんだ。

——うーんと？ 要するに、ご近所づきあいつてこと？

……まあ簡単に言えば。でも、“結い”は助けるだけじゃない。
やってくれた対価として自分も相手を手伝う。今でいう、ギブ&テイクだな。

——せちがらい……

……無償の行為、有償の行為。確かに無償の方がいいように思えるけれど、俺はそうは思わない。
やってもらうだけじゃない、出来る事で相手を助ける。……皆で助け合って皆で幸せになる。
これが一番いい人間関係だと思うけどなあ、とーさんは。

——難しい……

顔を顰めてぼそりと呟くと、困ったようにおとーさんは笑って、おかーさんに脇をひじでつつかれていた。

……歴史バカなんだから。要するにね、大変な事は皆で助け合っていきましょうっていう集まりをね、昔は“ゆい”っていつてたの。だから、由比には“人を助けて人に助けてもらえる、思い遣りを持つて行動のできる子”に育って欲しくて“由比”とつけたのよ。

——なら、“結”にすればよかったでしょ？

そう言つと、まあなーとおとーさんが腕を組みながら頷いた。

……そうしようとも思っただけで、俺は由比ヶ浜が好きでなあ

——要するに、歴史なんじゃん

意味とか関係なく。

すると少し慌てたおとーさんは、気恥ずかしそうに首の後ろを摩りながらそっぽを向いてしまった。

……あのね、由比

その姿を半目で見ていた私に、おかーさんがこそつと耳元に口を寄せる。

……私とお父さんが初めて出会った場所が、由比ヶ浜だったからなのよ

くすつと笑うおかーさん。

ますます照れた様に顔を赤くするおとーさん。

思わず二人を見上げた私は、ニヤニヤと笑う。

——顔に似合わず、ロマンチスト

おとーさんは、開き直ったようになぜか拳を振り上げる。

……なんだとーっ、いいじゃないか！ ロマンチスト最高！

その姿を呆れたように見上げたおかーさんは、溜息をついて肩を竦めた。

……何、開き直ってるのよ。ヘタレロマンチスト。

——そうだそうだー、ヘタレとーさん！

……ちよつと待て！ なんか、内容が変わってるぞ！

振り上げた拳をぐるぐる回しながら、おとーさんが私を威嚇する。
面白くて楽しくて、へたれへたれと連呼しながら駆け回る私。
追いかけるおとーさん。
笑いながら囃し立てる、おかーさん。

幸せな、とても幸せな――

「……………おか……………さ……………、おと……………さん」

暖かい日差しの中、私は幸せな夢に浸っていた――

その頃圭介は、割り振られていた校内の見回りの為、もう一人の教師と校舎内を歩いていた。

隣を歩くもう一人の教師は、さっきからぶつぶつと文句を言っている。
で。

表情は変えずにいたが、内心、いつまで文句を言ってるのかなあとぼや々と考えていた。

「遠野先生。絶対何かの陰謀だと思いませんか？」

その声に視線を向けると、隣を歩く溝口の恨めしそうな表情が圭介を見下ろす。

「午前中も見回りしたのに、何で午後まで回ってくるんでしょう。陰謀？ それとも、俺って嫌われてる？」

人に問いかけておきながら自己完結しているらしく、溜息ばかりその口から漏れている。

私も井田先生の方がよかったです、そんな事を考えながら圭介は視線を前に戻す。

本来はもう一人の社会科教師、井田と一緒に回るはずだったのだが、井田の担当している部活の方でトラブルがあったらしくたまたま職員室にいた溝口に代わりの白羽の矢が立ったのだ。

午前中も見回り当番だった溝口の落胆は激しく、さつきからずっと文句ばかりぶつぶつ呟いている。

「午前中見回りして午後から遊ぶぞー！ とか思ってたのに、また二時間拘束ですよ。ありえねえ。誰だよ茶道部でトラブル起こしたの。シメる、マジシメる」

口調が変わっている溝口に苦笑しつつ、見回りを続ける。

見回りと言っても各クラスを覗いたり、人目に付かない場所を見回ったり。特別教室への侵入がないか確認したりと、そこまで大変なものではない。

まあ教師が見回りをしている事を周知させる意味合いのほうか、強いのではないだろうか。

どんなに文句を言っても微笑と相槌しか返って来ないことに溝口は腹を立てたのか、ニヤリと嫌な笑みを浮かべて階段を上がる圭介に後ろから声を掛けた。

「遠野先生だつて残念でしょう。来てるんでしょう？ 弁当の彼女」
圭介は溝口が何を言おうとしているのかに気がついて、何がですか？ とそらと呆ける。

すると余計面白く感じたのか、一層笑みを深めて溝口が口を開いた。

「さつき学生から、ゆいって子が来てるって聞きましたけど？ まさか高校生とは思わなかったですけどねえ」

ぱたぱたとサンダルの音を響かせながら階段を上がっていた圭介は、足を止めて溝口を振り返った。

その顔はいつも通りの変わらない笑顔で。

ひやかされた事を怒るのかなあと、内心面白がつて見返した。

でも――

「溝口先生に、呼び捨てされる覚えはありませんが？」

……怖ええっ！ つーか、つつこみどこはそこかよ！

眼鏡の奥の笑っていない冷たい視線に、溝口はへらへらしていた顔をさらしたまま動きが固まり、背に冷たいものが流れた。

いつも見下ろす立場にいる溝口は、圭介に冷たく見下ろされるといふのはこんなにも怖いのかと一瞬で悟る。

そして……

「すみませんっ！ さあ、見回り続けましょうか！」

…… 全力で階段を駆け上った。

そして、全力で圭介の視線から逃げた。

その後姿を見上げながら圭介は一度目を瞑って気持ちを切り替える
と、大きな身体をして気が小さいなあこの人、と聞かれていたら溝
口が確実に落ち込むような事を考えていた。

「午前中、遠野弟に会いましたよ。なんだか図書委員に使われてるみたいでした。が、ホント人がいいですねえ。ああ、もう一人使われてる女の子がいたなあ」

あの子がきつとその子だったんですねえと、呪文のような言葉を溝口が呟く。

あの後なぜか動きの早くなつた溝口と共に見回りをしていた圭介は、見回るべき場所の最後の階に来ていた。

ここは下の階に通常のクラスが入っている為、部外者が比較的にもぐりこみ易い。

鍵を手に入れるとは思えないが壊して入る事も考えられるため、午後の見回りの際は面倒だけれど必ず各部屋を鍵を開けて見回ることになっていた。

「そういえば、溝口先生はなぜ職員室にいたんです？」

通常見回りや当番でなければ、担当準備室にいるか校内を見て回っているかどちらかだろうに。

溝口は手前から鍵を開けて中を覗き込みながら、ああ、とぼやく。

「鍵を返しに。図書室と図書準備室のスペアキーを、朝、図書委員会に持っていかれましてねえ。マスターキーがあるから見回りには問題なかったんですが。それをさっき返してもらったから職員室のキーケースに入れようとして、こんな事になったわけですよ」

まだ文句をいうのか、と半ば呆れながら圭介はそうですかと答える。「その鍵が遠野に渡って、図書委員にこき使われたんでしょうねえ。

悪いことしたなあ」

溝口が会った時に翔太は由比さんを着替えさせてたのかなと、溝口

の言葉を聞き流しながら圭介は知らず口元を押さえた。
思い出すと、どうしても口元が綻んでしまう。

しかし、やられたなあれは。

翔太にしてやられた。

自分じゃ考え付かなかった、由比さんを守る行動。
かなり自分の願望も取り入れていたみたいだったが。

あれなら、外で会っても由比さんに気がつく生徒はいないだろう。

女子高生姿の由比さんは、似合いすぎるほどはまっていた。

それを見て、驚いて固まった自分。

そしてそれを見て、得意そうにニヤニヤしていた翔太。
内心喜んでしまった自分が、なんとも気恥ずかしい。

「何、顔だけでのろけてるんですか。遠野先生」

溝口がドアの鍵を開けながら、圭介を振り向く。

「……いえ、そんなことは？」

顔が緩んでいた事を自覚していた圭介は咳払いで意識を切り替えながら、顔を上げて……固まった。

目の前には溝口。

その向こうに、開いたドア。

そしてその向こうに……

「溝口先生」

考えるより先に、体が動いた。

溝口の肩を持って、横に退かす。

「え？」

圭介のいきなりの行動に、なんの抵抗もなく溝口の体がドアの横に動いた。

圭介は開いていたドアを閉めると、鍵を掛ける。

そして呆気に取り残されている溝口を見上げた。

「まずい事になりました」

「は？」

意味が分らないと眉を顰める溝口に、圭介は真剣な表情を浮かべる。

「体育館を見るのを忘れてしまいました」

「あ」

圭介の言葉に溝口は思い出したように口を開いた。

「そーいえばそうでしたねえ。特別教室棟の向こうだから、ここに来る前に行ってしまったえばよかった」

面倒くさそうにがりがり頭をかく。

鍵を返すべき職員室は今いるこの棟にあり、もし体育館を見回りに行くのならばもう一度ここに戻ってこなければならぬ。

「ていうか、俺の場合教官室への帰り道ですよ。うっわ、面倒」

圭介は、その言葉に眉を微かに上げた。

なぜなら……、溝口がそう言い出すのを待っていたから。

「ならば鍵は私が戻しましょうか？　ですの……」

面倒くさそうに顔を顰めていた溝口が、嬉しそうに目を見開いた。

「ああ、俺が体育館を見に行くと！　それいいですね！　俺、もう早く解放されたいですし！」

持っていた鍵の束を圭介に手渡すと、いつそ清々しいほどの爽やかな笑みを浮かべた。

「教官室に一人くらい残ってる先生もいますから、体育館はちゃん

と見回りますよ。じゃ、鍵をお願いしますね」

軽く片手を上げるとさっさと廊下を駆けていき、視界から消えた。

よっぽど見回り当番がいやだったらしい。

その素早い行動に思わず苦笑がもれる。

実際、圭介は体育館の見回りを忘れていたわけではなかった。

この見回りが終わった後、先に鍵を返してから行こうと思っていたのだ。

とくに鍵を使う場所はないわけだし。

そのまま由比さんや翔太を探してみようと思っていたんだけれど。

溝口が、単純明快な性格でよかった。

井田先生なら、こうは上手く騙されてはもらえなかっただろう。

「さて、と」

圭介は視界に誰もいない事を確認すると、準備室の鍵を開けた。

極力音をたてない様に、そっとドアを開ける。

そこには、先ほど溝口の向こう側に見えていた光景が変わらず佇んでいて。

圭介は一つ息を吐き出すと、準備室に身体を滑り込ませた。

ゆっくりとドアを閉めて、鍵を掛ける。

カチリと響いた硬質な音に、この光景が動いてしまうのを恐れながら。

じつと様子を伺うと、何も変わらず規則正しい呼吸音が微かに聞こえて安堵の溜息を零した。

さっきは、心臓が止まるかと思った。
いや、一・二拍は絶対飛んだ。

もう一度ゆるゆると息を吐き出すと、サンダルの音を極力抑えながら窓際に近づく。
そこには規則正しく上下する背中と、腕に寄せられた横顔がこちらに向いていて。

ゆっくりと近づいて、覗き込む。

窓に向けておいてある小さな机に両腕を置き、その上に頭を乗せて幸せそうに目を瞑る人は。

目のやり場に困る服を着て眠る、由比さんだった。

圭介は、困っていた。

それは目の前で、すやすやと眠る由比の姿に。

パイプ椅子に座って上体を机に伏せるその格好は、色々と困る状況を作っていた。

「……」

まずいと思いつつ、目が向いてしまう。

太ももの大半を晒して伸びる、白く細い足に。

肩からずり落ちそうになっているストールは透けるほど薄く、タンクトップは体の線を隠していない。

その上背を丸めて机に伏せている為、タンクトップは上に引っ張られるように捲れていて。

肩からずれた下着のストラップが、白い肌の上に淡い色を添えていた。

「……」

そこまで観察してしまっただけから、挙動不審気味に視線を窓の方へと逸らす。

まだ制服の方がよかった。これじゃ、どこ見ていいのか……――

多分赤くなっているだろう頬に手を当てながらも、目は素直に由比に戻る。

細いとは分ってたけど、思った以上に華奢な体。

あんなに食べるのに、一体その栄養はどこに消えてしまっているんだろう？

そこまで考えて、ふと思い出したようにYシャツのボタンを外し始めた。

学祭だからと、普段はあまり着ないカラーシャツを着てきて助かった。

上着か白衣を着ていれば、もっとよかったけれど……

ボタンを外し終えYシャツを脱いで、由比の背に被せる。

まだストールよりはYシャツの方が透けて見えな……

「……」

思わず視線を反らしながら、手のひらで額をおさえた。

どっちもどっち……、と言う言葉がくるくと脳裏を回る。

半袖シャツだというのに由比の身体は簡単にその下に隠されて、はつきりいうならばYシャツしか着ていないようにしか見えない。

それも、自分が今まで着ていたYシャツ。

ミニスカートとタンクトップの組み合わせと比べて、精神衛生上どっちがいいのかよく分らん。

「だから、無防備すぎだって……。言ってるのに」
どうして、こんなところで熟睡してるのかな。

初めて会った時から心配の種。

あまりにも無防備で、人を信じやすい。

由比の眠る机に手を置いて、その寝顔を見つめる。

幸せそうに微かに口元を上げて寝息を立てる姿は、“女”というよりは“女の子”。

どんな夢を見ているんだろう。

「……ん」

口から零れた声に、どくりと鼓動がはねる。

身じろぎと共にさらりと肩口から零れた髪が、圭介の手に掛かった。無意識にそれを掬い、指の間から零れていく髪を見つめる。

普段は一括りにされている髪が、こんなにさらさらしているとは触れてみなければ分らない事実。

さすがに相手への好意に気がついた後のこの状況は、圭介の感情を高揚させるのに難しくなかった。

だからそれから数分たってから、やっと疑問に思えたのだ。

「……翔太はどうした？」

「……いない」

その頃翔太は思いつく全ての場所を見終わって、最後に見に来た特

別教室棟の壁に寄りかかっていた。

走り回った所為で汗ばんだ身体に、制服が張り付く。

額に掛かる前髪を乱暴にかき上げると、息を吐きながら顔を上げた。

「一体、どこにいった……？」

由比が見つからない事に、焦りと不安が隠せない。

初めてこの学校に来た由比が、俺の知らない場所に、一人でいくとは思えない。

やっぱり、誰かに何かされたんじゃない……

ズボンのポケットから携帯を取り出して、サブディスプレイを確認する。

そこには何の通知もなく、デジタルの数字が表示されているだけ。

翔太は少し考えて、携帯を開いた。

着信履歴から目当てのアドレスを表示させて、通話ボタンに指先を乗せる。

そこに表示されている名前は、”圭介”。

押そうか押すまいかで、指先を止める。

今頃、他の教師と一緒に校内の見回りをしているはず。

仕事をしている時に連絡を取るのには、圭介の立場を考えて控えていた。

けれど、そんな事言っている場合じゃない。

指先に力を入れようとしたその時、携帯が着信を伝えた。

その音に驚いて身体を震わせた後、表示された相手の名前に慌てて通話ボタンを押して耳に当てた。

「圭介！？」

いきなり叫ばれて驚いたのだろう。

一瞬しんとした後、圭介の声が流れてきた。

「……翔太、今どこにいる？」

小さく押さえたようなその声に、まだ見回り中かと気付く。

「特別教室棟の傍。それよりも、圭介っ！」

由比を見なかった？ と続けようとした翔太の言葉は、圭介に遮られた。

「由比さんを置いて、なんでそんなところにいるんだ？」

「……え？」

その言葉に、壁にもたれていた背を戻して思わず携帯を両手で掴んだ。

「由比がいるのか!？」

「……」

声がでかすぎたのか、携帯の向こうで唸るような声が聞こえる。けれどそんな事お構いなしに、言葉が続けた。

「圭介、今どこにいるんだよ！ 由比は、どこにいる!？」

「いたた……。今、図書準備室。そこに由比さんもいるよ」

「図書準備室!？」

なんだって、そんなところに!？」

そっぴいながら駆け出した翔太を、圭介があわてて止めた。

「まで、翔太。今特別教室棟にいるなら、社会科準備室から由比さんの着替えを持ってきてくれ」

「は？ そんなの後回しで……」

早く、由比の顔を見たい。

「いいから、誰かいると思うから必ずとって来い」

「でも……」

「落ち着け。大丈夫、私がいるから。な？」

そう圭介は言う、慌てて転ぶなよ、と付け加えて通話をきった。数回の電子音の後、無音になる。

翔太は携帯を耳から外すと、それをポケットに突っ込んで駆け出した。

ほっとした安堵の気持ちと、どうして鍵がなければ入れない場所によ比がいたのかと言う疑問。
着替えを持ってこいと言う、圭介の言葉。

ない交ぜの感情のまま、社会科準備室を目指して特別教室棟に駆け込んでいった。

「……一体、どういうことだ？」

翔太との携帯を切った圭介は、それをズボンのポケットにしまうと首を傾げた。

なんで一緒にいたはずの翔太が、由比さんを探してる？

ドアに近いところで携帯を使っていた圭介は、考えながらもゆつくりと由比の傍に戻る。

相変わらず規則正しく寝息を立てる由比に、起きる気配はない。

翔太は、ここに由比さんがいる事を知らなかった。

それどころか、探しているようだった。

……由比さんに、何かあったということか？

翔太の知らないところで、ここにつれてこられたということ……？
でも、それにしては……

机に広がる髪を指先で弄ぶ。

サラサラとしたその手触りに目を細めながら、由比の様子を伺う。

特に怪我をしているわけでもなく、反対に幸せそうに熟睡している。

「よくわからないけど……」

とにかく、由比さんがここにいて、自分が見つけることのできた幸運にある意味感謝。

これが他の先生だったら事情を聞くにしても、その間にこの格好を見られることになる。

それは、全力で阻止したい。

「……ん」

つい無意識のまま髪を弄っていた圭介は、由比が小さく声を上げて身じろいだことに動きを止めた。

起きるのかと思った由比の目は、相変わらず閉じられていて。

ただ何かが違うといえば、その表情。

さっきまでの幸せそうなものとは違う、深々と眉間に刻まれた皺。苦しそうに歯を食いしばっている。

「……由比、さん？」

起こすのもためられたけれど、あまりにも辛そうなその表情にどうしたのかと思わず声を掛けた。それに反応を示したのは、由比の声。

「……おと……さん？」

……おと……うさん？

かろつじて聞こえた単語を繋いで、脳裏に浮かべる。

由比の口から初めて聞く、家族の名称。

圭介は上体を屈めて、由比の口元に近づいて声を拾う。

「おとう、さん……おかあさん……」

呟くように発せられるその言葉は、震えるように紡がれる。辛そうに苦しうに、うわごとのように繰り返される言葉。

求める、声。

求めるように、彷徨う指先。

思わず、その指を自分のそれで絡め取る。

ほんの少しだけ、眉間の皺が緩んだように見えた。
そのまま、空いている方の手でゆっくりと頭を撫でる。

何も、知らない。

由比さんの、家族の事は何も。

けれど……、父親ならそう呼ぶであろう、名前を呟く。
低く、抑えた声音で。

「……由比」

ぴくり、と由比の指先が震えた。

きゅつと、圭介の指を掴む。

「お……とう……さ……」

求めたものを、離すまいとするその力は強く。
本来ならばそうするべきではないと、分っている。
自分じゃない人を求めている由比に、本来するべきことではないの
は分っている。

けれど、その声があまりにも切なくて。

圭介はためらいながらも、再び口を開いた。
いつもよりも、深く低く。

夢の中の声とでも、言うように。

「由比」

強く握られる、指先。

「……置いてか、な……」

指先が手のひらが、圭介の腕に伝う。
ぎゅっと閉じた瞼から、涙が零れた。

置いて……？

圭介は自分の方に重心の傾いてきた由比の身体を支えながら、その身体を机の方に持たせかけようと支える腕に力を込めた。
その、途端。

「……！」

声にならない声を上げて、由比が圭介の身体に縋りついた。

「わ、ゆ……っ」

いきなりのその行動に、圭介は支えきれずに押されるように後ろに身体が傾ぐ。

壁に手をつこうとしたけれど、由比に掴まれていて叶わない。

「ちよつと、まっ……」

ずるりと由比の身体も、圭介に凭れるように椅子から滑り落ちた。

圭介は由比を包み込むように、意識的に自分の背中を床に打ち付ける。

「痛っ……」

ドンツという衝撃に、一瞬息が止まる。

そして――

自分の腕の中……というか、身体の上にある柔らかい重みにどくりと鼓動がはねた。

今日は、心臓フル稼働だな。ホントに。

思わず苦笑しつつ倒れた拍子に外れた手を床に置いて、上体を起き上がらせる。

「ん……、う？」

流石の由比も椅子から落ちた衝撃で目が覚めたらしく、目を擦りながら顔を上げた。

「……」

「……」

目が、合う。

まんまるく目を見開いた、由比。
どう説明するべきだろうと、由比の様子を窺う圭介。
口を開いたのは、由比が先だった。

「……これは、どういう？」

圭介は口を開こうとして、額に手を当てた。

そして片手を伸ばすと、横に落ちていたYシャツを掴みあげる。

「その前に……、これ、着てもらえる？」

ふわりと肩に掛けると、意味が分らず首を傾げる由比に圭介は溜息をついて視線を反らした。

「いろいろと、落ち着かない状況だから、立ってもらって、いいかな？」

「？ 落ち着かない？」

そこまで言って、由比はやっと自分の状況を確認するように視線をずらした。

「……」

圭介の片足を跨ぐように、座り込んでいる自分の姿。

しかも、穿いているのが、マイクロミニ……

「……！」

慌ててその上から飛びのくように立ち上がる。

「なっ、なっ……！？」

かけて貰ったシャツの前を両手で掴みながら、まだ床に座ったままの圭介を見下ろした。

「みつ、見た！？」

「見たって……」

顔ごと視線を反らしながら、圭介が立ち上がる。

「見ないように、努力はした。とりあえず、前、留めて貰っていい？」

「努力……」

眩きながら、由比はボタンを留めていく。
上まで留め終えてから、はたと気付いた。

「このシャツって」

指先で摘んで確認しながら、圭介に視線を移す。

なぜか、タンクトップ姿の圭介。

自分が着ているのは、Yシャツ。

「これ圭介さんの！？ わっ、ごっ、ごめ……」

慌ててボタンを外そうとしたその手を、圭介が止めた。

「いいから、着てて。俺の精神衛生上、着てて貰った方がいい」

……精神衛生上って……俺って……

由比はボタン外そうとしていた手を止めて、ぽりぽりと頭をかいた。
焦っていた気持ちが、少し落ち着く。

「お粗末なものをお見せいたしました」
もっと可愛い子のならねえ。

あはは、と笑うと、圭介はやっと由比と視線を合わせた。

その口端は、少し上がっていて。

「……結構なものを、ご馳走様でした」

「……」

圭介さんが、狂った。

由比、心の言葉。

17（前書き）

翔太が出てこなかった……（笑）
すみません。長くなったので2つに分けたら、翔太登場までいけませんでしたm - m

「で？」

圭介さんの言葉に固まっていた私は、続けて問われた声に答えられずぱちぱちと瞬きを繰り返した。

「で？」

意味が分らない以上、質問に質問で返すという王道をとってみましよう。

圭介さんは笑ったままの顔で目を細めると、その手を伸ばして私の目元を指先で拭った。

その行動に首をかしげると、なぜか少し目元を赤くした圭介さんが何かを振り切るように頭を振って息を吐き出した。

「……聞きたいことはたくさんあるんだけど、とりあえず翔太が来る前に答えて欲しいのが三つ」

その言葉で、私は短く叫んだ。

「そうだ、翔太！ 私翔太に連絡しないとっ！ 圭介さん、携帯貸して……」

圭介さんは見越したようにズボンのポケットから携帯を取り出すと、ストラップを持って小さく振った。

「連絡済。今、由比さんの着替えを持ってこっちに向かってる」

それを聞いて、ほっと力が抜ける。

「よかったー。携帯を荷物と一緒に翔太に預けちゃったから、連絡取るに取れなくて。助かりました。んじゃ、もうすぐ来るかな？」

につこりと笑って圭介さんから離れようとする、目の前に肌色の物体が現れて足を止めた。

それは、伸ばした圭介さんの腕で。

誤魔化そうとした私に、気付いたらしい。
ちっ

内心舌打ちをしつつ口だけは、あははは、と笑い声を上げてその腕をくぐる。

「翔太早く来ないですかねえ。圭介さんが風邪ひいちゃ……う……うおお」

言葉尻がおかしくなってるのは、勘弁してください！

ドアに向けて歩き出した私の後ろから、ずんずんと圭介さんがやってくるのですよ！

「え、わ、ちよっ」

思わず足早にドアにたどり着いてしまい、その横の隅になぜか追い詰められてしまった。

……すみません、威圧感、半端ないんですが。

逃げ場のない状況で高いところから見下ろされる恐怖なんて、感じたことないだろう！

この、高身長兄弟め！

なんとなく壁にぴたりと身体をつけて、顔だけを真後ろにいると思われる圭介さんに向ける。

「……」

案の定、怒ってますよっ！

文句なく、お怒り中ですよっ！

少し広めに開いている足のせいで、この場を切り抜けるには足の間をくぐるしかない。

思わず足に目を向けて、ないない、と右手を小さく振る。

そこまでやる勇氣、ないです。

「えーと？ 圭介さん。なんでしょう？」

間抜けな質問に、圭介さんは笑ってもくれない。

「……なぜ、ここで熟睡してたのか。誰に連れてこられたのか、そしてその格好はどういうことか。端的に説明を」

……、先生。端的な御質問ありがとうございます。

笑顔を何とか浮かべながら、背に冷たい汗が流れている私。

こんな器用な事、できたんだねっ！

てことは、ここから逃げる事もできるかもねっ！

たとえば……

「由比さん」

現実逃避に走ろうとしたら、呼び戻されました。

恐る恐る見上げると、すっごく怖い目とかち合っと思わず目を反らした。

どうしようっかなー……

冷や汗をかきながら、どう説明しようかと頭をめぐらせる。

いや、あるがままを言えばいいとは思っただけど、さっきのあの女の子のことを言うのってなんか可哀想だよねと思ったり。

だって、翔太の事が好きなのわけでしょ？ だからこそこの行動でしょ？

桐原主任がらみでやられた嫌がらせに比べれば、こんなの可愛い嫉妬だよ。

別にそこまで嫌な事されたわけじゃないし、子供のしたこと先生に告げ口っていうのもねえ。

それに翔太の耳に入ったら、可哀想じゃない。

どう切り抜けよう、どうにか上手く圭介さんを丸め込めないだろうかと考え込んでいたら、いつもより低い圭介さんの声が聞こえてきた。

「誤魔化そうとか、思わないほうがいいよ」

「ごっ、誤魔化す？」

声、半分裏返ったけど勘弁してくださいっ。

「そっ、そんなそんな。圭介さんに嘘つくだなんて」

ホラは吹くかもしれないけどっ。

圭介さんは私の心の声をなぜか聞き取ったかのように、くすりと笑った。

なぜか、ぞくりと背筋に震えが走る。……怖い、の方の意味で。

「嘘だと分ったら、どうしてやるっか？」

「……」

今、凄い実感した。

圭介さんと翔太は、まごうことなく兄弟です。

なんか黒いよ、真っ黒で怖いんですけど。

ぱくぱくと口を開け閉めして、はぁあと息を吐き出した。
うん、ダメだ。

これは圭介さんには正直に話そう。

そして、巻き込もう。

私は一度目を瞑って意識を切り替えると、圭介さんを見上げた。

「えーと、ですね。翔太には言わないで欲しいんだけど」

そう先に言って、これまでの経緯を話し始めた。

諦めきれずに上手く誤魔化せないかと途中まで考えていたけれど、やっぱり無理だった。

ので、ほぼそのまま。

最初眉を顰めて聞いていた圭介さんは私の話を聞き終わると、呆れたように片手で額を押さえて呻いた。

「無防備だ、無警戒だと思ってたけど、ここまでとは」

しかも、盛大な溜息つきで。

私は頬をぼりぼりと指先でかきながら、あーうーと呻く。

「いや、なんとなく彼女の意図は掴めていたというか」

なんとなくあの女の子が翔太の事が好きでこんな事してるんだろうなって、分ってたし。

そう続けると、不機嫌そうに圭介さんは両腕を前で組む。

「だからといって、その子の思惑にのってあげることもないでしょう？」

「いや、まあそうなんですけど。勢いに押されたというか、流されたというか。まあ、自分の勘に半信半疑だったというか」

もしかしたら、くらいにしか思わなかったし。

「それに、あわよくば制服から着替えられるかなーって」

まさかそれが、もっとドツボにはまるとは思わなかったけどね。

「そんなに制服嫌だった？ 似合ってたけど」

「似合う似合わないじゃないし！ んじゃー、圭介さんってば絶対執事服似合うと思うけど、着てって言ったら着る？」

スリーピースにモノクルは、絶対外さないからね！？」

ちなみにモノクルは、日本人には結構難しい代物だからね？」

圭介さんは、その叫びにあっさりと頷いた。

「由比さんがそういうなら、喜んで着るけど」

思わず、あんぐりと口を開けたまま見上げてしまった。

後から考えれば執事服なんて、スーツとあまり変わらないものなんだと気付いたけど。

その時は全く気付かないくらい、テンパッてたという事です。

圭介さんはそんな私を微笑みながら見下ろすと、片手で顎に触れながらどうしたものかなと唸った。

「まあ、確かに聞けば翔太は怒ると思うけど。怒らせてもいいんじゃないかな」

それだけの事を、彼女はやったと思うよ？

そう続ける圭介さんの言葉を、慌てて遮る。

「え、でも別にここにいろはめになったただだし。それに同じクラスで喧嘩したら、気まずくない？ 卒業までまだまだあるよ？」

大学受験に差しさわりがあつたら嫌だなあ。

ぶつぶつと言っていたら、少し真剣な色を帯びた圭介さんの声が聞こえてきた。

18 (前書き)

やっと最後で翔太登場

「じゃあ聞くけど。今回は運よく私が見つけたからいいけど、そうじゃなかったら？ 他の教師だったら、とりあえず職員室まで連れて行かれるよ？ その間、確実にその格好のままで」

「それは……」

「それに見つけたのが、部外者だったら？」

私の声を遮るように、圭介さんは言葉を重ねる。

「熟睡していた由比さんに、何が起こるか想像できない？」

言い切ったような圭介さんの表情に、目を伏せる。

圭介さんの言いたいことは分かる。

分かるけど……。

「でも……、ほら。無事に圭介さんに発見されたわけだし。終わりをければ全てよしっていうでしょ？ それに、もし部外者の人が見つけてくれたとしても、その人がどうにかしてくれたかもしれないし」

ね？ と、なんとか雰囲気を変えようと笑いかけてみるけれど、それは無謀だという事を知る。

……あれ？ 怒らせた？

なんだか、物凄い無表情……。

呆れでも怒りでもない無表情な顔で、私を見下ろす圭介さん。思わず見上げていたら、それまで前で組んでいたはずの両腕が、私の顔の横を通って壁についた。隅に追いやられているだけでも威圧感半端ないのに、両腕を置かれてしまうと余計に怖いんですが。

圭介さんの行動の意味が分らず、ただあまりの近さにじりじりと身体を反転させて壁と向き合った。

真っ白い壁が目の前に見えて、思わずほっとしてしまう。

無表情と合いあまって、冷気が漂ってきそうです。

「近い」

非難を含んだ声で言うと、それには何も答えない。

それどころか上体を屈めたようで、傍に感じる体温でゆっくりと顔が下がってくるのを感じて思わず壁に縋りついた。

……無防備だー、無警戒だーだのと周りから言われている私ですが、
（本人としては反論あり）

この体勢は、さすがに恥ずかしいです。

そして、怖いです。

「部外者が……」

「……っ」

思ったより耳の近くで聞こえたその声に、びくりと肩が震えてしまった。

「男、だったら？」

どくりと、鼓動が大きく聞こえる。

顔に、血が集まっていくのが自分で分かる。

「あ、の。圭介……さん？」

「俺は嫌だ。こんな姿を誰かに見られるなんて、冗談じゃない」

横に置かれていた手が肩に触れて驚いた私が反対にずれると、当たり前だけでもう片方の圭介さんの腕に当たって、そのまま肩を掴まれて、身体を反転させられた。

目の前には、圭介さんの身体。

その近さに、目の前から感じる体温とその匂いに。
状況を忘れて、感情が波立つ。

怖い。……怖い、ん、だけど。

そうじゃなくて……

固まったように動かない体とは対照的に、思考はぐるぐると駆け回っている。

「由比さん」

「……っ。は……」

呼ばれた名前に、喉から搾り出すように返事をする。

すると、ふ……と、圭介さんの雰囲気が変わった。

ゆっくりと離される、身体。

それでもおさまらない鼓動に、思わず＼シャツの上からぎゅっと胸を押さえる。

頭の上で小さく息を吐き出す音が聞こえたけれど、それでさえ身体を震わせてしまいそうでぎゅっと手に力を入れた。

「由比さん」

一歩後ろに下がった圭介さんが、手を伸ばしてきた。

反射的に肩を震わせてしまった私の頭を、ゆっくりと撫でる。

「まあ、皆が皆、馬鹿な思考を持ってるわけでもないから、助けてくれる部外者もいるかもしれないね。でも、身を守るためには、そういう状況を作らないのも大切なことだよ？ 分った？」

いつもの圭介さんの優しい声に、強張っていた身体から少しずつ力

が抜けていく。

「分った、けど。うん、気をつけるけど……。圭介さん、怖い」

はは、と軽く聞こえる笑い声に思わず睨みつけたら、ぽんぽんと頭を軽く叩いてその手を下ろした。

「怖がらせようとしたわけだから、そう思ってくれないと我慢したかいがない」

「我慢？」

「こつちのこと。さてと、本当に翔太に言わないつもり？」

さっきまでが何だったんだろうというくらいあっさり切り替わった態度に、戸惑いながら壁に背をつけて口を開いた。

波立つ感情を自分の身体を自分で抱きしめるように両手に力を入れて、それを押さえつける。

「……はつきり言えば、後味悪いなって」

後味？ と、不思議そうな声で聞き返してくる圭介さんに、小さく頷く。

「自分のせいで、翔太が怒るとか誰かが悲しむとか。だから、私のせいにしてでもいいから翔太を上手く誤魔化せないかなって思ったんだけど」

おさまってきた鼓動を感じながら、圭介さんに聞こえないようにゆつくりと息を吐き出した。

「由比さん……、お人よしも度が過ぎると身を滅ぼすよ？」

だいぶ落ち着いてきた私は呆れ返ったその声に頭をかきながら、まあ彼女のことよりも、と笑う。

「私は翔太よりだから、何よりも翔太が悲しむのを見たくないって思うし」

「そう思ってくれるのは嬉しいけど……」

やっぱり頷いてくれない圭介さんに焦れて、縋るように圭介さんを見上げる。

早くしないと、翔太が来ちゃう。

「ね？　お願い、圭介さん」

「……」

……あれ？　なぜそこで、口を噤む。

目を見開いて私を見たかと思うと、圭介さんはそっぽを向いて息を吐き出した。

そして何かに気付くと、手をドアに伸ばす。

「圭介さん？」

「ん？　大丈夫」

大丈夫って、何が？

なんだろうと耳を澄ますと、すぐにその理由に気付いた。
物凄い勢いの足音が、近づいてくる。

「圭介っ」

ドアをけたたましく叩く音と共に聞こえた、翔太のその声は。
完全に息の上がった状態で。

圭介さんがドアに伸ばしていた手で、鍵を開けた。

その途端――

「由比！」

乱暴に開け放たれたドアが物凄い音を上げ、その横にいた私は驚いて小さく声を上げる。

すぐ視界に入ったのは、投げ出される白い紙袋。

思わずそれを目で追いかけていたら、両肩を思い切り掴まれてがくがくと揺さぶられた。

「何された?! 怪我は?!」

そこまで言った翔太がぴたりと止まり、何か信じられないものをみるように私を見つめた。

「……翔太?」

翔太は私の声にも答えず、ゆっくりと圭介さんに視線を移して再び戻ってくる。

その顔は、真っ青で。

けど、すぐに真っ赤に変わっていく。

……器用とか、言ってる場合じゃないよね。これ。

お、怒ってるのかな?

怒ってるんだよね?

とりあえず、謝らないとまずいかな。

連絡無しで、いなくなったわけだから。

「え、と……翔太」

すると、私の言葉を遮るようにがばつと翔太が頭を下げた。

「ごめん、ごめん!」

「……は?」

何が? と、謝まれた意味が分らず、間抜けな声で聞き返した。

私の間抜けな声を聞いても、翔太は頭を下げたまま。
何か苦しそうに呻いている。

「……え、と」

どうしていいのかわらず顔を上げると、怪訝そうな顔をしていた圭介さんが何かに気がついたように翔太を見た。

「翔太、勘違いだ」

その声は、少し笑いを含んだもので。

もちろん、苦笑。

翔太は顔を上げて圭介さんを睨むと、私の肩に置いた手に力をこめる。

「何が、勘違いだよ！　こんな、こんな格好……っ」

……格好？

翔太を見て、圭介さんを見て、自分の格好を振りかえる。

……格好。

それは、圭介さんのYシャツ姿。

そして、圭介さんは肌着の意味のTシャツ姿。

「あああああっ！　そーいうこと」

圭介さんの言う“勘違い”の意味に気付いて、慌ててYシャツのボ

タンを上からはずす。

「なっ、何やってっ」

驚いたように私の手をとめようとした翔太の視線が、はたと止まる。うん、じつと見られるのは恥ずかしいけど、今は許すよ！

私は二・三個ボタンをはずして、左右にあわせを開いた。

いや、ほんの少しね。

タンクトップが少し見えるくらい。

さすがに翔太相手でも、あの格好は見せられない。

「着てるから。制服じゃないけど、服は着てるから」

「……」

鳩が豆鉄砲食らった顔って、きつとこういうこと言うんだね。

そんなことを、翔太の顔を見ながら考えていたら。

しゅるしゅるしゅるゝと音でも聞こえそうなほど萎れた顔をして、

翔太が床に沈んでいった。

うん、鳩が（以下略）の次は、腰が抜ける、実際に見させていただきました。

ああ、自分のせいでこうなっているとはいえ、翔太は可愛いなあ。

目の前に腰を下ろすと、なでこなでこと頭を撫でてみる。

……反応無し

すると何を思ったか圭介さんもしゃがみこんで、私と一緒にになって翔太の頭を撫ではじめた。

なでなで

なでなで

——ちよつ、圭介さん手おつきいんだから、もつと端に寄ってくださいよ

——翔太が可愛いから仕方ない

目で牽制しあいながら撫で繰り回していたら、ぽつり、と翔太が呟いた。

「じゃあ、なんで？」

「へ？」

いきなりの問いに、間拔けな言葉が口から漏れた。

「なんで、ここに、いるの？」

区切りながら言うその声は、硬く冷たいもので。

なでていた手の動きを止めて、思わず圭介さんを見る。

圭介さんは私の視線をうけると、翔太に顔を向けた。

「……丁度通りかかった生徒に声を掛けられて、その人と服を換えただったってさ」

「……は？」

私の代わりに答えてくれた圭介さんに、翔太が胡乱な声を上げる。

「そんな事、出来るわけない……」

まあ、そりゃそうだ。

嘘だもの。

内心翔太の言葉に頷きながら、あえて軽い口調で翔太に声を掛けた。

「だって、できちゃったもん。泣き落として」

「泣き、落とし？」

うん、と頷くと翔太がゆつくりと顔を上げた。

「そんなに、嫌だったんだ」

あー、やばい。翔太が目に見えて落ち込んでいく。

私は内心の焦りを表に出さずに、小さく頭を振った。

「この制服を着たがっている子と会ってね、通りがかった翔太のクラスの子に二人で泣き落としてみたの。そうしたら泣き落とされてくれて」

だから、泣くほど嫌だったとかそんなんじゃないんだけど。そう続けると、少しほっとしたのか肩から力が抜けたのが見た目でよく分かった。

ていうかよく見ると、凄い、汗だくだ。汗で、Ｙシャツが背中張り付いてる。触れている髪も、汗で湿っていて。

どれだけ翔太を走らせてしまったのか、これだけでも充分伺える。

「あの、翔太。その……ごめん、ね？」

少し、軽く考えていたかもしれない。

怒られるとは思っていたけど、ここまで必死にさせてしまうとは思ってなかった。

「……なんで、連絡くれなかった？」

翔太は私の謝罪に対して何も言わず、質問を口にする。

私は翔太の頭に乘せていた手を引つ込めた。

「携帯、翔太に預けた紙袋に入れたままで。連絡手段が無くて」
床についている翔太の手が、微かに震えているのに気がついてその上に自分の手を重ねた。

びっくりと思った以上に震えられてその反応に驚いたけど、それを無視して強く手を握る。

「取り替えてくれた洋服が、こんなとは分からなくて。外出らなくて」

だから……

「翔太に、凄く迷惑掛けた。本当にごめんなさい」

正座に座りなおして、深く頭を下げた。

こんなに、心配させるとは思わなかった。

嘘について、自分を悪者にしてさっきの子を庇う形にしたけど。

翔太の為だからって、そう思ったけど。

ここまで心配させてしまった姿を見ると、自分のせいじゃないって今更訂正したくなってくる。

いや、三割くらいは自分のせいでもあるんだけど。

翔太はじつと私を見ていたみたいだったけど、大きく息を吐き出して私の手から自分の手を抜き取った。

「無事なら、それでいいや」

「翔太……」

顔を上げると、既に立ち上がりかけた翔太の姿。

その顔は、強張ったままで。

それでいいといいながら、まだ立ち直れていないのがよく分かる。翔太は投げ棄てた紙袋を手にとると、それを私の目の前に置いた。

「あの、しょ……」

「とりあえず着替えてよ。すげー、目に毒」

翔太は私の言葉を遮ると、強張ったままの顔で口端だけ上げると笑顔を作った。

「え？ ……あ、うん」

紙袋を持って立ち上がると、いつの間にか立ち上がっていた圭介さんがドアの方に歩き出す。

「私達は外に出てるから。着替え終わったら呼んでもらえる？」
「うん……」

翔太に何かいわなくちゃと、そう焦るけれど。
私は、頷くことしかできなかった。

「で？」

準備室から廊下に出た圭介は、先に出た翔太にドアを閉めた途端声を掛けられた。

それは、とても不穏な声音で。

圭介はもう一度きつちりドアが閉まっていることを確認すると、廊下の反対側、窓際に立つ翔太の傍に足を進める。

翔太はそんな圭介の動きを睨みつけるようにじっと見ていて、両腕を前で組んでいる動作といい、言葉にしくなくても怒りとも苦しみとも取れるような感情が体中から発せられていた。

「で、つて？」

落ち着いた声で聞き返しながら翔太の横に立つと、眇められた視線が圭介を捕らえる。

「本当は、何？」

「本当は？」

単語しか口にできないのは、翔太の感情が昂ぶっているから。今までに、幾度か見たことのある……けれど最近は見ることのなかった状態に、さてどうしたもんかと内心一人ごちる。

翔太は聞き返されることにイラついたのか、それとも何かを抑えているからなのか組んだ手で自分の各々の腕をぎゅっと掴む。

「由比。本当は、どうしたんだ？」

聞かれている事は察していたとはいえ、自分には答えるべきものがない。

由比が翔太のことを考えてした行動を、否定したくはない。

「……」

だが……

翔太の気持ちも、分かる。

分かるけれど……

翔太の表情を伺いつつ、ふうと聞こえないように息を吐き出す。

「私も、同じことしか聞いていないから」

「……本当に？」

平均より少し高いだろう身長 of 翔太を、平均より高い圭介は頷きながら見下ろした。

「本当に。見回りでここに来たら、ミニスカートにタンクトップの由比さんが、気持ちよさそうに熟睡してたんだよ。凄く驚いた。ここ数年で、一番の驚きだったなあれは」

少しおちゃらけるように言うと、翔太はふいつと視線を動かして床に向けた。

「そんな都合よく、いくのか？」

「都合よく？」

「由比の話。都合よく、由比が一人で。都合よく、制服を着たい他校生がいて。都合よく、うちのクラスの人間が通りかかる」

翔太の声は、冷たく。

赤く変わっていた顔色は、既に白い。

圭介の脳裏に、微かに警鐘が響きだす。

「都合よく、人のあまり来ない図書準備室に連れてきてもらえて。

都合よく、一人になって。都合よく、俺と離された」

自分の腕を掴む翔太の指先は、白く変わっている。

「おかしいだろ？　なんで、圭介、問い詰めない。あれだけ過保護なくせに、何で今回ばかり、問い詰めない？」

おかしい。

この括りに由比さんだけではなく自分まで入っている事に、圭介は表情を変えず口を開いた。

「問い詰めたけれど、あれ以上に返答がなかった。とにかく今は、由比さんを着替えさせて変装を解く方が先だと思ったから、かな」
いつまでもここにいられるわけじゃないしね、と圭介はスラックスのポケットから鍵束を取り出して小さく振った。

しやらしやらと綺麗な、聞きようによっては甲高くうるさい音が廊下に響く。

見回りの報告が遅れば、おかしく思う教師もいるだろう。

もしこの状況を誰かに見られてしまえば、誤解するのは火を見るより明らかだ。

大事になって嫌な思いをするのは由比であり、翔太や圭介ではない。
翔太はふうんと小さく呟くと、白くなった指先に力をこめた。

「誰だかしらねえけど、許さない」

そう言う翔太の顔は、ひどく真っ青で。

圭介は思わず顔を顰めた。

確かに、由比の言う通りにしてよかったかもしれない。

ありのままを話してしまったら、由比を騙した“誰か”に何をするか分からない。

「翔太……」

その肩に手を置こうとした圭介は、覗き込んだ翔太の表情が過去に見た“あの時”のものとだぶって慌ててその両腕を掴んだ。

「いたはずの場所に、いなくて。探しても見つからなくて。——また、いなくなるのかと……」

「翔太、落ち着け。由比さんは、ここにいる。いなくなったわけじゃない」

「あのときも、そうおもってた。けど……」

「由比さんは、ここにいる。由比さん、だ。“咲子さん”じゃない」

「……ああ、わかってる。わかってる、よ」

「翔太！」

思わず荒げた声に、俯いていた翔太の視線が圭介を捕らえる。

霞んだようなその視線が、圭介を睨み付けた。

「俺は、信じないから」

酷く冷たい雰囲気だが、過去とは違うその表情に内心溜息をつく。

「翔太、頼むから落ち着け。由比さんは無事だった。熟睡できるほど、全く追いつめられた状況じゃなかった。だから、大丈夫。大丈夫だから」

「何もなければ、それでいいって？ 随分と甘いんだな。どうせ、由比も同じ様なこといいそうだし。いいよ、別に」

ふいっと、そらされる視線。

両腕を掴んでいた翔太の手が、下りる。

「……翔太」

翔太は顔を俯けて大きく息を吐き出すと、いつもの笑みを浮かべた。

「大丈夫だよ、圭介。さすがに俺も焦ってさ。うん、ちょっと落ち着いた。悪い悪い、心配かけて」

いきなり戻ったその態度に戸惑いを隠せず眉を顰めた圭介に、翔太は笑いかける。

「だーいじょーぶ。それより、由比のあの格好、やばいよな。よく圭介我慢できたなあ。俺なら無理」

にやりと笑って、両腕を組む。

さっきと同じ格好だけれど、その指先には力が入っていない。

本当に落ち着いたという事なんだろうか。

翔太は隠すのが得意だ。

けれど話を終えようとしているのに、蒸し返してもいいものか。

どうするべき、か――

圭介は翔太に聞こえないように小さく息を吐き出すと、向かい合っていた身体を戻して壁に背をつけた。

「私だって、かなりの我慢を強いられたけどね。＼シャツを着せた方がよかったのか、悪かったのか本気で悩んだよ」

「だよなー。全体的に目のやり場に困る状況。まーでも、なんちゅうか眼福眼福？」

いつも由比が、翔太や圭介に対して使う呪文のような賛辞の言葉を、翔太が拝むマネをしながら繰り返す。

「俺らのこと眼福っていうけどさー、俺達からしてみりゃ由比こそ、そーなんだけどな。ホント、自分のこと、分かってらっしゃらない」

「まあ、そこがいいところといえばそうなんだけどね」

くすくすと笑いながら準備室に目を向けたその時、廊下の向こう、階段を駆け上ってくる足音が響いて二人は弾かれるようにそっちに顔を向けた。

「やべ、誰か来た」

小声で呟く翔太と、思わず準備室に目を向けた圭介。

そこに。

「待たせてごめんね」

がらり、とそのドアがあいて。
由比が顔を出し。

「遠野先生っ?!」

階段から駆け上ってきた男性教師……溝口が顔を出し。

「え？」

「あ」

「やば」

「……遠野、先生？」

四人四様。

その場で固まりました。

「……」

なんていうんだっけ。

この状態。

三人だったら、三竦みとかになるのかな。

……ちよつと、現実逃避、してみました。上条 由比、二十二歳、OL、独身……

いつか脳内で呟いた覚えのある単語を、くるくると思い出す。そして一度目を瞑って、意を決してからもう一度開けた。

……うん、三人だね。

圭介さんと翔太しかいないはずなのに、なんか、もう一人、いるね。

「……ゆい、だっけ」

呆然と廊下に立っていた見知らぬ男の人が、私を指差してぽつりと呟いた。

すると固まっていた圭介さんが、いきなり回復してその男の人を見る。

「……溝口先生」

「あつあつ、あの、その。……ゆい、さん」

……威嚇して、さん付け強要って。
突っ込みどころはそこじゃないよね、圭介さん。

私は実際にはそうでもないけど、内心だらだらと汗を流しながら引き攣った笑いを浮かべた。

「あ、はい。ゆい、ですが。あの、これは、その」
途切れ途切れになる声に、翔太が口を押さえて顔を反らした。

……肩が震えていると言うことは、笑ってるな！ この薄情者め！

私の頭の中は、引き立てられる宇宙人状態の自分の姿しか流していない。

圭介さんに溝口と呼ばれた先生は、瞬きを繰り返しながら私と圭介さんと翔太を各々見ていたけれど、
何か納得したのかにやりと笑って両腕を組んだ。

「そーいことですか。なんかさっきの態度おかしかったなーとか
思ったら。へえ、ふうん」

にやにやと笑って態度を大きくしているという事は、これをネタに
圭介さんをゆするとかそんな感じですか！！？

しかし、圭介さんは動じない。

「気になつて戻られたんですか？ わざわざ、こんなところに、
ったそれだけの為に」

……、なんか言葉が冷たいですよ、圭介さん。

一瞬口を噤んだ溝口先生は、気を取り直したように引き攣ったような笑みを浮かべる。

「いいんですか？ そんな事言つて。この状況下、誰が一番上ですかね」

「私です」

圭介さん、即答！

あの、どー考えても溝口先生だと思いますよ。その、圭介さん？

私の必死な視線に気がついたのか、圭介さんは笑みを浮かべると私の頭をゆっくりと撫でた。

そのままの動作で、口を開く。

「溝口先生は、なぜここに戻ってらしたんですか？」

……それは、今、聞く事なのかな？ 圭介さん？

全く圭介さんの真意は読めず、ただ頭の上にある温度が私の焦りを静めていく。

溝口先生は少し視線を彷徨わせてから、口を開いた。

「さつき学年主任と会つて。鍵がまだ戻っていないって聞いて」

「で、なんて答えられたんです？」

「なんてつて……。所用で離れたけれど、すぐに遠野先生と合流するところですよ」

ああ、圭介さんのことを考えてくれたんだ、この先生。
圭介さんにはつこりと笑うと、顔を溝口先生に向けた。

「そうですね。見回りは二人一組。何があつても、一人で見回りは禁じられていますからね」

ふふふ、と何か確信めいたような笑いに、私は首を傾げた。

「え。なら私、さっきもう見られてたってこと？」

二人一緒に見回りに来たのなら、圭介さんに見つかったときに見られてるって事、だよね？

圭介さんは溝口先生を見たまま、いいえ、と頭を振った。

「準備室に入った時には、すでに溝口先生はこの場におられませんでしたから」

「それは、遠野先生がつ」

慌てて声を上げた溝口先生が、圭介さんの視線で固まる。

「……私が、何か？」

勢いを削がれた様だったけれど、それでも何とか口を開いた。

「その、遠野先生が体育館を見忘れたって言うから……」

「ええ、そうですね。私がそう言ったら、溝口先生、なんておっしゃりましたっけ」

溝口先生は視線をさ迷わせたまま何か唸っていたけれど、がつくりと肩を落とした。

「俺が、体育館を、見に行く……と、言った、かな？」

途切れ途切れの言葉に、なんだかさっきの自分が重なる。

きつと、内心汗がだらだらと流れてるに違いない。

「私から、そう提案したわけではないですよ？　もし今の状態を誰かに言つとしたら、そのことについてはどのように説明を？」

落ち着いた声音で会話を締めくくった圭介さんの後ろに、後光じゃない、腹黒オーラを感じたのは私だけじゃないと思います！

うつわあ、さすが翔太の兄！

翔太より黒いかも！

少ししか意味が分からなかったけど、確実にやり込めただろうことは察せられます！

しかもそれが、私所為だったと言う事も。

迷惑、掛けたなあ……。いろんな人に。

今更ながら、彼女の後ろをついて行った自分を、止めに返りたい。

溝口先生は、はあああっと大きく溜息をつくと肩を竦めて笑った。
もちろん、苦笑。

「わかりましたよ、別に何かあったわけじゃないようなので、俺は見てみぬ振りします。ていうか、遠野先生の本性、黒い」

「そんなそんな、黒くなんてないですよ」

ふふふ、と笑うその顔は確実に真っ黒だと思えます。

味方であるはずの圭介さんの真っ黒さ加減に引き攣った笑いを浮かべていたら、翔太が私の横に立った。

「とりあえず、圭介、Yシャツ着たら？ 溝口先生を騙せても、この状況を他に見られたら面倒だろ」

「あ、そうだね。ごめん、圭介さん。ありがとう」

私は畳んで持っていたYシャツを、圭介さんに差し出す。

圭介さんはそれを羽織ると、いつもの先生スタイルに戻った。

「それにしても、溝口先生。よく、由比だと気付きましたね」

目に見えて落ち込んでいる溝口先生に、翔太が話しかける。

その手は私の肩に置かれていて。

外してくれないかなとおもいつつ、さつき準備室の中にいた時に漏れ聞こえてきた会話に躊躇する自分もいて。

諦めて、そのままにする。

そして翔太が言った事を反芻して、その疑問に納得した。

確かに。もう制服着てないのに。

眼鏡も外してるし、髪も一括りにしてある。

ていうか、これではれるなら外でこの生徒に会った時に、ばれるかもしれないってこと？

溝口先生はがしがしと頭をかいていた手をとめて、ああ、と呟いた。

「前に、正門まで連れてきた事あるだろ？ 夜」

「え？ 夜？」

聞き返しながら、思い当たる記憶にぼんつと右手を拳にして左の掌に打ち付ける。

「夕飯食べに行くのに、翔太を迎えに来た日の事かも」

私の言葉に合点がいったのか、頷きながら翔太は溝口に視線を戻した。

「それが、何か？」

「ああ、その時見回り当番でさ。正門前でいちゃいちゃしてるの見

たもんだから……」

——い、いちゃいちゃ?!

自分には絶対に当てはまらないと思うその単語に、ぶわあぁと顔に血が集まっていく。

あつ、あれはつ。

桐原主任のことで、悩んでた時でつ。
てことは、泣いてたの見られた?!

両手を振って否定する私の葛藤に気付いたのか、Yシャツを着終えた圭介さんの手が宥めるように再び私の頭を撫でた。

「見回りついでに覗きですか」

「ていうか、遠野先生さつきから容赦ないんだけど!」

いつもの圭介さんらしからぬ会話に、思わず私も苦笑する。

溝口先生は溜息をつきながら、両腕を組んだ。

「今だって大切そうに守っちゃって。で、どっちの彼女?」

「はぁ?」

彼女?

思っても見ない言葉に、つい呆気にとられたような声を上げてしまった。

不思議そうな顔をする溝口先生に、誤解を解こうと口を開く。

「いえ、あのつ。それはちが……っ」

「関係ないですよ、溝口先生には」

冷たく言い放つ圭介さんの言葉に、苦虫を噛み潰したような表情になつて溝口先生は溜息をついた。

「なんかもう、触らぬ神にたたりなし状態ですねえ。もう、聞きませんよ。でも二人とも高校生に弁当作ってもらってるんですか？

この子も大変だろうに」

……こっ、高校生っ？

「ちよっ、あのっ！」

今度こそ間違いを訂正しようとしたら、肩においてある翔太の手になぜか力が入ってとめられた。

怪訝そうな視線を向けても、翔太はこっちを向かなくて。

腑に落ちないまま顔を前に向けたら、興味津々に私を見る溝口先生と目が合う。

「ていうか、高校生って聞いてたけど……。成人してるんじゃないの？ ゆいさんとやら」

「えっ？」

分かってくれますか！

そうですよ、制服着せられたけど私社会人だから！

するとなぜか冷静な声が、頭の上から響いた。

「なぜ、そう思われるんです」

なんか圭介さん、優しいのか怖いのかよくわかんなくなってきたんだけど。

あくまで冷たい声音の圭介さんの言葉に、溝口先生が顎に手を当てて私を上から下まで視線を走らせた。

「だって……体つきがおんな……。っ、うがあっっ！」

圭介さんと翔太の行動は、早かった。

溝口先生の言葉に啞然としている私を置いて、圭介さんが首を翔太が腕を掴んで言葉を遮った。

「セクハラは重罪ですよ」

「そつだよ、先生。間違えて俺等が罰当てちゃうよ?」

「すみませんすみませんっ、もーいいませんっ!」

慌てて首に当てられた腕を掴んで剥がした溝口先生は、懸命に謝つてました。

なんか、がたいの割には気の小さい……

「由比、こう言ってるけど許す?」

腕を掴んだままの翔太が、笑っていない笑顔でこっちを見た。

「うん、許す。ていうか、私の方が迷惑掛けてごめんなさい、溝口先生」

「由比さんが、謝ることないよ。由比さんに謝る必要はありますけどね」

溝口先生の首もとから腕を外して笑う圭介さんも、全く笑ってない笑顔。

「ごめんなさい」

そして素直に謝る溝口先生。

……かわいい（笑

思わず笑いそうになって、何とか押さえる。

ここで笑ったら、今度は私の方が怒られそつだ。

すると翔太が溝口先生を掴んでいた手を離して、背中を押して階段へと促した。

「そろそろクラスに戻らなきゃいけないから、俺、行くね。由比、ちゃんと帰れる?」

いきなりの行動にうんうんと反射で返事すると、意地悪そうに肩を竦められた。

「帰りまでバス使つなよ、大人なんだから」
「バス?」

ぶつと吹き出しそうになった溝口先生は、翔太に見上げられて口を押さえた。

翔太にまでびびってどうするんだ、この先生。

「駅まで送るよ、由比さん。駐車場で待っててもらっていい？ 先に車に乗ってていいから」

圭介さんがスラックスのポケットから見慣れたキーケースを出して、私に差し出した。

「え、いいよ圭介さん。ちゃんと帰れるし！ 大人だし！」

最後の言葉は要らなかった気がするけれど、翔太につられてつい口に出してしまった。

圭介さんはキーケースを持った手をそのままに、もう一度私の名前を呼ぶ。

——受け取らなきゃ、どうなるかわかるかな？

なんて言葉が聞こえてきた気がして、素直に受け取りました。はい。

命は惜しいです（笑

「でも、お仕事なんじゃ……」

鍵を受け取ってしまったけれど、学校抜けてもいいの？
すると圭介さんは大丈夫と頷いて、溝口先生を見た。

「大丈夫ですよ？」

疑問系なのに強制に聞こえるのは、私の耳がおかしくなったからなのかしらね。

溝口先生はもう怖がったりもせず、苦笑して肩を竦めた。

「ええ、大丈夫ですよ。打ち上げの準備をお任せしますよ」

ちなみに打ち上げとは、学祭終了後、教職員のみで一時間ほど行う

アルコール抜きのお疲れさん会のようなもの。

「分かりました。適当に飲み物と食べ物。じゃあ私は職員室に鍵を返してから行くから、先に行つて」

まだ見回りで確認していなかった図書室の鍵を開けながら、圭介は私を促した。

「ここから分かれていった方が、いいだろうしな。んじやな、由比。来てくれてありがと」

「あ、こっちこそ。呼んでくれてありがとね」

そう答えると翔太はぴらぴらと手を振つて、溝口と階段を降りていった。

それを見送つて、図書室にいる圭介に声を掛けてそこを後にした。

階段を降りてさつき制服姿で歩いた廊下を歩くけれど、私を見る人はいない。

さつきまでは、翔太がいた事もあつて視線がきつかったのに。

「よかったあ」

思わず呟いた声をすれ違う人が聞いて怪訝そうに振り向いたけど、あつさり無視！

さーて、翔太と取ったお菓子で、今日は何のおかずを作ろうかな。

私の頭の中は、既に夕飯一色に染まっていた。

「遠野弟、お前も裏表満載の奴だったんだなあ。すげえ、騙されたわ」

肩を並べて階段を降りていた溝口が、苦々しい声で溜息をつく。

それを聞きながら、翔太は頭の後ろで両手を組んでにやりと笑った。

「騙される方が悪いんですよ。溝口先生、単純だから」

「口調戻っても容赦ねえつ。今まで温和な兄弟だっと思ってたけど、今回の事で実感深まったな。温和にコーティングされた腹黒兄弟と認定しよう。ていうか、別に口調戻さなくてもいいぜ？ ある意味しゃべりやすい」

苦笑しながら小突かれて、一・二段トントンと足を進めて止まる。

「一応先生ですから」

手を下ろして見上げると、溝口がにやりと笑う。

「それともあれか？ 好きな女の前でしか素は見せねえとか、そんな思春期真っ盛りな……、じゃ！ 俺先行くわ！」

途中から意識して冷たく笑みを浮かべると、背筋を伸ばしてはつきりくつきり宣言しつつ溝口は階段を駆け下りていった。

「……マジでへたれだな、ありや」

圭介に勝てないわけだ、そんな事を呟いて階段を降りていく。

見慣れた階段、見慣れた校舎内。

そこかしこに、さっきまで隣にいた由比の姿がちらちらと脳裏に浮かぶ。

変態臭い気がするけど、それでもいい。

ずっと、ずっと息が詰まるような生活をしてきた。
圭介の弟として、遠野翔太という自分として。

作ってきた性格を気に入ってる面も、少しはあるけれど――

もう、いい。

由比を傷つけるなら……俺を怒らせるなら……――

もう、……どうでもいい

翔太は自分のクラスのある階に出ると、一度目を瞑って息を吐き出す。

自分の意識を、無理やり切り替えるように。

開いた視界には、沢山の生徒。そして学外の人間。

見知った顔、初めて見る顔。

翔太は目を細めて、幾分まだ遠い自分のクラスのプレートを見やっ
た。

――さて、どいつだ？

ゆらり、と目の奥に浮かんた冷たい怒気を、周りにいた誰もが気づく事はなかった。

「……」

にこにこしている圭介さんが怖い。

そう思うのは、きっと私に後ろめたい事があるからであって……。

車で送るといった時点でお説教タイムだろーなーと、想像していたわけで……。

夕飯一色だった私のお脳も車にやってきた圭介さんを見た途端、さすがに怒られるなこりやと覚悟したわけで……。

だって、顔、怒ってたよ！ 笑ってるけど！

なのに。

一言も怒られないとなると、ほっとするどころかもすっごく怖くなってんだけど！

何この蛇の生殺し。怒るなら早く怒ってよ！

「由比さん」

「うあつ、はっはいっ!!」

内心の叫びと呼応したように呼ばれた名前に、早く怒れとか思ってたくせにビシッと背筋が伸びました。

前言撤回。

怒られたくありません。

圭介さんは右折レーンで止まりながら私を横目でちらりと見ると、困ったように口端を上げた。

「そんなに怖がらなくても。反省している人間に追い討ちをかけるようなこと、流石の私でもやらないよ」

そう言つて、目を細めて笑う。

「本当に？」

さっきの溝口先生に対する態度を見ていると、なんだかお腹の中にいろんなことを隠しているように思えるんですが！

圭介さんは私の考えを察したのか、困ったなと呟きながらぽんぽんと私の頭を撫でる。

「溝口先生は、ずっと由比さんに興味を持っていたからね。だからつい……。それに面白くないだろう？ 由比さん呼び捨てにされたら」

「？ そーかな。だったら、圭介さんも呼び捨てにしてくれて構わないんだけど」

「じゃあ、私のこと呼び捨てにする？ なら、私もそうするよ」

「圭介さんは、圭介さんです！」

即答すると、思わずと言った感じで噴出された。

前の車が動き出したのに併せて、右折する。

圭介さんの性格と連動したかのような、穏やかな運転。

そう思っていたのに、意外と腹黒翔太に遜色なかったとは！
ていうか、威圧感からいうと圭介さんの方が上です。確実に！

窓の向こうには、来る時には見なかった風景が広がっている。
バスで来る道とは違うのかな？

圭介さんは怪訝そうな私に、あのね、と言いながら少し走った場所
にある大きなモールの駐車場に車を入れた。

「買い物手伝ってもらっていい？ 正直、男性教師のはどーとでも
なるけど、女性が好む食べ物がよく分からないから」

ゆっくりとバックで車を停車させると、エンジンを切る。

私は一つ返事で頷くと、素早い動作で外に出た。

「よかった、役に立てて。 仕事中なのに駅まで送らせるとか、申し
訳ないと思ってたから」

鍵を閉めて歩き出す圭介さんに並ぶと、モールの核になっている大
型のスーパ―へと足を踏み入れた。

23（後書き）

圭介説教するかと思ったら、しなかつたです。
書いてる本人がびっくり^^；

そこはいつも行くスーパーよりも大きく、色々なものが揃っていた。自分の買い物もしたくなっただけ、さすがにそれはまずいかと諦めて。

カートを押しながら適当なお菓子や飲み物、軽食の類をカゴに入れて歩いていた時。

ふと気になる事を思い出して、隣を歩く圭介さんを見上げた。

「そういえば溝口先生が私に興味を持ってたって言ってたけど、どうして？」

私にとっては、初めて会った人なんですが。

圭介さんはニリツトルジュースのペットボトルを片手で掴み上げると、ゴトンとカゴに入れる。

「弁当を、羨ましがられていたんですよ。弁当の彼女、噂の彼女って……、あ」

そこで何かに気がついたのか、ぽんっと手を叩いた。

「何で由比さんの事で生徒達が騒ぐのか、やっと分かった。そういえば、さっきの生徒達も噂の彼女って言ってたなあ……」

納得するように頷く圭介さんを、不思議そうに見つめる。

するとその視線に気がついたのか、もう一本ペットボトルをカゴに入れた圭介さんがカートを押して歩き出した。

「私と翔太が弁当を持ってくるようになったから、誰が作ったんだって噂になってたんだろうね。名前がばれてるのは、よく分からないけど」

そういえば圭介さんが所属している準備室でご飯食べてた時に乱入

してきた子達、そんな事言ってたような。
噂の彼女だああって。

「じゃあ、今回の騒動の原因は、私にあるって事だね」

「え？」

会計を済ませて袋詰めしながら、私は溜息をつく。
押し付けがましいかなとか思ったけど、そういう方面で迷惑掛ける
と思わなかった。

「私がお弁当を押し付けたから、そんな噂が流れたってことでしょ
？ 後先考えないことしちゃったんだねえ。……うーん、来週から
は止めた方がいいかな」

「関係ないよ、別に」

詰め終えた袋を持って、圭介さんが歩き出す。

慌ててその後ろを追いかけながら、車へと向かった。

「関係なくないよ、圭介さん。それに、圭介さんにとってはあまり
よくないんじゃない……」

お弁当を作る噂の彼女が私だとばれて、私が高校生だと勘違いされ
ているこの現状。

高校の教師である圭介さんの立場的に、まずいんじゃない……。

重い袋を軽々と片手に持って鍵を取り出した圭介さんは、私を助手
席に促しながらドアを開けた。

「実際は高校生じゃないし、そんなプライベートまで口は出さない
よ。さすがに学校もね」

荷物を後部座席に積むと、運転席に腰を下ろす。

「私は由比さんのお弁当を楽しみにしてるんだけど、これからもお願いしては駄目かな」

その姿はさつきと打って変わって、肩を落として私を伺う雰囲気です。「怖い思いもさせてしまったし、無理強いはできないけど……」

怖い思い？　って、ああ……。

言われてやっと思い出すくらいのこと。

大体、怖い思いをしたわけじゃない。

熟睡してただけだもんねえ。

私は両手を目の前で振ってそれを否定すると、頷いてシートベルトを締めた。

「圭介さんや翔太が喜んでくれるなら、食べてもらえると私も嬉しい。でも、迷惑に感じたらちゃんと言ってね？」

さ、駅までお願いします」と笑うと、しゅんとしていた圭介さんが穏やかに笑う。

「駅からは、気をつけて帰るんだよ」

過保護な言葉に苦笑を浮かべると、エンジンの掛かった車が動き出す。

ゆっくりと車線変更をしながら、そう言えば、と思いついたように圭介さんが呟いた。

「できれば夕飯を食いたいんだけど、残しておいて貰っていいかな？　二人は先に食べていいからね。帰り、遅くなるだろうから」後片付けは後日学生がやるとしても、見回りや確認もしなければならぬ、その後打ち上げもあると思えば帰りは遅くなるかもしれない。そう続ける圭介さんに分かったと頷いて、思わず浮かんだ思考にく

すりと噴出す。

それを聞いていたのか、何？ と不思議そうに声を掛けられた。

「ん？ だって今の会話って、まるで夫婦みたいなんだもん。私と翔太って、父親の帰りを待つ嫁と子供みたい」

先に食べててとか、その理由とか。

そう聞こえない？ と笑って圭介さんを見ると、……なぜか顔が赤かったです。

……笑いたければ笑えばいいのに。

どーせ、私から翔太みたいに可愛い子供が生まれるわけないもんね！

そうむくれると、そーじゃなくてと溜息をつかれました。

なんだろう。

今日、一番のお疲れ顔を見ました。

翔太の扱い方がよくわかんないと思ってたけど、圭介さんの扱い方もよく分からないと首を傾げた私なのでした。

圭介が由比を駅に送っていった頃。

クラスに戻った翔太は、割り当てられた当番である受付に座っていた。

一緒に当番をしているのはクラスでも仲がいい方の男子生徒で、黒田一成。

黒田は翔太が戻ってきた途端、その隣の席に陣取ってさっきの噂の彼女……それは由比のことなのだが……を何とか聞き出そうとしていた。

それは純粋な興味。

友人としての、好奇心。

他の人よりも早く知りたいと言う、思春期特有の独占欲。

友人の悪意のないその感情は、他人の心を計る事に長けている翔太にとって、嫌いではないもの。

「ゆいって、お前の彼女なんだろう？」

なんとかの一つ覚えのように、翔太が反応しなければ腕を小突きながら黒田は懸命に聞き出そうと問い掛ける。

「はは、どーだろねー」

翔太も、これまたなんとかの一つ（以下略）のように、同じ返答を繰り返していた。

黒田は面白くなさそうに、椅子の背もたれに体重を掛ける。

「なんだよなー、あそこまで見せびらかしておいて肝心な事はいわ

ねえって、お前Sか？ ドSか？」

そして往々にして、思春期の年代は物珍しい単語や一つ間違えると貶す事にもなりそうなきりぎりの意味の言葉を使いたがる。

「何言ってるのよ！ 翔太くんがそんなわけないじゃないっ」

そこに突如割り込むように口を出してきたのは、黒田と仲のいい、比較的翔太とも一緒にいる時間の長い女子生徒。

「霧島、お前も聞いただろー。僕とかいつも言ってるこいつが、おもいつきり一人称”俺”だぜ？ 翔太には何かがある。絶対何かがあるはずだ！」

何かがあつて欲しい、いやなければならぬ！

……と拳を突き上げる黒田を半目で睨みながら、それでも霧島と呼ばれた女子生徒は興味の矛先を翔太に向けた。

「でもホント、いつもの翔太くんじゃなかったよね。付き合ってる云々は置いといても、ゆいちゃんのこと好きなのは当たり前なんですよ？」

…… ゆいちゃん……

思わず噴出しそうになって、翔太は片手で口を押さえた。

高校生に、ちゃん付けされるほど年齢下に見られる由比って……。

「翔太くん？」

肩を震わせて笑いをおさめようとしている翔太を、霧島が怪訝そうに覗き込もうとしたその時だった。

「翔太くん」

鈴が転がるような、可愛らしい呼び声。

黒田が一瞬にして、顔を高潮させた。

反比例するように翔太の意識は、地を這うように冷静になっていく。口元を押さえていた掌をはずしながら、顔に笑みを貼り付けた。誰に対してよりも、強固なものを。

「何？ 沢渡さん」

いつもの、遠野 翔太の顔を。

見上げた先の沢渡は、心配そうな表情で翔太を見下ろしていた。

「さっきの女の人、見つかったの？ 探してたから気になって……」

—— さ っ き の お ん な の ひ と ——

さっきクラスに戻ってから黒田や霧島だけじゃなく、いろいろな人から由比との関係を聞かれた。

その中で、由比の事を、ゆい、と呼び捨てにする奴やちゃんづけする人。

翔太の顔を伺いながら、さんをつける人など色々いた。

けれど、あの人、と呼んだのは沢渡だけ。

それを、唯の嫉妬とみるか。

それ以上とみるか。

翔太はことさら表情を曇らせて、肩を落とした。

「見つかったよ。でも、制服を着替えた後だったんだ。なんでも通

りすがりのうちのクラスの人に頼んで、制服を着たいっていう人と交換したらいいんだよね」

「はぁ？ まだ、あの制服帰って来てないぜ？ それに改めて借りたって申請もないし。……ちよつとまずくねえ？」

黒田が顔をしかめながら、貸出ノートをぴらぴらとめくる。

実際、この高校の制服を貸し出す時に学校側から言われたのが、必ずクラスの人間同伴という事。

もし持つて行かれてしまった場合、学校に対するなにかしらのいやがらせ等に使われたら困るから。

「翔太、なんで目を離したんだよ」

「ホント、凄い後悔してる」

それはもう、心底。

自分が少し傍にいなかったただで、厄介ごとに巻き込まれた由比。見つけた、圭介。

本当の理由を、口にしない二人。

由比から聞いた説明に、納得できるわけがなかった。

そんな都合のいいことが、あつてたまるか。

「その人は、今、どこにいるの？」

沢渡は、伺うように翔太の顔をじつと見ていて。

実は、由比に嫌がらせをしたんだろう犯人を沢渡だと内心決め付けている翔太にとって、その態度は不可思議なものに見えた。

もし沢渡が犯人なら。

もしここに由比がきたら。

困るのは、沢渡のはずだ。

翔太は様子を見るべく、事実とは異なる答えを返す。

「まだ校内には、いるよ。圭介と一緒にかもしれないけど」

揺さぶりと、圭介にとっても大切な人間だということを伝えて、プレッシャーを掛けてみる。

「そうなの。でも、見つかったよかったわね。あとは、制服が戻ってくれば一安心なんだけど」

そう言っていると、頬に掌を当てて困ったように教室のドアの方に視線を向けた。

その態度は、全く動揺の欠片もなく。

犯人だと決め付けていた翔太は表情には出さなかったが、沢渡の小さな感情の変化も見逃すまいとじっと見上げていた。

「何、沢渡さんをじっと見つめてんだよ。もう浮気？」

座ったまま目の前に立つ沢渡を見上げていたら、剣呑な声音で黒田が刺々しい言葉を漏らした。

その言葉に、ドアをみていた沢渡の視線が翔太に向けられた。

黒田に答えようとしてもしていなかった翔太は、真正面からその視線を受ける。

じっと自分を見下ろす、沢渡の視線。

そこに動揺も迷いもない。

あるとするならば、翔太への好意。

翔太はその感情を受けるでもなく、冷たい視線を笑みにのせる。

……もしこれで本当に沢渡が犯人だとしたら、こいつの被っている面の皮は、俺なんかとは比べ物にならないくらい相当厚いんだろうな

「目の前で見詰め合わないでもらえませんかー。なんつーか、すげむかつくんですけどー」

半分本音の拗ねたような黒田の声に、くすりと沢渡が口元を緩めた。

「翔太くん、はねてる」

そう言っつて、黒田に何か言うわけでもなくまっすぐに翔太の髪にその指先を伸ばしてくる。

沢渡の表情は、口調は、翔太がその好意を受け入れる事を確信しているようで。

翔太の感情に、暗い影を落とす。

「ほら、……」

翔太はその指先を一瞥すると、触れられる前に椅子から腰を浮かせた。

触れようとしていた沢渡の指先は、ほんの少し手前で翔太に避けられたような状態のまま止まっている。

「霧島さん、悪いんだけど受付変わってくれるかな？」

にこりと笑うと、少し焦ったような表情で後ろに立っていた霧島がこくこくと頷いた。

黒田も、呆気にとられたように翔太を見上げている。

翔太は立ち上がりながら沢渡の様子を横目で見ると、内心ニヤリと笑みながら歩き出した。

「ど、どこ行くんだよ」

やっと意識が切り替わったのか、焦った声を黒田が上げる。

それはそうだろう。

目の前で、沢渡が翔太に避けられるのを見てしまったのだから。

そして受付にいないければならないのに、それを人に頼んでその場から立ち去ろうとしているのだから。

どう考えても、沢渡から離れようとしているようにしか見えないだろう。

翔太は申し訳なさそうな……いや実際黒田と霧島に対してその気持ちは充分持っているのだけれど……表情で、黒田に片手を上げて謝罪を向ける。

「制服。探してみるよ。一応ベストは指定と違うものを渡している

から、すぐ分かると思うんだ。迷惑掛けて、ごめん」

黒田は翔太の言葉にほっとしたように、胸に手を当てて息を吐いた。一応、今の翔太の行動に沢渡を避ける以外の意味があったことに、この素直で単純な愛すべき友人は安堵したのだろう。

一変して笑顔になると、頑張れよーと手を振りかえしてきた。

まあ、その友人である霧島は翔太の内心に気付いているのだろう、少し引き攣ったような笑みを浮かべていて。

当の沢渡は、浮いたままの手をゆっくりと握り締めながら下ろし手いるのが目の端に映った。

その表情は、長めの髪に遮られてうかがい知る事はできないが。

翔太はひらひらと黒田に手を振りながら、クラスからでる。

後ろ手でドアを閉めると、ゆっくりと階段の方に歩いていった。

翔太に続いてクラスから出てくるだろう足音を、内心待ちながら。

「でも、ゆいと一緒にいる時の翔太って、人間って感じがしたな」
翔太が教室から出てすぐ、黒田がぼつりと零した。

それは霧島も感じていたようで、ホントだね、と黒田に同意する。
「いつも優しくて可愛くて穏やかで……、さすが遠野先生の弟さんだなーって思ってたけど。私達と同じ十七歳なんだよね。なんか、分かってるはずなのに、分かってなかったみたい」

あんなに穏やかな非の打ち所もない十七歳が、いる訳無いのに。
翔太だから、そうなのだろうとよく分からない納得をしていた。

「ゆいって、翔太にとって特別なんだろなー」

感慨深げに呟いた黒田の言葉に、沢渡がゆっくりと動き出す。

黒田は内心しまったと思いつながら、その背中に声を掛けた。

「どこ行くの？ 沢渡さん」

彼女は今、クラス委員として教室にいないなければならない時間のはず。現に、三十分前までは片割れである男子の委員長がここにいたのだから。

黒田がそう告げると、沢渡は足を止めてにつこりと美少女に相応しい笑顔を浮かべた。

「でも、制服が戻ってこなかったら、私がここにいないより大変なことになってしまうもの」

その言葉は、当然の事を言っていた。
言っていたのだが。

「そつか、いつてらっしやいー」

思わずこちない口調になってしまうほど、黒田には受け入れられない言葉だった。

沢渡は極上の笑みのまま口端を上げると、優しいね、と黒田に向けて呟いた。

それは、黒田と霧島にしか聞こえない位、小さな声で。

黒田単体のみ、大きなダメージを与えた。

ガラガラとドアが閉まった途端、黒田が机に突っ伏す。
伏せた顔は分からないけれど、耳は真っ赤で。

「かわいいよー、沢渡さんっ！ なんで翔太は靡かないんだ？ あんなに翔太の事が好きなの、見てるだけでもわかるのに！」
俺が代わりてえっ！ と叫ぶ黒田を、霧島は足を踏み付けて止めた。

学外の人もいるっていうのに、ホントに恥ずかしい！

黒田の足を踏み付けながら、霧島は二人が出ていった教室のドアを見つめた。

- - 何もなければいいけど……

そう思わざるを得ないほど、二人の間に流れる雰囲気、何か異質なものに感じられた。

「翔太くん！」

教室を出て階段を降りようとしていた翔太の耳に、沢渡の声が届いた。

いつもより足早に歩いていた翔太に追いつく為に、小走りで来たのだろう。

すぐその教室から来ただけだと言うのに、息の上がっている沢渡に振り向く。

「どうしたの？ 沢渡さん」

いつもの、遠野翔太。

まだ、ここでは。

いつもの、遠野翔太で。

いつものように人好きのする笑顔を浮かべると、沢渡はさも当然のように翔太の隣に並ぶ。

「私も一緒に探させて？ もし制服が返って来ないと、翔太くんに迷惑掛けちゃうし」

……俺に？

一番迷惑が掛かるのは、由比だと思っただけだなあ。
なんで俺の心配をするのか、意味わかんねえ。

翔太はありがととそれに答えて、階段を下り始める。
するとシャツの裾を引かれて、立ち止まった。
横を見ると、斜め後ろに立ち止まる沢渡の姿。

「ね、上の階に行って校庭を見てみない？　それでいなかったら、教室を順に廻ればいいと思うし」

とりあえず校庭を見る必要がなくなるから、効率いいよ？　と言われて、翔太は内心首を傾げていた。

なんでこんなにも由比を探そうとする？

実際はいないけど、もし会ったら気まずくないのか？

それとも、本当にこいつじゃないのか？　犯人……

翔太は逡巡するように眉を顰めたが、結局は頷いて沢渡と共に階段を上り始めた。

分らないのなら。

相手の思惑にのっかって行動するべきだ。

罠があるなら、何かする気なら、落ちてやるよ。

その後、自分がどんなやり返しをするか分からないけど。

「ね、翔太くん。あの人と、本当はどんな関係なの？」

階段を最上階に向かって歩きながら、沢渡は可愛らしい仕草で首を傾げて翔太を見上げた。

ふわりと肩口から零れる髪の毛が、白い肌を滑って沢渡自身を飾る一部となる。

計算されたような沢渡の姿を、翔太は内心苦々しい思いで見遣った。決して自分が否定されるとは思っていない、その揺ぎ無い自信はどこから来るのだろう。

翔太はポケットに片手を突っ込みながら、くすりと笑う。

「沢渡さんには関係ないって、どれだけ言えば分かってもらえる？」

それは、今までと同じ様な声音で。

毒を含ませた言葉を。

沢渡に向ける。

笑顔とその言葉のギャップに、沢渡は意味が分からないように瞬きを繰り返していたが、やっと理解できたようだ。
見る間に頬に赤みが差して、前で握り締めていた両手が微かに震えている。

「僕が誰と仲良くしていても、沢渡さんには関係ないよね？」

暗に……いや直接的に、由比は唯の関係ではない事を匂わせながら最上階に着いた。

ここは、さっきまで由比や圭介と一緒にいた場所。（溝口は消去）
笑）

由比が誰かに閉じ込められたところ。

誰かが、由比を騙したところ。

「……ちょっと待ってね、図書準備室の鍵を持ってるからそこから校庭を覗いてみよ？」

沢渡は少しぎこちない声音になりながら、制服のポケットから小さな鍵を取り出した。

それは見覚えのある、何の変哲もない鍵。

今朝、翔太が図書委員から借りた、その鍵。

……由比が閉じ込められていた、その場所の鍵……

沢渡はぱたぱたと小走りで準備室に駆け寄ると、その鍵を使ってドアを開けた。

かちゃ、と小さな音がしてそのドアが開く。

そこには、数十分前と同じ光景が広がっていた。

そのまま沢渡は窓際に寄ると、校庭を見下ろす。

「うーん、見当たらないね。メガネ掛けてて、髪の毛の長い子だよ
ね……」

窓を開けて校庭を見回すその後姿に、何の動揺も無く。

翔太は沢渡に歩み寄りながら、どうすれば本当のことを聞きだせるか頭の中で計算していた。

「そうだね、やっぱり校舎内にいるのかも」

とん、と沢渡のいる窓枠に手をつく。

傍から見れば、沢渡を腕と身体で窓際に囲っている状態。

沢渡もそれに気付いたのか、視線だけ上げて翔太を見つめた。

それに気がついたように、翔太は眉尻を下げて目を細めた。

「冷たいこと、言ってごめんね？ あんまり由比の事、聞かれたくないんだ」

少しだけ、甘やかな色を声にのせて。

「翔太、くん？」

戸惑ったような、期待するような、さつきとは違う赤みの差した頬。きつと今ここに黒田がいたら、悶絶しているに違いない。

翔太は内心友人の姿を想像しながら、微かに口端を上げた。

「彼女は僕たちにとって大切な人だから、あまり悪く言われたくないんだ」

その言葉で、沢渡の表情に影が差す。

「翔太くんは……。その……。好き、なの？」

翔太は沢渡の言葉に、小さく頭を振った。

「大切な、人、だよ」

「好きじゃないの？」

「……。ね。沢渡さんは、どうしてそんなに拘るの？」

「……。え？」

ますます赤みの深まるその頬に、するりと指を滑らせる。

「赤い、ね」

びくり、と沢渡の肩が揺れる。

今や期待しか見つけないことのできないその目は、じつと翔太を見上げていて。

もし校庭のどこかで誰かが翔太達を見ていたら、確実に誤解するだろう状況。

少なくとも、沢渡は半信半疑なまでも翔太の感情が自分に向いていると期待していた。

頬を撫でた指先はそのままそこに留まり、翔太が見ているのは沢渡だけ。

翔太はあえて何も口にせず、ただじつと沢渡を見下ろした。ほんの少しの時間だったけれど、沢渡は恥らうように目を伏せる。

「……さっきと、態度がぜんぜん違うね。私のこと、避けたでしょ？」

拗ねるような口調に、翔太はくすりと笑う。

「……察してよ、沢渡さん」

“何を”とは言わない。

けれど、想像できる事は少ないだろう。

そしてたいがい、自分に都合のいいことを選択するのだ。

それを選択するように、仕向けるのだから。

こういう所は、圭介に似ているなと翔太は内心苦笑した。

相手が言い出すのを待つ為に、上手く誘導する言葉。

腹黒と由比に言われても仕方ない。

由比の嫌そうな半目の表情を思い出して、つい口元が緩む。

案の定、沢渡は自分に都合のいい方に解釈した。

それは、自分が持つ絶対の自信が成せる業。

幼い頃から、可愛い、綺麗と賞賛されて育ってきた。それに見合う努力もした。

嫌でも、皆から注目される存在にいるために、クラス委員もやってきた。
だからこそ、由比に会ってから……いや会っ前からずっと考えていたのだ。

——私の方が、翔太くんに、似合うはずなのに

俯いたまま視線を上げると、口元を緩ませて微笑む翔太の表情が目
に映った。
その笑みに、心臓がどくりと音を立てる。

可愛い、優しい、翔太くん。
ずっと片思いをしてきた相手。

違う一面を見てしまったけれど、それも翔太で。
ゆいとは、ただ仲がいいだけなのかもしれない。
近所の人とか、親戚とか。

“僕の”大切な人とは言っていないもの。

遠野先生にとっても大切なのであれば、翔太くんの彼女じゃないか
もしれない。

遠野先生の彼女かもしれないもの。

翔太くん優しいから、きつと、それで……

沢渡はぎゅっと制服のスカートを握り締めると、顔を上げた。

言うなら、きつと、今。

今なら、避^けけず^にに聞^いいてくれ^るはず。

顔を上げた先の翔太を、じつと見つめた。

27（後書き）

本気モードの腹黒翔太、光臨（笑
書いててなんだけど、いやだなあ
……

「翔太、くん」

微かに震えを含む声に、翔太は“何？”とでも言うように小さく首を傾げる。

「あの、……ね？」

緊張のまま途切れがちになる言葉を、なんとか音に変える。

頑張らなければ、口の中で消えてしまいそうなほど小さな声。

「あの……」

意を決してぎゅっと手を握り締めた沢渡に対して、翔太はふうと溜息をついた。

それは絶妙なタイミング。

沢渡は次の言葉を繋げるタイミングをはずされて、眉尻を下げた。

「でもホント、困ったよね」

もう一度付いた溜息と共に、翔太が呟く。

内心悔しさを感じながら、沢渡は翔太の言葉を聞き返した。

「……困った？」

何が？

言外に含めたその言葉に翔太は沢渡の頬に当てていた指を下ろすと、校庭をもう一度見遣った。

私服の混ざる、いつもより多い人達。

学校という日常の中の、学祭という非日常。

きつと、誰もが浮かれている。

それは、沢渡も、同じ様に。

「制服。見つからなかったら、まずいよね」

その言葉に、沢渡の意識が現実に戻される。

そうだ。今は制服を探している途中。

それが見つからない限り、翔太はここに留まってくれない。

縫りつくような沢渡の視線に、翔太は気まずそうに首筋を片手で押さえた。

「惜しいけどね」

「え……？」

何が？

何が、惜しいの？

「僕、教室を廻ってみるよ」

そう言つて、体温の感じられるくらい傍にいた翔太が、沢渡から離れていく。

それは、とてもあつけなく。

先ほどまでの甘い雰囲気は、一体どこにいったのかと目を見張るほど。

思わず沢渡は、離れていく翔太の腕を掴んだ。

それに気付いて、翔太は足を止める。

振りほどこうとすれば簡単だけれど、動かそうともせず沢渡を見下ろした。

「あ、あの」

焦ったように口をばくばくとさせる沢渡を、不思議そうに首をかしげて見遣る。

「どうしたの？」

ほんわかと笑うその表情は、沢渡が恋をしたその顔で。
今のこの状況が、沢渡の感情に拍車をかける。

「あのつ、あの……」

沢渡の中で、選択肢が大量に生まれてそして消去されていく。

翔太と、二人の時間を過ごす為には。

翔太に、想いを告げる為には。

その目的の為に、どうすればいいのか――

そして何よりも今からやろうとしていることは、墓穴を掘ることになるのかもしれないという不安。

けれど、低い可能性は……自分に都合の悪い選択肢は消え去った。

意を決したように、翔太を見上げる。

「私に、少し思い当たるところがあるから。翔太くん、ここで待っていてくれる？」

……掛かった……

翔太は、内心ほくそ笑む。

しかし顔には何も出さず、こてんと首を傾げた。

「……思い当たるところ？」

聞き返すと、沢渡はこくりと頷いて翔太の腕から手を外した。

「多分だけど、一度見に行ってみるから。ここにいてくれる?」

制服のポケットからこの鍵を取り出して、翔太に手渡す。

そしてそのままドアへと向かった。

「僕も行くよ?」

「うつん、一人の方がいいから。すぐに戻ってくるね?」

がらりとドアを開けて、沢渡は足早に準備室から出て行った。

その後姿を翔太は準備室のドアから顔を出して見送ると、くすりと笑って廊下に出る。

そのまま準備室に鍵を掛けると、沢渡のあとを追いかけた。

沢渡は準備室を後にすると、そのまま階段を駆け下りて行く。

そして携帯を取り出すと、簡単にメールを送った。

宛先は、二年の後輩。

その返信はすぐに来て、沢渡はそれを確認すると部室棟に向けて駆けていった。

待っててと言ったけど、翔太がいつまでもそこにいてくれるとは限らない。

もしかしたら、いるかもしれないあの人を見つけて、行ってしまいかも……

脳裏に、“ゆい”の姿を思い浮かべる。

それだけで、どす黒い感情がわきあがってくる。

普通だった。

本当に、ただの、普通の女。

長い髪と眼鏡に隠されていたけれど、特筆すべき点が見つけられないほど普通の人。

押しに弱い、何も考えていなさそうな女。

彼女の存在が、自分を脅かしたのだと思うだけでも腹立たしい。

翔太が沢渡の願いを聞いてくれなくなって、周りから向けられたあの視線。

――可愛いからっていい気になって

――男が皆言う事聞いてくれるとか、勘違いしてんじゃない？

――ただの勘違いだったんだねー、沢渡の。恥ずかしいー

それは、侮蔑を含んだ、視線と悪意。

分かってる。

これは八つ当たり。

だから？ 八つ当たりだから、何だっていうの？

あの人が、お弁当なんて作らなければこんな事にはならなかった。ずけずけと、この学校の日常に入り込んでこなければ。

翔太くんをとられる事もなかった！

翔太くんに避けられる事もなかった！

この学校の生徒でも無いくせに、図々しく……！

沢渡の脳内では、周りから向けられた悪意への悔しさと苛立ちが、

由比への嫉妬に変換されて増幅していた。

八つ当たりだと気付いていながらも、そこまで自分が理不尽な事をしている自覚はほとんどなかった。

自分に恥をかかせた由比に、やり返しをしたかっただけ。

翔太と楽しそうにクラスを廻るのを、止めさせたかっただけ。

その行動の先が、どうなるのか、まだ気付けない。

それは、沢渡の後ろから気付かれないように追いかけてくる、翔太のみが知る。

29（前書き）

今回ちょっと長いです。

沢渡、翔太じゃない人にばれる、の巻

「沢渡先輩」

沢渡が目当ての部室に入ると、先に来ていた後輩が座っていた椅子から立ち上がった。

「唐沢さん、突然ごめんね？」

上がった息を整えてふんわりと笑いかけた。

二年の唐沢は、少し前からの知人。

体育教官室で”お弁当の彼女”の名前を知っていると溝口に言っているのを聞いてから、沢渡はただ見知っている人だった唐沢と情報交換をする間柄になった。

体育教官室での話を聞いたという沢渡のお願いに、唐沢は遠野兄弟の情報してくれるという交換条件で、お弁当の彼女の名前を教えたのだ。

名前を教える代わりに貰える翔太の情報は、他愛ないものでも学年の違う唐沢にとって、またその友人にとってとても嬉しいものだった。

可愛いと評判の沢渡と、仲良くできるというのも。

沢渡が足早に傍によると、いいえと笑って紙袋を手渡された。

それはお目当ての、制服。

「あとで教室について言ってたのに、大丈夫なんですか？」

「うん、大丈夫」

紙袋を確認して、それを手に持った。

目印と中を見られないようにとの意味で持ち手に縛り付けておいた紐は、渡した時と同じままになっていて内心安堵する。

あの時はさらりと見せたただけだから気付いていないと思うけど、よく見れば分かってしまうから……。

早く、翔太くんの元に戻らないと……。

さっさと部室を出て行こうとした沢渡に、唐沢が唐突に声を掛けた。

「あ、沢渡先輩。その紙袋の中身なんですけど……、それって制服でしたよね？」

その声は、沢渡の反応を伺うような声音で。

思わず、沢渡の足が止まった。

今更いきなり疑問を持たれた沢渡は、足と共に止まってしまいそうだった思考をなんとか動かす。

さっき二人で中を確認したから、分かっているはずだ。

なのにあえて問いかけられている理由に、言いようのない不安をかきたてられた。

けれど……

沢渡は意を決すると、小さく頷く。

「ええ、そうよ」

「それって、ゆいが着てた奴ですよね？」

唐沢の言葉が、鋭く続いた。

それは、沢渡にとって悪いほうに。

「え？」

一体、何なのだろうと沢渡は混乱しながら唐沢を見た。

あの時私は、置き忘れただけ言っただの。

それに見ただけじゃ分からないはず……。

動揺しそうな感情を押さえ込みながら否定する言葉を口にしようとした時、唐沢は少しむっとした様な表情で口を開いた。

「もしかして私、沢渡先輩に使われました？」

言われた言葉に、目を大きく見開いた。

「唐沢……さん？」

なぜこんなに責められるような状況になっているのか、沢渡は訳が分からず口端にまだ笑みを残したまま後輩の名前を呼ぶ。

その声にやはり表情は変えないまま、唐沢は言葉を続けた。

「さっきメールを貰う前に、沢渡先輩の教室に行っただけです。

そしたら先輩はゆいが着ていたはずの制服が見当たらないから翔太くんを探しに行ったって、そう言われて。その時はなんとも思わずに、教室から出てきたんですけど」

よく考えてみたら、沢渡の行動がおかしいことに唐沢は気付いた。

もともとこの紙袋は、少し前に沢渡に呼び出されて待ち合わせた場所に不自然に置いてあった物。

あの呼び出しも、おかしかった。

陸上部の出し物で校庭にいた唐沢に、沢渡から突然メールが来たのだ。

“食堂の裏手に来て欲しい”と。

確かに沢渡と会って遠野兄弟の情報交換をする時はそこを使っていたけれど、それは食堂の中であって裏ではない。

しかも学祭中は食堂が休みのため、ほとんど人が来ない場所なのだ。けれどいつもの事だとなんの疑いもなく、メールを貰ってすぐ食堂へと急いだ。

午前中に由比と遭遇していた唐沢は（圭介のいる準備室で会った女生徒三人のうちの一人）、部活の仲のいい人たちと、由比のことで盛り上がっていた。

だから、話を盛り上げる為にも貰える情報ならすぐに手にいれたかったのだ。

沢渡の言う通り食堂の裏手に来た時、何の変哲もない白い紙袋が置いてあるのに気がついた。

違和感を感じて覗き込もうとした時、沢渡に声を掛けられたのだ。今思えば、絶妙なタイミング。

沢渡にそれは何？ と問いかけられて、ありのままを話す。

ここに来たら置いてあった事。

今気付いて、中を改めようとした事。

沢渡は唐沢の言葉に小さく首を傾げると、その紙袋を開けて中を覗

き込んだ。

そこにはビニール袋にくるまれた何かが入っていて、ビニールを取り出して中を見てみると、それは学校の制服だった。

——もしかしたら、何かパフォーマンスをしている子が、ここに置いたのかもしれないわね。かといって、このままって言うのはちょっと困るわね……

沢渡は困惑したような声で、袋を閉める。

だから唐沢には一瞬しか見えなかったけれど、確かにこの学校の制服だというのは見て取れた。

——私、落し物として届けた方がいいですかね？

内心面倒な事になったなと溜息をつきながら唐沢が沢渡を見ると、いいえと頭を振ってくれた。

——いいわ、私が後で持つていつてあげる。面倒でしょう？ ただこの後すぐに用事があるから、三時半くらいにうちの教室に持つてきてくれる？

沢渡のその言葉に腕にはめている時計を見れば、現在時刻が二時前。唐沢が陸上部の当番が終わるのが三時過ぎだから、丁度いいと頷いた。

沢渡は唐沢の返答に頷くと、ここには置手紙をしておけばいいしと言って制服のポケットからミニサイズのメモ帳とペンを取り出した。そして持つていた髪のコム紐で持ち手を縛って閉じた沢渡は、これで中身が足りないとか文句を言われる事はないでしょう？ と微笑

んだ。

ときはきと処理をする沢渡を見て、さすが委員長を歴任しているだけあると唐沢は心から尊敬していた。

「だから気が急いて少し早めに教室に行っただけ、沢渡先輩がいないくて受付の人に聞いたんです」

そこで聞いたのが、翔太と一緒に見当たらない制服を探しに行ったという話だった。

「そしてもし貸し出している制服を着ている人見かけたら、声掛けで確保してねって頼まりました。その時……」

唐沢の視線が、沢渡の持つ紙袋にゆっくりと向けられた。

「特徴を教えてくださいました。制服は一緒だけど、ベストが指定とは色が違うって」

「それは……」

なんとか誤魔化せないかと言葉を続けるが、唐沢は一睨みすることですべてを遮った。

「もう一つ。裾にクラスの名前が書いてあるって。その中身が制服だって言うのは見ていたから、教室から出た後ふと気になって……」
それでここに走って戻って来て、中を見ました。
そう告げる唐沢は、じっと沢渡を見つめる。

「中身は、沢渡先輩が翔太くんと探しているという制服でした。さつき一緒に中を見たんだから、先輩だったらすぐ気付きますよね？先輩のクラスが扱ってるんだから、ベストの色がこうも違ければ普通疑問に思うはずですよね？」

唐沢の淡々とした口調に、沢渡の表情が強張っていく。

そう。

由比から制服を取り上げたあと、食堂の裏手に来るよう唐沢に沢渡は連絡をした。

人気が少ない事を、昨日のうちに確認しておいたから。

そして唐沢より先にその場所について、紙袋を置いておいたのだ。いかにも、置き忘れのような感じで。

そしてそれを見つけて中を覗こうとした唐沢に、まさに今来ただけかりと声を掛けて、一緒に発見者となった。

由比がいなくなった後、制服を持ってクラスに帰ったら絶対に疑われるから。

ワンクッションとして、唐沢を使ったのだ。

クラスに戻ってきたのが沢渡じゃなきゃ、それでいい。

現に唐沢は由比と沢渡が一緒にいた時、陸上部の出し物で校庭にいたのだ。

それを把握しての、計画だった。

唐沢にはちゃんとしたアリバイがある。

そして唐沢と一緒に見つけたことによって、沢渡が犯人になる事はないと踏んだのだ。

その後は落し物として届ける前にもう一度確認するような振りをしながら、それが探していた制服だという事を翔太に話せばいいと思っていた。

どういいうきさつがあったにせよ、結局由比が勝手に誰かと制服を交換し、そしてそれを見張るべき翔太が把握できなかったという事は事実だから。

翔太は、沢渡に感謝するだろう。

あれだけ見え見えの好意を寄せている由比を、面倒ごとに巻き込まなくて済むのだから。

沢渡にしても翔太との間に秘密を持てることになって、ある意味特別な関係になれる。

もし仮に由比に会って犯人は沢渡だと言われても、状況も物的証拠もなければ言いくるめられると思った。

沢渡の作り上げてきた、周りからの信頼。

そして流されやすそうな性格の由比を見て、こちらが引かなければ折れるだろうとそう思った。

沢渡の味方は沢山いる。

けれど、由比の味方は翔太と遠野先生の二人しかいないんだから。

それにもしかしたら面倒をかける嘔吐きの子として、翔太の興味もなくなると思っただのに――

29（後書き）

なんだか痛々しいような感じですね。
早めに更新しますm - - m

眉を顰めて沢渡を見る唐沢の目は、嫌そうに眇められている。

「さっきこの制服と一緒に見たんだから、ホントは気付いてましたよね？　なのにそれを隠して行動するって事は、後ろめたい事があるってことですよね!？」

興奮したように責める言葉を投げつけてくる後輩に、沢渡は呆然と立ち尽くした。

……なぜ、私はコノヒトに責められてるの？

唐沢は、圭介や翔太の言うなればファン。

それがミ―ハー精神で成り立っているとはいえその二人と一緒にいる由比を、快く思わないはず。

だから、もし唐沢にばれても大丈夫だと、そう思ったのに……

「さっき、ゆいを見ました。社会科準備室で、遠野先生と翔太くんとご飯食べてました。凄く二人が大切にしているのがわかって……」

何？　なんなの？　何が言いたいのか？

「確かに遠野先生と翔太くんに憧れる気持ちはありますが、嫌がらせの片棒を担ぐほど嫌な女になりたくないです」

「嫌がらせ……?」

「なんで疑問系？ 嫌がらせ以外の何があるんですか？ こんな幼稚な嫌がらせ、さつき気がつかなかったなんてホント自分でも信じられない！」

「ちよっ……」

唐沢は興奮しているのか矢継ぎ早に文句が口を出て、沢渡に話させない。

その勢いのまま、叫んだ。

「認めたらどうですか？ 人の事巻き込んだのにつ。それとも偶然って言い通す気ですか？！」

嫌がらせ？――

ただ、私は……翔太くんの隣を歩いて欲しくなかっただけ……だって、私の方が釣り合うでしょ、う？

沢渡は今まで向けられた事のないその怒気を含んだ視線に、思わず困惑したままの笑みを浮かべた。

「そんなこと……」

「ないって言えるんですか？ なんかもう、本当に嫌だ。さつきまで翔太くん達のことと盛り上がって楽しんでたのに、なんでこんな事させたんですか？！」

唐沢にしてみれば、ただ紙袋を預かっただけ。

ただ、それを届けるように言われただけ。

その前後については関係ないとはいえ、気分のいいものじゃない。

唐沢は寄りかかっていた机から重心を戻すと、沢渡の前まで歩み寄って足を止めた。

陸上部に所属している彼女は、沢渡よりも背が高い。

沢渡はこの後輩から感じた事のない威圧感を、全身で感じていた。

「私も片棒担いじやったから、誰にも言いません。ていうか言えませんが。でも、もうホント話しかけないで下さいっ」

泣きそうな声でそう叫ぶと、唐沢は部室から足早に出て行った。

大きな音を立てて、ドアが閉まる。

沢渡はびくりと肩を震わすと、その場にへたり込んだ。

「あっ」

部室を飛び出した唐沢は、すぐ近くの壁に寄りかかっていた翔太に気付いてその場に立ち竦んだ。

翔太はにつこりと笑うと、指先を振って唐沢を呼び寄せる。

何でここにいるのかとか、もしかして話を聞かれていたのかとか、そんな事が頭を過ぎったけれど、唐沢はぎゅっと手を握り締めて、竦んだ足を懸命に動かして翔太の傍に歩いていった。

悪いことをしてしまったのは、自分なのだから。
知らなかったとはいえ、やっぱり片棒を担いでしまったのは自分なのだから。

そう心の中で繰り返しながら。

そんな唐沢を見遣りながら、翔太は小さな声で一言言い放った。

「大体聞こえた」

唐沢はその言葉で足元から凍りついたように、体が固まった。けれどそれじゃいけない、と、意を決してがばつと頭を下げる。

「言い訳はしませんっ！ 本当に、すみませんでしたっ」

少し大きな声になってしまった唐沢に、翔太は指先を自分の口に当てて声を落とすように伝えた。

それから知っている事を全て話させると、しばらく考え込んだ後翔太は小さく頷いた。

「そっか、うん、分かった」

それは微かに笑んでいて、一言も責められないこの状況に唐沢は罪悪感で一杯になる。

「あのっ、本当にすみませんでしたっ」

再び頭を下げると、くすりと笑い声が聞こえてきて思わず顔を上げた。

「いいよ。何も知らずに手伝わされちゃったんでしょ？ さっきそ

う聞こえたよ」

「……それは、そうですね」

「言い訳もしないし、潔いし。由比だって怒らないよ、君なら」
そう言われて、社会科準備室で見た由比の姿が思い浮かぶ。

大人しそうだけど、楽しそうな人だった。

呼び捨てにした私達を責めた翔太くん達から、庇ってくれた。

つい興奮が先立って、言いたいことだけ言って出てきてしまったことを思い出す。

「あの、」

話は終わったとばかりに歩き出そうとした翔太に、唐沢が慌てて声を掛ける。

何？ とでも言うように、翔太が振り返った。

「あの、さっき庇ってくれてありがとうって、ゆいちゃんに伝えてください」

さつき？ と首を傾げてから思い当たったらしく小さく頷くと、ぶつと噴出した。

「え、あの？」

笑う様な場面じゃなかったはず。

呆気にとられた唐沢に、翔太は口元を掌で押さえながらうんうんと頷く。

翔太としては、年下にまでちゃん付けされているのが面白かっただけなのだが。

「分かった、伝えておく。じゃ、もう気にしないでいいから、学祭楽しんでね」

人好きする笑顔を向けて、翔太はひらひらと手を振った。

唐沢は元氣よく返事をする、もう一度頭を下げて校舎のほうへと駆けていった。

その後姿を見ながら、翔太は視線を部室棟に戻す。
まだ、沢渡は出てきていない。

盗み聞きした二人の話、詳しく聞いた唐沢の話。
分からない部分は想像するしかないけれど。

ただ――

ただ、これだけは分かった。

由比が嘘をついた事。

そして……

犯人が、沢渡、だということ――

30（後書き）

さくさくと、沢渡の回を過ぎ去ろつと、懸命な篠宮です（笑
だつてもー、書いててイライラとムカムカと。
書いてる本人なのに（笑

31 (前書き)

今回短いです。

きりがよかったので^^ ;

翔太の足取りは、軽かった。

心は重くても、動きは軽かった。

由比を、貶めただろう犯人をこんなに早く見つけられた事。それは、翔太の心を軽くもし重くもする。

俺の大切な人を、くだらない理由で騙したこと。

それを隠して、自分に近づいてくるその傲慢さ。

どう追い詰めてやろうかと、冷静な部分が思考を早める。

けれど、その反面――

やはり、というか。

既に気づいていた事だったし、端から信じていなかったけれど。

由比が嘘をついていたことに、感情が冷えていく。

由比は、嘘をつける人間じゃない。

…… 由比は、“自分自身を守る為に”嘘をつける人間じゃない。

きつと、俺を守る為。

俺のことを考えて、嘘をついた。

そう信じられる程、翔太は由比を自分のテリトリーに入れていた。

仮にその考えが間違いで、由比を責めることが考え付かないくらい。

それほど、翔太は由比から与えられていた。

“温もり”を。

近しい人から与えられる、“安心感”を。

圭介からしか感じる事が出来なかった……、否、圭介以外を受け入れようとしなかった翔太が、自ら求めて手を伸ばすくらい。

故に、それに気付く。

由比にとって翔太が、守るべきものなのだという事を。

弟、子供……

要するに肩を並べて同じ立ち位置にではなく、保護する立場で翔太を見ている事を。

それは、……翔太にとって圭介と同じ存在だという事を――

どんなに好きだと伝えても、額面どおりに受け取ってくれない由比。それは、翔太という存在を保護すべき子供だと思っているから。

「分かってるよ」

思わず、自分の考えに声を上げる。

「理解、してるよ」

最初から、そうだった。

男として見られていなかった。

それが新鮮で、嬉しくて。

見てくれで傍によって来る人が多かったから。

この顔の男じゃなくて、翔太という一人の人間を見てくれた事が嬉しくて。

由比に惹かれた。

だから自分に対して特別な感情を、由比に持つて欲しかった。

自分を特別にして欲しい人には、そう見られない事に自嘲しながら。

ゆっくりと足を進める翔太の目の前に、何の変哲もない安普請なドア。

陸上部と書いてあるその部室には、主である部員達ではなく沢渡がいる。

唐沢に責められた沢渡が、どんな状況になっているのか想像はつく。今までもてはやされて来た沢渡に、それを受け止められるだけの精神力が存在しているのか疑わしい。

けれど。

手を伸ばして、ドアノブに触れる。

安心していようが、罪悪感に打ちひしがれていようが。

「俺には関係ない」

手に力をこめて、ゆつくりとドアを開ける。

視界に入る、へたり込んでいる沢渡の後ろ姿。

同情も、何もわかない。

どこまでも冷えている自分の感情に、翔太自身、苦笑する。

……俺には関係ない。

沢渡が、今、どんな状況だろうと。

ねえ……？

「沢渡さん」

自分でも聞いた事のない低く地を這うような声に、翔太は思わず目を細めた。

32 (前書き)

もう少し…、ヤマはもう少しで登りきる……っ
早く沢渡の回を終えたい(苦笑)

掛けられた声に、へたり込んでいた沢渡が勢いよく顔を上げた。

翔太の方に視線を向けた沢渡は、ただでさえ大きな目が零れ落ちちやうんじやないかというくらい目を見開いて。

翔太はなんでもないので視線を外すと、辺りを見回しながら部室内に足を踏み入れた。

そのまま後ろ手で、ドアを閉める。

「ここが、沢渡さんの言う“思い当たるところ”なの？ 随分ピンポイントなんだね。迷いなくここに駆け込んだけど」

ゆっくりと足を進めながらも、沢渡との位置は変えない。
ドアを塞ぐように、翔太は立ち塞がる。

「翔太くん……、どうして……？」

沢渡は信じられないものを見るかのように、じっと翔太を見上げたままぼつりと呟いた。

それはそうだ。

図書準備室にいるはずの翔太が、こんなところにいるのだから。

翔太はおかしそうに、肩を竦めて答える。

「だって、僕の落ち度だし。沢渡さん一人に、探す労力を掛けるわけにはいかないよ」

ね？ と、にこりと笑う。

その姿に、沢渡の肩から力が抜けるのが見て取れた。

ばれていない、そう、信じた。
話は聞かれていないと、その願いのまま。

部活に所属してない沢渡は、部室棟の壁の薄さに気付いていなかった。

少なくとも、叫べば外に内容が分かるくらい声が漏れるとは知らなかった。

それは防犯上の構造だったけれど、沢渡にとってはありがたくないものに違いない。

翔太は今すぐ詰め寄りたい感情を何とか押さえ込みながら、いかにもほっとしている沢渡に声を掛けた。

「もしかして、見つけてくれたの？」

翔太の視線は、沢渡の傍に落ちている白い紙袋へと向けられた。
何の変哲もない、ただの紙袋。

朝の段階で、翔太が持っていた真っ白い紙袋。

それが沢渡を責めるものになるとは、二人とも想像すらしなかっただろう。

沢渡はちらりと一度それを見遣ると、ふうと小さく息を吐いた。
唐沢にはばれてしまったが、翔太に気付かれたわけではない。

どうとでも、言い訳はできる。

どうとでも、言い逃れはできる。

だって私は……、私なんだから……。

ずっとずっと、頑張ってきた。

自分を見てもらうために、自分を認めてもらうために。

私は、そんなに酷い事をしたわけじゃない。
ほんの少し、少しだけ我俣を……通してみただけ。
唐沢さんの言うような、そんな酷い嫌がらせをしたわけじゃ……

沢渡は一度目を瞑ってから、ゆっくりと立ち上がった。
顔を伏せたその瞬間に、“沢渡 美樹”を立て直して。

少し強張った顔を誤魔化すように、口端を何とか上げて笑みを作る。
「はい、これ」

まだ少し震えている指先を隠すように、紙袋を持ち上げて翔太へと差し出した。

「さっきね、落し物で見つけて。まさか貸し出しの制服だとは思わなかったから、知り合いに預けてたの」

翔太は微笑んだまま、何も言わずにそれを受け取る。

中はビニール袋にくるまれていて確認はできないが、さっきの唐沢の言葉を聞けば本当なんだろう。

改める事もせず、それを片手で持った。

「そうなんだ。もっと早く言ってくればよかったのに」

少し眉尻を下げると、沢渡が少し焦ったように翔太の傍近くに寄る。
それは、先ほどの図書準備室で存在することのできた、距離。

「ごめんね？ あの時、よく見ておけばよかった。そうすれば翔太くんを困らせずに済んだのに」

「いいよ、見つけてくれたんだし。これで、由比に迷惑掛けずに済むから」

“ ゆい ”

その名前に、沢渡の心臓が、どくりと音を立てた。

“ 二人が凄く大切にしているのが分かって…… ”

唐沢の言葉が、脳裏をよぎる。

でも、でも……

沢渡はあの時の翔太の態度に、縋っていた。

“ 惜しい ” と言ってくれた、あの表情に。

頬を辿った、その指先の熱に。

「 そういえばさ、この制服、どこで見つけたの？ 」

翔太はそんな沢渡を見下ろしながら、小さく紙袋を持ち上げた。

沢渡はぎゅっと胸の上を片手で押さえながら、意識を切り替える。

「 食堂の、裏にね。置いてあったの 」

「 へえ？ なんてそんな所に……、ていうかどうして沢渡さんはそこにいたの？ 」

怪訝そうに首を傾げる翔太に、沢渡は考えていた言い訳を矢継ぎ早に伝える。

沢渡はあの時の翔太の態度に、縋っている。

それは少しの違和感さえも、きつと思いついて過ごしと欲してくれなくらいには自分を見てくれているはずだと、そう信じる為に。

「 たまたま後輩の子とそこで待ち合わせしてたの！ 」

そうしたらその子が紙袋を見つけて、一緒に中を見たら制服が入ってて。

てつきり校庭で何かパフォーマンスしてる人が、荷物としてそこに置いていたのになって」

用事があったから、後輩に託していたの。

そう続けると、翔太は得心がいったように頷いた。

「なるほどね。それは重要な役だね、唐沢さん」

33 (前書き)

とりあえず、翔太VS沢渡は終了！
あー、……なんだかほっとしました^^；

声が、変わった。

優しい声が、身の竦むぐらい冷たい声音に。

無意識に肩を震わせた沢渡は、呆然と翔太を見つめる。

「しょうた、く……」

呟くように零れた声は、翔太に遮られた。

「自分が犯人と疑われない為にも、アリバイって重要だもんな」

声と共に、表情までもが冷たく変化していく。

薄く張り付いたような、笑み。

なのに笑っていない、目。

「で、沢渡さ。由比から制服を取り上げた理由は何？」

呼び名まで変わる。

「翔太くん？」

夢のような幻のような、目の前に翔太がいるのは分かっているのに、聞こえてくる言葉がそこから発せられているとは理解できない。

「俺と由比を騙した沢渡の目的、言ってみろよ」

翔太は口端を上げて、侮蔑の色を浮かべた。

目を見開いたまま固まっている沢渡に、くすりと笑う。

「何、驚いてんの？ 俺って言うて欲しかったんじゃないっけ？」

“俺”

由比に向けられたこの一人称を、羨ましいと思った。

唯一人の特別のように扱われていた、由比。

自分も、特別に見てもらいたかった。

由比だけじゃないと……

けれど、由比とは間逆の状態に沢渡は震えるしかない。

「おーい、俺の話聞いてる？ それとも、言えないなら代弁しようか？」

冷たく眇められたその目は、さつき出て行った唐沢を思い起こさせる。

「まあ、何をしたとかも面白いよ。さつきここで話してたこと、外に駄々漏れだったし。大体内容は分かったから、今更言うのも面倒だし」

「え……」

聞こえて、いた？

驚いたように見開かれる目を、面白そうに翔太が見下ろす。

「どんな状態かなーとか思ってたけど、まさか何もなかったかのような態度を取るとは思わなかった」

くすくすと笑う翔太は、“遠野 翔太”ではない、いつもとまったく違う人。

沢渡はどうしていいのか分からず、現実を直視しなくなって無意識に俯いた。

沢渡の脳裏に、由比と歩く翔太の姿が思い浮かぶ。

由比が翔太の隣にいるのが悔しくて……、悔しくて仕方がなかった。自分の想像以上に、なんでもない普通の女が翔太の隣にいるのが嫌だった。

それが自分の立場を不安定にしている存在だと思えば、余計に苛立ちが募る。

だから……、制服を返してもらった。

大人しそうな由比に、派手で露出の多い服を押し付けて。

声をかけた時、バックも何も持っていなかったから、きつと携帯も持っていないんじゃないかと思つて。

案の定、急かして制服を脱いでもらった時、携帯を制服のポケットから出す仕草もしなかった。

——ただ、それだけ

衣服を何も渡さなかったわけじゃない。

少し派手目な子なら、充分服となりえるもの。

ただ単に翔太から離して、二人でいるところを見たくなかっただけ。

別に怪我をさせたわけじゃない。

ほんの少し、閉じ込めただけなのに。

なんで、こんな事になつてるの？

何で、責められてるの？

違つ、だって……絶対……

ワタシノホウガ ショウタクンニ ツリアウモノ――

「私の方が……」

「ん？」

ぼそりと呟いたその声に、翔太が首を傾げる。

「何？」

翔太の問いに触発されたかのように、沢渡が口を開いた。

「私の方が、絶対に、釣り合う、もの」

「……」

俯いたまま言った沢渡は、ある意味よかったかもしれない。

翔太の顔を、見てなくて。

恐ろしいほど冷たく目を細めた翔太は、緩く息を吐き出して沢渡を覗き込んだ。

「ね、そういえばさつき準備室で、何を言おうとしていたの？」

がらりと変わった優しい声音に、弾かれたように沢渡が顔を上げる。そこには、優しいいつもの翔太の顔。

「何か言おうとしていたでしょ？ つい気が急いて遮っちゃったけど、なんだったの？」

それは――

「翔太くんが……」

「僕が？」

追い詰められている意識のない沢渡は、翔太の促すままにそれに答

えた。

ずっとずっと大切にしてきた、翔太への気持ちを。

「好き」

幾度も描いたようなシチュエーションではなく、ただ、幾度も思い描いたフレーズだけ口をついた。

こんな場所で、こんな状況で言うつもりじゃない言葉。

翔太は沢渡の言葉に微笑むと、覗き込んでいたその体勢のまま口を開いた。

「俺は、嫌い」

言われた言葉の意味が、麻痺した感情に何も響かない。言われた事のないその言葉が、沢渡の動きを止めた。思考ごと。

翔太はゆっくりと上体を戻すと、手にある紙袋を持ち直した。

「じゃ、僕、先に行ってるね。黒田たちも心配してると思うし」
そう告げても、俯いたままの沢渡は微動だにしない。
そんな沢渡を一瞥して、翔太はドアノブに手を置いた。

「あ、そうそう」

そこで気付いたかのように、後ろを振り返る。

「皆には今回の事、内緒にしておいてあげるね？」

沢渡はその言葉に、ぴくりと反応を示した。

自分に気を使って言ってくれたろう翔太に、もしかして、の望みを見出すように。

けれど、現実残酷で。

翔太はゆっくりと顔を上げた沢渡の目をじっと見つめて、にこりと微笑んだ。

「じゃないと、由比が悲しむから」

あとはもう、何も言わない。

ただ黙って立ち尽くす沢渡を残して、その場を後にした。

34（前書き）

沢渡VSは掘り下げようと思いましたが、止めました。

うん、これ以上翔太のイメージが崩れることは止めておこう。
確実、保身です（笑）

「うー、作りすぎたかな？」

自宅アパートに戻った由比は、いそいそと夕飯の用意を始め数時間。ホームパーティーかよつ、と、どこぞのお笑いの人につっこまれそうな位の料理を作り上げた。

自分でも作りすぎて思うってことは、あの二人はもっと分かるよね。

豪華になりすぎた夕食を前に、思わず由比は苦笑した。

それはもう、絶対的にお詫びを兼ねているからの行動。

翔太にも圭介さんにも、迷惑を沢山掛けてしまったから。

特に翔太には、嫌な思いまでさせてしまった。

アパートに戻った時に送った帰ったよメールには、いつもどおりの返信がきたけれど。

圭介さんからも、普通に返ってきたけれど。

それでもなんとなく落ち着かなかった由比は、ホワイトボードに書いてあった夕食のリクエストを片っ端から作ってしまったのだ。

「これ、食べきれるかなあ」

もし自分が食べるなら、二日は掛かるな。

しかも三食連続で。

ふむ、と腕を前で組む。

その時、隣の部屋のドアが閉まる音が聞こえた。

……翔太だね、多分。

テーブルに置いてある時計は、七時前を指している。

さすがに、圭介さんはまだ戻らないだろう。

由比は視線を戻すと、もう一度作り上げたおかずを見て息を吐き出した。

「作ったもんは仕方ない。まあ、明日の分として引き取ってもらえば捨てる事もあるまい……」

まるで職人のような口調になりつつ、隣にいるだろう翔太に向けて壁を叩いた。

“とととん”

すると少し時間を置いて、

“とととん”

と、叩き返してきた。

「よし。じゃ、戸締り戸締り」

その音を聞いて、戸締りを始める。

今のは「ご飯出来たよ、もってってー」の、合図。

あとは、“とととん”で、「今から行くよ」とか。

いちいち顔出したり、メールしたりが面倒でそんなことになった。

汁物のお皿にラップを掛けながら、ふと、昼間に会った女の子を思い出す。

あんだ、翔太くんのなんなのさ！

という感じで見られたけど、本当に隣人なんだけどなー。

あ、”仲のいい”を加えてくれると、私は嬉しいけどね。

その時玄関から、翔太の元気な声が聞こえてきた。

「由比、上がるよ」

「ん、どーぞ」

頭の中からとりあえず疑問を追い出して、笑顔で翔太を迎える。

廊下から姿を現わした翔太は、着替えて来たらしくジーンズとＴシャツのラフな格好。

少し表情が暗いのは、学祭で疲れたんだろうか。

翔太はいつもよりゆっくりと台所に入ってくると、テーブルの上にある数々のおかずを目を見張った。

「凄い、どしたのこれ」

あー、やっぱりおかしく思うよねー。

私は頬を指先で掻きながら、えーと、と呟いた。

「学祭の打ち上げ？ 的な？」

「なぜに疑問系」

苦笑いに表情を変えて、翔太がくすりと笑った。

「なんか後ろめたい感情が見え隠れ」

「……」

う……ばれてるしー、ていうかばれるよね。

うん、ここは素直が一番だ！

私は翔太の目を見て、がばつと頭を下げた。

「ごめんなさい！ 今日、本当に迷惑掛けました！」

もう、ホント色々と色々と！

いや、迷惑掛けられたところもあったけど、でもやっぱり私の方がかけた比重が大きい気がするし。

「……まあ、焦ったけどな」

ぼつり、と翔太が呟いた。

頭を下げたままの私には表情は見えないけれど、それでもなんだか寂しそうに聞こえてくる。

視界に見える翔太の足をじっと見ながら、翔太の言葉を待つ。

「戻ってきて、由比がいなかった時、どーしようかと思った」

「ごめんっ」

「散々探してやっと圭介から連絡来て。服持って来いって言うから最悪な想像して。案の定準備室にいた由比は圭介のYシャツ姿で。

……目の前が真っ暗になった」

うーあー、それは自分のせいじゃないけど、そうだよ。そう思うよね？

「ホントにごめん」

「しかも、溝口にまで見つかって……。どんだけ心配したか、分かってる？」

「うん、ごめん」

「服、取り上げられたんだろ？」

「うん、ほんとーにごめ……。え？」

勢いで頷いてから、翔太の言葉にピタリと動きを止めた。

……背中が、うつすら寒い気がするのはなぜだろう？

「受付のところにいた女に、制服、着替えさせられたんだろ？」

「う……。え？」

人までばれてんですけど！

ちよっ、なんでっ！？

これは、誤魔化すべき？ とぼけるべき？ どーするべき？！

脳内ぐるぐるの状態でじっと固まっていたら、テーブルの向こうにいた翔太がいつの間にか目の前に立っていた。足の指先が、ゆっくりと視界に入る。

「又、俺に嘘つく気？」

心臓が、
跳ねた。

「由比」

下げたままの視界に、翔太の足が……身体が……そして。
私を覗き込む、翔太と目が合う。

「俺を守る為の嘘なんて、つかないで」

その声は落ち着いていてとても優しく、その表情は見たこともないくらい寂しそうだった。

「翔太……」

跳ね上がった鼓動が、どくどくと脳内に響く。

「由比が俺をどう思ってたもいい。でも、お願い」

ゆっくりと腰に回される両腕に、身体を絡め取られる。

お腹の辺りに横顔を押し付けた翔太は、私の身体に回した腕に力をこめる。

腰に縋りつかれたような状態に、両手を宙に浮かせたまま翔太を見下ろした。

しがみついていたながら、触れられることを怖がりそうだったから。

「俺を、子供の一括りに入れないで。俺は、由比と、対等でありたい」

「……翔太？」

「なんか、様子が……？」

「たったの四歳じゃないか。俺が学生だからって……、俺を守る側にならないでくれよ」

ぎゅっとしがみつく翔太は、言葉とは違って小さな子供みだった。た。

表情は全く見えないけど、微かに肩が震えてる……

「どうしたの？ 翔太……？」

さっき、図書準備室で会った時は、こんなに弱々しい雰囲気じゃなかった。

確かに辛そうだったし焦っていたけれど、こんな状態じゃなかった。

「由比」

「何？」

くぐもった声で呼びかけられて、応える。

すると翔太は頬を私のお腹につけたまま、身体に回した両腕に力をこめた。

「由比。俺こそ、ごめん。謝るの、俺の方だよ……」

苦しそうに言葉を吐く翔太に、先ほどまでと違って触れた方がいいと気づく。

ゆっくりと宙に浮かせていた手で翔太の頭に触れると、震える事もなく驚くこともなくそれを受け入れてくれた。

すこしほつとして、ゆっくりと頭を撫でる。

「ね、翔太。本当に、ごめん。守る為の嘘と言うよりは、私が後味悪そうだからついた嘘なの。だから、私が悪いんだよ」

「違う。勝手に振り回して、一人にした俺が悪い。大丈夫って言うてたけど、本当は呆然としたろ？ どうすればいいか、悩んだろ？」

何がどうしたんだろう。

さっきまでの私を責めるような言葉も雰囲気もなく、自分が悪いと謝罪の言葉を繰り返す。

私は何度かその言葉を交わした後、じゃあ、と呟いた。

「お互い様、にしようか。そうしたら」

どっちが悪いを繰り返していても、仕方ない。

私が言うべき方じゃないと思うけど、今の翔太は、頑なだ。
私が言うしかない。

翔太は口を噤んだ後、小さく頷いた。

「由比がそれでよければ」

「うん、いい。じゃ、これでこの話はお終い」

ぼんぼんと軽く頭の上で手を動かせば、なぜか翔太は少し緩んでいた両腕に再び力をこめた。

それは少し痛みを感じるくらいで。

お互いに後ろめたい話は終わったはずなのに、と思わず翔太に触れていた手をまた宙に浮かせた。

すると何を思ったのか、翔太は片腕だけ解いて離れた私の手をぎゅっと掴む。

腰に回された手と同じように強い力で握られて、方眉を顰めた。

しかし顔を上げた翔太を見て、何も言えなかった。

「由比」

再び呼ばれた名に、瞬きで応える。

あまりにも必死な翔太の表情に、やはり言葉が出なかった。

じっと見下ろしている私に対して、行動だけではなく翔太はその目まで縋りつくような色をのせた。

「いなく、ならないで」

……？

いなくならないで？

思ってもみなかった言葉に、思わず目を見張る。

けれど翔太はそんな私に構わず、もう一度繰り返し返した。

「……頼むから、勝手にいなくならないで」

そう言つて、私の手を掴んだまま再びぎゅっと両腕に力を込めるとまた顔を伏せた。

その表情が見えなくなる。

私は意味が分からないまま、翔太をじっと見つめた。

心なし、肩が震えているように見える……。

そこでふと、準備室で着替えていた時、廊下にいた圭介さんと翔太の会話を思い出した。

——いたはずの場所に、いなくて。探しても見つからなくて。——
また、いなくなるのかと……

——由比さんは、ここにいます。由比さん、だ。“咲子さん”じゃない

咲子さん、という人が誰だか知らないけれど……
いつもの明るく腹黒翔太が、こんなにも弱るなんて
一体、その人と何があっただろう……。――

「翔太、大丈夫だよ」

びくり、と翔太の肩が震えた。

よく分からないけど。

私はただ、頭を撫でていた。

その背中を、ただ抱きしめていた。

「私は、いなくならないよ」

翔太が、いつもの翔太に戻りますように、と願いを込めて。

35（後書き）

これで4章終了です。

翔太の理由までいけなかったと、反省中 m - - m

学祭後 週明け月曜日 ― 圭介 ―

学祭明けの月曜日、圭介はいつもより早い時間に職員室の自分のデスクに鞆を置いた。

まだ出勤していない教師の方が多く、遠くの方から掛けられた挨拶に会釈をしながら応える。

上着を脱いで椅子の背もたれに掛けると、ぎしりと音を立てて椅子に腰掛けた。

使いまわしのデスクセットは、何年使っているのか分からない年代物。

ところどころ傷の付いたスチールの天板には、余分なものは置いていない。

担当クラスを持たない圭介は、最低限必要なもの以外は準備室の自分のデスクに置いていた。

足元に置いた鞆から手帳と、紙袋を一つ取り出す。

それを一瞥して、黒板にある週の予定を手帳に書き写していた。

「おはようございます、遠野先生」

しばらくして、隣の席に人が立つ気配。

挨拶の声に、圭介は顔を上げた。

「おはようございます、溝口先生」

いつもどおりの微笑を浮かべて挨拶を返すと、溝口は少しほっとしたように椅子に腰を下ろした。

いつもどおりジャージの下穿きとポロシャツの溝口は、圭介のＹシヤツ・スラックス姿を暑そうですねえと評しながら。

「今日は学祭の片づけがメインだから、授業がない分、気が楽ですねえ」

ばさばさと机の上においてある数冊のバインダーを横にどけながら、溝口は手帳を引き出しから取り出した。

圭介のデスクと正反対に、溝口の机は“乱雑”の一言に尽きる。いるんだかいらないんだか分からないバインダー、生徒から貰ったいつのものか分からない飴。

圭介が一番理解できないのが、手帳が引き出しにしまわれていること。

予定を書き込んだ手帳を机に入れっぱなしにするならば、手帳の意味がないのではないだろうか。

一度そう聞いてみた事があったが、溝口はきょとんとしてさも当たり前と言った。

“気分です”

手帳に予定を書いただけで、なんとなく満足感があるから。必要なら、職員室の予定表を見ればいいんだし。

きっと、相互理解は遠い話だなと思った記憶がある。

圭介はべらべらと学祭の愚痴を口にする溝口に、小さく息を吐き出して先ほど机に置いておいた紙袋を差し出した。

「よろしければ」

その言葉に、圭介を見ないで話していた溝口が顔を上げた。紙袋に、目が止まる。

「……なんですか、これ」

「……私も不本意なので、いらないと言、言ってくださればありがたいのですが」

「ください。ありがとうございます」
よく分からないが、圭介が嫌がるというところに興味が惹かれたらしい。

手を伸ばして、圭介から紙袋を受け取る。

それを膝の上に乗せて袋の口を開けると、目に入ってきたのは布にくるまれた物体。

その脇に割り箸と、インスタントの味噌汁の小袋が見える。

……もしかして。

溝口は内心得心がいったように、にやりと口端を上げた。

「ゆいさん？」

圭介は楽しそうな溝口から視線を外すと、手元の手帳に意識を向ける。

「溝口先生にご迷惑をお掛けしたので、お詫びにとの事です。失敗しました。いつも私のお弁当を狙っている同僚の教師だというような紹介をしなければよかった」

「って、なんですか？。その紹介文！？」

「はあ……と、盛大に溜息をついた圭介に、溝口が突っ込む。

「端的で、そのままだと思います」

顔も上げずに言い返してくる圭介に、思わず苦笑する。

「ゆいさんが絡むと、遠野先生は腹黒光臨するって事です」

「由比さんに負担ばかり掛けてしまって、本当に憎らしい。溝口先生が」

「うわー、なんか凄い不穏な言葉！」

ぽんぽんと交わす会話に、溝口は初めて圭介の素に触れたような気がしていた。

完璧すぎて胡散臭いと思っていた奴は、好きな女性が絡むと心が狭くなる嫉妬野郎だった。

笑えて仕方ない。

「ゆいさんにお礼を言っておいてください。ありがとうございます
って」

「はい、分かりました」

「また作ってくれると嬉しいな、も、ついでに」

「……一食一万円になります」

「たけえっ！」

本人達……いや溝口は結構楽しい言葉のやり取りをしていたつもりだが、実は周りの先生からちらちらと見られていた事に二人は気づいていなかった。

そして昼休み、自分が監督をする陸上部のミーティングが急遽開かれた為、食堂でお弁当を食べることになった溝口は、校内に流れる噂に自分が勝手に参戦させられた事に数日後気がつく。

教師間 曰く

——遠野先生の彼女に頼み込んで、おすそ分け貰ったらしい

生徒間 曰く

——ゆいに横恋慕したらしい

「なんで、俺の立場が悪いものばっかなんだ！」

後の祭り（笑

学祭後 週明け月曜日 — 圭介 — (後書き)

ちよつと閑話を挟みます。

次回、翔太ターン

「はよーす、翔太」

いつもより遅めに教室に足を踏み入れた翔太は、ドアからさほど離れていない席に座る黒田に声を掛けられて立ち止まる。

「おはよ」

短く返すと、ちよいちよいと手招きで呼ばれて首を傾げつつ傍にやる。

「何、黒田」

机の脇に立った翔太に、黒田は隣の席の椅子を脚で引き寄せて座るように促した。

「？」

呼ばれる事も椅子を勧められる事も珍しくないけれど、鞆を席に置いてくる暇も与えられないほど急かされる事は今までなかった。

その態度に疑問を浮かべながら、足で引き寄せられた椅子に腰を下ろした。

その向こうにいる、本来の持ち主に一言断りを入れて。

「で、何なの」

翔太は黒田の机に鞆を置くと、言葉を促すように口を開いた。

黒田は翔太を呼んだわりに、少し困惑するような表情をしていたから。

「いや、あのさ」

「だから、何？」

強い語気ではなく、やんわりと先を促す。

黒田は少し視線を彷徨わせたあと、ずいっと翔太に顔を近づけた。

「……悪いけど、僕、そんな趣味ないよ」

「俺にもねーよ」

空気を和ませようとする翔太の気遣いは、今の黒田には通じないら

しい。

仕方なく何か言い出すのを待っていると、やっと黒田が口を開いた。

「沢渡さんと、何かあった？」

その言葉に、翔太はすうつと目を細めた。

小さな声だった黒田の言葉を聞こうとして、顔を伏せていてよかったと自分でも思えるほどに。

けれど何も答えない翔太に、黒田は言葉を重ねる。

「ほら、学祭の時ゆいさんに貸した制服を二人で探しに行っただろ？ 無事に見つかってよかったけど、二人で行ったわりに別々に帰ってくるし、沢渡さんの様子はおかしいし。なんか気になってさー」
小さく息を吐き出しながら翔太が顔を上げると、がしがしと後頭部を掻きながら困ったように自分を見る黒田と目が合う。

「いや、別に何もなかったならいいんだけど」

この友人は、翔太よりも沢渡の変化を気にしているらしい。

それはそれで、当たり前だと翔太は苦笑する。

実は黒田。

二年時から、沢渡の事をずっと片思っているのだから。

好きな人が、自分の友達に何かされたと思えば気が気じゃないだろう。

くすりと聞こえないように笑いながら、視線を黒田から外してクラスの中中央付近にある沢渡に向ける。

見た目は普通だと思うけれど、確かに笑顔が少ない。

いつもなら周りを取り巻いている生徒も、今日は空気を読まない猛

者である隣の席の男だけだ。

翔太は意識を沢渡に向けながら、口を開いた。

「別に一緒に行ったわけじゃないけどね。それに、黒田が心配するような事は何もないよ。制服を見つけてくれたのは沢渡さんだから感謝してるくらいかな」

「そうかー？」

黒田は納得のいかないような表情で、溜息をついた。

「翔太が気がついてるかどうかわかんねーけど、ほら……その……」

いや、気付くよ普通。

そう突っ込みながら、そうだねと頷く。

「まあ、僕にしたらどうしようもないかな。好きなのは、由比だけだし」

「つかあつ！ お前が言うとしっくり来るな、そんな言葉でもよつ！」

悔しそうに机に撃沈する黒田を、可愛いとは思うが正直めんどい。さてどうするかなー、と頬杖を付いて顔を上げたら女子生徒と目が合った。

「おはよー、翔太くん」

教室に入ってきたばかりの霧島は、歩きながら自分の席に鞆を置いて机を挟んだ翔太の向かい側に立った。

「おはよ、霧島」

挨拶を返すと、黒田ががばっと顔を上げて霧島を見た。

「俺には無しかよ！」

「だって面倒そうなんだもの」

「優しくない！」

この二人のやり取り、凄い面白いのになー。

なんで黒田は気付かないんだろ。

憎まれ口を叩きながらも、心配そうに黒田を見る霧島の視線に。こいつら、一直線関係っていうのかねえ。

その中に自分も組み込まれている事に、思わず苦笑する。

“一直線”も踏襲してるから、性質わりいな。

「なあ、翔太あ……」

自分の思考に沈んでいた俺を、おずおずとした黒田の声が現実引き上げる。

「ん？」

素に近い表情で黒田を見下ろすと、縋りつくような目と合って溜息をついた。

振り返って沢渡を見れば、唯一人、じっと席についていて。

遠巻きにしている女生徒が、首を傾げながら少し離れた場所でこそそと話しているのが見えた。

もし、沢渡のした事がばれたら、きっと今までのクラスの状況がひっくり返る。

人はある意味、素直で流されやすい。

こと、こういう閉鎖された“学校”という箱の中では。

今まで“かわいくて勉強の出来る、頼れる委員長”だった沢渡が、実は嫉妬であんなくだらないことをやらかしたとしたら。

あまり表に出ることのなかった沢渡に対しての悪感情が、今までのイメージをきつと覆す。

人がどれだけ温かくて、そしてどれだけ薄情か。

翔太は、ふう、と息を吐いて沢渡から視線を外した。

「暑いわね」

一言、桜が呟いた。

既に学祭から数日が経ち、翔太の学校は先週期末考査を終えた。いやあ、どんどん顔色が怪しくなっていく翔太と、試験問題を作り終えて後は採点を残すのみとなった少し浮かれている圭介さんとの対比がとても面白かった。

しかし翔太が家にいるのにどこで試験問題を作っているのかと思ったら、学校で作っているらしい。

圭介さんの授業を翔太が受けていなければ問題はないけれど、担当クラスに入っていて。

周りから何か言われる前に、という事で、毎回試験問題は職員室で作るようにお達しを受けているのだそうだ。

ちなみに、保管管理は教頭先生。

そこまで面倒なことをしても、雇用してくれる学校に感謝ですよ、と圭介さんは笑っていた。

そうだよー、PTAとかに叩かれたら面倒だもんない。

私立だから、許されるところがあるんだろっけね。

そんな日々も終わり、成績はある程度まあだったという翔太は今日から夏休みに入っている。

圭介さんは、お仕事に行かれましたけどね。

で、冒頭に戻るわけですよ。

いつもの如くお昼を会社の屋上で食べようとしていた私に、隣に座ろうとしていた桜がうんざりした様に呟いたのだ。

ランチバッグを膝に乗せてまさに開けようとしていた私は、座ろうともせず忌々しげに空を仰いだ桜を見上げた。

「そしたら、食堂にでも行く？」

「二人ともお昼持ってきてるのに、席数に限りがある食堂に行ったら迷惑でしょ」

正論を返しながら、それでも桜は座らない。

「じゃあ、総務に戻る？ 席でご飯食べたっていいんだし」

「嫌、休めない」

……ちよつと小突いてみてもイイデスカ？

後が怖いけど、おねーさん、イラッときてるわよ？ ねえ、桜さん。

思わず口元が引き攣った私に、絶対に罪はないと思う。

いや、無い。

「あ、ここにいたわ！」

空を見上げる桜、それを見上げる私という変な構図の私達に、お気楽な声が掛かった。

その声がよもやこの後、大変楽しくそして困った状況を作り出してくれるとは思わずに。

「ホント、ごめんね。迷惑掛けて」

三階にある小会議室で、屋上より涼しい昼食を桜と取っている。それは、さつきより一人増えた状態で。

涼しげないつもより胸元の開いたブラウスを、なんでこんなにキャリアな女つぽく着こなせるのか是非ご教授頂きたいですよ、な、人事課の皆川さんが向かいの椅子に座ってにこにこ珈琲を啜る。

桜はさつきの不穏な空気は何処へやら、柔らかな笑みを浮かべながらいえいえと頭を振った。

「とんでもないです。会議室はブラインドがあるから、食堂より涼しいですし。ね、由比」

「だね。ありがとうございます、皆川さん」

ハートマークをつけたような声で伝えると、よかった、と皆川さんが笑う。

さつき屋上に現れた皆川さんは、涼しい食事の場を提供する代わりにお仕事手伝って？ はあと　　て言う感じで、ある意味強制的お願いをお達ししに來たのだ。

まあ、内容的には事務処理だし、話を聞いてみれば課内の社員が暑気あたりでダウンしたのが原因らしいし、二つ返事でOKしたわけなんだけど。

仕事内容が時間の掛かるものだったから総務に連絡しますと言ったら、許可済み　と言われて内心、唯の強制じゃん！と突っ込んだ私はきつと普通の反応だ。

とりあえず昼ご飯を食べてから、作業に取り掛かる。

作業内容はいたって単純。

来年度入社予定の学生に送る案内状の作成・準備、後期インターンの受け入れ部署の予定表や研修内容の資料作り。

ま、単純作業は、時間と手間が掛かるものなのですよ。

とりあえず雛形の出来ている書類（桐原主任作）を人事課に連絡してプリントアウトしてもらい、その間に封筒に宛名を書き込んでいく。

宛名も印刷してしまえば楽なんだけど、そこは昔から手書きというのが決まりらしい。

皆川さん曰く、「昔の入社人数を基準に決めんなっての！」である。十数人の入社人数は今昔。

現在は百名近い人数が、新入社員として入社してくる。

まあ、大体数年後には半分くらいに減るらしいけれど。

うちの代も、その位いるもんなあ。

ひたすらサインペンで宛名を書きながら、自分の入社式に思いを馳せる。

まだ三ヶ月くらいだけど、実はもう辞めた人もいたりして。

それを聞いた時、まあ考え方だけど、せめて半年くらいは働いてからの方が……と思ってしまうた。

「……、なんか無言になるわね」

しばらく黙って宛名を書いていたら、ぽつりと皆川さんが溜息を零した。

「まあ、何かしゃべると間違えそうですし」

桜が封筒から顔を上げずに応える。

その会話を聞きながら、ていうかこの状況って、と呟く。

「力二食べてる時みたい」

自分の言葉に力二の足にむしゃぶりつく想像をしてしまって、思わ

ず手が止まった。

「……」

「……」

今まで規則的に響いていたサインペンを走らせる音が、一瞬にして止んだ。

顔を上げると、桜も皆川さんもサインペンを持ったまま固まっている珍しい光景が目に入る。

「かに……」

「かに……」

まずい、二人して同じ言葉を呟いている。

「……あの、皆川さん？ 桜？」

動き出そうとしない二人におずおずと声を掛けたら、がばっと顔を上げて非難の目で見られてしまった。

「止めてよ、由比のお馬鹿っ。口の中、カニ風味になっちゃったじゃない！」

桜がそう叫べば。

「うわ、食べたい。もう、山と詰まれたカニを片っ端から……」

皆川さんが、ぶつぶつ呟く。

あれ、これって……なんかやばいスイッチ押しちゃった感じ？

「えっ、えっ」

どうすればいいのかわからず、瞬きを繰り返しながら両手を上げて降参の形をしていたら。

「カニ、今の時期カニが食べられるところ……」

皆川さんが携帯を取り出して、いきなり検索を始めた。

「ちよっ、皆川さん！ 目がマジです！」

「マジに決まってるでしょ！？ 責任とってよねー、上条さん」

「ええっ！？」

そんな！ 責任て？ 責任って、もしかして……

嫌な予感に思わず椅子から腰を上げたら。

「給料日までは、我慢してあげるから」

桜の満面の、そしておつそろしい笑顔に思いっきり立ち上がる。

「え、ちよつ、それは勘弁して！ ムリだからっ！ 新人に三人分の食事代とかムリだから！」

「……じゃあ、この力ニ地獄をどうしると？」

あり地獄みたいに言うなあっ！

「ああ、力ニ力ニ」

皆川さんの目が据わってるし！

追い詰められた感、満載。

いや、でも！

給料はっ、給料だけはあああっ！

その時、救いの神が舞い降りた。

立ち上がった私の後方、がちゃりとドアが開く。
そこには、紙の束を片手に持った桐原主任の姿。
もう一方の手には、ペットボトルの紅茶が三本。

「印刷終わったから。悪いな、お前たち手伝ってもらって……え？」

思わず、キラキラとした目で見上げてしまった。
きつとこんな表情を向けるのは、初めてじゃないだろうか！
だって、桐原主任が目見開いて固まってるもの！

が、しかし。桐原主任は会議室の異様な雰囲気ですぐ危険を察知したのか、傍の机に手に持っていたものを置くと脱兎の如く出て行く
うと踵を返……

「……させるわけ、無いだろおおっ！」
「はあ?!」

がつしりと桐原主任の腕を掴んで、後ろの二人に顔を向ける。

「財布確保！ 財布確保！」

いきなりの行動と叫びに、桐原主任が固まっているのがなんとなく
雰囲気伝わってくる。

「やったわ！ 気兼ねなく食べれるわ！」

「そうですね！ 奢ってくれるはずでしたもんね！」

皆川さんと桜が、手を取り合って喜んでいる。

うん、物珍しい光景だ。

桜が素で喜んでいる。

「いや、おい。ちょっと、なんだこれ」

後ろで桐原主任のうるたえたような声が聞こえるが、説明は皆川さん
にお願いしよう！

私が言っても、冗談にされちゃういそうですからね！

ここは一つ大人の魅力（威圧）で、押し切って頂きましょう！

皆川さんは私の視線に気付いたのか、にっこりと目を細めると桐原

主任に視線を移した。

「上条さん、並びに私達に掛けた迷惑料。カニ込み食べ放題で許すわよー!」

「はあっ!?!」

……いつの間に、食べ放題へと話が発展したんでしたっけね？

後ろで桐原主任の叫び声を聞きながら、私は首を傾げて苦笑した。

「桐原主任、お氣を確かに」

「……巻き込んだお前が、何を言う」

へらり、と笑ったら頭を掴まれて追いやられた。

既に奢りが確定し、見た事もないくらい機嫌のいい桜と皆川さんに反比例して、ドアに近い場所で黙々とノートパソコンに向かう桐原主任は、眉間に皺を寄せたまま。

総務課に手伝いをさせている手前、急ぎの仕事だけなんとか片付けてやってきた（お詫びのペットボトル持参）桐原主任は、いきなりの奢れ命令に戸惑いつつ、しかし目の前の皆川さんの勢いに諦めたらしい。

さすが、皆川さんのご性格を把握していらっしゃる！

言い出したら、押し通す！

嫣然とした笑みと威圧感ばしばしで！

皆川おねーさま！　と言う感じです！

桐原主任が言い返す事も出来ずに、無言で頷く姿を初めて見たよ！

皆川さんは既に目をつけているお店があるらしく、今は工藤主任に都合のいい日をメールで問い合わせ中らしい。

——　一気に奢らせてあげれば、散財も一度で済むでしょう？　私
ってなんて優しいのかしら

と、上から目線で桐原主任を見据えていたその姿は、“おねーさま”から“女王様！”に格上げされた瞬間だった。ていうか、何回もに分けるのも辛いけど、一気にお金が出て行くのも辛いんですか……？

言わないけどね

しかも現金なもので、奢りでカニを食べられるという欲求を満たす確約をされた今は、仕事が進む進む。

桜でさえ、凄く楽しそうにノートパソコンのキーボードを叩いている。

……写真とりたいくらい（笑

桐原主任には悪いけど、なんだか楽しい状況に押さえきれずに口端が上がってしまう。

あ、でも桐原主任と一緒にだから、会社からは離れたお店がいいなあ。なんて、のほのほとむむふと脳内妄想で楽しんでいたら。

「お前は……」

ぼそつと呟いた桐原主任の声に、私は封筒に書類を入れていた手を止めて顔を上げた。

話しかけてきた割に、桐原主任はノートパソコンの液晶を見たままなんですけど。

「はい？」

とりあえず先を促そうと問い返すように声を上げると、少し気遣わしげな桐原主任が顔を上げた。

「お前は、それでいいのか？」
「は？」

あの、桐原主任。

あなたには珍しく、会話の内容が分かりません。
主語をお願いします。

……まあ、そんな事は言えないので。

「……何がです？」

無難な言葉を返してみました。

桐原主任は、いや……だから、と口ごもる。

「その……、食べ放題を奢るだけで、いいのか？」
奢るだけ？

「……ああ」

なるほど。お詫びがそれでいいのかと。

私はやっと納得がいつて、いいんですよと笑みを浮かべた。

「だって、あのままだったら私が奢らなきゃならなかったんですから。ありがとうございます、お財布様」

しかもホントはお詫びで奢るとかそういうのうやむやにしようと思つてたから、肩代わりさせちゃって反対にすみマセンって感じ。だつて。

新人の給料に、食べ放題三人分はキビシイのです。

桐原主任は目元を緩めて、お前がいいならいいんだけど……と、呆

れたように肩を竦めた。

「抹殺対象の次は、財布呼ばわりかよ」

「いいじゃないですか、役職持ち。私より給料高いですよ、役職持ち」

「今度は役職持ちかよ。名前で呼べ、名前で」

「名前？」

桐原主任なら、呼んでるよ？　いつもは。

「桐原主任？」

試しに呼んでみると、じゃなくて、と突っ込まれる。

はて、んじゃあなんて呼べと？　桐原って呼び捨て？　と、つい首を傾げたら、後ろから皆川さんの声が上がった。

「ちよつと、その振られ男。人前でいい雰囲気作ろうとしてんじゃないわよ、悟」

「お前に呼び捨てされる覚えはねえよ」

「何、敗者復活狙ってんのよ。悟」

「うつせーな」

「へ、敗者復活って？」

よく分からない言葉が出てきて、思わず問い返すように繰り返した。すると皆川さんに視線をそらされてしまったので、仕方なく桐原主任を見る。

「な……ん、だよ」

視線に気付いたのか少しうろたえた様に視線を彷徨わせながらも、桐原主任は私を伺うように目を合わせた。

その表情を見て、ああ！、と手を叩く。

「皆川さんっ」

くるりと振り向くと、ニヤニヤ笑う皆川さんと目が合う。

「なるほど。桐原主任てば、まだ私に対して罪悪感満載な訳なんで

すね！」

「……は？」

ニヤニヤの顔が、一気に怪訝そうなものになりましたが、何か？

「可愛いですねえ、こんな顔してまだ気にしてるなんて！」

ぐふふと笑うと、皆川さんの怪訝そうな顔が一気に笑いに転じた。

「そうね！　そうそう、桐原ってば可愛いんだからああ」

「ですよ〜！　大体、大丈夫ですよ、桐原主任」

驚いたように目を見張る桐原主任に、思いつきり笑いかける。

「抹殺対象者になら、すぐに返り咲けますから！」

他に、その称号を贈りたい人はいない！

そう言つて笑うと、桐原主任は机に一気に突つ伏した。

「抹殺対象者ーっ！」

もうすでに、”あはは”から”ぎやはは”に笑い声がかわっている皆川さん。

うん、大人な女性の大笑いつてなかなか見れないかも。

そんなことを考えながら首を傾げる私と、今の此の状況を呆れた様な顔で無視する桜と。

微かに聞こえた、桐原主任の溜息になんだか温度差を感じました。

——はて？

2 (後書き)

桐原、まだちょっと頑張ってる(笑

3 (前書き)

きりがよかったので、今日はちょっと短めです。
すみません。

「ということで。今度の土曜日、夜は食べに行くからおかず温めて食べてもらってもいい？」

その日の夜。

仕事から帰ってきた圭介さんと翔太とうちでご飯を食べている時、昼の事を思い出して二人に伝えた。

その後、工藤さんから返事が返ってきて、カニで脳内を埋められていた皆川さんは、都合のいい日の中で一番早い土曜日を選択したのだ。

……かわいそうに。給料日前。あと二日後なら給料日だったのに。しかもランチならまだしも、カニがあるのが前提で、それがでてるのがディナーのみという、桐原主任には大変お可哀想な展開で決められてしまいました。

五人分のディナー食べ放題って……、おいくらまんえん……？

……お気の毒に

掛かる金額を計算して脳裏で桐原主任を拝んでいたら、向かい側でご飯を食べていた圭介さんが眉を顰めた。

「……桐原さん？」

「はい、桐原主任がお財布担当です」

「お財布担当？」

意味が分からないと、今度は斜め横の椅子に座る翔太が首を傾げる。

「ご自身含めて五人分、桐原主任が奢ってくれるんです」
なんで、の、理由は言わないけどね！

前に圭介さんの前で泣いた時、桐原主任と何かがあった事がばれてる。

はつきり私から言っただけじゃないけど、絶対にばれてる。
核心もって、言っただもの。

”由比さんが言わないなら、桐原さんに聞くしかない”って。
だから、今回の奢ってもらう理由も薄々感づいているだろう。

でも、翔太には気付かれてないはず。

それに、わざわざ蒸し返している事でもないし。

なんか二人とも相性悪そうだし。
できれば言いたくない。

「私の同期と、先輩三人。ディナータイムって言っても五時からスタートらしくて。制限時間一時間半だから、そんなに遅くならないと思うけど」

とりあえず話しを進めると、箸をかちかちさせながら翔太が口を尖らせた。

「いいなー。桐原さんに、俺の分も奢ってって、由比、強請って」
「強請るか。あ、もし行きたかったら、夏休み中に行ってみる？」
「そうだよ、若い子だしたまにはお腹一杯普段食べないものを食べるのもいいかもしれない。」

「ね、圭介さん」

「ん？ そうだね、それもいいかもね」

もくもくと箸を動かしていた圭介さんが、顔を上げてにつこり笑う。
「ああ、由比さん。その日は夕飯の支度はしなくていいよ。私か翔太が作るから」

「だなー。たまには作らないと、下手になりそう」

圭介さんの言葉に賛同するように、翔太が頷く。

「いつも作ってもらってるし。ゆっくりしてきなよ」

ね、と笑うその表情は、全く普段どおり。

学祭の日、私に縋りついてきた時は昏い瞳をしていたけれど、翌日にはいつもの翔太に戻っていた。

安堵すると共に、感情を押し殺して我慢しているんじゃないかとそう思った。

でも、どうする事も出来ない。

蒸し返して、理由を問い詰めて、心にどこかか入り込んでいくのは優しさでも気遣いでもなんでもない。

それは、ただの自己満足だ。

——自分が一番、理解してる。

私は思考に沈みそうになった意識を引き上げて、ありがとう、と二人に微笑んだ。

3 (後書き)

100話目突破です。

皆様のおかげです、本当にありがとうございますm・・m

「上条」

約束の、土曜日。

待ち合わせは、……会社の人も皆使う、最寄り駅だった。
マジか！

そう、言われた時は思ったけれど。
考えてみれば、休日に会社に来る人間なんて、総務か人事か秘書く
らいのもので。

もし来るとしても、総務か人事で把握が出来る。

それにあえて会社の近くにいた方がバレにくいんじゃない？ とい
う皆川さんの意見に、なるほどと二つ返事で頷いた。

これから予備校の夏期講習に行くという翔太と連れ立って駅に来て
みれば、既に桐原主任が改札前に立っていた。

「……はやっ」

「開口一番、それかよ」

思わず足を止めて、後ずさった私に罪はない。

隣で翔太が私の態度に笑っているけど、気にするもんか！

そうさ、高校の時、行動が漫画みたいと言われた私を舐めるなよ！
だいぶ挙動不審な私をさておき、翔太は桐原主任に視線を向けた。

「ども、桐原さん」

肩から掛けている鞆を後ろに払いながら、翔太が軽く桐原主任に頭を下げる。

「ああ」

桐原主任は少し驚いたように方眉を上げたけれど、ぶっきらぼうに答えて頷いた。

そういえば、この二人って仲悪そうだったよね？

この後どんな会話をするのかと思ったら、翔太はくるりと私を振り向いた。

「じゃ、俺行くから。由比、楽しんできてね」

「あ、うん。お勉強、頑張るんだよー」

「はい」

と、きらきらしい笑顔を浮かべて、翔太は改札へと歩いていった。

……随分、あっさりだなー

前、桐原主任と会った時、噛み付かんばかりに言い争いしてたのに。

ちょっと拍子抜けな感じだったのは、私だけじゃなかったらしい。

「なんか、落ち着いた？ 翔太」

桐原主任も、不思議そうに隣で呟いている。

「……大人になったんですね」

無難な答えを返しつつ、内心、眉を顰めた。

やっぱり、なんかおかしいなあ。

圭介さんに、相談してみた方がいいんだろうか。

実は、学祭の日に縋りつかれた事、圭介さんには言っていない。

どう言っているかわからなかったっていうのもあるけど、翔太が、きっとそれを望まないだろうと思ったから。

現に、あの後しばらくして普通に戻った。

翌日には、いつもの翔太に。

安堵と共に、残る焦燥。

……私が、翔太にしてあげられることって、何かないのかな。
不甲斐ない、おねーちゃんでごめんねっ。

「上条」

「はい？」

ずっと桐原主任を無視して思考にはまっていた私は、ぼうつとした
まま掛けられた言葉に応えた。

けれど、次の言葉で一氣に意識が引き戻される。

「翔太、なんかあったのか？」

「……桐原主任？」

なんで、そんな事。

驚いたように隣に立つ桐原主任を見上げたら、丁度息を吐きだすところだった。

「なんか、覇気がねえ」

「覇気？」

そんな事が分かるほど、翔太と一緒にいないでしょう。そう言外に
含めると、桐原主任は両腕を前で組んで、小さく唸る。

「前はもつと、なんか負けん気があったけどな。なんつーか、牙抜
かれた犬みてえ」

「……そうですか」

他の人にもそう見えてるってことは、圭介さんも気付いてるのかな。

「しかし、お前。こんな近くに住んでたんだな」

「——は？」

なんだ、その脈絡のない話しの持つて行き方は！

突然のことに、アドリブが全く効かないのは私の特技だ！
目を見張ったまま桐原主任を見上げていたら。

思わずといった感じで噴出すと、片手で口元を覆った。

「そりやお前、ここに迎えに来てる隣人を見りゃ一目同然だろうよ。
しかも、今も一緒に来たんだろ？」

ああ、まあそーだよな。

他の人には見られないように帰宅の時は気をつけてるけど、桐原主任には圭介さんや翔太が迎えに来てるところ何度も見られてるんだから。

そう伝えると、今更気付くなよと笑われた。

「他言無用に願います。飲み会の後とかに、宿にされたらかないません」

「まーな。しかも隣はあの二人だし、そっち目当てでお前んちに行く人間増えそうだ」

——確かに

それはとつても面倒そうだし、何よりも二人に迷惑掛けちゃうじゃないか。

「抹殺対象者！ 絶対に！ 他言無用で！」

うるさい、と、人の頭を小突いた桐原主任は、目撃していた皆川さんに足蹴にされてました。

さすが、皆川おねーさま！

全員揃ってから移動したのは、駅から二十分ほど歩いた所にあるピュッフェ専門のレストラン。

連れられてきてから思ったのは、限りなく隣の駅に近いこと。

それを工藤主任に突っ込まれた皆川さんは、「だって、こっちの駅だと定期の区間すぎちゃうんだもの」と、女王様な発言をなされていました。

そして、現在。

「……」

全員無言。

全員無言で、唯ひたすら力二をほじほじしています！

各自他の料理も取ってきているのに、皆川さんが大皿に山盛りにしてきた力二を、ひたすら食べ続けております！

「……」

しばらくして。

「つつーか、手が疲れた！」

工藤主任が脱落しました。

「……俺も、もういいや」

次いで、桐原主任。

私も早々に切り上げ、グラタンやパスタに取り掛かる。

しかし、皆川さんと桜はひたすら力二。

話しかけても、力二。

私、ただだけ強力な力二スイッチを押しちゃったんでしょねえ。

「そういえば、なんであんなに早かったんですか？ 桐原主任てば」

私でさえ、翔太に合わせて少し早めに来ていたのに、それ以上に早くついているなんて。

私の横に座る桐原主任は、煮物を口に放り込む。

「仕事」

「え？ 何かあったっけ？」

仕事ときいて、同じ部署に所属する皆川さんが力二から顔を上げた。皆川さんは、桐原主任のサポートをする仕事が多いらしい。

社内よりも、就職関連やインターン等、社外関連を桐原主任がメインで担当している為、あまりスキルのない若い子をつけるわけにはいかないそうだ。

桐原主任は皆川さんに目を向けると、はあ、と溜息をついた。

「暑気あたりの次は、夏風邪だと」

「は？」

食べ終えた力二の足をお皿に放って、皆川さんが布巾で手を拭う。

無言で力二を食べていた桜も、デザートに手をつけていた工藤主任も顔を上げた。

桐原主任は全員の視線を浴びて居心地悪そうに眉を顰めると、だから、と息を吐き出す。

「月曜に、インターン関連部署の会議があるだろ？ あれの進行を

頼んでた奴が、夏風邪でダウンしたって今朝、連絡きてな」

「え、でも月曜のことでしょ？ 別に、週末で治して出勤できるんじゃないの？」

「今日の朝で、四十度越え。熱さまし飲んで月曜に来ても、俺等に風邪染つたらたまったもんじゃない。この時点で二人休みで四人しかいねえのに、皆ダウンしたら、人事誰がやるんだよ」

……夏風邪で四十度越えって。確かに洒落になんないね、それ。

すでに来年度の就職セミナーも準備していかなきゃならない段階で、桐原主任と皆川さんが同時に休んだら、人事回らないだろうな。さすがに。

社内のものはどうにかなっても、社外は待ってもらえないわけだし。

「だったら完治するまで休んでもらって、月曜の会議を俺がやった方が何倍もありがたい」

そう言って珈琲を一口飲んだ桐原主任に、皆川さんがなるほどねと呟いた。

「それで会議内容確認しに、今日出てたわけ」

「そ」

短く返答した桐原主任に、皆川さんが溜息をついた。

そしてすぐ、笑みを浮かべる。

「じゃあ、今日はがつつり食べて栄養取らないとね。来週から大変だわ」

「皆川、強気だなあ」

工藤主任が面白そうにくすくす笑う。

それに応えるように、皆川さんが再び力二に手を伸ばした。

「当たり前じゃない。仕事なんて、勢いよ！やる気があれば何とかなる。ね、桐原」

「よし、そのまま突き進め。皆川」

「よし、あんた達二人もよろしくね」

ぽんぽんと桐原主任と言葉を交わしていた皆川さんが、ふいにこっちを向いた。

あんた達二人って、私達？

人事の話だけに関係ないとばかりデザートを楽しんでいた私とカニに戻っていた桜は、いきなり振られた話にハテナマークを頭に浮かべながら顔を上げる。

すると皆川さんはニコニコと笑いながら、艶やかな唇を弧に描いた。

「勿論、桐原に奢らせるから」

「え」

「じゃー俺も手伝う」

桐原主任と工藤主任の声が重なって、ぷはっと思わず噴出してしまった。

「ずるいじゃん、俺奢られないの」

意地悪そうな工藤主任の声に、桐原主任が半目で見返す。

「お前もこいつら曰くの、役職持ちだろ。奢る方に回れ」

「はー？手伝って奢ったら、俺にメリットねーじゃんか」

ぶすくれる工藤主任の肩を、皆川さんがぽんぽんと叩いた。

「まさか総務の若い子が手伝ってくれるのに、同期で仲のいい工藤が桐原と私を助けないわけ無いわよね？」

それは疑問系でありながら、確実に断定。

引き續りながら了承する工藤さんと共に、手伝いが決定した私と桜
なのでした。

「あー、満足。あー、お腹一杯、これで来週頑張れる」

機嫌のいい皆川さんは、鼻歌交じりに来た道を戻っていく。

あれからもう一ラウンド、カニと繰り広げた皆川さんは、だいぶお店の注目を集めておりました。

ちよっと、恥ずかしかったです（笑

そしてお腹一杯になった私達は、再び会社の最寄り駅へと歩いていく途中なわけで。

夏とはいえ、既に七時近く。

薄暗くなってきた住宅街で、工藤主任が恥ずかしそうに皆川さんの頭を小突いた。

「流石に三十近い女が、外で歌うな。恥ずかしい」

「じゃー、二十歳に近きやいいわけー？　だったら、総務課二人に歌ってもらおーじゃない」

「それはさすがに遠慮させて頂きたいです、皆川さん？」

二人の言い合いに、やんわりと桜が釘を刺す。

あれだけカニを平らげたはずの桜のお腹が膨れていないように見えるのは、私の幻覚なんですかね。

なんでー？

私なんか、ウエスト凄く苦しいのに。

ぶつぶつと内心の文句が口から駄々漏れだったらしく、桐原主任に可哀想な子を見るような視線でぽんぽんと頭を撫でられた。

…… かわいそくないもん。

余計切なくなっただのは、内緒です。

「そつえば、お隣の可愛い子、元気？」

工藤主任と桜とじゃれていた皆川さんが、思い出したように私に話を向けた。

顔を上げると、指先を口につけて何か思い出すようにきよろきよろと視線を彷徨わせている。

そして私といえば、それに対してなんて答えようか一瞬迷ってしまった。

けれどまあ、内情知らない人に本当の事言っても仕方ないことだしと口を開く。

「ええ、元気ですよ。もう少し早く来ていたら、会えたかも。桐原主任は会いましたもんね」

そう話を振ると、前を向いたまま桐原主任が頷く。

「高校生かあ、若くていいわよねえ」

しみじみと呟く皆川さんに、工藤主任がおばさん臭いといって肘鉄を食らわされていますが、まあ、見ない振りをしておこう。

「ああ、ホント若いですよ。四歳しか違わないって言うのに、学生さんだと思つて隔てる壁を感じました」

ホントもう、恋愛感情で動くとか、若くなきゃ出来ないよねえ。思わずふわふわなお人形さんみたいな彼女を、脳裏に浮かべる。

ああ、大人でもいたっけ。

桐原主任とのごたごたまで思い出して、苦笑を浮かべた。

「？ 過去形？ なに、なんかあったの？」

思わず遠い目をしてしまったのがいけなかったらしい。皆川さんに食いつかれた。

……さすがにごたごたは、話さなくていいよね。

「いえ、ちょっと前に学祭に呼んでもらって行ってきたんですよ」

「え！ 何で呼んでくれないのっ！ てことは、噂の圭介さんとやらにも会えたってことでしょう?!」

「は？」

両肩を掴まれてがくがくと揺さぶられる。

うげえ、沢山食べた後にこの仕打ちは……

「中身がでるうう」

呻くように訴えると、あら、と皆川さんの手が止まる。

「翔太くんには会ったことあるけど、圭介さんには会ったことないんだもの。あれだけ翔太くんがかわいいという事は、期待充分！」
興奮してきたのか、最後はがつつり大声を上げて拳を握り締めていきます。

それを見ていた桐原主任が、溜息混じりに皆川さんを指差す。

「誰だ、こいつに酒飲ませたのは」

「ビールなんて酒じゃない！」

酒でしょ、工藤主任の溜息に思わず皆で苦笑い。

大人な皆川さんは、お酒に弱いようです。

「ねえねえ、そうしたらさ！ 今度上条さんちに遊びに行かせて！」

「は？」

思わず問い返した声に、皆川さんはいい事思いついた、と工藤主任を振り返った。

「人事の手伝いしてくれたら、上条さんのご飯をご馳走！」

「あ、それいいね」

断ると思っていた工藤主任が、あっさりと頷いて私に目を向けた。

「いつも弁当、上手そうだと思ってたんだよねー」

「おいしいですよ、唯のご飯」

なぜか桜まで、皆川さんの案を推すように口添えする。

「え、ちよつと桜……」

桜はくすりと笑うと、いいじゃない、と続ける。

「隣人に食事を作ってるんだから、私達にもご馳走してくれるですよ？」

「は？ 隣人にご飯！？」

工藤主任が驚いて私を見て、すぐに視線を上げた。

そこは私の横、桐原主任がいるところ。

つられるように私も顔を上げると、見下ろしてくる桐原主任と目が合った。

少し考えるように口元に手を当てていた桐原主任は、こくりと頷く。

「……そうだな」

桐原主任まで言い出して、……結果断れなくなりました。

いや、いいんだけどね。

ご飯作るのは好きだから。

「でも、うち、こんなに人数入らないですよ」

「えー、何とかならないのー？」

何とかって……

アパートの庭にある木の机セット、あれなら大人数いけるけど……

そんなことを考えながら、もう一度皆川さんを見る。

「……本気ですか？」

「本気です」

ハートマークがつきそうな語尾に、思わず口端が引き攣る。

すると工藤主任が私の内心を察してくれたのか、皆川さんの頭を小突く。

「上条さんの住環境的に、お前、隣人に迷惑掛けるなよ？」

そうです、工藤主任！

翔太はもう会ったことあるからいいけど、圭介さんは初対面。
皆川さん、大人な女性だけど……

ちらりと盗み見ると、うるさいわよ、と工藤主任に反抗する皆川さんの姿。

……お酒入ると、ダメらしいです。

「あ、でもその日、隣人がいなくても文句言わないで下さいね。仕事もあるんですから」

そう付け加えると、ぶんぶんと頭を振る仕草。
可愛いつていえば、そうかも。

そんな皆川さんを見ながら、聞えないように息を吐き出す。
うちが会社と同じ駅って言うの、ホントは桐原主任と桜しか知らないからあまりいいたくないけど。
まあ、皆川さんと工藤主任ならいいかな。

そんな感じで、食事会の次はうちに来るのが決まったみたいです。
なんだか、イベント続きな感じだわ。

6 (後書き)

更新、遅くなりました。
どうも、すみません m - - m

駅につく頃には皆川さんのテンションも幾分覚めていつもの感じに戻りながらも、工藤主任に手を引っ張られて帰っていった。

その後姿を見ながら、もしかして……とちらりと桐原主任を見上げると、あまり表情を変えないまま“見ての通り”と呟く。

「工藤の一方通行。皆川が全く気付かないのが、傍から見ている面白いな。あいつ、恋愛のれの字もないぞ今は」

へえ、と呟く私の横で、桜が口元に指先を当てながら小さく首を傾げた。

「あら、そうなんですか？ 私、てっきり皆川さんは桐原主任の事が好きなのかと思ってましたけど」

「それはない」

私は桜の言葉を遮るように断言する桐原主任を見上げて、もう一度視線を戻す。

「私も違う気がする」

私の言葉を桜は意外そうに聞きながら、問い掛けるように小首を傾げた。

その視線に、私はうーんと唸る。

こう、なんて言うの？

恋愛感情って言うか……。

その時、かちつと当てはまる言葉を思いついてぼんつと手を叩いた。

「なんかね、弟って感じ！」

「おい待て、上条。俺の方が年上だ」

半年くらいと続ける桐原主任を、私は一刀両断してみた。

「精神年齢」

「桐原主任、やっぱりいいですよ」

さっきの一言で地味に主任を怒らせたらしい私は、強制的にアパートに送られていた。

あらあら〜と笑って手を振る桜に卑怯者め……という視線を向けつつ、さつさと歩き出した主任の後を追いつける。

「この位の暗さなら、真っ暗になる前にアパートつきますから！」
ていうか、送られるとか借りは作りたくないんですけど！

そう主張したら、考え方がおかしいと突っ込まれた。
なんで？

それでも懸命に考え直させようと食い下がったら、突然桐原主任が足を止めて振り向いた。

真後ろを小走りに着いていった私は、鼻をしたたか主任の背中
で打って思わず手で押さえながら睨みあげる。

主任は私の胡乱な空気に構いもせず、再び前を向いて歩き出した。

「お前ん家把握しとけば、行く時に俺があいつら連れていけるだろ？」

じんじんと鈍く痛みを訴える鼻を押さえながら、半ば諦めてその横
を歩き出した。

一応気を使ってくれているらしく、歩調は同じなので疲れはしない

けれど。

聞えないように息を吐き出しながら、桐原主任の言葉を頭の中で反芻する。

「別に主任がうちを把握しなくても、駅まで私が迎えに行けばいいんじゃないですか？」

駅から歩いて二十分くらいなんだし。

今日のレストランまで歩いたんだから、うちのアパートまでだって歩けると思うけど。

そう続けると、桐原主任は頭を振ってわざとらしく溜息をついた。

「俺の車は四人乗り。五人は乗れねーよ」

あ、車でくるんだ。

「その方が、帰りとか楽だろ？」

ああ、まあ今日の皆川さん見ちゃうとなあ。

あれを駅までの道々でされると思うと、近所的に少し恥ずかしいかも。

「もし手伝いが必要なら、先に皆川や都築を連れてきてもいいけど。俺らも役に立つなら手伝うが……」

皆川さんの今日の状態を思い出して考え込んでいたら、桐原主任は違う意味で取っいたらしく幾分早口でまくし立てられて思わず噴出してしまった。

「そんな焦らなくつても」

鼻を押さえていた手を口に移動させて、笑いをおさめようとしたけれどちょっと無理で。

だっていつも年上風吹かせて、焦るとこなんてほとんど見ないのに。例の嫌がらせを受けていた時も、落ち込んでいたし辛そうだったけど焦ったような所なんて見る事はなかった。

まあ、どん底まで落ち込んだ様は見えたけどね。

だから、こんな些細な事で焦るのが面白くて。

すみませんと繰り返しながら笑っていたら、ふ、と桐原主任の空気が和らいだ。

「……こんな事で、笑ってもらえるんだな」

ぼそりと言ったその言葉は、笑いをおさめることに集中していた私の耳に声としか届かなくて。

涙目になりながら、顔を上げた。

「何か言いました？ 桐原主任」

そう問いかけると、桐原主任はあまり見たことのない穏やかな表情で小さく頭を振る。

「……いいや。ていうか、手伝いは必要だろう？」

大人数の料理を作らなきゃいけないわけだから。

私はその言葉に、そうだなーと視線を彷徨わせた。

7（後書き）

篠宮です。いつもお読みくださり、ありがとうございます。

ただいまブログにて、お礼SSお題を下さいアンケートをお願いしています。

お時間のある優しいおにーさま・おねーさま。よろしければ、ご参加お願いします^^

こちらのコメント欄に書いてくださっても、嬉しいですm・・m
よろしく願いいたします。

手間があまりかからない、それでいて見栄えのいい料理……。大皿料理をいくつかと、サンドウィッチとかおつまみ系でいけば何とかなるかなと思う。

反対に手伝われても、うちのキッチン狭いし……。

頭の中で当日の段取りをつけると、大丈夫ですと口を開いた。

「打ち上げだから、今の忙しさが終わってからの食事会ですよね？」まだ日にちを決めていないから、すぐって訳じゃないはず。

桐原主任はそうだなと呟くと、ふうと溜息をついた。

「うちの仕事が落ち着くまでだから、月末以降だな」そう。

もともと休みの人がいるからこそその忙しさをわけで、その人達が復活して……けれどすぐに落ち着くわけじゃない。

フォローしていても、それには限度がある。

それが落ち着くのに、しばらく掛かるってことか……。

「なら、大丈夫ですよ。あらかじめ準備して、皆が来てから仕上げればいいですし」

サンドウィッチならパンと具だけ用意して、皆で挟むとかね。

「そうか？　なんだか悪いな。手伝わせた上に、そんなことまでさせて……」

何作ろうと考えていた私に、申し訳なさそうに桐原主任が珍しく謝りの言葉を口にした。

レアさ加減に、ついじつと見上げてしまった。

その目に少し心配そうな色をのせて、桐原主任は真面目な顔で見下ろしてくる。

「それに、お前断ること覚えた方がいいぞ。人事の仕事と言い今回のことと言い、押し切られすぎだ」

押し切られすぎって……

「どうしたんですか、桐原主任。今日は凄く素直ですね」

反応が。

最初からこんな感じなら、抹殺対象者とか言わなかったのに。

「大体、最終的にとどめを刺したのって、桐原主任の言葉ですよ」
皆川さんを止められるの、主任しかいなかったのに。

そう言外に含めて口にする、途端バツ悪そうに視線を落としてくる主任の姿がなんだか可愛い。

「いや、その……あのな」

口ごもる桐原主任に、くすりと笑って足を止めた。

「いいんですよ、別に。ご飯作るの大好きだから。皆川さんの勢いにはびっくりしたけど」

何か言いかけていた桐原主任は、まあなと苦笑した。

「悪いな、ホント。費用は請求してくれ」

「上乗せして」

穏やかに話してくれる桐原主任に引きずられるようについ軽口を叩くと、ぽん、と頭を叩かれた。

「調子に乗ったな、お前」

「いや、なんか桐原主任と普通に話せるのがびっくりで」
噛み付き合うばかりだったし。

「変、か？」

少しぎこちなさそうに顎に手を当てた主任に、私はにこりと笑いかけた。

「なんか、嬉しいです。いつもこうならいいのに」

「……上条」

少し掠れた声で、桐原主任が私の名前を呼ぶ。

なんだか気恥ずかしくなって、思わず目を伏せた。

「だって新入社員研修の時、仕事ができる主任に皆憧れたんですよ。まさか、ネズミとか言われると思わなかったけど」

結構ドキドキしながら挨拶に行ったのに。

だから。

「穏やかなら、理想の上司ですからね！」

満面の笑みで顔を上げると、動きの固まっていた桐原主任が声を出して笑った。

「ああ、そうかい。調子に乗るなよ？ 週明けからは、がつがつ仕事してもらうからね」

にやりと嫌味ったらしく笑うその表情は、いつもの主任で。

「そうじゃなきゃ、主任じゃありません」

そう言って頭を下げた。

「送って頂いて、ありがとうございました。ここ、うちなんです」
いつの間にか付いていたアパートを指差す。

桐原主任はアパートに目を向けた後、少し戸惑うようにきょろりと辺りに視線を廻らせる。

「……少し……その、殺風景じゃないか？」

ものは言い様だね。

「ぼろいって言うてくれていいですよ。大家さん共々、自他共に認めるボロアパートですから。でも私、凄くここが好きなんです」

桐原主任はまだ困惑したまま、そうかと頷いた。

どう言ったらいいのか、分からないらしい。

まあ確かに、昭和の匂いはぶんぶんだもんねえ。

桜たちがどんな反応を示すか、この桐原主任の態度を見れば想像つくし。

主任はフォローか何かを言おうと考えたらしいけれど浮かばなかったらしく、曖昧な表情でほんと私の頭に手を置いた。

「まあ、じゃあ……来週から頼むな」

あはは、日本人は曖昧が一番だよねっ。

「はい、分かりました。今日のご馳走様でした」

軽く手を振って、桐原主任は来た道を戻っていく。

私はその後姿を見送って、ふうと溜息をついて目を伏せた。

桐原主任の言葉が、脳裏をよぎる。

「……押し切られすぎ、か」

ポツリと呟く。

——押し切られすぎ、自分の意見ないの？
笑ってばかりでさ。

昔聞いた、呆れ交じりの嘲笑。

伏せていた目を一度瞑って、顔を上げる。
既に暗くなった風景に、桐原主任の姿はない。

桐原主任は、心配して言ってくれる。
嬉しいことだね。

小さく笑う。

自分でも、分かってるよ。
でも、それでもね。

求められるのは、嬉しいんだよ。
自分の存在を、確認できる。

ぱんつと軽く頬を両手で打つと、思考に沈んでいた意識を切り替えて自分の部屋へと戻った。

その姿を、見られていたことなど知らずに。

それから数日間、私達は人事課の手伝いに勤しんだ。

最初に休んだ夏バテの社員さんは、週中には復帰してくれたけれど、夏風邪の社員さんはこじらせてしまったらしく、一週間、医者から安静を言い渡されたらしい。

そんな社員さんもすでに出勤してきていて、人事課の手伝いも週末までと決まった。

そして、食事会の日にも決まった。

目の下の隈が痛々しい皆川さんは、それでも嬉々として日にちを決めていました。

それこそ第三希望まで。

……そこまで、圭介さんに会いたいか

「ひゃっふー、上条さんのご飯ーっ！」

……いや、ご飯が目当てですか

「遅くにごめんなさい、圭介さん」

残業で遅くなった私を迎えに来た圭介さんの車に乗り込みながら、私は溜息混じりに呟いた。

運転席でハンドルに軽く片手をそえたまま、圭介さんが苦笑する。

「大変そうだね、最近は。ずっと残業続きだから」

「仕方ないけど、さすがに一週間以上こんなのが続くと結構くるかな」

肩を竦めてもう一度溜息をつく、シートベルトを引っ張って装着した。

それを待つて、圭介さんはゆっくりとアクセルを踏む。

微かに感じる重力に背中をシートに押し付けられながら、膝に置いた鞆を両手で抱えた。

「でも、今週末までの辛抱だし。夕飯も迷惑掛けっぱなしでごめんなさい」

最近に残業が続いていることもあって、夏休み中の翔太と、仕事が少し早めに終わる圭介さんが夕食を作ってくれている。

私が帰宅するのを待つていたら、遅くなっちゃうから。

丁度赤信号で止まったところで、圭介さんが手を伸ばしてゆっくりと頭を撫でる。

往復して軽くぽんと頭に手を置くと、それがハンドルへと戻っていた。

「いつも頑張ってくれる由比さんの為だからね。今日は翔太が夕飯を作って待つてるよ、夏期講習から夕方には帰宅したみたいだったから」

圭介さんは、お仕事だったらしい。

てつきり先生つて、夏休みは学生と一緒に休みばかりになるのかと思ったらそうでもないらしい。

まあ、何かの研究論文を書いている圭介さんは、他の先生よりも出勤しているのかもしれないけど。

「昼ごはんは由比さんが作ってくれてるし、返って残業続きなのに弁当を作ってもらって申し訳ない」

「そんなことないよ、私の分のついでなもの。あまり代わり映えし

ないから、もつと精進しないかね」

お弁当のおかずって、結構決まってるから。

そう笑うと、圭介さんも目を細めて笑みを浮かべた。

「そんな事ないよ。未だに溝口先生に狙われてるからね、私の弁当」一度由比が詫びのつもりで進呈したお弁当をいたく気に入った溝口は、第二弾の要望とそれがダメなら一口寄越せとうるさい、と。

それを聞いて、私の頭にぼんつと“いい考え”が浮かんだ。

おもわずにんまりと笑ってしまった私を、圭介さんが訝しげに横目で見てくる。

「どうかした？ 由比さん」

伺うようなその声に私はゆっくりと頭を振ると、前方に視線を向けた。

「いい事思いついちゃったもんで。帰ったら話しますね？」

納得してなさそうな表情を見ない振りして、私は笑いをおさめるでもなく暗い風景を目に映していた。

「会社の人と、ごはん？」

私の帰りを待っていてくれたという可愛い翔太の言葉ににんまりとしながら、遠野宅のダイニングで夕飯にありついた私は、帰りがけに思いついたことを口にした。

その案を却下されたとしても、食事会の事は伝えなければ。

私の言葉を鸚鵡返しに問い返してきた翔太に頷きながら、豚しゃぶに箸をのばす。

今日翔太が作った夕飯は、大量の豚しゃぶ大根おろしのせ。

副菜は市販のもずく酢に、角切り長芋とカニカマを投入したもの。卵を落とした味噌汁。

副菜は以前私が作ったのを気に入ったとかで、翔太担当のご飯の時は出現率が高い。

男子高生にしては、よく出来る方なのではないだろうか。

さっぱりしてて、夏には丁度いい夕飯だ。

「そう、前に食事に言ったメンバーで、うちに来ることになって。といっても、全部で五人だから庭のテーブル使わせてもらおうと思ってるんだけど」

「でも、確か住んでる所ばれたくないって言ってなかったっけ？」

二杯目のご飯を口に運びながら、翔太が首を傾げる。

それに頷きながら、手に持っていたお茶碗をテーブルに置いた。

「うん。まあ、この人達ならばれてもいいかなって」

「ふうん」

翔太は呟きながらも、その手を止めない。

山盛りの豚肉が、どんどんなくなっていく。

昨日買った、百グラム百円の特売豚肩ロースが見る間に……。

思わず家計に頭がいきそうになって、いやいやと意識を切り替える。

「だから、溝口先生も呼んだらどうかかって思ったんだけど」

そんなに、ご飯を所望されているのなら。

怪訝そうに私を見る翔太に理由を説明しながら、ねえ？ と圭介さんに視線を向けると。

ずっと黙って話を聞いていた圭介さんが、眉を顰めながら箸を止めた。

「由比さん、溝口先生に甘い」

むすりとしたその言葉に、真向かいに座る翔太がぶふつと噴出す。

「圭介っ、黒いつ。駄々漏れしてるし」

「そうか？」

右手で顎を撫でるその姿に、意味が分からず私の方こそ首を傾げた。

「黒いつて？ 何漏らしてるの？」

「……由比さん、なんか違う意味に聞えるからやめて、それ」

「はあ？」

溝口先生を食事に誘うくらいで、なんでこんなに微妙な雰囲気になるわけですか。

なんだかよく分からないまま圭介さんを見ていたら、ふうと溜息をつかれた。

9（後書き）

ブログでのお礼SSお題を下さいアンケートへのご参加、ありがとうございます^^

途中経過です。ただいま圭介がトップ（笑

その表情は、呆れ半分で。

「由比さん、お人よしすぎだよ。大変でしょう、そんな人数のご飯作るの」

心配半分。

そう言ってくれる気持ちは嬉しいけれど。本当に嬉しいんだよね、私。

「心配してくれてありがとう。でも、献立とか考えるの、楽しいと思うんだよね」

だって、もし全員来るなら八人分。

いつもなら作れないような大皿料理、たくさん食べられそうだなあ。

顔がにやけていたらしい。

翔太がくすくす笑いながら、私の頬に指を押し付ける。

「楽しそうだね、由比ってば。それっていつなの？」

その指を片手で押し返しながら、皆川さんが決めた第三希望までを伝える。

「よっぽど由比のご飯食べたいんだねえ。第三希望までって」

「まあそれもあるけど。前に会った皆川さんで覚えてる？」

「ああ、桐原さんが由比に告白した時に、一緒にいた人？」

……また、懐かしい話を……

その後の騒動の事を考えると、大変落ち込む過去なのですが……。思わず肩を落とすと、

「そうなの？」

意外そうな声を上げて圭介さんが、呟いた。

翔太はなんでもないので、笑いながら頷く。

「そ。びつくりしたよ、目の前だったし」

「ちよつと、翔太……」

それをなんとなく止めつつ、新たな事実血の気が引いた。

翔太、圭介さんに言ってなかったんだ。

私も言っていないから、圭介さんにとっては初耳ってことで！

しかもその後のごたごたで落ち込んでいた時、圭介さんに慰めてもらったわけで！

理由は知らなくても、桐原主任がらみって事は気づいていたみたいだし！

結論〃この話は流すに限る！

「由比さん」

掛けられた言葉に笑みを返すと、早口でまくし立てた。

「昔のこと昔のこと！ 忘れなさい、翔太」

「由比さ……」

「で、その皆川さんが翔太と圭介さんに会ってみたいって言うってね？ ほら、翔太とは会ったことあるけど、圭介さんとはないからそんな不純な動機も入ってるので、断ってくれて全然OK！」

翔太を見ながら言っていた言葉を、最後は圭介さんに向ける。

そうそう、顔のいい方々はそんな理由で会いたいなんていい気持ちはいらないだろう。

皆川さんの機嫌は損ねるかもしれない＆溝口先生には悪いけど、断って欲しくなっただかも！

考えてなかったー。

そういえば、圭介さん、桐原主任にあんまりいいイメージ持ってないよね。

すっかり過去のことだったよ。

箸を持ったまま目を細めた圭介さんは、いつもより無表情気味に翔太に顔を向けた。

「……翔太、お前はいつなら大丈夫だ？」

え？

「んー、全部平気」

あれ？

「なら、第一希望になってる、来週末の土曜でいい？」

あらら？

「うん、いーよ。溝口先生には聞かなくていいのかよ」

ちよっ……

「由比さんのご飯を食べられるのに、日にちを選ぶなんてことさせない」

うわ、黒いつ

……じゃなくて。

「えつとー、参加決定？」

いつの間にか食事会参加方向で、話が進んでいます。

二人を横から眺める椅子に座る私は、箸を持ったままの手で首の後ろを押さえる。

すると二人は満面の笑みで、あたりまえだよ、と頷いた。

「いつも由比さんが、お世話になってるわけだしね。溝口先生も喜ぶよ」

え、あれ？ さっきまで溝口先生の参加、拒否してましたよね？

圭介さんの言葉に首をひねれば、

「久しぶりにちゃんと話したいし、桐原さんに」

桐原主任と話したいと言う翔太の言葉に、余計ハテナマークが増えていく。

そう言えば、と圭介さんが疑問を口にする。

「当日、皆さんは何で来るの？ 駅まで迎えに出ようか？」

穏やかないつもの態度に戻った圭介さんの言葉に、小さく頭を振って遠慮した。

「桐原主任が車で、ここまで連れてきてくれることになってるんだ」

「ここ、知ってるの？」

驚いたような声に、うんと頷いた。

「場所の確認の意味も込めて、前の食事会の際にここまで送ってもらったから」

「……ああ。そっか」

ん？ 今、変な間がなかった？

夕飯を再開していた私は、違和感のある間に箸を口に入れたまま顔を上げた。

目があった圭介さんは、なぜか嬉しそうに目元を緩めている。

「じゃあ、早めに溝口先生を連れてきて準備を手伝だって貰おう。」

翔太、楽しみだな。何作ろうか」

あれ？ なんか、え？

「あー、俺、シチュー食いたい」

「夏だよ、今」

ね？ と私に問いかける圭介さんに、浮かんでいたもやもやをよく分らないまま気のせいだと意識的に消す。

「翔太はシチュー好きだよな。クラムチャウダーとかなら、夏でもおかしくないかもね」

一緒に作ろうと笑いあうと、私達は当日の献立を話し合いながら賑やかな夕食を終えた。

由比から食事会の話を告げられた翌日、圭介は職場である高校で勤務していた。

翔太は午後から予備校。

圭介は図書室の奥で資料を手にながら、ふと、考え込む。
学校は夏休みに入っているとはいえ、教師に学生と同じだけの夏休みはない。

特に今年は大学のゼミの担当だった教授から、論文を出してみないかと誘われて少ない休日がもっと減った。

まあ、自宅にいて翔太の受験勉強を邪魔するよりは、学校にいた方がいいと思うけれど。

圭介は大学で史学・日本史学科に在籍し、ゼミの専攻は中世。

実際は古代史も興味の範疇で、それなりに遊びもあったけれどゼミ室に入り浸っている事が多かった。

ゼミ室の隣は、大学院生も使う教授の研究室。

めったに見ることの出来ない研究資料が山積みされていて、圭介はそこにいるのが好きだった。

高校に蔵書としておいてある資料は大学とは比べ物にはならないけれど、それでも圭介は社会科準備室よりもここにいた事が多かった。

手に持っているのは、日本史の年代表。

西暦・和暦・干支、そしてその時代に起こったことを表に纏めてある本。

中世専攻の圭介は、戦国期における国の形成について論文を書くべくページを繰っていたのだが。

関東の地図に載っていたある海岸の名前に、ふと目を留めた。

「由比……」

指先で、そろりとなぞる。

日本史好きじゃなくても、きっと知っているだろう、海岸の名前。鎌倉時代を勉強すれば、必ず出てくる地名。

初めて由比と会った時、まさかこの字を書くとは思わなかった。

女の子の名前にするなら、「結」とか「優衣」とか「唯」とか。

他にもいっぱいあるのに、なぜ「由比」を選んだんだろうとそんな事を考えた。

目を伏せてもう一度指でなぞると、ぱたりとその本を閉じた。

少し移動して、窓際に身体を寄せる。

綺麗な青空が広がる風景は、圭介にとっては見慣れたもので。

けれど、見飽きない。

眼下の校庭では、部活動に励む生徒達の姿。

少し外れたところに溝口がいて、陸上部を指導している。

「……普通にしていれば、いい同僚上司なんだけどね」

つい、愚痴るように呟いた圭介は、朝の溝口とのやり取りを思い出しながら窓横の壁に腕から寄りかかった。

「は？ 食事に？」

朝、出勤してくる溝口を職員室で待つて、昨日由比から提案された食事の誘いを告げた。

案の定、喜ぶよりもびっくりしている。

それはそうだろう。

翔太の事もあって、プライベートで会ったりする事は過去なかった

のだから。

圭介は口端を微かに上げて笑みを作ると、溝口の言葉に頷いた。

「ええ。溝口先生が未だにしつこくお弁当を狙ってきてると、つい口を滑らせまして」

「ちよつと待ってええつ、遠野先生！俺、どんだけ食いしん坊！？」

「事実を伝えたまのですが」

「そこはもうちよつと、オブラートに包もうよ。大人でしょ？大人だよねえ？遠野先生？」

「では、不参加と」

「参加します！」

ぴしつと手を上げて宣言するように叫ぶと、職員室にいた先生達がかすくすと笑いを零す。

溝口はそれに気付きもせず、どかつと椅子に座った。

いや、気付いていても気にしないのだろう。

「いつですか？」

溝口は鞆から引き出した携帯を操作しつつ、圭介に問いかける。

「来週の土曜日です」

「随分急ですねえ」

「不参加ですか」

「参加だつてば！」

ぶつぶつと文句を言いながらスケジュールに入力しているらしいその姿を見て、圭介はふと首をかしげた。

「手帳には書かないんですか？」

確か、引き出しに入っているんじゃ……

溝口は圭介の言葉に怪訝そうに目を向けてきたが、すぐに携帯に戻す。

「手帳になんか書いたら、忘れるじゃないですか」

……それは手帳とは言わない

内心そんなことを思ったけれど、そういえば相互理解はできないと諦めたんだっけと一息つく。

「その日、由比さんの会社の方々も来るので、粗相だけはしないで下さい」

「だから、俺、どんだけ！」

粗相ってなんだよと憤りながら、何か思いついたのかぴたりとその動きを止めた。

「もしかして……」

その声音に好奇心の色を感じ取って、圭介は見ていたプリントから顔を上げた。

目が合った溝口は、にんまりとした表情を浮かべていて。

見るからに、圭介をからかおうとする気満々だ。

「もしかしてその会社の人の中に、牽制したい人でも？」

「は？」

正直ドキリと鼓動が早まったが、圭介はそれを表に出すことなく目を細める。

溝口は漏れ出した圭介の冷たい空気にも気付かず、ニヤニヤと言葉を続けた。

「じゃないと、俺を呼ぶとかそれを許可する事自体不思議ですからね。あれだけゆいさんと話す事を牽制していたく……」

「溝口先生」

溝口は、低くなった圭介の声にびくりと肩を震わせた。

「当日は動きやすい格好と、汗を拭くタオル、着替えをご持参願います」

「ちよっ、何それ！ 食事会の持ち物じゃないっ！」

そのまま待ち合わせの場所と時刻を伝えて、あうあうと呻いている溝口を尻目に圭介は社会科準備室に移動した。

朝のやり取りを思い浮かべていた圭介は、意識を切り替えるように大きく息を吐き出した。

「なんだか溝口先生と話してると、調子が狂うな」

大人になって増えた、本音と建前。

使い分ける術も、社会人になれば誰だって身につく。

無意識に感情をコントロールするだろう。

溝口には、それが薄いのだ。

その、コントロールをするという事自体が。

薄いというか、するつもりがないというか。

だからなのかどうなのか、気付いたら溝口に引きずられてしまっただ。

つい、感情的になってしまっのが少し悔しい。

これじゃまるで、年下……いや実際年下なのだが、年下が年上に甘えている状態に思える。

ようするに、翔太と自分の関係に近い気がして気に食わない。

「溝口先生より、精神年齢は上でありたいと……願う。切実に」

溝口が聞いていたら一発ダウンしそうな言葉を吐きながら、圭介は手にしたままの本に目を落とした。

——ここまで、送ってもらったから

昨日、由比から聞いた言葉。
思わず、ほっとしてしまった自分がいた。

少し前、由比が会社の同僚と食事に行った日。

仕事だった圭介は、それでもいつもより早くアパートへと戻った。
暗くなりかけている風景に、電気のついていない隣の……由比の部屋。

まだ帰っていないのかと過保護を発動しながら車のエンジンを切った圭介は、シートベルトを外しながら背筋を伸ばす。

さて、今日の夕飯は何にするかなとドアを開けようとした圭介の視界に、ひょこつと小さな影が入り込んできた。

それは、由比で。

いつもよりは少しおめかしした格好に、帰ってきたのかと目元が緩む。

声を掛けようとドアに置いた手に力を入れた時、もう一つ背の高い影が彼女の後ろから出てきて圭介の動気を止めた。

見慣れている由比と違って、見慣れていないその人影に目を凝らす。
薄暗い中見えたのは、覚えのある顔。

……桐原

一・二度駅で会った事のある、由比の上司。
表情まで細かく伺えないが、それでも穏やかに笑っている。

前に見た時の威嚇するような、押さえつけるような雰囲気ではなく。

この二人に、何が、あった？

思わず二人から見えないように、シートに身を深く沈める。けれどどうしても気になって、二人を目で追っていた。

その時。

由比の頭に、桐原の手が触れた。どくりと跳ねる、鼓動。

ぼんぽんと上下に動く、その手のひら。

思わず、駆け寄りたくなった。

触れさせたくない……、誰にも。それが桐原ならばなおさら。体調を崩すほど、彼女を追い詰めた男。

何があつたのかは知らないが、それでも恋愛感情が絡んでいるのは明白。

感情を見せてはいても本心を隠して生きているような由比を、あそこまで揺さぶった男。

その場所は、その手は、俺の――

けれど、出て行くのは理性が押し留める。

暴れだしそうな感情を、何とか押さえ込みながら。

話し終えたのか、由比が頭を下げたのをきっかけに桐原は踵を返して駅へと戻っていった。

けれど由比はすぐに部屋に戻るわけでもなく、ただ、桐原の立ち去った方をじつと見ていて。

しばらくして両手で頬を叩くと、ゆっくりと部屋へと帰っていった。

圭介は、じつと車内に身を潜めたままそれを見送って。

由比が部屋に入ったのを見て、やっと強張っていた体から力が抜けた。

口の中が、からからに乾いている。

今の、由比の行動はなんなんだろう。

桐原の後姿を見て、何を考えた……？

どんどんと深く落ちていく思考を、右の拳をドアに叩きつけて押し留める。

中古で買った車が、変な軋みを上げた。

こんなにも、動揺するとは思わなかった。

感情を持っていられるほど、動揺するとは思わなかった。

桐原の存在が、こんなにも自分に影響するとは思わなかった。

翔太も、由比を好きだと言う。

そして、行動も起す。

どちらを選ぶのなんて分からない。

今の所、由比にとって圭介も翔太も、恋愛の範疇外にいるのだろうから。

けれど桐原は。

頭の中に、警鐘が、鳴り響く。

由比の感情を揺さぶった、男。

由比を、泣かせた、男。

ふっ、と風が頬を撫でて、圭介の意識が浮上する。

だいぶ考え込んでいたらしい。

眼下の校庭にいたはずの生徒は、昼休憩なのか脇の方で片づけをする数人しか見えない。

圭介は幾度か瞬きをしながら小さく息を吐くと、手元の本を持ち直した。

本当は知っていたけれど、知らない振りをした。

桐原が、会社の同僚達を車で連れてくるといった時。

ここを知っているのか？ と。とぼけて、問い返した。

もし言葉を濁されたらと思うと、内心、気が気じゃなかったけれど、でも由比は、あっさりと送ってもらった事を口にした。

それはつまり、知られたくない事がないって事で。

こんな試すような事をしてでも、由比にとっての桐原の立ち位置を測ろうとする自分に嫌気がさした。

けれどほっとしているのも、本心で。

桐原の事で泣いていた由比の姿が、脳裏を過ぎる。

自分以外の為に泣く姿を見たくないと思うこの感情は、自分自身で

も持て余すほどの強い嫉妬。

今までの人生で、ここまで誰かを欲した事があっただろうか。
思いつく記憶は、一つもない。

好きだと、離したくないと、願う。

翔太とも、いつか決着をつける時がくるのだろうけれど。
でも、本当は今のまま。

叶うなら、由比と翔太、大事な人達とこのまま穏やかに過ごしたい。

「……由比、さん」

呟くように零したその声に反応するように遠くでかさりと音がなっ
たけれど、圭介の耳には届かなかった。

12（後書き）

すみませんっ、食事会の曜日。土曜日です！10話目、日曜日って書いてました。本当にすみません！

「明日ですねえ、遠野先生」

食事会の話が出たのが先週。

昨日休みだった溝口が、わざわざ帰りに圭介のいる社会科準備室に顔を出した。

なんのようだと思ったら、ただ単に明日の確認だったようだ。

大雑把なのか細かいのかよく分からない溝口の行動に、圭介は纏めていた論文から顔を上げた。

珍しくジャージではない格好に首を傾げながら、ワードを保存して液晶画面を閉じる。

「お誘い頂いてから、もうわくわくして」

語尾に音符でもついてしまうような物言いに、本当にこの人は三十三歳のだろうかと首を傾げたくなる。

「そう言ってもらえれば、由比さんも喜びます」

にこりと笑うと、溝口はそりや楽しみですよと笑う。

「遠野先生のプライベートと、恋敵を見れるわけですから」

「……恋敵なら、会っていると思いますよ」

つい翔太の事を思っけて口から出た言葉は、溝口には聞えなかったらしい。

なんですか？ と聞き返されて、いいえと曖昧に濁す。

溝口は不思議そうにしながらも、そういえば、と話を変えた。

「なんか新学期から赴任してくる予定の先生が三人もいるんだって。遠野先生、聞いてました？」

初耳の内容に、小さく頭を振って否定する。

「三人もですか。年度中に珍しいですね」

年度の初めならありえるだろう異動だけれど、私立とはいえ年度中の赴任は珍しい。

「三人とも臨時採用らしいですよ。図書室司書と英語の補助教員。あとうちに体育の補助教員」

臨時採用……、なるほどね。

その言葉に納得した圭介は、気になっていた溝口の格好に理由を見つけてぽんつと手を打った。

「もしかして、その方々が来ているとか？ 今から歓迎会でも？」

溝口は圭介とは違って、同僚教師と飲みに行く回数が多い。

そういう時はさすがにジャージで行くわけもいかず、体育教官室に置いてある私服に着替えるのだ。

といってもポロシャツはそのまま、ズボンを替えるだけだが。

溝口は頷いて、腕時計に目を落とした。

「本来の挨拶は再来週らしいんですけど、今日三人で会ったらしくてそのまま挨拶に来たみたいですよ。あと二十分後に正門で待ち合わせなんですけど、遠野先生も少しだけ顔出しませんか？ 俺も酒は飲まずに帰るつもりですから、適当に挨拶だけでも」

体育の補助教員がいるから、溝口も顔を出すつもりなのだろう。

酒を飲まずに帰る、それは明日の食事会があるからが理由に違いない。

圭介は飲み会への出席を断ってから、ノートPCの液晶画面を押上げた。

「私はまだ仕事があるので遠慮しますが、溝口先生はたんまり飲ん

できてください。大丈夫です。飲んでても疲れてても寝ていても、ちゃんと使わせていただきますから」

につこりと満面の笑顔で言い放つと、圭介は論文の続きを書くべくキーボードを叩き始める。

「敬語なのに、内容が全く敬ってないし！ 俺、年上！！」

「残念です」

「どーいうこと?!」

まだ明るい陽が差し込む社会科準備室に、溝口の叫び声が響いた。

「ただいま」

圭介が帰宅したのは、夜八時。

もう少し早く帰れる予定だったのだが、思いの外、論文が進んで切りのいい所まで終わらせてきた。

これで、この後が楽になる。

「おかえりなさい」

帰ってきた声は由比のもので。

ここ二か月位で当たり前のようになってきた状況に、圭介の感情がほんのりと温かくなる。

「圭介遅い」

玄関をあがって数歩の廊下を歩けば、キッチンとダイニングがくつついた八畳ほどの部屋。

ご飯を食べる由比と翔太が、箸を止めて圭介を迎えた。

「ごめん、ごめん」

圭介は二人に應えると、翔太の頭をぼんと叩いてから自分の部屋と

して使っている和室へと直行する。

そこで服を部屋着に変えて、洗面所へと再び二人の後ろを通って歩いていく。

既にご飯を再開している翔太と、圭介のご飯を用意し始める由比。その二人の姿は、まごうことなく家族の姿。

数日前願った自分の想いを、再び脳裏に描く。

——このまま。

このまま暮らしていければ……。

眼鏡を外すと、微かにぼやける視界。

もともと必要な時だけ掛ければ充分な、視力。

疲れた目を気にしながら小さく息を吐いて、蛇口をひねった。手を洗って、ついでに顔も洗う。

それを拭いながら、目の前の鏡に映る自分を見た。

——それでも。

いつかつくだろう決着は、この関係を変えてしまうのは明らか。

せめてそれが三人にとっていい方向に進めるように、願う。

バラバラに、ならないように。

……もう、二度と、あんな思いはしたくない。

「圭介さん、どうかしたの？」

後ろからひよこつと顔を出す由比に少し驚いて、肩をびくりと揺ら

した。

ここ数日、桐原に揺さぶられた感情が、圭介を支配していて、由比を見る視線に、違う色をのせてしまう。

それは、由比の望む感情ではないのは分かっているけれど……。

圭介はタオルを持ったまま、片手で由比の頭を撫でる。

「なんでもないよ、由比さん」

嬉しそうに自分の掌を受け入れる由比の笑顔に、幸せを感じながら。

苦い過去の記憶を、圭介は頭を振って追い出した。

13（後書き）

アンケートへのご協力ありがとうございました。

結果報告はブログにて、させていただいております。

1位は「圭介と由比のデート」でした^^

食事会当日。

朝七時から起きだした私は、まず必要な食器類を用意した。来るのは合計八人。

圭介さんと翔太と相談して作ることにした料理に必要なカトラリーは、スプーン。そして箸。

割り箸はスーパーやコンビニで買ったものがあるから、それでよし。スプーンはうちと圭介さんちので、なんとかセーフ。

お皿は、もうばっらばら。

適当もいいところだけど仕方ない。できるだけごみを出さない方向で、必要ならその場で洗いに戻ればいいと諦めた。

桜たちが来るのは、夕方。

本当はお昼とかの方がいいんだろうけれど、なんたって既に八月。とにかく、暑い！

事情を話したら大家さんである孝美さんが日除けにタープを貸してくれるとっていただけたけれど、さすがに日中は耐えられないだろう。と言うことで、ビアガーデン並みに夕方開始に決めた。

だというのに、なぜか溝口先生は午前中から手伝いに来てくれるらしい。

うん、本当にいい人だ。

あんなに迷惑を掛けたのに、早くから来て手伝ってくれるなんて。圭介さんも、いい同僚に恵まれてるんだね。

私は機嫌よく鼻歌を歌いながらお手拭やタオルをテーブルに置いて、冷凍庫の氷を確認した。

冷たい飲み物は、必須だろう。

作れるだけ作っておいたけど、後で圭介さんちにも頼もう。
最悪、足りなくなったら一階の人に貰えばいいし。

作っても作っても、ご飯も氷も足りなそう。

大変だというのに、つい顔が笑ってしまう。

楽しいな。自分のご飯を食べてくれる人がいるんだよ。

私が役に立てるんだ。

私を、必要としてもらえてるんだ。

「お父さん、お母さん」

つい、呟いた。

目を瞑れば、笑ってくれる両親の顔。

きっとお父さんなら、がしがしと頭を撫でてくれるはず。

「……」

ふいに、昨日、自分の頭に触れた掌を思い出す。

そして、自分を見るその視線を。

最近、圭介さんが私を見る雰囲気が変わった気がする。

触れてくれる掌は、とても温かいけれど。

何か今までと違うように思えるのは、ただの思い過ごしなのか。

ほんわかな雰囲気は変わらないんだけど。

たまに、じっと私を見るその視線に。

何か怖いものを感じてしまうのは、気のせいなのか……

口元を押さえながら、目を伏せる。

翔太は一時期不安定な感じを受けたけど、今は至って普通で。

一応圭介さんに聞いてみたけれど、思い当たる事があるらしくてもしなくて大丈夫と言われてしまった。

だから気になりつつも、様子を見るだけにしているけれど。

そこで、ふと、気付く。

もしかして、翔太が不安定になったきっかけを私が作ったから、圭介さん、私の事を内心苦々しく思ってるのか？

圭介さんが一番に守るべきは翔太で、それは当たり前で。そこにちゃっかり居つかせてもらっているのが、私。

なのに、そんな私が翔太を……それどころか皆を振り回しちゃったから……。

翔太の為とか言いながら、本当に自分の為の行動だったってこと。

あの子の翔太の状態を見れば、一目瞭然だったのだから。

「……あ」

そうだ、きっとそうなんだ。

圭介さん優しいから、はつきりと言えないだけで。

ぎゅ、と手を握り締める。

なんで今更気がつくんだらう。

なんでいつも、気がつくのが遅いんだらう。

桐原主任の時もあれだけ後悔したのに、また……

その時、壁の向こうから叩く音が聞こえて、飛び上がらんばかりに肩を震わせた。

“そっちにいつていい？”の合図に、慌てて返答する。

胸を押さえて動悸を治めながら、時計に目を向ける。

考え事をしながら用意をしていたら、いつの間にか十時を過ぎていたらしい。

十時半に溝口先生を迎えに行きがてら、今日の食材を買いに行く予定。

沈みこみ始めた感情を、両手で頬を打って切り替える。

今、考えても仕方ないもの。

今日は楽しもう。

そう、翔太にも圭介さんにも、会社の皆にも楽しんでもらうんだから。

その後の事は、今は考えるのはよそう。

私は、慌てて戸締りを始めた。

14（後書き）

お礼SS……というより短編になってしまったので、新たに立ち上げました。

よろしければお読み頂ければ嬉しいです^^

「きつと、それは」のほかのおはなし 下記リンクより飛べます^^
お礼のおはなし「圭介と由比のデート」1）

「溝口先生、いい筋肉してますわねえ」

「へ？　そ、そうですね？」

開け放っている窓から庭にいる溝口先生と、日除けにとタープを持つてきてくれた孝美さんの声が聞こえてきた。

午前中迎えに行った溝口先生は、なぜか大きい紙袋を手に駅で待っていた。

飲み物とかそういった差し入れ的なものなのかと思って聞いてみたら、タオルと着替えと紙袋を開けて見せてくれた。

……うん、下着が見えたのは忘れよう。

せめて別に袋に入れるか、着替えて包んでくださいね。

詰めが甘いね、溝口センセイ。

そんな事を内心考えながらどうして着替えなんか……と聞いたら、遠野先生のご指示ですと言った……あとに圭介さんから冷氣攻撃を受けてました。

圭介さんは笑いながら「力仕事を主に引き受けてくださるらしいですよ、由比さん。さすが体育教師ですよね」と、バリッバリの敬語で威圧感醸し出していました。

なんか……、圭介さん最強……。

そんなこんなで買い物も済ませて、昼ご飯を食べた後、手分けして食事の準備をしているわけなんです。

溝口先生は圭介さんが言ったとおり力仕事を一手に引き受けてくれて、今はウッドデスクセットの掃除と日除け用のタープの設置をしていく。

暑いのかタンクトップになった溝口先生は、確かに素敵な筋肉だった。

むきむきじゃないけど、ある程度ついた筋肉と引き締まった体は、圭介さんとは違う男らしいというか男くさいと言つか。

つんつんしている髪の毛が、余計幼さを醸し出しているというか。人の良さそうな顔と、屈託のない笑み、明るい性格。

うん、すみません。三十歳に見えませんか。

圭介さんより、年下に見えますよ。

「さすが体育の先生。学生の頃とか、何してたんです？」

「え？ 部活っすか？」

孝美さんの質問攻撃は止まることなく、聞いているのは面白い。

私はすこし引き加減の溝口先生の返答を聞きながら、グリルで焼いていた鶏肉を取り出してそぎ切りにしていく。

玄関のドアも開けっ放しで、さっきからひっきりなしに翔太が出入りしていた。

そんなことを考えていたら廊下を歩いてくる足音が聞えて、顔を伏せたまま翔太が来たのかなと思っていたら。

「由比さん、こっちの方もうすぐ終わりそうだけど、あと何かすることある？」

「……っ」

思わず、肩が揺れてしまった。

入ってきたのは、圭介さんだったらしい。

強張った表情をなんとか普通に戻しながら、私は顔を上げた。

そこにはエプロンをしている、圭介さんの姿。

下ごしらえを全て終えていた食材を渡して、圭介さんちの方で煮込んでもらっていたのだ。

あとあまり手間の掛からないサラダと。

少し怪訝そうな表情の圭介さんを見上げて、私は笑みを作る。

「え、とね。そうしたら、もうそろそろ食器とか下に持っていったらいい？ あと一時間くらいだし」

クーラーボックスを孝美さんに貸してもらっているから、飲み物とかももう持っていて大丈夫だろうし。

「持って行くのは別にいいけど、まだ終わってないみたいだし、手伝うよ？ 皿に並べていけばいいんだよね？」

圭介さんは私の手元にある切り分けられたままの鶏肉やハム、サンドウィッチの具材に手を伸ばした。

「あ、えっと！」

それを見た私は、思わず声を上げて制してしまう。

「？ どうかした？」

伸ばしていた手を止めて、圭介さんが不思議そうに私を見た。

それはそうだろう。いきなり止められれば……

咄嗟の行動とはいえ、どうしようと頭がぐるぐるしていたところに、翔太が駆け込んできた。

「うおーい、……て、あれ？ どしたの？」

手に菜ばしを持ったままの翔太は、私達の間を交互に視線を走らせてから傍に立った。

「溝口センセが、もう下の準備は終わったって。そろそろ持つてく？」

その言葉にうんうんと頷いて、圭介さんを見上げる。

「ってことなので！ こっちは大丈夫だから、お願いします」

なんとか笑顔で押し切ると、圭介さんは少しだけ目を細めてからいつもの笑顔で頷いた。

「そうだね、どんどん持っていけないとテーブルがいっぱいになってしまっかな」

「うん」

そのまま圭介さんを見ていらなくて顔を伏せると、鶏肉を切り始める。

「由比、切るのへたー」

翔太は空気を読んでいるのかまったく気付いていないのか、菜ばしを置くとそばにあったナイフを手についた。

「絶対、俺の方が上手いね」

翔太の突然の行動に呆気にとられていた私は、我に返って口を尖らせる。

「私の方が上手いわよ」

言い合いながら鶏肉を切り分け始める。

と言ってもそんなにないから、すぐに次の食材に手を伸ばして。

「圭介、由比と勝負がついたら俺も運ぶから」

翔太がナイフを持ったまま、圭介さんに声を掛けた。

「あ、ああ」

それに返す声に、私も顔を上げる。

……っ

目が合った途端、感じる、その視線。
何か、意味を持っているような視線。

怖くなって、目を伏せた。

「圭介さん、お願いしまーす」

声が震えないように気をつけながら声を掛けると、了承の返事をし
て圭介さんは部屋を出て行った。

サンダルを履いて歩いて行く音が遠ざかると、ふっと体から力が抜
ける。

思わず溜息をつきそうになって、それは喉の奥に飲み込んだ。

「ねー、由比」

すると隣の部屋に圭介さんが入ったのを見計らったのか、少し小さ
めの声で翔太が私を呼んだ。

「ん、えと、何？」

顔を上げて翔太を見ると、少し困ったような表情で私を見ていた。

「なんかあった？」

「何かって……別に何も無いよ」

跳ねた鼓動を隠して即答すると、翔太はうーんと唸りながら手に持
っていたナイフを置く。

「そ？ だったらいいけどさ、なんか元気なさそうだったから。じ

や、俺も荷物運びしてくる」

「うん、ありがと」

包丁を持っていないほうの手を振ると、翔太は圭介さんの後を追うように部屋を出て行った。

その後姿を見送って、包丁をテーブルに置いた。

意識しないで、今日は皆に楽しんでもらうんだってそう決めたのに。ダメだ。圭介さんを見ると、どうしても意識してしまう。勘繰ってしまう。

嫌がられていたらどうしよう。

本当は、今日も嫌々だったのかもしれない。

仕方なく、付き合ってくれているのかもしれない。

圭介さんはそんな人じゃないって分かっているのに、悪い方向に傾いて行く思考が止められない。私の、悪い癖。

「普通に、しなきゃ」

声に出して、戒める。

視線の意味を聞けばいいのは分かっているんだけど、その答えを聞くのが怖いから。

もう少し、もう少しだけあの優しさの中にいたい――

「溝口先生、お疲れ様です」

あらかた食事の準備を終えて庭に出てくると、なぜかぐったりと椅子に座り込む溝口先生の姿が目に入った。

さっきまでいた孝美さんの姿はない。

溝口先生はがっくりと頭垂れていた頭を上げて、にへらと私に向かって笑う。

「ゆいさんのご飯を食べられるなら」

そう言いながらも、ちらりと別の場所に視線を向けてふるふると頭を振った。

「でも、質問攻めにはまいった」

「あはは……、孝美さんは筋肉好きですからねえ」

「筋肉好きって……俺の存在意義は筋肉ですかい」

拗ねたように呟く溝口先生が、大変面白い。

沈み気味だった私の気持ちも、思いつきり浮上させてくれる。

「でも、確かに体つき素敵ですよ」

タンクトップ姿を傍で初めて見たけど、うん、綺麗な筋肉のつき方だと思いますっ！

溝口先生は私の言葉に片眉を上げると、にやりと笑って腕を折り曲げた。

そこに現れる筋肉の盛り上がり、思わず目を見張る。

「触ってみる？」

「えっ、いいんですか？」

うわっ、いいの？ ちよっと、真面目に触ってみたいんだけど！

「いいよー」

軽く笑う溝口先生に促されるように、ワクワクしながら指先で二の腕の筋肉をつつく。

「うわっ、硬いっ」

「どれどれ」

すると真後ろから声が聞こえて、するつと右横から腕が伸びてきた。
「翔太！」

背中からかぶさるように溝口先生に腕を伸ばす翔太が目端に映つて、思わず声を上げる。

「うわっ、ホントだ。かってー」

しかしまったく効き目のない私の声を聞き流して、翔太は同じ様に指先で溝口先生の二の腕をつつく。

「おいこら、生徒。誰が腕をつつくのを許した」

言葉は不穏でも笑いながら言う溝口先生に、怒っている様子はない。現に翔太は、怒られてもつつくのをやめない。

「どれだけ鍛えたらこうなるわけ？ 頭も筋肉だから？」

「おいまて、さすがにそれは言われたくねーぞ。お前、どんだけ猫かぶりしてやがった」

「っていうか、翔太ってば！ そんなところから手、出さないでよ」
溝口先生の言葉を継ぎながら、背中越しの翔太に声を上げる。

「えー、いーじゃん。ねえ？」

そう言うとなにをとち狂ったか、伸ばしていた腕をするりと腰に回された。

「由比のこと、好きだって言ってるでしょ？」

斜め上、見上げるその先の翔太は可愛らしい笑顔全開だけど、やっ
てる事は可愛くない！

「いくら好きでも、そーいうことは特別な子にしてあげなさい」
まったくつ。

「まーた、そーいうこと言うー」

「ちよっ、ちよっ」と

がくりと翔太が項垂れたのは、私の背中。
上半身の重みが掛かって、体が傾ぐ。

慌てて踏みとどまろうとした私の身体を、左から出てきた腕が支えた。

「……っ」

まわされた腕の、私の腕を掴む手の力が、強い。思わず息を詰めて、体の動きを止めた。

「翔太、いい加減にしろ」

やんわりとけれど強い力で翔太の腕を外すと、その腕……圭介さんはゆっくりとでも確実に私を引き剥がす。

「由比さんが転んだらどうする」

そう言いながら、私を自分の横に引き寄せた。

……翔太から、引き離れた。

とんとと触れる肩に、普通にしなきゃと戒めた感情が、ぶわりと膨れ上がる。

……今、顔を上げたら。

さつきも向けられた、圭介さんの視線。あれをまた、浮かべているのだろうか。

目の前に立つ翔太は拗ねた顔で圭介さんを見上げて、両腕を組む。

「なんだよ、嫉妬ならそーいえばいいのに。ねー、溝口センセ」

後半視線を向けた先は、傍の椅子に座る溝口先生。

ニヤニヤした表情で、翔太の言葉に頷いている。

「ていうかさ、ゆいさん」

「はい？」

なんでもないように笑みを繕いながら、私はゆっくりと圭介さんか

ら離れる。

その行動に少し目を細めた溝口先生は、翔太と同じ様に腕を前で組んで私を見上げた。

といつても、座っている溝口先生と私でもあまり身長差がないのが空しい。

そんなどうでもいい事に気をとられた私に、溝口先生があっけらかんとした口調で爆弾を投下した。

「どっちと付き合ってるの？」

「どっちとも付き合っていないません！」

即答してくると踵を返す。

今、そーいう冗談は聞きたくないんですがっ。

まったくと息巻きながら、手に持ったままだった台布巾をウツドテ
ーブルに置いた。

「あんまりそーいう事、言わないで下さい。二人から敬遠されちゃ
ったらどーするんですか」

「えー、そんなことないでしょ。っていうか、遠野先生。付き合っ
てるんじゃないの？」

不思議そうに問いかけてくる溝口先生を、圭介さんは何も言わずに
ただ笑みを浮かべる。

溝口先生はそれじゃあと、翔太を見た。

「翔太の方？」

「俺は、それを望む！」

元気いっぱい手を上げる翔太に、思わず肩から力が抜けた。

今日は翔太に助けられてるなあ、色々と。

本人、気付いてないだろうけど。

「翔太ってば、可愛いこと言ってくれるんだから」

「またそれかよー」

ぼんぼんと頭を叩くと、アパートの駐車場に一台の車が入ってきた。

少し大きめのその車の助手席から、工藤主任の姿が見える。

「あ、皆が来た」

翔太から手を離して車に体ごと向くと、伝えておいた空いている駐車スペースに車がゆつくりと停まった。

「おー、あれがゆいさんの会社の人」

溝口先生が手の埃を払いながら、腰を上げた。

「あ、溝口先生、どうぞ」

手拭を渡すと、溝口先生が気付いたようにそうだと呟いた。

「溝口先生はやめない？」

「え？」

「だってさー、仕事してるみたいなんだよね。こいつもいるし」
そう言つて、がしりと翔太の頭を掴む。

「こいつつて何！」

「それにほら、こっちもいるでしょ？」

翔太の叫びを無視して、空いている右手で圭介さんを指す。

「遠野先生、お互い先生つけるのやめませんか？ 俺も圭介って呼んでいいですかね。タメ口でいいから」

ゆいさんもさ、と。

圭介さんは少し逡巡しながら、ふむ、と呟いた。

「……なんだか複雑な気持ちですが、そうしますか。さすがにプライベートで敬語に尊称付けは面倒な気がします」

圭介さんは是と返しながら、しかし……と難しい顔をした。

「大変な問題が、一つあります」

「あ？ やっぱ年上に敬語はきついか？」
きよんとした溝口先生に、圭介さんはそれはまったく頭を振った。

「溝口先生の名前、知らない」

しーん

静まり返った瞬間、翔太まで知らないと言い出した。

「まじで！？ 六年も隣の席に座つといて、先輩教師の名前しらねえってか！」

「え、ホントに？ 圭介さん、冗談でしょ？」

さすがにそれはないよね、という目で見上げれば、思いっきり真面目な表情で否定された。

「至極、臆げ」

「端的に言つなよ、文系教師！ 俺泣くぞ？！」

ちょっと泣きそうな溝口先生が、大変面白い。

うん、圭介さん達が苛めて遊ぶ気持ちがあった気がする。

17（後書き）

1話分の文字数、少ないですね。

少し前まで3000文字前後で更新してたんですけど、読みにくいかんnao思って、今は1200〜1500文字位にしてるんですが…。

今度は少なすぎだろうか……。

なんとなく、今の悩み。

「おーい、上条！ 少しは、出迎える素振りとか見せねえ？」

その声に、すっかり皆の事が頭から抜け落ちていた事に気がつく。

慌てて声のするほうを振り返ると、工藤主任と皆川さんを先頭に四人が歩いてきた。

各々、荷物を持って。

「上条さん、今日はありがとうね！ 凄く楽しみにしてきたのよ」
これ差し入れー、と荷物を置くために出しておいたレジャーシートの上に、どさどさつと手に持っていた袋を置く。

「こんなにすみません。丁度準備ができたところだったから、よかった」

「わぁ、おいしそう！ ちょっと凄くじゃない」

私の言葉にウッドテーブルを見た皆川さんが、感嘆の声を上げる。

「私ひとりじゃなくて、皆で作ったんですけどね」

「そう！ ちょっと早く紹介して！ 何このきらきら兄弟。ちょっと目が痛いんだけど」

……今、さらりと溝口先生はずしましたよね。

目線、圭介さんと翔太にしかむいてなかったですよね。

溝口先生が突っ込んできそうだなと思ったけれど何も聞えてこなかったので首を傾げたら、我慢できなかったのかテンションが高いのか皆川さんが圭介さんの前に立った。

圭介さんの身体が少し引き気味に見えたけど、スルーしておこう。

「私、上条さんと同じ会社の皆川 紗都です！ 二十七歳！ あ、

でも今年二十八歳になりますけどね！」

ああ、大人の女、皆川さんのイメージが崩れて行く……

そこでふと気付いて工藤主任に視線だけ向けると、……固まってるし。

圭介さんはすぐにいつものふんわり笑顔に戻って、口を開いた。

「由比さんがいつもお世話になってます。隣に住んでいる遠野です。私とは同じ年ですね？　そういえば翔太とはもうお会いになっているとか」

「お久しぶりです、皆川さん」

圭介さんの言葉を継ぐように、翔太がきらきら可愛い表情で皆川さんに頭を下げる。

……今日は猫かぶり翔太でいくらしいです。
久しぶりに見るかも。

挨拶している三人の傍に工藤主任が歩いていって、同じ様に自己紹介をしている。

なんかそこに変なオーラが入っちゃってるのは、意味なく嫉妬しているんですね？

そして皆川さんは、あっさりスルーしているわけですね？

そんな四人を桜と一緒に生暖かく見ていたら、桐原主任が隣に立った。

「今日は悪いな」

「いいえ、口にあえばいいんですけどね」

そこまで言って、桐原主任が視線を私から外す。

「遠野と翔太は知っているが、もう一人の人は？」

「あ……」

そこで、まだ溝口先生を紹介していないことに気がつく。
なんか勝手に話していそうな雰囲気だから、すっかり忘れてた。

そんな事を考えながら、溝口先生を見たら。

「……？」

口をぽかんと開けて、こっちを見ていた。

あれ？ 名前知らないとか言われて、茫然自失？ いや、そんな人じゃないか。

首を傾げながら溝口先生の傍に行っただけで少しも反応してくれないので、不思議に思いつつ声を掛けてみた。

「あの、溝口先生？」

「……ゆいさん、大変だ」

ぼそりと返ってきた言葉は、至極真面目な声音で。
大変という言葉に、何かあったのかと眉を顰めた。

「どうしたんです？ 溝口先生？」

不安になってもう一度声を掛けると、ふらりと溝口先生が立ち上がる。

「俺、ちょっと目がおかしくなってるのかも。だって、そこに天使が……」

「はあ？」

天使？ おかしいのは頭の方じゃ……いやいやいや。

一人突っ込みをかましていた私は、いきなり歩き出した溝口先生の後を慌てて追った。

「どうしたんですか、ちょっと！」

皆も何事だと話を止めてこっちを見ているらしく、しんとした空気の中、溝口先生の歩く足音だけが聞えて。

そして止まったのは、桜の前。

「圭介の同僚の、溝口 護です。あの、あなたは……」

みぞぐち まもる

初フルネーム！

後ろの方で圭介さんがそうだと呟いた声は、とりあえず流そう。

この状況で名前思い出したとか、さすがに言い出す場所じゃないし。

って、桜……桜かあ！

やっと溝口先生の行動の意味がつかめて、思わず片手で口元を覆う。

桜は一瞬無表情になったけれど、笑みを浮かべて小さく会釈をした。

「都築 桜です。由比と同期の」

「……桜、さん」

うわっ、熱に浮かされたようなその口調！

今までに何度か見てきた光景に、わくわく感が半端ない。

溝口先生はぎゅっと拳を握って思い切るように、桜を見つめた。

この後の行動を想像してときどきしていたけれど。

「……」

何も、言わない。

皆が大注目中だけど、溝口先生は気付いていない。

桜は思案顔で、私の方に視線を向けてきた。

多分、こういう対応をした方がいいのか、確認したいんだろう。

思いつきり毒づいていいのか、それともやんわり避けた方がいいのか。

とても心惹かれる想像ができたけれど、一応やんわりの方でお願いしてみた。

大体好意を持ってくれた相手に毒づくことはないけれど、あまりしつこいとそれ相応に返すから。

今回は私の知人としてここにいる人……溝口先生が相手だから、もし毒づいた場合私に迷惑が掛かるか考えたんだろう。

毒づかれた溝口先生がどうなるか見てみたい気がするけれど、さすがに私は翔太のように腹黒ではない。

だって、翔太。多分桜に対して、同じ匂いを嗅ぎ付けてるんだろうね。

すっごい楽しそうに、成り行きを見守ってるから。

しかし、溝口先生が何も言わないと、桜も対応しかねると思うんだけど。

桜も私から視線を戻して溝口先生を不思議そうに見上げていたけれど、小さく息を吐き出した。

あ、一瞬の無表情を垣間見ました！

桜、面倒くさくなっています。

桜は微笑をキープしたまま、料理の並ぶテーブルに目を向けた。

「溝口さん……あ、失礼しました、溝口先生とお呼びするべきかしら」

困惑気味の視線に、溝口先生は盛大にどもる。

「いえっ、あの……俺、護っていいいます」

さり気の下の名前呼びを強請ってる！

再び一瞬無表情になった桜は、にこりと笑ってそうですかと頷く。

「けれど初対面でお名前を呼ぶのは失礼に当たると思いますので、溝口さんでもよろしいでしょうか？」

「あ、はいっ」

見るからにしゅんとしたけど、仕方ないよ！ 溝口先生っ。

桜は名前呼びしないからね、男の人に対しては。

「溝口先生もお作りになったんですか？」

「いえっ、俺は、その……力仕事、で」

「そうなんですか？ なら、お疲れでしょう？ ありがとうござい
ます」

なぜか、ほのぼのとした会話が繰り広げられている。

そのまま話し始めた二人を見て、桐原主任がぽつりと呟いた。

「溝口、で、いいんだな」

「いいんじゃないでしょうか、呼び捨てで」

桜に名前呼びを要求するくらいだから、気にならないんじゃないで
すかね。

そんな感じでぼけーっと桐原主任と見ていたら、横から声が掛かっ
て二人してそちらに顔を向けた。

「お久しぶりです、桐原さん」

それはいつもより強い意思を視線にのせた、圭介さんだった。

18（後書き）

溝口先生のフルネームは、溝口 護でした。
書き手も今知った……（笑）
今日は長めに見えました。
読みにくかったらご指摘頂ければ幸いです。

桐原主任は片眉を微かに上げて、すぐいつもの表情に戻った。

「どーも」

ぶっきらぼうだけど、前のような不穏な空気はそこにはない。どちらかといえば、圭介さんの方がおかしな雰囲気を纏っていた。

「今日は由比さんと色々作りましたよ？ お口に合えば嬉しいです
ね」

にこりと笑うその表情も、何か強いものを感じる。

桐原主任は特に動じることなく、そりゃどーも、とやはりぶっきらぼうな言葉で返答した。

「桐原さん、こんにちは」

すると皆川さんと工藤主任と共に、翔太が傍に寄ってきてばしりと桐原主任の背中を叩く。

「由比の隣にいたとか、凄いいムカツクから離れてね？ 桐原さん」
目を丸くする皆川さんと工藤主任を他所に、そのままばしりと背中を幾度か叩いた。

「いてえよ、翔太」

思わず前のめりになった桐原さんは、がしりと翔太の頭を掴むとそのまま皆川さん達に視線を向ける。

「こいつ腹黒だから、可愛くねーから。絶対お前ら騙されてるから」

おお、腹黒翔太を暴露しちゃったよ。

けど皆川さんはぺしりと桐原主任の腕を叩き落すと、翔太をひっぱって後ろに庇う。

「こんな可愛い子捕まえて、何いってんのかしら。この無表情主任」「いやだから、お前騙されてるってば」

桐原主任の言葉を信じない皆川さんは、ますます眉間に皺を寄せて桐原主任を睨み上げた。

「大人気ないわねえ。あんた、まだ上条さん諦めてないの？ 隣の子敵視とか、なっさけな」

今度はこっちから爆弾投下ですか！

半目で桐原主任を見る皆川さんの後ろから、翔太がニヤニヤと顔を覗かせているけれど見て見ぬ振りをしよう。

ここはさっさとご飯になだれ込ませた方が、身の安全が確保されるような気がするよ。

「なんだか楽しい事になってるわねえ」

「っ、桜」

いきなり横から話しかけられた私は、思わず後ずさる。

すると軽い音と衝撃と共に、ふわりと匂う……いや、臭う、男の……

……いや汗の臭い。

顔を上げれば、丁度真後ろにいたらしい溝口先生に体当たりしていたところだった。

「あ、溝口先生。すみません」

そう言いながら離れれば、上機嫌な溝口先生が首を振る。

「いいよー、別に。ていうか、ゆいさんも名前呼びしてくれていいのに」

「溝口？」

「うーわー、すげー微妙」

呼び捨てにしたら、口を引き攣らされてしまいました。

まあ、さすがに溝口はないか。

「じゃ、護」

「まさかの、名前呼び捨て！」

ダメだ、楽しい溝口先生ってば！

非難するような口調だけれど、面白そうに笑っていて。

圭介さんの雰囲気になじびくついていた私は、溝口先生に拘い上げてもらえた。

落ち込みそうな、感情を。

隣で話を聞いていた桜が、くすくすと笑いながら私の頭を撫でた。

「由比は、随分溝口さんに懐いているのねえ」

「会つの二回目だけだね！」

「二回目で、呼び捨てだけだね！」

溝口先生と言い合いながらにへらつと笑うと、そう、と桜が目細める。

「でもせめて“さん”は、つけた方がいいと思うわよ？」

え、そりゃそーだよな。

いや、つける気ではいるけどなぜそこに突っ込むの？

不思議そうな顔をしていたのだろう。

桜が少し後ろを振り向いて、くすりと笑う。

「溝口さんが、無事に今日を終えられる為にはね？」

その言葉に桜の視線を辿ったけれど、別に桐原主任や圭介さん達がこっちを見ているだけで何の怖い事もない。

「なんで？」

視線を戻して首を傾げれば、桜に頭を撫でられ。

見上げてみれば、溝口先生が引き攣った笑いを浮かべてる。

「何なの？ どうしたの？」

重ねて問いかけたら溝口先生が口元に拳を当てて、くくつと噴出し

た。

「ゆいさん」

「はい？」

「実は漢字も知らず、苗字も知らないんだけど」

「へ？」

そういえば、まともに自己紹介してなかったかもしれない。アパートには、表札出してないし。

「上条 由比です。由比ヶ浜の由比」

その言葉に、少し珍しそうな顔をしてふうんと頷く。

「じゃ、由比。ね？ 呼び捨てでよい？」

楽しそうに問いかけてくるから。

「いいですよ？」

なんだって一番年上ですしね、この中で。

「じゃー、由比も俺の事、護って呼ぶ？」

え。

「いや、さっきのは冗談……」

さすがに、下の名前呼びは……

そう伝えようとしたら、溝口先生は桜に視線を移した。

「だから桜さんも、そう呼んで」

……あ、そういうことね。

戸惑っていた気持ちだが、途端綻ぶ。

ホント、溝口先生って凄いなあ。

桜は、どうするの？ という顔で、私を見ていて。

にやりと笑って、溝口先生を見上げた。

「じゃ、呼んじゃいますよ！ 護さんっ！」

「おうっ、呼んでしまえ。由比！」

そしてワクワクしながら桜を見れば、呆れたように笑みを浮かべた。

「あなた達、親戚？　つてくらい、意気投合ね。でも」

そう言つて、溝口先生……改め護さん、を見た。

「私、結構な性格してますけど。それでもいいのかしら。幻滅するかもしれませんよ？」

挑戦的に細められた目に、護さんはほんの少し驚いてでもすぐににやりと笑った。

「今の状況を楽しんでるなら、そーなんだろうなあ。でも、そっちの方が面白い」

あれ？　天使な桜に一目ぼれしたのでは……

桜は口端を上げて、そう、と一言呟いた。

「護さん、でいいのね？　私は桜。よろしく」

で、さっそくだけど……と、桜は言葉を続けた。

「頑張ってくれたのは分かるけど、結構芳しいわよ。体臭」

「え」

それまでにこやかに笑っていた護さんの顔が、固まった。

一瞬の後、弾かれたように顔を上げる。

「圭介！　シャワー借りるぞ！　せっかくの恋愛フラグがへし折れる！」

「……どうぞ」

呆気にとられたように頷いた圭介さんを横目に、護さんは一直線にアパートの階段へと走っていった。

「さすが体育教師、陸上部顧問。足、はやー」

感心したように呟く翔太の声に、なぜか桜達が足の速さだけじゃないところも納得とも言つように頷いていたのが面白かった。

20（前書き）

篠宮です、どもです^^

ご無沙汰しております。

落ち着いてまいりましたので、少しずつ更新していききたいと思ひます。

お待たせして、大変申し訳ございませんでした。

その後が始まった食事は、思った以上に楽しかった。

手巻き寿司ならぬセルフサンドウィッチもすぐになくなり、作り置いておいたおかずも出したけれど時間が立つにつれてお酒が回ってきた皆川さんがおつまみを作る！　と言い始め。

それを手伝うついでに少しだけ残ったおかずを味を変えてもう一度出してみたりと（貧乏レシビ）、なんていうか忙しくて楽しかった。

「由比さん、飲み物買ってこようか？」

桜と話していた私は、いきなり後ろから掛けられた声に動きを止めた。

不必要なほど、高鳴る、鼓動。

それを押さえ込むように、胸元で右手を握りこむ。

不思議そうに私を見る桜の視線を気にしないように、意識を切り替えてから後ろを向いた。

そこには、クーラーボックスの傍でしゃがんで、私を見上げる圭介さんの姿。

「えと、何？」

少し後ろに下がってから問い返すと、圭介さんは首を傾げつつ同じ言葉を繰り返してくれる。

「飲み物が少なくなってきたから、そのコンビニで買ってこようかって」

「飲み物？」

そついいながら、クーラーボックスを覗き込む。

言われてみれば、確かに炭酸系が減っている。

あと、ビール。

運転する桐原主任と護さん、普段からあまり飲まない圭介さんや未成年の翔太を抜かすから少なめに入れておいたけれど、足りなかったらしい。

つて、飲んでるの皆川さんと工藤主任だけだ。

それで、足りなくなるとか。

思わず笑いそうになった口元を引き締めて、頭を振る。

そうして、圭介さんに告げた。

「私、買いに行つて来るね」

持っていたお皿をテーブルに置こうとすると、立ち上がった圭介さんに止められた。

「いいよ、私が行つてくる。重いから」

ぼん、と肩に手を置かれて体が強張る。

普通にしなきゃ、普通に……！

脳内でそう自分に言い聞かせてみたけれど、体は簡単にいう事を聞いてはくれず。

おかしい態度に気がついたのか、肩に手を置いたまま圭介さんが怪訝そうな表情で私を見下ろした。

「由比さん？」

その声に、圭介さんの手からゆっくりと逃れる。

「私行く！ 甘いものは別腹なんですよ、圭介さん！」

では！ と意味もなく敬礼をすると、私はその場から駆け出した。後ろから私はプリンと声を上げる桜に、手を上げて答えながら。

でも、後ろは向けなかった。

圭介さんは、どんな表情をしているんだろう――

普通にしようとするればするほど、おかしい態度になっているのは自覚してる。

どう考えたって、圭介さんに対して挙動不審になってる。

もしかしたら、私が過敏すぎるだけなのかもしれないのに。

それでも、……それでも圭介さんから向けられる視線が、どうしても気になって仕方がなくて。

罪悪感でいっぱいになりながら駆けた先の、コンビニの自動ドアを慌ててくぐった。

往復十分も掛からないコンビニから帰ってきた私を迎えにきたのは護さんで、アパートから少し離れた場所でかち合った。

「ああ、コンビニまで間に合わなかった。重かっただろー」

「あれ？ 護さんも何か食べたい物が？」

「いや、桜さんに」女の子一人で行ってるの、可哀想だと思いませんか？」って、言葉なく強制された」

迎えに行くと、そう屈託無く笑って私の手から袋を取り上げる。

「あ、持ちますって」

慌てて手を伸ばせば、やんわりと押し返された。

「三十歳のおっさんにまかせなさい。まだまだ、若者には負けないさー」

にやりと笑うその仕草に、思わず笑い声を上げた私の頭をぽんぽんと宥めるように叩く。

「撫でやすいなあ。この頭」

そう言つて、なでなでと前後に掌を滑らせる。

「ちよつと、何するんですか護さん！」

その手を避けようと頭を振れば、護さんは笑いながらそれを退けた。
「いや、前に圭介がやってるの見たからさ」

撫でやすい……

その言葉に、何かが、ちくりと心に刺さった。

「撫でやすい、ですか」

ちくりと痛みを上げた胸を手で押さえながら、護さんを見上げる。

少し複雑そうな表情を浮かべた護さんは、そうだなあと前を向いた。

「撫でやすいだけが、理由じゃないと思うけど」

「え？」

言い方が気になつて、思わず問い返した。

それは、どういう？

ちらりと視線だけ私に向けた護さんはふつと口元を緩めると、がしがしと片手で私の髪をかき混ぜた。

「なあなあ、桜さんって彼氏いる？」

「は？　もしかして、それ聞く為に……」

迎えに来たんですか？　そう続けたら、満面の笑みで頷かれた。

「流石に、桜さんの前じゃ聞けないし！」

「つて、うーわー。三十男の恥らう姿とかつて、見ててこっちが恥ずかしい……」

どん引きしそうな護さんの姿に、顔が引き攣る。

けれど護さんは一向に気にする事も無く、照れたように笑った。

「迷惑掛けないし！　由比ちゃん、おーしーえーてー」

語尾に音符でもついていそうなその声に、思わず笑ってしまったの

は言うまでもない。

怒られない範囲で桜の情報を漏洩しながら帰ってきたら、にこにこ
と上機嫌な孝美さんがカンテラ型の電燈をいくつか持ってきてくれ
た。

お礼を言ったら隣に立つ護さんの筋肉を賛辞しながら、戻っていつ
たけど。

ちなみに、ここの大家さんである孝美さんのご主人は、護さんより
筋肉質な方。

いや、この紹介の仕方もうかと思うけど、あの体格で内勤って外
見詐欺だと思う。

設計事務所の設計士さんだけど、どちらかと言うと現場の方が似合
うんだよね。

そんな筋肉……じゃなかった、ご主人の趣味はアウトドア。

それ故にタープやカンテラを貸してもらえたり、ここにウッドテ
ブルセットを設置してくれたりするわけです。

いい人！

孝美さんのご主人！

……さつきから名前を呼ばないのは、すっかり忘れたからじゃない
からね！

「あ、ちょっとお皿片付けてくるね」

桜と一緒に蚊取り線香に火をつけていた私は、テーブルの上に使い

終えた食器が横に重ねられているのがに気がついて腰を上げた。

「手伝うわよ」

蚊遣りブタが可愛いと護さんと話していた桜が立ち上がってくれたけれど、それを片手で制して遠慮する。

「いいのー、今日は皆にご馳走する側なのですからね。桜もお客様。護さんと話してて」

ね？ と笑えば、桜よりもその後ろで座ったまま私を見ていた護さんの方が嬉しそうに親指を立てて喜んでいるのが楽しい。

それでも渋る桜を再度押し留めると、空いたトレイに食器を載せて私は自分の部屋へと向かった。

「上条」

部屋に上がる為にアパートの階段へと向かっていた私は、くんつ、とシャツの裾を引っ張られて足を止めた。

持っていたトレイを揺らさないように両手でバランスを保ちながら、顔だけ斜め後ろに向ける。

そこには、桐原主任の姿。

「桐原主任、どうしたんですか？」

わざわざ呼び止められた意味が分からずに、体ごと桐原主任と向かい合った。

街灯はあるけれど丁度光の届きにくい場所にいる所為か、薄暗い視界で桐原主任が少し戸惑うように首の後ろに手を当てて口を開く。

「上条、お前、どうした？」

聞かれた言葉に、思わず聞き返す。

「どうしたって……、何がです？」

それよりもトレイ重たいんですけど……とそれを持ち上げると、何も言わず奪い取られた。

「上につけていけばいいんだろ？」

そう言つと、さっさとアパートの階段へと歩き出してしまった。

「え、私持てますからいいですよ！？　ちょ、桐原主任？」

慌てて追いかけたけれど、桐原主任は私の言葉なんて聞く事もせず階段を上つて行く。

「桐原主任！　止まってくださいって！」

階段を上りきつた所で、なんとかトレイを持っていない左腕を両手で掴んだ。

やっと足を止めた桐原主任は、小さく息を吐き出すと顔をこちらに向けた。

「——まあ、ここでもいい。それで、何があつた？」

「だから、何も……っ」

そう言つて顔を上げれば、桐原主任の心配そうに私を見る視線とがち合う。

アパートの入り口にある街灯の明かりが辛うじて届いているだけのこの場所は、どうしても視界が暗い。

その中で、目を細めて心配そうに私を見下ろすその表情に、なぜか胸の辺りが締め付けられた。

思わず右手で胸を押さえながら、視線を逸らす。

ダメ、だ。

過敏になりすぎて、私。

分かつてるのに……

「由比さん？」

びくり、体が震えた。

突然かけられた声は、桐原主任の向こうから。

丁度開いたドアから顔を出したのは――

「圭介さん……」

ほんわかとした笑みを口元に浮かべた、圭介さんの姿。

いつもの優しい声音で、私を呼ぶ。

圭介さんはドアを開けたまま傍に来ると、桐原主任の手にあるトレイに気がついた。

「ああ、食器を持ってきてくれたんですね」

そう言つて、ひょいっとそれを手に取る。

「悪いな」

桐原主任が短く謝ると、いいえ、と答えて私に視線を向けてくる。いつもどおりのほんわか圭介さんなのに、目を見る事が出来ない。何か言わなくちゃと逡巡している間に、圭介さんは出てきたばかりの部屋に戻るべくドアに手を掛けた。

「由比さん、洗い物は私がやるから皆の所にいるといい。せっかくなんだから」

その言葉に、私は逸らしていた視線を上げた。

「あ、ううんっ。自分でやるから！ ごめんなさいっ」

慌てて桐原主任の横をすり抜けて、圭介さんの持つトレイに手をかける。

「ただでさえ迷惑かけてるのに、これ以上は」

そう言つて、ぎゅ、とトレイの両端を握り締めた。

揺れたトレイの上で、食器がかちゃかちゃと軽い音を上げる。

「由比さん？ 迷惑なんて、そんな事……」

圭介さんの戸惑ったような声に、鼓動が早まる。

それを押さえ込むように口をぎゅっと噤んでから、いつの間にか乾いた喉で唾を飲み込む。

「いいから、自分でやるからっ」

捲くし立てるように叫べば、圭介さんの手から力が抜けた。
その隙にトレイを引き寄せると、笑みを貼り付けて顔を上げる。

「ごめんなさい、大声出して。これ以上、妹は迷惑を掛けたくない
のですよ。お兄ちゃん」

誤魔化すように笑えば、圭介さんは困ったような笑みを浮かべて目
を細める。

「迷惑じゃないんだけどな。うん、まあ、それじゃお願いします」

「うんつ。桐原主任も、戻ってて下さいね！」

そう言い放つと、返事が来る前に自分の部屋へと駆け込んだ。

ばくばくと、心臓が早鐘を打つ。

なんとかサンダルを脱いで、台所に辿り着いた。

トレイをテーブルに置くと、力が抜けたように床にへたり込む。

圭介さん、普通だった。

朝みたいに、私を見ていない。

……なのに

ぎゅっ、と目を瞑る。

これ以上、嫌われたくない。

これ以上、負担に思われたくない。

傍に、いて欲しいのに。

温かいあの空間に、いたいのに。

圭介さんを目の前にすると、怖くて逃げ出したくなる。

あの笑顔の下で、もしかしたら私を邪魔に思っていたら――

もう、自分が、分かんない。

わたし、どうしたいの？

こんな、思わせぶりな行動を起こして。

自分が、恥ずかしい――

21 (後書き)

もう少し、由比のいじいじが続きます。
なんだかもー、すみませんm - - m

「で。なんかしたの？ 圭介さんてばー」

明らかに挙動不審な由比が部屋に入ったのを見届けてから、茶化すように桐原が口を開いた。

圭介は口調とは裏腹などこか探るような真剣な桐原の視線に、自ずと表情が硬くなる。

「いえ、何もしてないんですけれどね」

丁寧な口調だが、声はいつもより低い。

圭介はゆっくりとそう口にしながら、桐原を見据えた。

由比さんの感情を揺さぶった、男。

何を、したのだろう。

自分では、由比の感情を揺さぶることはできない。

温い居場所を作ってやれても、距離は近くも遠くもない。中途半端な立ち位置。

そんな事ばかり、桐原を見ると考えてしまう。

どれだけ由比が思考の中心にいるのか、今日は思い知らされた。

妹だと、そう最初は思っていたのに。

桐原はそんな圭介の態度を訝しげに見遣りながら、ゆっくりと歩を進めた。

それは大きな声で話せば、由比に聞こえてしまうからと言う配慮だろう。

大人気ない様子だった過去を思えば、いくらか改善したんだろうか。「あんた、今日はずっとおかしいぜ？」上条もだけど、遠野の態度

もすべからく変」

「変、て」

眉を顰めて圭介が繰り返すように呟けば、桐原は鼻で笑う。

「気付いてねーのかよ、その目付き」

「……目付き？」

圭介は訳が分からないとでも言う風に、眼鏡の奥の目をずっと細めた。

その仕草に、桐原は仕方が無いとでもいう様に溜息をつく。

「さつきから鸚鵡返しみたいだな。っーかさ、あんた上条に対して恋愛感情持つてなかったんじゃないの？ そう俺に、前に言ったよな？」

その言葉に、圭介の脳裏に過去の記憶が掠める。

「……過去は振り返らない主義です」

覚えはあるものの桐原相手に肯定するのも癪に障って、圭介はそう呟いた。

「へえ？ 否定しないわけか」

桐原はそんな事はどうでもいいんだけど、と言葉を続けた。

「俺に対する視線と、上条に向ける視線。他の奴らに対するものと違いすぎて、いい加減頭に来るんだけど」

「視線？」

桐原の指摘に、圭介はふと顔を上げた。

確かに先だつて見かけた仲の良い二人に、嫉妬を覚えたのは認める。そして、桐原に対して今日は牽制の意味も込めて、周りにばれない程度に見ていた事も。

けれど……

「由比さんには、何もしていない、が」

見ていたとは思う。

けれど、そこに桐原を見るような嫉妬心や、責めるような意味を持

たせてはいないが。

ただ朝から様子がおかしい気がして、気がつくと目を向けている事が多いのは否めない。

「つーかさ。本当に、なにもしてねーの？」

確認するような桐原の言葉に、圭介は端的に是と答える。

「していません」

「ホントかよ、圭介」

圭介に被せるように、少し高めの声が入り込んできた。

声がした圭介の背中を見ると、ドアとの隙間からひょっこりと翔太が顔を出す。

「どこから顔出してんだ、翔太」

桐原が呆れたように息を吐き出せば、圭介の背中を押し退けるようにして翔太が廊下に出てきた。

「仕方ないじゃん、ドアの前にでかいのが立ってんだから」

「口が悪い、翔太」

咎めるような口調の圭介を流して、翔太は廊下の柵に背をつけた。

「俺もさー。どう考えても、何かあったと思えるんだだけ。ねえ？」

桐原

「同意はするが、お前年上呼び捨てかよ。くそガキ」

「うるさいねえ、おっさん」

今はそこが問題じゃないんだと言い放って、圭介を見上げた。

「それとも、気に掛かることでもあるの？ 何か物言いたげな視線をずっと向けてるから、由比が気にしちゃってるよ？」

「え？」

思っても見ないことを言われて少なからず動揺した圭介は、思わず由比の部屋に行こうとして翔太に止められた。

「何しに行くの」

至極当たり前な質問に、微かな苛立ちを覚えながらも圭介は立ち止

まる。

「何って、誤解を解きに……」

「圭介」

翔太は言葉を遮るように、呆れ返った声を上げた。

「俺が行くから、今は止めときなよ」

「なぜ？」

怪訝そうに見下ろしてくる圭介の背中を叩いて、翔太は柵から背を離れた。

「圭介に怯えてるのに、いきなり本人行ったら驚くだろ？ この後、由比は皆の所に戻るんだからさ。後にしときなつて」

圭介は翔太に言われた事を反芻して、そして溜息をついた。

「分かった」

圭介がそう呟くと、翔太は笑みを浮かべてぼんぼんと背中を軽く叩いた。

「圭介でも、自分を抑えられない時ってあるんだな！。なんか、知らない一面を見た気がする」

軽い口調で圭介を茶化すと、翔太は由比の部屋へと入っていった。

由比の部屋へと入って行く翔太の後姿を見ていた圭介は、桐原の抑えた笑い声に引き戻された。

顔を向ければ、面白そうに笑いを堪えていて。

思わず眉間に皺を寄せれば、桐原は笑いをおさめて口端を上げる。

「ホント、あんたでもポーカークフェイス崩れんだな。ちゃんと謝れよ、上条、可哀想なくらいびくびくしてたから」

圭介はその言葉に、困惑したように視線を迷わせた。

「そんなに、ですか」

確かに、避けられているとは感じていたが、怯えさせていたとは……。

自己嫌悪に陥りそうになりながら、圭介は桐原を見つめた。

「別に、他の奴らはそこまで気がついちゃいないと思うけど。ほら。

俺は、上条が好きだから」

「……」

圭介の視線が、陰を含む。

その変化に桐原は我慢できないとばかりに、腹を抱えて笑い声を上げた。

「感情つて、そうそう抑えられるもんじゃねーんだな。振られたって、俺は上条がまだ好きだ。いけないか？　ってかさ、振られた俺にそこまで分かりやすい視線向けられても、反対に笑っちゃうんだけど」

甚も簡単に自分の気持ちを口にする桐原を、圭介はじつと見据える。

暗い、感情。

桐原に対する、嫉妬心。

噴出しそうな気持ちを、なんとか表情の下に押し込めて。

「人の気持ちは、自由ですから。私が何か言える立場では、ありません」

「教師的模範解答を、どーも。そうだな、自由だからな。でもさ、そう言えるなら、……なあ遠野」

桐原は笑みの消えた顔で、圭介を見据える。

「くだらない嫉妬で、上条、怯えさすなよ」

「いいたい事はそれだけだ、と続けて桐原は圭介に背を向けた。

「ああ、でも——」

そうしてアパートの階段を降りようとした時、思いついたように桐原が顔だけこちらに向ける。

「同じ年だったのにいやに達観してやがると思ってたから、今日は人間臭くてけっこう愉快だったけど。俺にしてみれば」

それ以上は何もいわず、階段を降りていった。

庭へと歩き去る足音が聞えなくなってから、圭介は部屋へと戻った。飯に由比が部屋から出てきた場合、廊下に自分がいるのは得策ではないと考えたからだ。

庭に面した和室に入り、ごろりと畳の上に寝転がる。

「怯えさせてた、か」

ぽつりと呟いて、溜息をついた。

今日は朝から、由比に避けられているという自覚があった。

話しかけても、傍にいても、どこか態度が素っ気無い。それが自分の所為だったとは、気がつかなかった。

ぎゅ、と瞼の上に手の甲を押し当てる。

怯えさせたかったわけじゃない。責めていたわけでもない。

ただ、由比を求める気持ち、桐原の存在で強くなっていた。

どうしたら、由比を自分のものにできるのか、そんな事を考えていた。

だからここ最近、つい向けてしまっていた恋情を、由比は感じ取って……怯えさせてしまった。

昨日は普通に笑ってくれていたのだから、なんらかのきっかけで、今朝氣がついてしまったんだろう。

翔太からの好意を、本当の意味ではないにせよ笑って受けとめる由比。

桐原からの好意を、受け入れられず泣いていた由比。

どちらに対しても、由比はちゃんと気持ちを相手に見せているのに。受け止めて、答えを返しているのに。

自分からの好意に対しては、怯えられる。

向けるその気持ちから、逃げられる。

「私は、恋愛対象外でいた方がいいんだろうか」

家族ごっこの範疇で。

由比の望む、優しい兄であつた方がいいんだろうか。

ふ、と。

泣いていた由比の姿が、脳裏を掠める。

微かに痛んだ胸を片手で押さえて、圭介は深く息を吐き出した。

自分を、見て欲しい。

自分だけを見て欲しい。

由比の望む兄の立場で、彼女が幸せになるのを見ていたくない。

圭介はもう一度息を吐き出して腹筋に力を入れると、ぐっ……と身体を起こした。

立てた膝に、肘について頬をのせる。

見つめた視線は、すぐ傍の壁……の向こう。由比の部屋。

その目は、今までに自分でも感じた事のないほどの熱を孕んでいて。

「おにいちゃん……、ね」

さっき、お兄ちゃん、と自分を呼んだその声が脳裏を掠める。

自嘲気味な笑みを浮かべて、何かを吹っ切るように息を深く吐き出した。

「……ごめん、由比さん」

由比がどんなに望もうと、それは叶えてあげられない。

「……好きだよ」

俺の腕の中で、大切にしたい――

23（後書き）

桐原を牽制しようとして、反対に煽られた圭介の図（笑
ていうか、書くのが恥ずかしかった><

圭介の視線を感じながら翔太が由比の玄関に入ると、廊下の先にある閉まっているドアの向こうから洗い物をしている音が聞こえてきた。

……あっちもあっちだけど、こっちもこっちだよなー

はつきり言って由比が好きな自分にとっては、圭介のフォローをするのもどうかという疑問もある。

あえて言うなら、圭介が嫌われてしまえば自分の方が一歩抜きん出るわけで。

そんな事を考えないでもなかったが、翔太はまるで自分が年上にでもなったかのように二人のギクシャクとした雰囲気を用意を元に戻そうとしていた。

なんていうか、少し、むず痒い気持ちでもあった。

年上で大人で落ち着いた保護者の圭介が、自分から見ても感情を抑えきれないほど惑わされているのを初めて見た。

お荷物になっていると自覚していただけに、こうやって由比を宥める為に自分を頼ってくれたのが、圭介に近付きたいとずっと思っていた翔太にとって、由比が好きという感情に並び立つほど嬉しかったのだ。

変だな、俺。

そんな自分にも、つい笑いが漏れる。

だからって、由比を諦めるつもりはないけどね。

翔太はともすれば零れそうになる溜息と苦笑を喉の奥で飲み込むと、わざと足音を立てて短い廊下を歩き出した。

その瞬間がちやりとガラス同士がぶつかる音がして、由比が自分の存在に気がついた事を確認する。

いつもなら玄関のドアが開いた時点で誰か来たことを認識するのに、ここまで大きな音が聞こえないと気付けなかったらしい。

それだけ、由比の意識が何かに囚われているんだという事を実感した。

翔太は仕方ないなどでも言うように押さえていた溜息を零して、口端をあげた。

ドアを開ければ、見慣れた由比の部屋。

シンクで洗い物をしていただろう由比が、強張った表情を浮かべてこちらに顔を向けていた。

そして翔太を見ると、ふ、と緊張を解く。

「翔太、どうしたの？」

ゆるゆると戻る笑みに、翔太はことさら明るい声を上げて由比の傍へと歩み寄った。

「手伝いに来たんだよ、俺って偉いっ」

そう言うと、食器を拭く布巾を手取る。

由比の手元を見ればまだ泡のついた食器が積まれていて、水切り籠には洗い終えただらうものが重ねられていた。

「え、いいよ翔太。勉強して」

泡がついたままの手では翔太を制する事が出来ずに、由比が困ったように頭を振った。

それは、今は一人で居たいとそう伝えてくる言葉にも聞える。

翔太はそれに気がついたけれどなんでもないように流し、水切り籠からお皿を手にとった。

「息抜きさせてよー、勉強ばっかで頭がパンクする。やっぱアレだね、家に先生がいるってのも結構考えもんだね」
休むにも、精神的になんか休んだ気がしない。

そう続ければ、由比の目元が緩む。

「翔太ってば……」

そう呟く声は、さっきまでと違って少し柔らかい。

それにほっとしながら、次々と食器をふきあげていく。

ちらりと横目で見れば由比の表情も最初よりはほぐれていて、頃合いかな、と翔太は口を開いた。

「圭介、謝ってたよ」

「……っ」

がちゃん、と、派手な音を立てて由比の手からカトラリーがシンクに落ちた。

「おっと、お皿じゃなくて良かった」

ステンレスのフォークとスプーンだったから、音は大きかったけれど壊れたりとかはしていないはず。

ってまあ、そこを狙ったんだけどね。

「え、えと。何？」

当の由比は動揺しているらしく、そのままの形で固まっている。

翔太は布巾を置くと、手を伸ばして水道の蛇口を捻って水を止めた。キュ、と言う音の後、あたりがしんとする。

表の声が遠くに聞こえるのは、この暑いのに窓を閉め切っているからだと言わねえから気がついた。

それほど、外界から遮断された空間で一人になりたかったのかと、今更ながら圭介の影響の大きさに気づかされる。それを少し、苦く感じながら。

「圭介の態度、怖かったんだろ？ 由比ってば、びくびくしてたよ。今日はずっと」

そう言えば、びくりと肩を震わせてゆっくりと顔を上げた。

「私、態度に出てた……？」

蚊の鳴くような声で翔太に問いかけるその表情は、怯えた小動物のようで。

翔太はタオルで手を拭くと、徐に由比の体に両腕を回して抱き寄せた。

「翔太っ？」

圭介ほどない身長でも、小さな由比の体はすっぽりと自分の腕の中に包み込める。

咄嗟に離れようとした由比は、泡だらけの手に翔太を押し退ける事も出来ず、ぎゅっと両手を握り締めた。

そうして体を強張らせる由比の背中を、翔太は宥めるように軽く殊の外優しく叩く。

「気を張りすぎたんだよ、圭介。だから、許してやって」

「……？ 気を張りすぎた？」

思っても見ない言葉だったんだろう。

由比は怪訝そうな声を上げて、眉を顰める。

「桐原がさ、今日来てるでしょ？ 前、由比が痩せちゃう原因になった、桐原」

「え、桐原主任？」

そう、と呟くと由比は訳が分からないと首を傾げる。

「由比は何も言っていなかったけど、見ていれば分かるよ。由比が痩せた頃、よく目に付いたの桐原だもんね」

駅とかで、よく見てたし。

一度桐原から逃げてきた由比と、駅から少し離れた隧道で待ち合わせした事もあった。

「……それでって、こと？」

「そう。もしかた桐原が由比を諦めてなかったとしたら、この後何もない様に。気合入れすぎたんだと思うよ」

そう由比に告げながら、翔太はあながち嘘じゃないしと内心呟いた。

「だから、許してやってよ。俺達の、おにーちゃんをさ」

翔太は悲しそうに自分を見る由比に強請るように、きらきらしい満面の笑みを浮かべた。

24（後書き）

フォローしているようで「おにーちゃん」強調
ちよつと腹黒光臨中翔太（笑

この位なら、許せる範囲だろ。

翔太は由比を宥めながら、心中では圭介に対してそんなことを考えていた。

ここ最近、圭介の態度がおかしい事に翔太は薄々感づいてはいた。由比に好意を持っていると言っておきながら、全く変わらない態度でずっと接していた圭介。

そう……優しい無害なお兄さんキャラを由比の前では見せていたはずなのに、その視線に入り込んできた焦がれた色。

ほんわり柔らかかった視線は、抑えきれないように感情の込められた色をたまに見せる。

それに由比が気付いていないみたいだったから、圭介の変化のきっかけがよくわからないままだったけれど。

だからさつき桐原が圭介を問い詰めたのは、ある意味翔太にとって助けでもあったのだ。

まあ今日桐原を見る圭介の視線が、理由を雄弁に語っていたけれどね。

そこまで考えて、翔太は内心くすりと笑う。

要するに、今まで圭介は翔太と同じ土俵に上がって無かったって事だ。

由比を好きだと言いながら、何をするでもなく兄という立場で接して来ていた。

由比がそれを望んだから行動に移せなかったっていえば、そーかもしれないけどさ。

それって、俺を馬鹿にしてねえ？

俺も由比が好きなのを知っていても、動じなかった癖に。
桐原に対しては、あんなになるとかさ。

俺の存在は、焦るものでもないってか。
いいぜー、そういう態度なら俺だって意地悪しちゃうからなー。

「お兄ちゃん……」

ぽつりと呟いて目を伏せる由比に、かぶせるように口を開く。

「俺だって守ってもらってる。由比だけじゃないよ？ 圭介は、俺達のお兄ちゃんだろ？」

前進なんかさせねえ。

その立場から、あがけよな。

やっと、今、同じスタートラインなんだから。

かといって、由比がこんな状態なのは嫌だから、憶測ではあるけれどほとんど正解だろう理由を伝えて、安心してもらおうと考えた。

由比は翔太の言葉に唇を噛み締めると、そっか……と呟く。

「迷惑、かけちゃったんだね。なんの考えもなしに、主任達を呼んじゃって」

由比らしくもない後ろ向きな受け止め方に、驚いて身体を離れた。

「え、そうじゃないよ」

肩に手を置いて、由比と向き合う。

「由比の会社の人達と会えたの楽しいし、俺達の知らない会社での事を聞いたのも嬉しかったよ？ 少なくとも俺達は、今日食事が

できて楽しかった」

「……そう」

全く信じていない由比の態度に、翔太は困ったように首を傾げる。

「いや、まじで。溝口センセにしてみりや、最高だったんじゃないの？」

その言葉に強張ったままだった由比の表情が、微かに緩んだ。

「桜に会えて？」

「そうそう。なんか今日は、溝口の為にあった食事会の様な感じがしてきたよ。俺達も楽しかったけど、溝口のはしゃぎようは学校では見ないものだった」

心底しみじみと伝えれば、由比がくすりと笑う。

「私も護さんと話せて、凄く楽しかった。もちろん翔太と圭介さん、それに皆と遊べて嬉しかったし。ただ……」

「ただ？」

言いにくそうにしている由比の言葉を、促すように言葉尻を繰り返す。

由比はもう一度、ただ……と言い直すと小さく息を吐き出した。

「私、圭介さんにも翔太にも甘えすぎだって……反省したの」

翔太は由比の顔を覗きこむように、状態を屈めた。

「何言ってるのさ、由比。俺的、もっと甘えて欲しいんだけど」

圭介はつかじやなくて、俺も頼りにして欲しい……そう言いそうになっただけとか喉元で止める。

今は、こっちから圭介の名前を出さない方が、得策みたいだと翔太は判断した。

それ程、由比の雰囲気は固かった。

圭介に見られるだけで、ここまで深く考える由比の姿に微かな焦燥

を感じる。

圭介にとって俺が焦る対象じゃないのと一緒に、由比にとっても深く悩む程影響のある奴じゃない。

そんな事、気付きたくなかったなと自嘲するように内心呟いて、意識を切り替えた。

「ずっと言ってるけど、俺、由比の事好きだからさ。頼られると嬉しいし、甘えられれば頬が緩む」

殊更おどけた様に笑えば、由比は悲しそうな表情のまま目を細めた。

「……二人に余計な心配をかけちゃって。本当に、ごめん」

翔太はその言葉を聞いて、自分の失敗を悟った。

圭介の視線の意味、違う理由にすればよかったと。

かといって、他に誤魔化す理由とか思いつかないから仕方ないけど。

「そんなこと言ったら、俺達どんだけ由比に甘えてんだよ。食事関係、全部由比まかせなんだよ？ 隣人の域、越えてるって」

「それは、私が押し切ったから……」

「いや、喜んで押し切られるし」

そう断言して、由比と目を合わせる。

「家族だって、圭介も言ってたろ？」

「……それは、でも」

「家族が、家族のことを心配するの、当たり前だろ？ 由比は、俺達のこと心配してくんねーの？」

重ねるように言葉を続ければ、由比は小さく頭を振った。

「でも、重荷に感じて欲しくない」

「重荷じゃないし。ていうか、由比には俺達って重荷なのか？」

「違うっ」

小さく叫ぶと、由比は顔を伏せてしまった。

翔太の視線から逃れるように目を伏せた由比は、唇を噛み締めた。

翔太の言いたい事は分かる。

自分を大切にしてくれる気持ちが、本当に伝わってる。

どうしてこんなに思いを向けてくれるのか分からないけれど。

ただの隣人なのに。

けれど脳裏を掠めるのは、少し前の翔太。

学祭で私がトラブルに巻き込まれた時、様子がおかしかった。

家に帰ってきてからも、私にいなくならないでと、そう静かに訴えていた。

翔太に何があったのか、分からない。

でも、きつと心に傷が残る事が過去にあったのだけは分かる。

朝からずっと昂ぶっていた感情が、すうっと落ち着いて行くのを由比は感じた。

こうやって気持ちを訴えかけられて、誰が嬉しいだろう。

甘えてばかりじゃダメだってそう言いながら、まるで変わってない。

私は、……弱い。

ぎゅ、と目を瞑る。

今、何が一番大切なのか。

それは、圭介さんと翔太が嫌な思いをしないこと。

そう考えるほど、二人は自分の中で大きな存在になってしまった。ずっと、一人で大丈夫だったのに。

傍にいてくれて心配してくれて、大切にしてくれる。その温もりを手放したくなくて、余計、二人に迷惑をかけてしまった。

傍にいてくれる事を、当たり前のように享受してしまった。これから先、ずっと一緒にいられる訳、ないのに……。

そこまで考えて、気がついた。
いや、気がついたというより……思い出した。

ああ、そうだ。

私……

私、一人で生きてきたんだ――

「由比？」

いきなり黙ってしまった由比の肩に手を置くと、翔太が伺うように声を掛けてくる。

その声音に、学祭の夜の翔太が重なった。

縋るような、求めるような。

いなくならない存在を、求める声。

――いくら望まれても、私がそれになれるわけないのに。

由比――

自分の名を、心の中で呟く。

由比。現実――

こくりと、唾を飲み込む。

――現実、どっち……？

口端が、上がっていくのが分かる。
目元が、緩んでいくのが分かる。

顔を上げれば、心配そうな翔太が私を見下ろしていて。
ごめんね、という意味でにこりと笑う。

「ありがとう、翔太」

こんな私を、好きだと言ってくれて。
こんな私に、いなくならないでって言ってくれて。

いきなり笑いかけられた翔太は、啞然とした表情のまま由比を見下ろしている。

その姿に、由比はあたりまえだね、と心うち呟いて一歩後ろに下

がった。

肩に乗っていた翔太の手が、支えを無くしたように下りる。

由比はそれを見ないように、くるりと背を向けた。

水道の蛇口を捻って泡の消えかかった手を洗い流すと、タオルでそれを拭う。

「圭介さんに謝らなきゃね。まさか、そんな意味だとは思わなくて」

「由比？」

そう言って歩き出せば慌てたように腕を掴まれて、由比の足が止まった。

振り返れば、焦ったように自分を見る翔太の姿。

「ごめんね、翔太。心配かけちゃったね」

「ちよつと待って、由比……」

口を開こうとする翔太の言葉を遮るように、笑みを浮かべた。

「私、考えすぎちゃうの悪い癖なんだよね。ダメだなあって思ってるんだけど、」

掴まれていない手でぽんぽんと翔太の腕を軽く叩くと、するりとその手が外れる。

「本当に、分かってくれた？ 俺達にとって、由比は……」

「家族って言ってくれて、ありがとね。心配してもらえて、本当に嬉しい」

言葉尻を受けるようにそう続ければ、少し安心したように翔太が息を吐く。

「本当に？」

それでも疑いが全く晴れたわけじゃないようで、伺うように問われた言葉に深く頷く。

その態度に力が抜けたように、ふにやりと翔太が笑った。

「よかったあ。由比が元気になってくれて」

それは、母親や親しい人に向ける安堵の笑みで。

少し心に引つ掛かったけれど、由比は表情に出すこともせずもう一度謝りの言葉を口にした。

「心配かけちゃってごめんね？ さてー、圭介さんに謝ったら食べに行くぞー！」

食器を洗いに来て、二十分くらい。

外にいる皆をほったらかしにしている手前、ちゃちゃっと謝って戻らないと。

「なんかほつとしたら、お腹すいてきちゃった」

部屋のドアを出ながらお腹に手を当てれば、くすりと笑う翔太の声。「ずっと気にして、よく食べれなかったんだろ？ まだ何かしらあるだろうから、いっぱい食べよ。なければ、溝口センセをコンビ二に派遣」

「何それ。護さん何者？」

「都築さんに言ってもらえば、なんにでも変身？」

疑問系で断定する翔太に、そうだねと笑いかける。

外に出れば、楽しそうな声が響いてきて。

神野のおぼちゃんの声がするって事は、アパートの人も参加してるみたい。

そんな話を話しながら、圭介さんがいるドアを開ける。

玄関に入れば、中から物音。

翔太を見れば、一緒には来るつもりはないらしく、目線で促された。それに頷いて玄関をあがれば、数歩で辿り着く台所のドア。

ゆっくりと中に足を踏み入れると、奥の和室、畳の上に上半身を起こしてこちらを見る圭介さんの姿を見つけた。

驚いたように目を見開いていて。

「圭介さん」

呼びかければ、やっと意識が現実に戻ったかのように飛び起きた。

「由比さん！ その、今日は……」

そう言い掛ける圭介さんの言葉を遮るように、由比は口を開いた。

「今日はごめんなさい。翔太に聞いたの。桐原主任の事で、私を気に掛けてくれていたって。本当に、ありがとう」

謝罪と、そしてお礼を。

圭介は少し息を吞んで口を噤むと、頭を振った。

「私こそ、ごめん。許してくれて、ありがとう」

ほんわりと笑みを浮かべてくれる圭介の姿に、ちくりと胸が痛んだ。

“ お兄ちゃん ”

翔太が言った、言葉。

自分が言った、言葉。

偽の関係だとしても、家族として大切にしてくれる存在。

「ありがとう、お兄ちゃん」

由比の視界が、唐突に霞がかった。

圭介が、視界から消える。

感情を、押し込める。

消せないのなら、浮かび上がる事のないほど深い場所へ沈めて。

私は、今だけここにいさせてもらっている、ただの隣人。
今が楽しく過ごせれば、それだけでいい。
温かいその場所は、今だけなんだから。

求めすぎたその手を、下げなければ。
全ての感情を、曖昧に。

なんとか笑顔だけは保ちながら、由比は自分の意識が急速に冷えていくのを感じていた。
お礼を再び口にすれば少し柔らかくなった圭介さんの声音に、ふつと体から力が抜ける。

——現実とは、どっち？

そして重ねるようにさっき自分に問いかけたその答えを、噛み締めるように心の中で呟いた。

——ここは、現実じゃない……

26（後書き）

ストック終了ですm - - m

今週は更新が難しいと思います。

お待たせいたします事、申し訳ございません。

篠宮 楓

仲直り？　をした私達は、翔太と三人で庭へと向かった。

まあ、そこまでおかしくない時間だと思う。たぶん。

お皿洗いに、二十分。大丈夫、ありでしょ。

途中、神野のおばちゃんの声が聞こえてきて、思わず苦笑する。

「アパートの人達も、楽しそうだね」

「確かに」

くすりと笑う圭介さんは、いつもの表情。

あの、気になる視線は今は無い。

私を気にしてくれていたのに、嫌われているとか思い込んで悪いこととしたな。

でも、そのおかげで思い出さなきゃいけないことに、気づけたけど。

内心、安堵しつつ、そしてこれからの事を考える。

幸せだけだ。

精一杯、幸せをもらって、自分も返そうと思うけれど。

いつでも、いなくなる覚悟をしなきゃ。

それは、圭介さんと翔太が、でも。
私が、でも。

ねえ、圭介さん。
だから言ったでしょ？

頼ることを覚えると、弱くなっちゃうんだよって。

前、桐原主任の事で悩んでいた私に、言ってくれた言葉。

—— 一人で我慢すること、ないからね ——

それに、甘えたのが多分始まり。

—— 考える事を放棄した時、人は弱くなる。それは、現実から逃げているだけだから ——

脳裏に浮かぶ、心配そうに私を見ていた圭介さんの表情。
心に入り込む、穏やかで優しい言葉。
私の事を、心配してくれた圭介さん。

目を伏せて、ごめんなさい、と心の中で呟く。

私は、いいの。
現実から、逃げているだけだから。

「由比」

思考に沈んでいた私は、名前を呼ばれて顔を上げた。
視線の先には、歩いてくる桜と護さん。

手のひらを向けて私を呼ぶから、圭介さんと翔太から離れて駆け寄った。

近づけば、その表情は少し安堵したようなもので。

首を傾げると、桜がふんわりと笑った。

「元気になったのね、よかったわ」

こそつと私の耳元で囁いた桜の言葉に、思わず彼女を見つめた。
ぽんぽん、と頭を撫でるその温かい掌に、桜の隣にいる護さんを見上げる。

「それでこそ、学祭で教室忍び込んでた由比だな」

「ちょ、護さん！」

変なこと、言わないでよ！

このいい雰囲気、壊さないで欲しいっ。

案の定、柔らかな表情だった桜が、胡乱気に目を細めた。

「由比、そんな趣味があったの？」

「違う！　ないから！」

ほら、誤解された！

「護さん、訂正お願いします！ 別に、忍び込んでないよ私！」

どちらかっていうと、閉じ込められたんだってば！

それいうと、違う問題になりそうだから言わないけどねっ。

じろりと睨み上げれば、護さんが私の頭に乘せていた手を浮かせて、じりつと後ずさった。

「そうですよ、護さん」

ひつくーい声に、びくりと顔だけ振り向ける。

そこには口元だけ微かに上げた圭介さんと、翔太の姿。

「ちゃんと訂正してくださいね、護さん。由比さんは忍び込んだんじゃないんですから。わかっていますか？ 護さん」

……さんづけの名前呼びで、ここまで威圧感出せるのって相当だと思う。

だって、桜でさえ呆気にとられたように見上げてるもの。

思わず体を引いてしまった私に、罪はないと思う。

圭介さんはそんな私に少しだけ視線を向けたけれど、すぐに目の前で逃げ出しそうになっている護さんに戻した。

「謝ってください、護さん。軽はずみな言動は、教師のすることではありませんよ、護さん」

「いつ、いちいち語尾に名前足すなよ！ 敬語もやめたんじゃないのか！」

しつぽを足の間にしまつて怯えながらも吠えようとしている、ドーベルマンがいます！

あ、護さんそこまできりつとした人じゃないや、ドーベルマンごめんなさい。

「やはり、護さんには敬語が一番効果的だと思いますので」
「だねー」

圭介さんの後を次いで会話に入ってきた翔太が、のほほんとした表情で護さんを見上げる。

護さんは逃げ腰になっていたけれど、相手が翔太だから少し表情を和らげた。

「じゃあじゃあ、忍び込んだんじゃないなら、なんで準備室から出てくるんだよ」

げ。

今更、それ問題になるの？

だったらまだ、忍び込んだって事にして置いた方がいい気がするよ！すると、圭介さんが私を見てふっと目を細めた。

「私が、閉じ込めたんですよ」

27（後書き）

こっさり更新。

大変お待たせいたしました。

前よりは更新速度は落ちますが、再開させて頂きます。
どうぞよろしくお願いいたします。

いきなり飛び出した言葉に、その場にいた私達は呆けたように圭介さんを見つめた。

見上げた先の圭介さんは、ほんわりと笑ったまま。

閉じ込めた……？

やっと、圭介さんの言葉がお脳に到達して、目をまん丸く見開いた。

そんな事実、無いし！

やっと訂正するっていう事に気が付いて口を開けたら、護さんが先を越された。

「だからあの時、圭介ってばYシャツ脱いでたわけ？ おかしいと思っただ、中から出て来た由比が圭介のシャツ持ってたの」

うあああつ！ しかも、余計なことばらされた！

「つーか、俺も一枚噛んでんだけどねー。圭介と、俺が、由比を閉じ込めたんだよ。勝手に俺を排除しないで」

へらりと、翔太が笑いながら嘘を重ねて。

「え、二股……！」

それに護さんが、思いつきり喰いついて。

「なんだそれ」

話を聞きつけたのか微妙な雰囲気気が付いたのか、いつの間にか桐原主任が傍に来ていた。

顔を上げれば、桐原主任の向こうで興味津々といった表情を浮かべて工藤主任と皆川さんがこっちを見ている。

なんなの、なんなの、この状況！！

救いなのは、アパートの人達がこっちに興味を持っていないところだけだ。

「あわわ、ちょっ圭介さんっ」

パニックに陥って、隣にいる圭介さんを見上げれば。

につこりと笑みを浮かべる圭介さんが、大丈夫とでもいうように私の頭を撫でた。

「翔太が由比さんに、学祭の余興で制服着せたんですけどね。あまりにも可愛いくて他の男に見せたくなくなりまして。着替えさせるために、あの準備室を使ったという訳です」

「は?!」

事実をばらされなかったのはありがたいけど、その理由も恥ずかしすぎるんですが!!

訂正！ 訂正を願います!!

「えええっ！ まさか圭介さんも、上条さん狙い!？」

「みつ、皆川さん!!」

慌てて口を押えれば、後ろでさも当たり前のように肯定する声。

「ええ、そうです」

「あつ、圭介抜け駆け！ 俺もっ！ 俺もだからね」

圭介さんに被せる様に、翔太まで言い出して。

あわあわと一人でパニックに陥っていたら。

くすり、と頭の上で微かに笑う声が聞こえてきて。
ぼん、と、頭に大きな掌が下りてきた。

「可愛い」

満面の笑顔で圭介さんにそう言われて、ぼふっと顔面真っ赤になった。

それを見て、圭介さんが目を細めて口角を上げる。

見たことのない「ニヤリ」という笑みに、頭に血が上って思わず叫んだ。

「人で遊ぶなあっ！」

皆して、人をおちよくって！

思いつきり叫び倒すと、さすがにこっちの騒ぎに気が付いたアパートの住人に向かって私は走りだした。

「どうしたの、由比ちゃん」

神野のおばちゃんが、走りこんでくる私を目を丸くして見つめていて。

おばちゃんに縋り付きながら、後ろでこっちを見ている圭介さん達を指でさした。

「皆が苛める！」

「苛めるって」

ぼかんとしていたおばちゃんが、吹き出すように笑い出した。

「由比ちゃんは、苛められキャラだからねえ」

……え！

「なにそれ、何そのカミングアウト！」

神野のおばちゃんに噛みつけば、周りで話を聞いていた孝美さんやほかの住人も笑い出す。

「昔からそうじゃない、ねえ？」

「今更だよ、由比ちゃん」

うんうん、と頷く様に納得する皆をじろりと睨みつけて、傍にあった割り箸を手を取った。

「そうやって、皆して言っていればいいよ！ 食べてやるー、お腹すいてるんだからー！」

「よし、食べるー！」

「由比ちゃん。これねー今作ってきたのよー」

おばちゃんの勧めに、私はテーブルに手を伸ばした。

これでいい。

これでいいんだよ、私。

楽しければ楽しいほど、幸せであれば幸せであるほど、離れる時が苦しいけれど。

それでも。

今、享受できる幸せを、受け取って。

私は、一人で生きていくんだから。

由比が脱兎の如く逃げ出した後、その場に残った面々は圭介と桐原の間を交互に視線を動かしていた。

ほんわりと笑んだ圭介と、不機嫌そうに眉を顰める桐原。

「お前さ。くだらねえ嫉妬するなどは言ったが、何いきなりぶつちやけてんだよ」

「抑え込むから、くだらないことをしてしまうと気が付いたものですから。抑えるのをやめようと思ひまして」

につこりと笑う圭介に苦虫を噛み潰したように桐原は顔を顰めると、ふいつと踵を返して由比達が食事をしている方へと歩き去った。

それを満足げに見遣る圭介を、がつくりと頂垂れた皆川が大きく溜息をつく。

「なんかキラキラほんわり兄弟とか思ったけど、本音の辺りは黒そうだわー。上条さんて、桐原といい、黒い人を寄せ付けるのかしらねえ。Sっ気全開」

その言葉に、圭介は何も言わずに笑みを浮かべる。

「上条さん、鈍いからねー。って、しかし上条さんばつかモテて、ずるい！ ねえ工藤！ 私には魅力なし？！ 私に、一人くらいくれてもいいと思わない！！？」

途中から工藤に詰め寄って、その胸倉をがくがくと揺さぶりだした。

「うえっ、みつ皆川よせ！ 酒がまわる！ 気持ち悪いっ！」

そういえばと皆川を見れば、ほんのりどころじゃなく顔が赤い。言うまでもなく、酔っ払いだ。

「あーたーしーのー、あーいーてーはー、どーこーでーすーかーあ
あっ！」

「俺に聞くなよーっ」

情けない声を上げた工藤は、自分の方が泣きたいと思ったに違いない。

皆川への片思い歴、まだまだ更新だなと内心頂垂れていた。

皆川は思いのたけを叫んで気が済んだのかぽいつと工藤から手を放すと、くると圭介と翔太を見上げた。

「上条さん、泣かせないでよね」

桐原の事で迷惑をかけてしまった事をずっと忘れていない皆川は、二人を交互に見ながらそう念を押す。

圭介は翔太と目を合わせて、すぐに皆川へと視線を戻した。

「もちろん」

それは、二人同時の返答で。

思わず苦笑したのは、皆川だけじゃなく桜や溝口、工藤も同じ事。

「いやーねー。なんだか、今日の食事会って上条さんがどれだけ大切にされてるか見にきたみたい」

ねえ、工藤？ と隣に立つ男を見上げれば、そうだなと返される。

「上条さんが、幸せならいいんじゃないの？」

「そうねー。可愛い恋をしてみらいたいわよ。ホント」

くすくすと笑いながら、桐原の後を追って由比のいる方へと歩いて行った。

残された圭介達は、アパートの住人と部外者達の食事会を見遣る。楽しそうに笑う由比に、今日ずっと貼り付いていた怯えのようなものは見えない。

元気がないなと少し心配していた溝口は、大きく息を吐いて笑った。

「由比は、皆に可愛がってもらってんだなあ」

しみじみとそう言うと、桜は目元を和らげて微笑む。

「だって、由比は可愛いもの。私から見たら、本当に純粋で可愛いわ。私の友達には、勿体ないくらい」

「桜さんは、素敵です！」

真剣に言い返す溝口にきよとした桜は、ぷつ、と吹き出した。

「なんだか凄いわ、ちよつともう……っ」

桜の笑いを困ったようにそれでも嬉しそうに見ていた溝口は、あのと口を開いた。

「また、会ってもらえませんか？」

「ちよつとー、生徒の前で口説きモード入らないでよ」

翔太が揶揄するように突っ込めば、照れた様にじろりと睨みつける溝口。

桜は笑いを何とか抑え込んで、小さく頷いた。

「でも、友達ですよ？」

「もちろんです！」

嬉しそうに返答する溝口を見遣って、桜はふわりと笑った。
それはきつと、由比がいたら驚くような事。
気を許した人にしか見せない、素の笑みだったから。

「じゃ、戻りましょうか」

そう告げた桜に、頷いて溝口が歩き出す。

「私は、もうしばらくここに」

視線を向けられた圭介は、柔和な笑みを浮かべてやんわりと断った。

そう？　とでもいうように首を傾げて同じように動かない翔太にも
視線を向けつつ、桜は溝口と皆の所へと戻っていった。

29 (後書き)

次話で5章が終了です。

二人の後ろ姿を見送って、圭介は両腕を前で組んで隣に立つ翔太を見た。

「由比さんのことだけど」

「ん？」

「きつと彼女には、何か過去にあったんだと思う」

突然話し出したその内容に、翔太は思わず圭介を見上げた。

その視線を受けて、圭介は由比を見つめる。

「お前も、そう思う事。ない？」

翔太は、圭介の視線を辿るように由比を見ると、小さく頷いた。

翔太の脳裏を掠めるのは、突然変わった由比の態度。

圭介の態度を気にして怯えていた由比が、いきなり普通に戻った。

確かに家族だからと心配するのは当たり前だと宥めてはいたけれど、それでも拭えない違和感がそこにはあった。

「ある」

周囲と楽しそうに話す由比の顔には、そんな翳りは見られないけれど。

一緒にいると、気づくことがある。

もしかしたら、圭介と翔太の抱えるものも、由比に気づかれているのかもしれない。

圭介は小さく頷いて、その視線に強い意志を込めた。

「それ含めて、私は由比さんを大切にしたい」

圭介の言葉に、一瞬口を噤んだ翔太が口端を上げた。

「奇遇。俺も」

にいつと笑って圭介の背中を軽く叩くと、翔太は由比達のもとへと歩いて行った。

圭介は、立ったままそれを見送る。

由比に声をかけた翔太が、彼女が持っていたパンをその手ごとを掴んで口に入れているのが見えた。
思いつきり、由比に怒鳴られている。

それを笑いながら見遣ると、圭介は目を伏せた。

圭介にも、翔太にも、抱えている過去がある。

そして、きっとそれは、由比も同じ。

彼女は、乗り越えていない過去を、きっと抱えてる。

そして、それは私達も同じ。

由比が周囲の感情に対してあまりにも鈍いのも、以前聞いた、一人で生きていけなくなってしまうといったのも、何か過去に要因があるんだろう。

それを。それごと、由比を受け止めたい。

由比に、自分を受け止めてほしい。

今まで持っていたような、優しい感情では追いつかない。

穏やかな日々を望む、決して穏やかではない感情。

自分に家族を求める彼女にとって、望まない気持ちなのかもしれないと気付いているけど。

でも、ごめん。

由比さん、ごめん。

もう、決めた。

由比さんを、妹としてもう見ない。
好きだから、その感情のまま動く。

これから先、ずっと未来まで由比さんに傍にいて欲しいから――

30（後書き）

5章終了です。

手を伸ばして、君が求めたものは。

現実には幸せを求めた、由比。

自分だけの人、自分だけの居場所を求めた、翔太。

由比が求める家族になれたらと、穏やかな感情を求めた圭介。

三人とも、それぞれ違う形で感情を育ててます。

幸せを求めようとして、自分の居場所を思い出しその手を下した由比。

自分だけの居場所を求めようとして、何とか自分に振り向かせようとあかく翔太。

由比の求めるものとは違う、穏やかではない感情に気づいてしまった圭介。

次章、伏線を頑張って回収していく予定です^^
お読みくださり、ありがとうございました。

「よし、と」

水切り籠に入れておいた食器を棚に戻して、その扉を閉めた。

閉まってあった食器も使ったから、一時的に増えている。

夜にでももう一度箱にしまい直さないとないながら、身に着けていたエプロンを外した。

昨日の食事は、本当に楽しかった。

最初は圭介さんの視線にびくびくしてしまっただけで、実はそれが勘違いで私を心配してくれているものだったと知って嬉しくて……そして自分の立ち位置を思い出すことができた。

「幸せ、だね」

ぽつりと呟く。

こうやって幸せな気持ちを少しずつ溜めて、この先一人になった時の糧にしよう。

それくらいは、許してくれるよね。

視線を向けた先にある、鞆。

その中に入っているはずの、小さな巾着。

そしてその中にあるペンダントを思い浮かべながら、私は笑みを浮かべた。

戸締りをして、鞆を肩にかけて外に出る。

午前中だというのにじとりと肌に汗が浮かんで、今日も暑くなるんだろうなってそう予感させる気候。

「暑くなりそうだなあ……」

思わず呟いて、玄関の鍵を閉めた。

歩き出そうとした途端、隣の部屋のドアがいきなり開いて驚いて足を止めた。

「由比さん？」

そこから顔を出したのは、ボサボサ頭の圭介さん。

歯を磨いていたらしく、手には歯ブラシを持ったまま。

あまりの姿に、思わず噴き出した。

「圭介さん、どうしたの？」

そんなに慌てて。

「いや、その」

ちよつと待っててと告げると、ばたばたと部屋の中に戻って行ってしまった。

口をはさむ暇もなかった私は、仕方なく廊下の柵に寄り掛かる。

「静かだねえ」

昨日のお祭り騒ぎが、嘘のように静まり返っている。

まだ早い時間だし、外に出てくる人も少ないんだろう。

そんな事を考えながらぼうつとしていたら、後ろのドアが開いた。

「ごめんね、待たせて」

そこから出てきたのは、さっきとは違ういつもの圭介さん。

ビフォーアフターを見た感じで、思わずくすりと笑ってしまう。

私は柵に凭れていた体を起こすと、頭を振った。

「ううん、別に大丈夫。で、どうしたの？」

「由比さんは？　これからお出かけ？」

ドアの鍵を閉め終えた圭介さんに問うと、反対に聞き返された。

「うん、ちよつと出てこようと思って……」

行き先を曖昧にして答えれば、小さく頷いて歩き出した。

「え、あれ？　圭介さんは？」

そのまま階段を下りていく圭介さんの後を追いつけば、前を向いたまま圭介さんが私の名前を呼んだ。

「少し、時間ある？　話したい事があるんだけど」

「話？」

何の？　と言外に含めたけれど、それに対する答えは返ってこなくて。

意味が分からないまま、私は大丈夫と頷いた。

「翔太は？」

車に乗って駐車場を出る。

「予備校に行ったよ。あの子は夏期しか通ってないからね、使える時間は只管使うとか言ってた」

「はは、翔太らしい」

「そうだね」

声を上げて笑うと、圭介さんの目元が微かに緩む。

いつも通りの表情で、いつも通りの視線だけど、なぜだか違和感を感じてじつとその横顔を見つめた。

なんだろう。

緊張、してる？

よくわからない雰囲気のまま、圭介さんは少し離れた場所にある公園の駐車場に入っていた。

一番奥、けれど視界は一番綺麗な場所に車を止める。

そこは少し山に入ったところで、目の前は河原、向こうに木々が連なっている場所。

途中で買ったアイステイのペットボトルを手にとって、シートベルトを外した圭介さんを見た。

「そういえば、昨日はありがとう。みんな喜んでたよ」

食事会が終わったのは、九時。

皆帰宅してから、お礼のメールを送ってきてくれた。

桜から来た、護さんには連絡先教えないでね、という内容はいまいちよくわからなかったけど。

圭介さんは缶珈琲をころころと手の中で転がしながら、そういえばと眉根を寄せた。

「溝口先生から、都築さんのメルアド教えて欲しいってメール来たな……」

「ぶっ」

ちやうど考えていた内容で、思わず吹き出してしまった。

くっ、口の中に何も入ってなくてよかった！

ダッシュボードが大変になるところでしたよ！

濡れていないか口元を手の甲で拭ってから、不思議そうな表情を浮かべていた圭介さんを見る。

「桜からね、護さんには連絡先教えないでってメール来てたの」
その言葉で合点がいったのか、圭介さんは苦笑を浮かべた。

「そっか。結構いい雰囲気だったと思ったけれど。溝口先生も、前途多難だ」

そうだね、と返答しながら瞬きを繰り返す。

……も？ も、って何？

工藤主任の片思いがばれたとか？

不思議そうな私の表情に気が付いた圭介さんが、微かに目を細めた。

あ、やっぱり。

なんか緊張してる。

圭介さんから伝わってくる雰囲気、思わずこっちまで緊張してしまいそうだ。

「どうしたの？」

その緊張感の原因が分からないから、こっちまで不安になりそう。

先を促すために、圭介さんを覗き込む。

すると圭介さんは一度口元を引き締めて、私をまっすぐに見つめた。

「……圭介さん？」

なんか、変。

「由比さん、私は……」

「何？」

圭介さんは一度大きく息を吐き出すと、再び私を見た。

「由比さんの事が、好きなんだ」

1 (後書き)

更新再開いたします^^

よろしく願いいたしますm - - m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1604t/>

きっと、それは

2012年1月9日02時46分発行